九月一日發行

# 女學世界

第十二巻　第十二號

博文館

大正元年八月二十三日印刷納本
明治三十四年十二月二十五日第三種郵便物認可





乳白化粧水
レート
月の前
露に色ます
尾花の様と
レートに粧ふ
美人の肌は
秋のはじめの
風情を添ゆる
倶に艶しき
花と花
東京
大阪
平尾賛平

# 一にも三越二にも三越

三越といふ名は最上を意味す。苟くも三越と銘打つたものは、所謂三越式の特色を有せぬはあらじ。目下の必要品としては、

▼三越縮緬▲ 右撚り三本、左撚り三本、即ち三本越。普通鶉縮緬に比しシボ細く、普通縮緬に比してシボに面白味あり。羽織地用、又は袷向として好評を博せり。

▼三越鉛筆▲ 一打二十錢、品質は舶來品に比して劣るなく、學生用、事務室用として知らる。

▼三越髷形▲ 極大より三番形迄で大小種々あり。輕快にして上品なり。十七錢以上。一度之を用ゐは市中の髷形は用ゐ難しといふ。

▼三越樟腦▲ 約半ポンド七十錢、四分の一ポンド卅五錢。永く保ち、香よろしき理想的樟腦。

▼三越ヴヰール▲

三越一度ヴヰールを賣出してより、靡然として一世の流行となれり。一圓以上種々。

東京駿河町

越

# 三越呉服店

# 女學世界第拾貳卷第拾貳號目次

# クラブ新聞

禁轉載

クラブあらいこ
クラブおしろい
クラブはみがき
クラブ美身クリーム
煉香油クラブ美髪用ポマード

本店新案

## ●打明けばなし

福岡縣　春子

暑中休暇に東京から歸つて來た姉さんが、朝晩お顔を洗ふ時とお湯にはいる時と、屹度妙な、兄さんの持つてる懐中電燈と同じ恰好した、罐の中から白い綺麗な粉を振り出して、顔や身體を洗ひますので『それ何？』と訊いたら『クラブ洗粉よ、春ちやんも使つて御覽お容色がよくなつてよ』と云ひましたの、けれど私何だかきまりが惡いので使ひませんでした、でも一度使つて見たくて仕様がないから、或日湯殿で内密で、姉さんのする通りにして使つて見たら、汗や脂がさらつと流れて何とも云へぬ肌ざはり、こんな心持のいゝ感じは是迄經驗した事がありませんでした、お湯から上ると姉さんが『春ちやんクラブ洗粉を使つたれ』と云はれたので、はツとして『何故？』と訊きかへすと『でも顔がそんなに綺麗になつて、そして好い香がするぢやないか直分つてよ、宜いから何程でもお使ひなさいよ』と云つて、行李の中から大袋を半ダース出して下さいましたが、其時程きまりの惡いやうな嬉しいやうな、妙な心持のした事はありません、それから私もクラブ洗粉の愛用者のお仲間入を致しました。

▷健ちやんと雪さん◁



（幼稚園がよひ）

健ちやんと雪さんとは、夏休みの間朝に晩に、クラブ洗粉を使ひましたから、汗疹も出來ず日にも焦けず、こんな綺麗な顔で、今月からまた、手を引きあつて幼稚園通ひです。それにクラブ歯磨で毎朝歯を磨いた爲に、歯が丈夫になつて、お腹の痛みもなくなつて、身體がめつきりよくなつたと、健ちやんのお父様も、雪さんのお母様も、大層喜んでいらつしやいます。

## ▼露は藥▲

野草の露を素足に踏むと、體の藥になるといふ。

明け渡る空はほの〴〵と、横雲美しく東にたなびく時、クラブ歯磨つかひながら、塵を含まぬ清らかな風に袂を吹かれて、背戸の野川の畔を歩む心持はえもいはれぬ。

## 風が來る

京丸作

涼しい風に
柳がなびく
なびく柳に
風が來る

涼しい風に
簾がゆらぐ
ゆらぐ簾に
風が來る

涼しい風に
クラブが匂ふ
匂ふクラブに
風が來る

先帝陛下御尊影



今上天皇陛下



皇后陛下



# 募 新學期開講 集

入會の最好期家庭の生きたる良友

▲入會金不要
▲入會規定見本進呈
▲女子手藝普及會編

◎本會講義錄は內外手藝界に於ける粋を居ながらにして修得することを得……

◎本會講義錄は監督者なき出京遊學の危險を避くることを得……

◎本會講義錄を修了するときは一技藝學校卒業以上の價値あり……

◎本會講師は東都各學校一流の教師と專門家にして最新式の說明法に依る……

◎本會入會者には質問應答雛形下圖買物紹介受驗入學案內等の便宜あり……

# 女子手藝講義錄

## 講義課目

裁縫科和樣
袋物科各種
組糸科各種
結繡科各種
細工物科各種

手藝圖畫科各種
裁縫小物科各種
編物科各種
刺繡科各種
造花科各種

割烹科和洋支那
手藝教授法
其他科外講義各種

## 會費

▲普通科各一ヶ月
▲高等科一冊金三十錢
半年一圓七拾錢一年三圓廿四錢
●普通科高等科共各一年修了●

讀んで作つた品が職業となり教授用となり家庭用となる進物となる

每月一回五日發行

女(いの二)

發行入會申込所 東京日本橋角 大倉書店
振替貯金東京二三八番
電話本局四一四・二四〇四
入會申込支部全國各書店

ぬりもの

美術蒔絵物

御陳列縦覧御随意

東京日本橋通室町

木屋漆器店

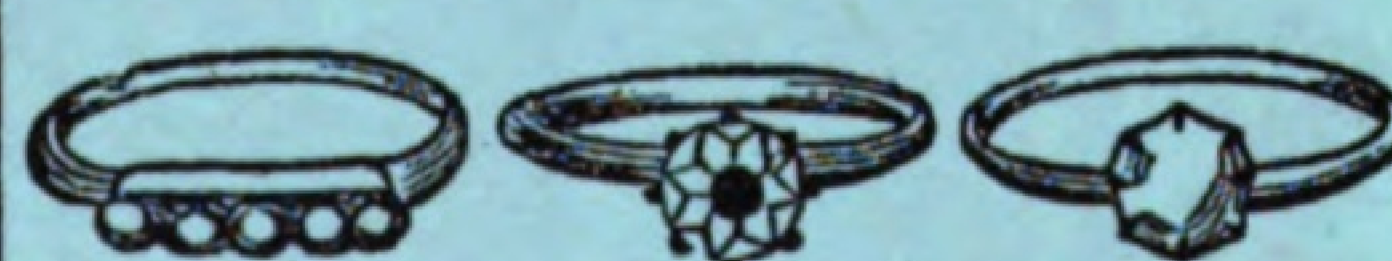
電話本局 五百九拾七番

長 千七百拾番

四千六百参拾二番

---

大流行金メツキ製



壹個參拾五錢 送料三錢 宛

## 安くてよい指環

これは金メッキ製で模造寶石を入れた指環で、人のはめてゐる所を見ると、どうしても十圓も廿圓も出した眞正の金指環と思ふ程によく出來てゐます。故に東京では只今大流行です。それで大切にすれば二三年間は色も變らず模造寶石も眞物の樣です、今回廣告のため一個三十五錢送料三錢小爲替で送金次第御送り致し升二錢切手なら一割増四十二錢分送れ●形色々あり誰の指にも合ふ樣に出來てゐます

東京神田錦町錦城學校南隣 **小島工場**

女(いの二)

---

從二位勲二等伯爵 鷲尾隆聚閣下題字 池の坊小倉照月宗匠著

池の坊流 **生花の手びき**

和洋頗美本全二冊 圖畫百數個入 定價四拾錢 小包送料八錢

本書は一般有觸れたる生花指南書と異り既に卷を開けば悉く圖畫を挿入れ手を以て教ふる如く軽妙なる行文に獨特の趣味多大の價値を感ずべし蓋し生花上の心得は此書に網羅して漏すなし是非一本を求められよ

宮城千代子編 **實用裁縫手ほどぎ** 價廿五錢 郵税八錢

本書は婦女子に極分り易き様圖畫二百八十有余も加へ詳しく説明し尚背紋組止等は一々彩色して糸の縫方迄示したれば裁縫を學ぶに最良書

赤松登美子編 **西洋料理の仕方** 價卅五錢 郵税八錢

秋本久子編 **女子普通早學問** 價拾五錢 郵税四錢

販賣所 大阪市西區二條通四丁目三十八 振替貯金口座大阪一七七八五番 **岩崎浪速堂**


水晶
おしろい
石鹸
太和屋





水野秀方畫　　田中製版所三色版


最上醬油
元祖
上
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覽會に於て
太平洋博覽會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番 振替口座五〇二一一番

香水の代用になる極めて高尚な匂ひをもつた

# 千代田香油



は第一毛髪を養ひくせを直しつけてサラ〳〵と心地よく夏分お髪の臭氣を去るに最も妙です

定價　七十錢、卅五錢、廿五錢、十七錢、　郵税四錢

千代田香油本舗
スワン浮石鹼輸入元

## 山岸三之助

東京……馬喰町
大阪……鹽町
振替東京二〇五〇〇番

有名なる英國のリバー會社製造の最良の浮石鹼

# スワン石鹼

は泡立ちよく肌さはり滑かに海水浴にもよくとけ熱海、伊香保の如き温泉にも好適す。

女(ろの四)



佐々木林風畫

# 最見易き琴の譜本

井上胡蝶著　生田流

## 箏曲新譜

四版巻一定價壹圓卅錢送料六錢再版巻貳巻三定價各金壹圓拾錢宛送料各金六錢　代金引換各金拾六錢增

曲譜目次

**巻壹**　四季の花　門松　鶴の聲　黒髪　六段　亂　八段　金剛石　夕顔　新高砂　越後獅子　千鳥　茶音度　春の曲　小督の曲

**巻貳**　春日影　朝外出　六段　前歌　難波獅子　末の契　松竹梅　殘月　秋風　八重衣　冬の曲

**巻三**　松盡　萬歲　八千代獅子　雪　九段　巖上の松　新雪月花　凱旋喇叭の曲　四季の詠め　夏の曲　秋の曲

生田流
山田流　新譜

## 箏曲之栞　第一輯

定價金壹圓送料六錢　代金引換十六錢增

**曲譜**　一門松　ことぶき　春雨　六段　七草　瀧盡し　御製の一曲　水は器　千鳥　菊水　那須野　御國の譽　外練習用四曲

## 山田流譜本

| | |
|---|---|
| 江の島 | 卅五錢 |
| 住吉 | 同上 |
| 松上鶴 | 同上 |
| 初若菜 | 同上 |
| 四季の艶 | 同上 |
| 今様朝妻船 | 同上 |
| 松風 | 四十錢 |
| 菊水 | 三十錢 |
| ほとゝぎす | 三十錢 |
| 櫻狩 | 四十錢 |
| 那須野 | 同上 |
| 春宮 | 卅五錢 |
| 子の日遊 | 卅五錢 |
| 山田流手ほどき　六段外七曲合本 | 定價六十錢送料四錢 |

送料各貳錢

## 本書の特色と購求者の便利

一以上各種の譜本は何れも調子の合せ方や音符休止符左右手法其他彈琴に必要の事は悉く平易明瞭に記載しあれば直接師に就きて習ふ通りであります

一此譜本は西洋樂譜の心得無き人でも直ちに了解せられ且つ言葉記號を附記しあれば音符を知らぬ人も之に依りて彈奏せらるる事を得べく自然の間に完全なる樂則を覺え給ふに至るべし

一本書の購求者は曲中の不詳は返信料添へ質義あれば無料之が說明敎授をなすべし苟も琴を習はんと欲して師を得給ふに難きか或は一度習ひて忘れたりとて歎かせ給ふこと勿れ本書は是等の人々に多大の滿足を與へ得べしと信ずればなり

琴調子笛六十錢一圓五十錢二圓送料各八錢宛　琴糸〃器其他琴及附屬品一切

發行所　筑前國福岡市外馬出東公園博多座横　箏曲通信教授所

女(はの一)

九月號發行定價 壹冊貳拾八錢郵税貳錢五厘 六冊前金郵税共壹圓七拾錢

# 新婦人

## 諒闇畫報

誠恐誠惶子々孫々に傳ふべき精巧無比の畫報

印刷紙質の精巧に於て雜誌界のレコードを破れる本誌が御大喪に闕し齋戒沐浴で謹んで印刷術のベストを發揮したる一大記念の畫報にして他に得能はさる珍貴の寫眞を拜載す記事又精選萬世の資料たらん事期をす

## 大行天皇陛下御眞影

コロタイプ二色摺竪一尺三寸横八寸五分 特漉プローインク紙

高貴御尊影六葉拜載 御眞筆拜載 那須岡山久留米大演習御野立五種拜載の光榮に浴す 柳原愛子の方 園祥子の方●皇后陛下御乳人大河原てい女 桃山御陵行人兩刀を帯して潤歩せる二重橋大喪使總裁宮殿下以下事務官祭官 人民虔禱の寫眞三十餘圖 元老大官の急遽參内近衞聯隊勅語捧讀式第一艦隊弔砲發射其他御不豫御崩去に對して我六千餘萬の蒼生が發揮したる純忠の至誠以て千古の好記念となすべき寫眞六十餘圖は一度有るべくして再び見るを得ざる千載の精神教育として竝ニ國民の母たる婦人は必らず其家庭に一冊を具へざるべからず本誌の微意又玆に在り

電報賴信紙附

## 家庭日誌

九月分 溫度表晴雨表獻立表來客控●九星舊暦添

新婦人見本 郵劵卅錢

一賣捌所は全國著名の書林雜誌店

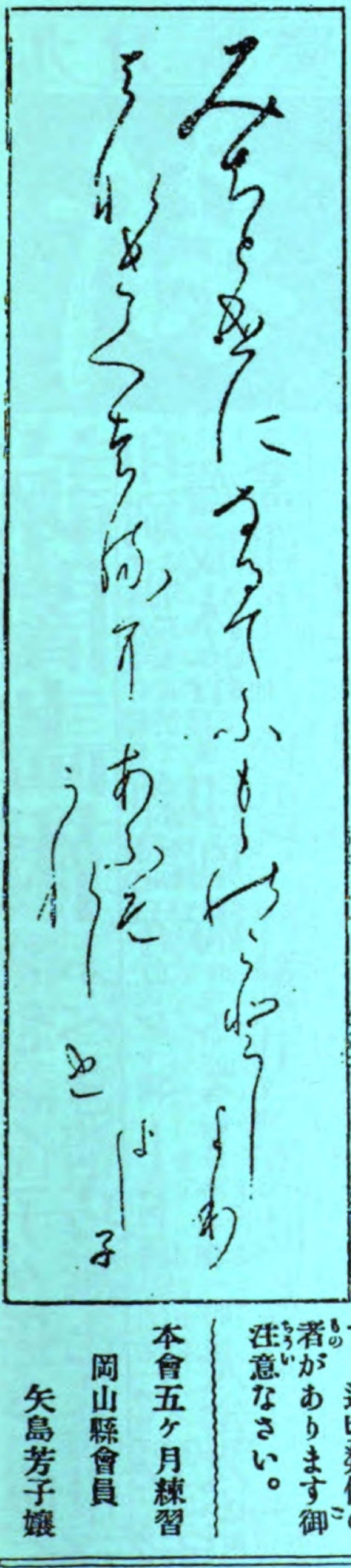
發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 （電話下谷四〇九七番 電話下谷一六二七番） 聚精堂

女（はの三）

# 字が上手になりたい方は！

御婦人のたしなみの中で筆蹟が第一に位します。美事な筆蹟の方は何となく奥ゆかしく御人格のほども忍ばれますが、悪筆の方は自然他人から輕んぜらるゝやうな風で非帝に損です。今日の學校では習字の時間が少ないから無理もありませんが、併し評判の高い專賣特許習字速成法で御練習になれば。どなたでも僅かの間に左の如き立派な能書家になることが出來ます。殊に手本の書者は小野鵞堂先生であります。で東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會宛に「ハガキ」（電話下谷三二一〇番）にて申込みになれば見本附規則書を無代で送つて參ります。近頃類似の者があります御注意なさい。





本會五ヶ月練習
岡山縣會員
矢島芳子孃



河崎蘭香畫

# 婦女界

## 九月號

■自由の女「マグダ」 野上臼川
■風變りの女 沼波瓊音
■世界の女 若月紫蘭
■クラスメート……竹久夢二

最も文藝趣味に富る九月號

▼生活難

如何にして生活難を防ぐべきか…宮田脩○主婦の經濟は利用にあり…棚橋絢子○財布の中に見出し兼ねし餘裕は讀者中に探せ……

□□□□□□

新髪形 大正まき

◎出產前の準備と心得…◎洋服及手織物の整理…◎西洋料理手ほどき…◎子供暑中着物の縫方…◎手軽な日本料理…◎婦人の內職生花點茶の師匠…

▼▼▼▼▼▼

人にするまで 鳩山春子
家庭問題の解決 近角常觀
豫定なき今の婦人 佐々博士
自ら病癖を治する修靈法
小兒の嘔吐はどうして起るか

■寂寥たり[illegible]の心…吉岡千種樹
■奇怪なる動物の正體 安藤瀧沼
■大人物の母の十三年 中西ますゑ
■細川忠興の夫人……天野雉彥

錢郵稅一 錢半年六冊 稅共九十 年十二冊 稅共一圓 七十五錢 振替東京 一三五

同文館

女(にの一)

# 來十月新學期開講

九月十日入會者に限り入會料免除す

# 會員募集

會則附き內容見本申込次第進呈

# 女子大學 家政講義

編輯所 東京小石川區高田目白臺 日本女子大學校通信教育會

家庭の和樂と幸福なる生涯は家政講義に得らるべし、開講以來空前の好評を博したるは本講義の優秀なる所以なり、講述が如何に懇切に平易に實際的なるか、科目の選擇と解説の方法の如何に注意せるか、先づ內容見本によりて本會の趣旨と講義錄內容の一班を知られよ。

## 學科目及講師

○修養談 ○修身講話 ○教育 ○實驗心理學 ○兒童研究 ○法制大意 ○經濟大意 ○社會衞生 ○家庭理科 ○家事

諸名士教育大家 成瀬仁藏 麻生正藏 文學博士 松本亦太郎 高島平三郎 法學博士 奥田義人 文學士 中隈敬三 醫學博士 三宅秀 近藤耕藏 井上秀子

○作法 ○日本料理 ○西洋料理 ○裁縫手藝 ○挿花 ○家庭園藝 ○自然研究 ○文藝 ○美文評釋 ○科外講話女子演劇歌劇結婚問題家庭衞生問題等

小笠原清務 佐木幸子 手塚かね子 櫻楓會研究部 兒島晩翠 農學士 佐々木祐太郎 大橋ひろ子 文學士 武島羽衣 文學士 下村英

◉將來家政を執り良妻賢母たらんとする婦人は本講義を讀め

發行所 東京小石川區 精美堂 振替口座東京二八二三八



竹久夢二畫




◉からだをつよくする薬
暑い／＼都をのがれて水清く風涼しき山里へ旅行するには何はさておき大木五臓圓を御持参下さい本劑は疲勞を回復し血を増し肉を肥す良藥なれば山へ登るも温泉に浴つても此れさへあれば體は益々丈夫になつて本當に避暑のねうちも出る
大木五臓圓
主効
身體虚弱症　婦人血の道
病後の衰弱　痰咳喘息
貧血諸病　ぶら／＼症
肺病肋膜　老衰
心臓病諸病　一般衛生家
藥價表
四日量 三十錢　七日量 五十錢
十五日量 一圓　廿四日量 一圓半
本舗
東京市神田區大通鍋町
大阪淡路町堺筋東
大木合名會社

女へほの一

女(ほの二)

THE GIRL'S GRAPHIC

# 少女畫報

第一年第九號　定價拾五錢郵税一錢五厘　六冊税共九十錢　十二冊一圓七十五錢

編輯　高島平三郎先生　顧問　倉橋惣三先生

◎口繪 ●●秋立つ日　竹久夢二 ●●芙蓉の園　高村眞夫

**讀物**

■嗚呼　先帝陛下！……高島平三郎
■天皇陛下御踐祚…記者
■少女小説 やどり木……尾島菊子
■畫家を志望の少女…高村眞夫
■探偵女王……押川春浪述

◎忘れ得ぬ人……竹久夢二
◎秋の庭……思水
◎お月見團子……手塚かれ
◎茶目君のおいた…純一
◎秋の虫の音……そよ子
◎一口噺……

**畫報**

先帝陛下　天皇　皇后　皇太后陛下　皇太子殿下の御眞影を初め奉り、赤誠こめし少女の御平癒祈願、遙拜奉悼式、祐の井と新御陵地等を掲げて哀悼の意を表し奉る外に、お客樣の色々、寫眞小説撮影ぶり新懸賞等五十有餘の意味深きものを滿載す！

**讀物**

■小説 魔法博士……三津木春影
■少女實話 未だ見ぬ親……谷江風
■郊外散歩……佐々木邦
■小説 撞き初めの日……みゆき女
■教室で見た先生の癖…とし子

◎風車のおもちや…蓮子
◎頓智問答と判じ繪
◎自炊の生活味…鈴子
◎讀書と記者……
◎童謡 十三夜……歩二
◎和歌作文其他種々……

◎明治天皇御聖徳を仰ぎ奉る可き唯一記念號！！

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九　振替貯金口座東京一一八一八


ア、美しい月！
私の化粧用の
大學水白粉は
月の雫！
ツバメ香水は
月の桂の
花の露よ！

白萩



侯爵佐々木行忠氏令妹美智子

# 穂すゝき



子爵酒井忠晄氏令妹牛子（本郷區千駄木町）

女(への一)

# 鐘淵紡績株式會社 第五十一回決算報告

損益計算

| | |
|---|---|
| 一 總收入金 | 二八、二六二、四五四・三六八 |
| 一 總支出金 | 二六、七四〇、九〇六・四一〇 |
| 差引 | 一、五二一、五四七・九五八 |
| 內 固定資產減却金 | 三〇〇、〇〇〇・〇〇〇 |
| 再差引 當期純益金 | 一、二二一、五四七・九五八 |
| 前半期繰越金 | 八八九、三二四・七八四 |
| 計 | 二、一一〇、八七二・七四二 |
| 內 株主配當金 但年一割二歩（舊株壹株ニ付金三圓 新株壹株ニ付金一圓五十錢）の割 | 七〇九、五五七・〇〇〇 |
| 當期特別配當金 但年二歩（舊株壹株ニ付金五十錢 新株壹株ニ付金二十五錢）の割 | 一一八、二五九・五〇〇 |
| 配當準備積立金 | 一〇〇、四七三・〇〇〇 |
| 諸種積立金 | 一〇〇、〇〇〇・〇〇〇 |
| 使用人病傷者救恤及職工幸福增進資金 | 一〇〇、〇〇〇・〇〇〇 |
| 役員賞與金 | 六〇、〇〇〇・〇〇〇 |
| 後期繰越金 | 九二二、五八三・二四二 |

右報告候也

明治四十五年七月

東京府南葛飾郡隅田村 鐘淵紡績株式會社

取締役會長 日比谷平左衛門　專務取締役 武藤山治
取締役 高辻奈良造　同 岡本貞烋
同 藤正純　同 長尾良吉
同 山口武　同 永江純一
同 前山久吉　支配人 山口八左右

右帳簿監査候處相違無之候也

監査役 平賀敏　同 野崎廣太
同 筑紫三郎　同 清岡邦之助
同 安田善三郎

---

宮内省御用達

ヒゲタ醬油

千葉縣銚子港 田中玄蕃釀造




女(への四)

# おもかげ



曾て屢々本誌上に花散里の名を以て絢爛の才筆を揮へる上原綾子の君上圖は萩香内藤千代子孃

# かたばみ



右の上、荒井とよ子（東洋女學校出身）、中、博多和子（跡見女學校出身）、下、稻垣きよ子（女子職業学校出身）、左の上、玉木きよ子
中、上遠野秀子、下、竹内八重子（立敎女學校出身）

# ●婦人のこしけは恐ろしい

素人の中にはこしけと言へば婦人に附物で成人の婦人には誰にでもあるものの様に心得て居る人がありますが之は大なる誤りで有升元來健康の婦人には經血時の外は如何なる場合にも決して下物は無いものであります、換言すれば、月經期に當つて時々薄い水様の分泌物の伴ふ事がありますが、其量極めて少く且大抵經血も共に下る所から、殆んど本人自身にも氣附かれぬ位であります。

**▲病的の白帯下**　之に反して月經期又は月經の前後に卵の白味の様な濃い粘のある分泌物があつたり、月經でない時にも下物があつたり、其下物に惡臭があつたりするのは、言ふ迄もなく病的のこしけ子宮其他の生殖器に病のある證據であります。一體此白帯下は慢性婦人病の特徴で殊に子宮內膜炎、子宮肉腫、子宮癌腫などには頗る多量にあつて病の進むに從ひ黄色な鼻汁の様な粘液に變り強度の酸性を帯び而して何とも言へぬ惡臭を放つものです。

**▲白帯下と頭痛**　それから斯様な白帯下のある婦人は一般に逆上強く、頭痛持癇癪持で神經過敏であるのは爭はれぬ事實であります、又多く冷性で常に足腰が冷え勝であるのも既に皆様の御存じの事でありませう。之を其儘に打捨て置くと常に局部の不潔となりて惡臭を發し、糜爛、痛痒くなる事もあります、事玆に到れば、勿論婦人病は餘程嵩じて居るから治療愈〻困難となり、一朝一夕に根治する事は到底六ヶ敷なります。

**▲不姙性と帯下**　前にも述べた通り婦人が一旦子宮其他の生殖器病に罹ると分泌の量は著しく增加して所謂白帯下となり、分泌物には異様の惡臭を伴ひ強き酸性を伴ふ様になります、生殖素は極く弱い酸性には耐へ得るも淋疾又は子宮病から來る白帯下の強き酸性に出逢つては、直に死滅し、又偶々死滅せずして卵子と接合しても其勢力の大半を奪ひ去れて居るから迚も姙娠の原因となる事は出來ませぬ。猶此白帯下に就ては種〻御話致したい事もありますが、紙面に限がありますから詳しい事柄は北畠、佐藤兩先生の御書になつた『子宮病自宅療法』と云ふ書物で御承知を願ひます。

●●注意　兩先生の治療書は一般患者に無代送本せらるゝ筈なれば婦人病者は速にハガキにて東京築地新榮町笹岡藥房宛女學世界で見し旨御申添へ申込せられよ。

女(との一)

女(との二)

# 羽仁もと子主筆

# 婦人之友

九月號

▲どうしたら家持が上手になれるか。どうしたら子供を賢く育てられるか。どうしたら買物が器用に出來るか。どうしたら着物のくり廻しが旨くゆくか。どうしたら料理が巧者に出來るかどうしたら女中を使ひこなせるか。どうしたら交際が苦勞なしに出來るか。「婦人の友」を讀んでゐると、自から家持が上手になり、子供の育て方に無駄骨が折れず、人づきあひの道にも慣れ、女中を使ふ呼吸も分つて來ます

▲「婦人之友」には實際生活の役にたゝぬ空理空論は一字も一行もありません。最初の頁より最終の頁までしらげにしらげた一粒選の記事ばかりであります。

▲「婦人之友」の家政、育兒、裁縫、手藝、料理等家庭實務に關する研究と工夫と考案とは實に天下一品ともいふべきものであります。どこの雜誌にでも、此の如く緻密にして、行屆きたる、且つ直に如何なる家庭生活にも應用し得べき周到親切なる記事は絕無といつてもよいでせう。

▲「婦人之友」の終始一貫して渝らざる特色は、その眞面目なることとです。さうして飽くまで、親切なることです。「婦人之友」の記事の隅から隅まで注意の行き渡り、痒い所に手の届く編輯ぶりは一度「婦人の友」を手にした人の忘るゝことの出來ない所です。

一冊金十八錢郵稅一錢五厘 半年分郵稅共一圓八錢

婦人之友社

東京小石川雜司ヶ谷町
振替東京一一六〇〇番

女(との三)




# ニキビ

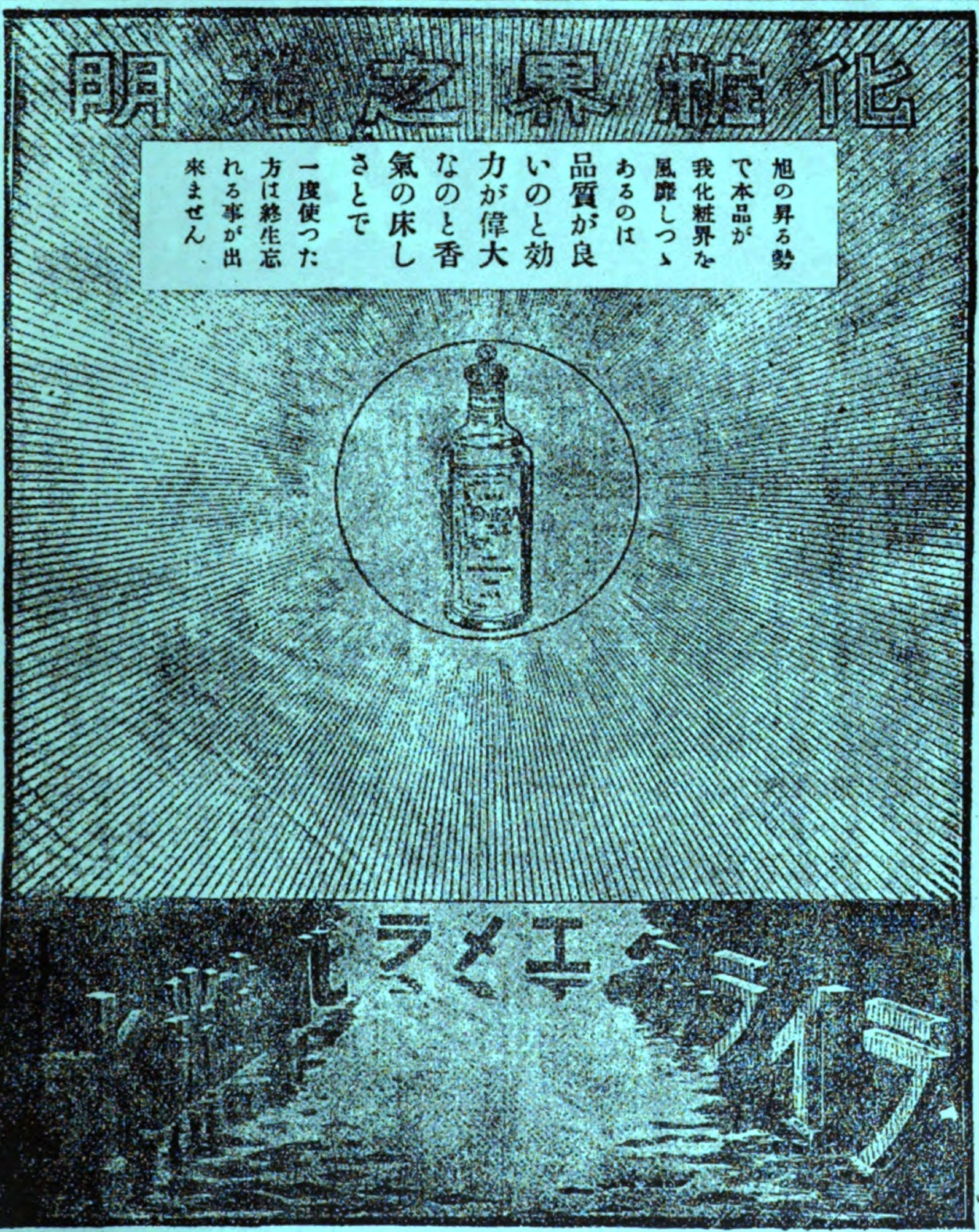
## 吹出物を治療して色白く美しくする內服藥

ニキビ吹出物油顔其他皮膚ドス黑く色澤惡しく薄穢き等は概ね體內胃腸の變化より生ずる一種の毒素に原因す故に之を治するには必ず內服藥を以て體內より治療するを要す然る時は奏効確實にして外用藥の如く內攻の恐れなし是現今皮膚病學上の定論なり本劑は此理由に依り製出せる內服藥にして既に醫藥の成書に於て確實に効能を記載せられたるに係はらず先般報知新聞大阪毎日其他八大地方新聞に於て社會的試驗の計畫を發表し多數の患者に試驗し驚くべき好成績を報告せらる最早學理に於ても又實際に於ても疑ふの餘地なき有効藥たる事を確信するに至り茲に發賣す患者は只十錢郵劵三枚封入申込あれば直ちに送藥すべし

藥價 四日分三十錢●一週間分五十錢●十五日分一圓
市內は電話かハガキにて御通知次第無料配達
地方は成るべく爲替又は振替の事

東京市下谷區上根岸町百十一番地
本舖 藥學得業士 金澤巖
振替東京四六七番電話下谷二二五九番

女(ちの三)




特効
日焦け
汗ぼ
ニキビ
ソバカス
白粉下
髭剃り後
素顏美

輸入元
東京市京橋區南金六町十五番地
エメラ・ライラツク東洋總代理店
合資會社 理容商會
振替東京二三〇〇〇
電話新橋二三三〇二

女(ちの四)

# 花野

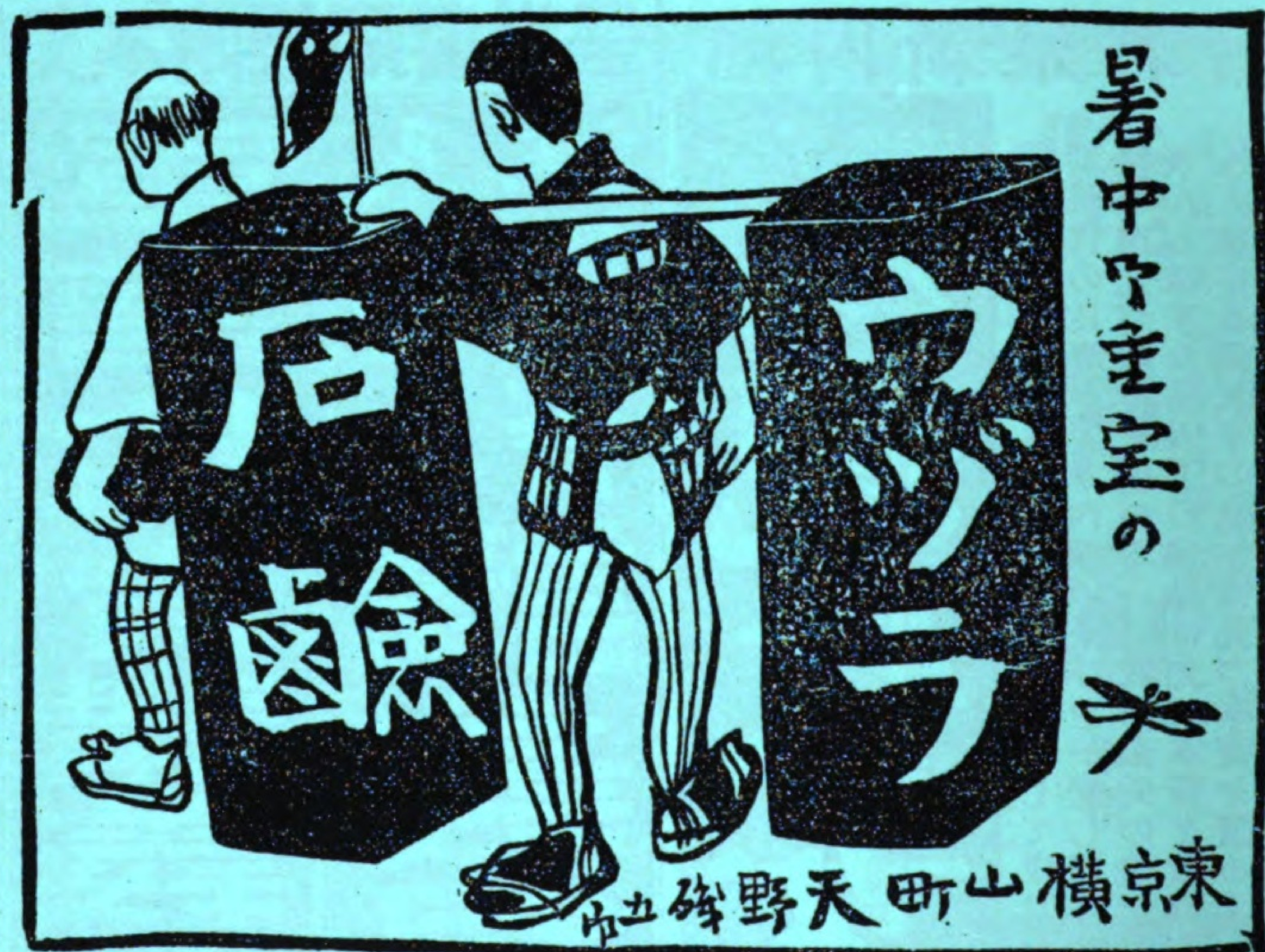


上圖 植松正氏令嬢房子、左圖 紳商有賀文八郎氏令嬢文子、下圖 岡部環氏令妹八重子

# 花夕顔



上圖 書間梅子（埼玉） 右圖 伊藤智惠子（山形） 左圖 芹澤靜枝（山梨）






女（りの一）

女(りの二)

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

# 隆鼻術(はなたかくするほう)

午後

和田耳鼻咽喉醫院

電話本局一七三〇番

---



東京神田裏猿樂町

## 東洋音樂學校

電話本局三八五四番

本科、特別科、本校及東京音樂學校入學豫科
新學期九月五日始業
補缺生募集

### 生徒募集

ピアノ。オルガン。バイオリン。唱歌其他管絃樂器及理論等
音樂家となり又樂みに之を學びたき人は本校へ申込みあれ

---

## 男ちゞれ 女くせ毛

赤毛は何程の難毛も自然に矯正黒化良き艶の出る最新發見専賣特許奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髪に治して差上升

岩阪澄子

東京千駄ヶ谷五九五五

---

# 肺病の奇藥

一般世人が不治症と斷定しつゝある肺病は決して不治症ではありません本病に襲はれ悲觀しつゝある人は郵券二錢を添へ照會せられよ療養法及び不思議に治癒の奇藥を詳細に御通知致し升(●文句の盗用及轉載を嚴禁す)

東京府荏原郡大森海岸八幡電車停留場上

川名助次郎

---

## ◎産婦人科 ◎小兒科

宅診 午前
往診 午後

病室並ニ産室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長 女醫 吉岡彌生 (鷲山改姓)

## 東京至誠病院

東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地

電話番町(二三五七)

女(リの三)

活ける社會の

# 活學問

加藤咄堂先生……苦心の大著

# 世態人情論

製本既成

新刊特賣

機會は極めて短時日也

着金順發送

『男兒元愧儆ニ書生』。跋渉雲山千里程。要レ識ニ乾坤活歴史一。須レ諳ニ世態ニ與人情一』とは夫れ偉人東湖先生の詩に非ずや。彼の學窓に在て秀才と稱せられし士の、一度校門を去るや忽ち社會の落伍者に墮し、就職難に惱む所以の者は、豈活社會の實情と、人心の機微とに通ぜざるの罪に非ずして何ぞ。本書は則ち加藤先生が、洽博なる學識と奇警なる觀察とを經とし、實社會の統計と、多趣味なる世界の活事實とを緯とし、痛烈火の如き快筆を以て、古今世態人情の變遷、地理と人情、生活の意義、生活と世態人情、職業と人情、世態と宗教、宗教と人生、男女の問題、世態心理の基礎群衆心理の應用等に亙り、滔々數萬言、正面より、側面より、最も大膽に、最も精細に、現社會の忌憚なき解剖を試み、以て處世の妙諦を指示せられたる、一大創説にして、眞に是れ、精寫せられたる現實生活の一大縮圖、人情觀的に綴られたる地理書とも目すべく、平易に解説せられたる社會學、實地に應用せられたる心理學とも稱すべし。世の經世濟民に志ある士、及び生活の一大事に心を潛めらるゝの士は來つて、此活ける處世經典を繙かれよ。

●洋裝箱入大判美製本
●索引共六百二十數頁
●各時代風俗畫一葉に新案意匠圖十一葉挿入

正價 二圓三十錢

▲九月卅日迄
▲五千部限り
特別減價

壹圓八十錢

（送料）内地十二錢 臺樺滿朝四十二錢

東京神田區今川橋大通

## 東亞堂

（電話本局八八四 振替東京一七一）

女 りの四）


女學世界
第拾貳卷
第拾貳號

嗚呼思ひまゐらするだに恐れ多くも悲しきことの極みなりける。
大行天皇陛下御惱の御床につかせられたまひ、日にいやましに重らせたまふ
由、九重の雲井を漏るゝ公示に萬民色を失ひ、或は齋戒して神佛に祈誓を籠め
或は沐浴して大内山の御正門近くに參りつゝ、折からの熾くが如き暑熱をも
のともせず、大地にひれ伏し肝膽を碎きつゝ御平癒を祈り奉りしに、何事ぞ嗚
呼何事ぞ。至仁至慈にわたらせたまひし
大行天皇陛下には、惱ませたまふこと十日あまりにして、終に崩御あらせたま
へり。此悲報の九重を漏るゝや陛下の赤子は仰いて天に號び、俯して地に哭し
身を忘れて歎き悲み奉れども、今將甲斐もなく、宸駕は遐かに登らせたまひぬ
嗚呼宸駕は終に遐かに登らせたまひぬ。悲しい哉。謹みて惟るに
大行天皇陛下　聖文神武にましまし、御幼なくして夙に天津日嗣を承けさせ

られ、折しも刈菰と亂れたる國歩困難の時に處らせたまひて維新の大業を成就させたまひ、親ら文武の政事を總べさせられ、大詔屢〻煥發ありて文教大に興り、民皆な人道の赴くところを知り、工藝ます〱開らけて蒼生業に安んじ、陸には百萬の貔貅陛下の御手足の如くに動き、海には幾百の艨艟、洋の東西に馳航して陛下の大稜威を日月と耀かし、國運ます〱隆んに、版圖ますます擴大し、明治の御治世は前古に比ひなく、萬民悉く仁風慈雨の鴻恩に霑はひ、聖世の恩澤に樂しむこと四十五年、前途なほ遙かなるべきに

寶算僅かに六旬にましまして、嗚呼宸駕は終に遐かに登らせたまひぬ。率土六千萬の赤子、天地に號哭し奉れども、靈駕再び囘し奉るべきよすがもなく、龍顏とこしなへに拜し奉るべくもあらずなりぬ。嗚呼悲しい哉。謹みて衷心哀悼の至誠を

陛下在天の聖靈にささげ奉る



# 明治天皇登遐

## 大内山の悲雲

廿九日午後八時頃より御病狀漸次增惡し同十時頃に至り御脈次第に微弱に陥らせられ御呼吸は益淺薄となり御昏睡の御狀態は依然御持續遊ばされ終に今三十日午前零時四十三分心臟痲痺に因り崩御遊ばさる洵に恐懼の至りに堪へず

との宮內省の告示あるや六千萬臣民の恐懼悲痛如何ばかり

二十九日の午前十一時三皇孫殿下が悄々と御退出遊ばされし頃宮中は寂として木の葉の戰ぎさへ忍びやかになりぬ玉の宮居は今しも深憂の沈默に落ちぬ午後一時發表の御容態書によれば御四肢の末端に暗紫色著明云々の文字も見えぬ。神種なればこそ未だ前途の御光明も希望すべきなれど正しく御重態御危險の樣は歷々として恐察するに餘りあり此御容體書を拜したる百官の驚愕は今更の如く慌だしく潤める眼は一種の光を帶て悽愴の氣充ち滿つる想あり。すかし見れば九重の雲深きあたり何となう唯ならぬ樣も見え松の嵐蟬の聲も憐れにさす日の光も薄れて

大内山の夏木立今は早其色を失ひぬ。斯くの如きことと幾時間元老大臣樞府の大官等何れも最寄々々に打集ひつゝ沈々默々として石像の如く何れも云ふ可らざる悲痛を眉に云はせて時々出づるは冷やかなる太息のみ、午後六時に至り北の御車寄のあたり氣色立ち伏見大將宮を第一に東久邇宮東伏見宮同妃殿下梨本宮 閑院宮 朝香宮等の各殿下愁色深く御面も瘦れさせ玉ひ各御馬車にて御退出遊ばされる中にも故一位局の御妹中山榮子刀自が白無垢の小袖、緋袴、紫の包を膝にして當年七十一の老齡を踏む足さへたどたどしく退出された姿は見參らするに忍びず之に續いて西園寺首相を始め各大臣大官 續々退出し深憂の顏容そぞろに傍人を動かしむるに餘りあり

夜に至つて各宮殿下を始め各官孰れも再び參內し集ひ寄れる其一室には憂色深く罩め渡れり。尙二重橋前に雲霞の如く打集へる赤誠の士が熱禱の聲は遙に宮中に反響し西の御溜あたり迄も手に取る樣に聞え來り、一種悲愴の氣に打たれざるを得ない、記し終りし時突如耳朶を打つ聲あり、曰く聖上御崩御と噫遂に記し奉る辭を知らず。大内山の夜は陰々として上下百官唯慟哭の聲あるのみ　拜記するだに悲痛の淚なり。

## 拜訣式

三十一日大行天皇の拜訣の光榮に浴したる某大官



先帝陛下の御英姿

御即位當時の先帝陛下御影

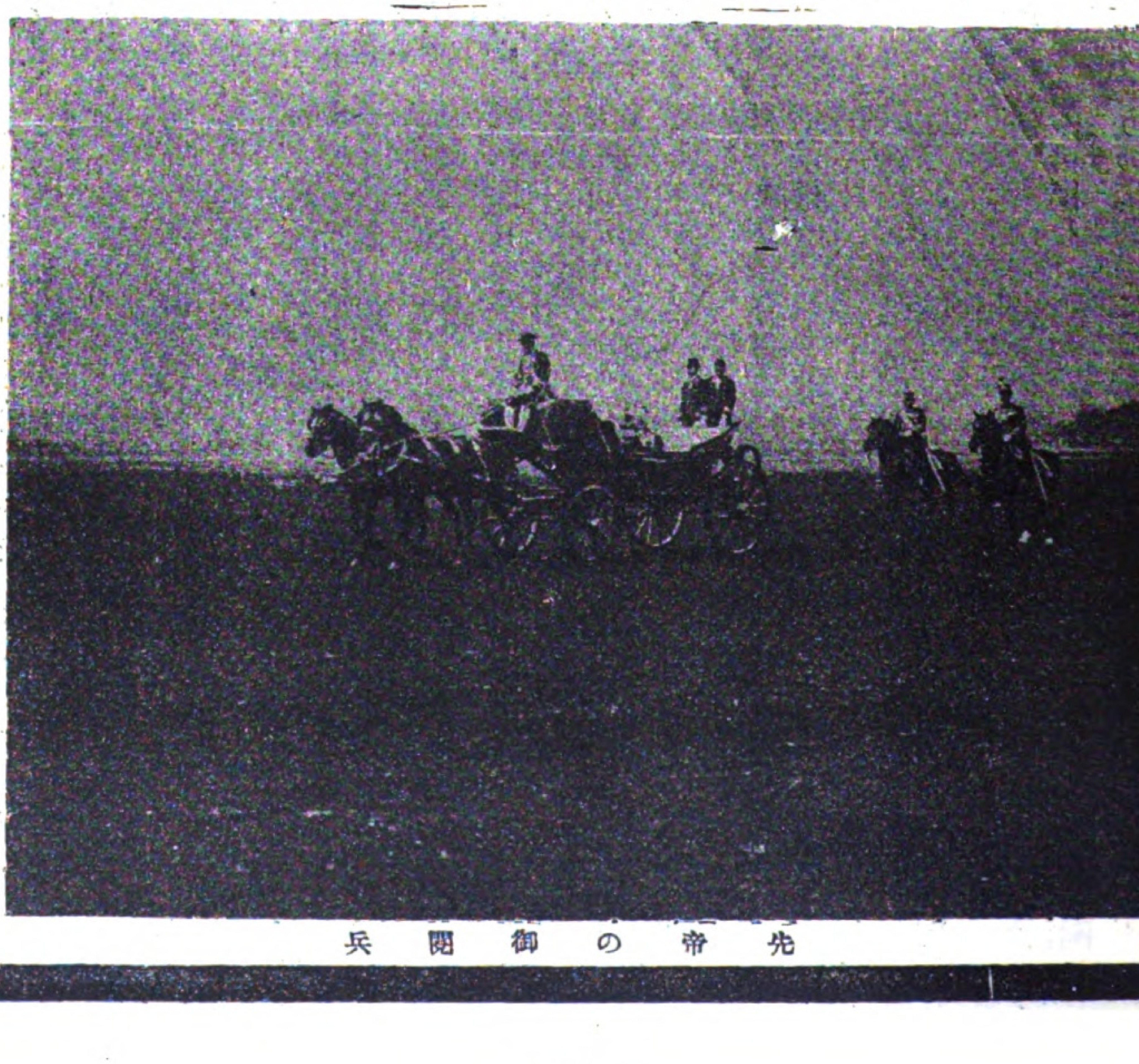


は、哀愁悲痛の涙に暮れつゝ語つて曰く、拜訣の御式は午後四時よりとのことなりしが、皇族方の御名殘や盡きざりけん、後れて午後五時過に始まれり。吾等拜訣の光榮を荷ひたる臣下一同は、宮中牡丹の間に參集し、山縣公爵を最先とし、順次二名宛御尊骸を安置せる殯殿に進みたるが、此の間は牡丹の間より一町餘りも隔り、廣さ十疊敷もあるべきか、美麗なる毛織物を敷き詰め、御尊骸は白羽二重の厚き御夜具に御安置申上げ、白羽二重の御枕に御衾を召され、御側近う奉仕れる女官喪服にて團扇もて御煽ぎ申上げ居たりき。扨吾等は此の御間の入口にて先づ九拜し奉り膝行すること約三尺ばかり御尊骸との隔り一間にも足らざるほどの所まで進み參らせて、又も九拜し、其の儘引退くべきが至當なりとは思はれたるも、餘りに御名殘の惜まれたれば、恐る〳〵最後の御顏を拜し奉りたるに、御顏色こそ少し御白く、御目こそ御閉ち遊ばされたれ、畏きことながら御逞しき御眉、凛々しき御口許、御總體に於て御威嚴滿ち〳〵て、神々しき御顏、少しも御平常と御變りあらせられず、今にも何とか御仰せありはせざるかと思はれ、御不敬をも忘れて少時立去り得ざりしも、斯くてあるべきにあらざれば、其の儘以前の如く罷り退りたるが、兎に角長々の御病苦にも拘らず、御變りあらせられざる御尊骸、御棺に御納め奉るに忍びざるやうに思はれ拜別の榮に浴したる諸臣何れも感極まりて涙も出で

ず、誰あつて一語をだに發し得ず、只茫然と首垂れたる儘退出したり。

## 大内山の夜風

先帝御臨終の悼ましき刹那を漏聞するに、七月二十九日の夕陽、悲しく大内山の光を投げる四時頃、刻々衰へ給ふ玉體の御側には、皇太后陛下、新帝、皇后、内親王殿下が幽かに漏るゝ聖上の御呼吸を覗はせられ、一皷々々微かに波打つ御脈を諦視遊ばされ、少し斜に玉體を横はせ給ふ其の背後には、岡侍醫頭詰め掛けぬ。時に昏睡の御容體に陷入らせたる聖帝陛下の御症狀、今は一縷の御望みも絶え給ふにてぞあらんと、岡侍醫頭は大聲を發して『陛下如何御座ります』と御問ひまゐれすれば、昏々として今は早や御臨終と思ひまゐらせたる　陛下は、幽かにいと微かに御答ありて、パッチリ御目を開かせ給ひ、其聲のすなる御背後に御目を廻視し給



先帝の御閲兵

ひて、莞爾として龍笑を含ませ給ふ。『何か召上りますか』と言上すれば、又幽かに頷かせらるゝに、皇太后、新帝、皇后、内親王の各陛下殿下は、始て憂愁悲歎の御顔に晴ばれしき御笑を見せ給ひ、岡侍醫頭より綿棒に數滴の葡萄酒を潤して御口元に差上ぐれば、陛下は心地好く其葡萄酒の綿棒を吸ひ給ひしと、更に第二の綿棒を差上げたるも、既に悲しい哉、刻々に天上遐かに登らせ給ふ　陛下は、其半を吸ひ給ひて、再び目覺めぬ御昏睡に陷らせ給ひぬ。斯くて醫術もあらん限りを竭し御看護の總てを盡しまゐらせたる　陛下は、恰ら枯木の枯るゝ如く御呼吸御脈、刻々薄れ衰へ消えて其夜十時過ぎには既に冷たき尊骸とならせ給ひ、獨り御心臟の絲の如き御脈動が翌零時四十分迄續きまゐらせたりとぞ。

## 御臨終の御模樣

### 御惱の御經過に就て岡侍醫頭の謹話

### 今回の御發病

明治天皇陛下今回の御不例に關し、余が始めて拜診し奉りたるは、去る七月十四日の事にして、當日より腸胃に輕度の故障を起され、御下痢二三回あらせられたるが、陛下には御平素より御通じの多きを好ませらるゝ御方にして、一日二回位は其事のある方却て氣分宜しと仰せられ、例も通じを止めるなどの御沙汰あり、左れば此時も御自身は別段御氣にかけさせられず、又御藥餌は常に御好あらせられざるより、余は只御食事上の注意を大膳職の方に傳へ、不消化物は一切差上げざる樣の處置を爲し置きたるのみ。斯くて十四十五の兩日を過したるが、余は此間朝の拜診に際し、『御氣分は如何に厶りまするか、別段御變りはあらせられませぬか』と一再申上げたるも、平生より御診察を御好み遊ばされざる陛下には、『何事も無い』との仰せにて、御物うげに何の御沙汰も遊ばされず、實際御脈御熱等にも別段御變りの模樣を拜し奉らざりしが、然し暑熱には餘程御困りの御樣子にて、『夜分は熱いので困る、よく睡眠が

できぬ」との仰せありき。玉座は素より涼しけれども、其頃俄かに加はりたる暑熱には、恐れ多きまで御惱み遊ばされたり。斯く何分にも連夜の大殿籠りに御安眠を缺き給ひしかば、午後は表御座所より玉座に入御遊ばされ、御嚴格なる平素の御氣性にも似させられずうつら／＼と御座睡遊ばさるゝ事多かりき。

## 御座睡の御癖

斯く陛下には御平生極めて御嚴重なる御氣性なるに似給はず、午前十時半頃より一時頃まで、卽ち表御座所出御の御間は素より御健かにて在したれど午後一時頃常の如く入御ありて御食事を濟まさせられたる後は、例の御座睡勝にして、始終ウツトリと爲させられ、怪しきまでの御様子なりしを以て、若か御腦に御故障のおはしますには非ざるかと先つ御心配申上たり。开は陛下には近年こそ御節酒遊ばさるれ、御壯年時代は非常の御大酒にて、且つ現に頗る御肥滿遊ばされ居る事ゆゑ、或は卒中等の御病氣を發し給ふ御事はあらぬかと常に懸念し居たればなりき。然し陛下には相變らず『夜分暑くて眠られぬのが苦しい』と仰せあるのみにて、玉體には何の御故障をも認めさせず、女官等も夜分の足ぬ御睡が晝にお廻り遊ばすのでございませうと御噂申上げ居たり。併し斯く表御座所より入御の後は終日うつらうつらとなし居たまひたれど、罷出でゝ何事をか奏し上ぐれば、ハツと御眼覺ありて、『何か』と僅かに問はせ給ふ。斯かれば毎朝の拜診に當り、絕えず特別の御注意を申上げ居たるも、別段何の御變りもあらせられず、殊に十七十八の兩日は御腸胃の故障も御快よくならせられ、御小水の蛋白量も御減少、全く平素の如く殆ど纔に其痕跡を認むるのみなりしより、大に喜び居たるに、十九日午前拜診に際し少しく御容體御面白くなきやう拜したるより、『何か御變りあらせられずや』と重ねて御伺ひ申上げたるも、尙ほ『何事もない、夜分暑くて困る、睡られぬ』との仰

せにて、後は又うつら／＼と御假睡ありき。但し此日より度々御小水の御用ありき。

## 俄かの御發熱

かくて陛下には此日より極て御大儀げの御樣子にて、平素は決して御横などにはなり給はず、又安樂椅子などには御かけ遊ばすを好ませられざりしに、此日に限て午後一時頃表御座所より御戻の後暫御書見ありたるまゝ御假睡に入らせられ、軈て又御横になられたりとの事を後にて女官より拜したり左らでも余は同朝拜診の結果頗る心掛りに堪ざりしかば、同夜九時頃別段御召は蒙ざりしも、特に自ら參内して玉座に伺候し『今朝拜診の節玉體少しく御平素に異らせらるゝやうに拜しました故、夜中押して參内仕りました、玉座のまゝでは拜診し兼ねますから、恐れながら今夜は御床で一つ充分拜診させて頂きます』と言上したるに、『可し／＼、左樣、今日は少し大儀に思ふ』と仰せありて、直に御床に入らせられたり。依て直ちに拜診し奉りたるに、驚くべし、四十度の御高熱にあらせられ、御脈も不整にして玉體頗る御違例に渡らせらるゝにぞ、余は眞に恐懼して取敢ず御假床を御すゝめ申上ぐると共に、急使を渡邊宮内大臣に派して、即時參内を乞ひたるが、陛下は御假床にて拜診し奉る僅かの間にも御座睡あらせられ、殆ど一分間も御恍惚の御狀態を去らせられず、頗る憂惧し奉るべき御容體にて、


壯年の先帝陛下

尿毒症の御疑あり、余等侍醫療のもの〻みにて萬一不十分の事ありては恐れ多きにより、帝國大學の博士を御召あり度しと宮内大臣に協議したり。

### 兩博士の御召

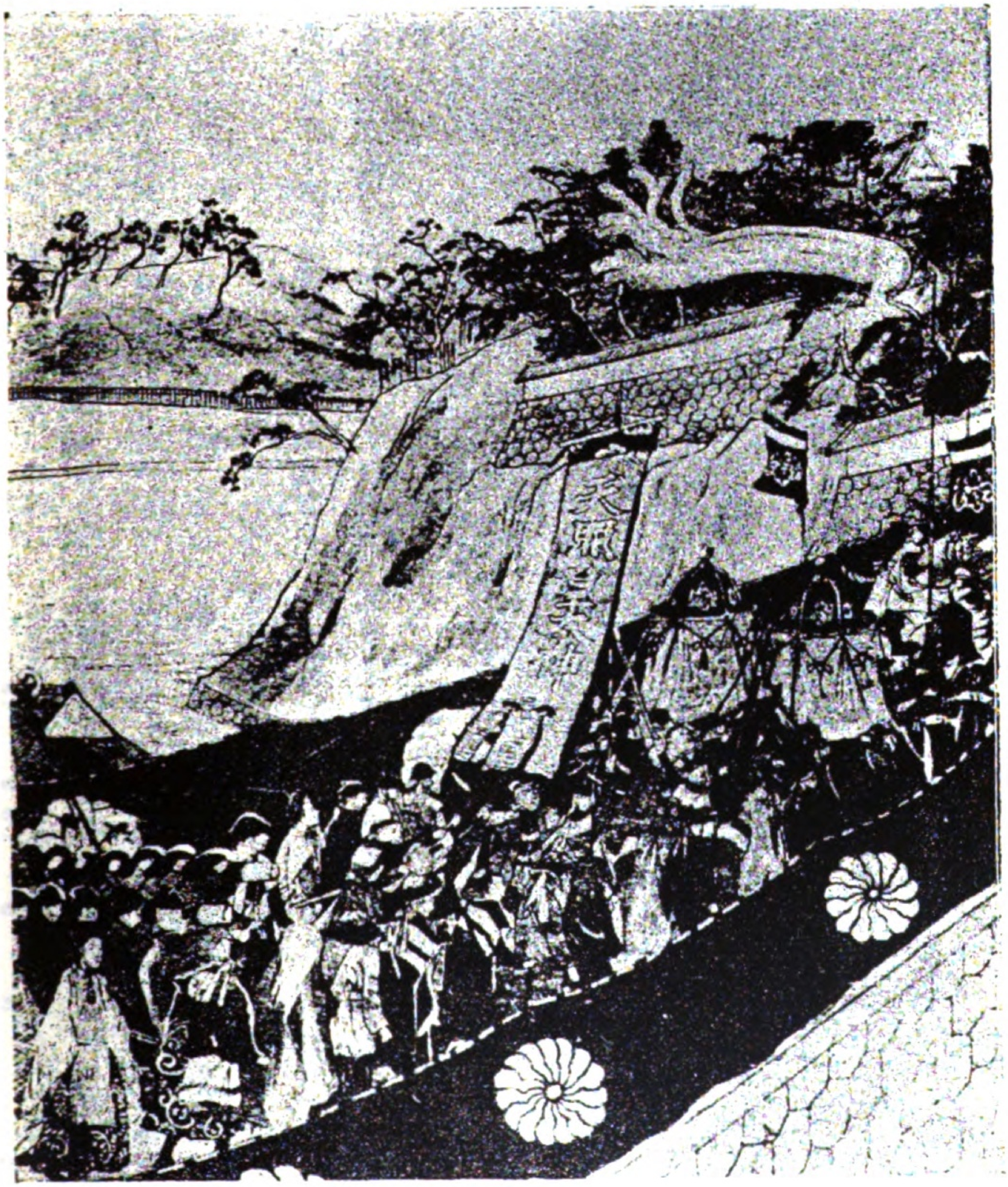
醫科大學の博士にては誰れがよきかと宮内大臣のお話あり、青山三浦の兩博士がよかるべし、先づ一人御召ありて後より又一人など〻云ふよりは、最初



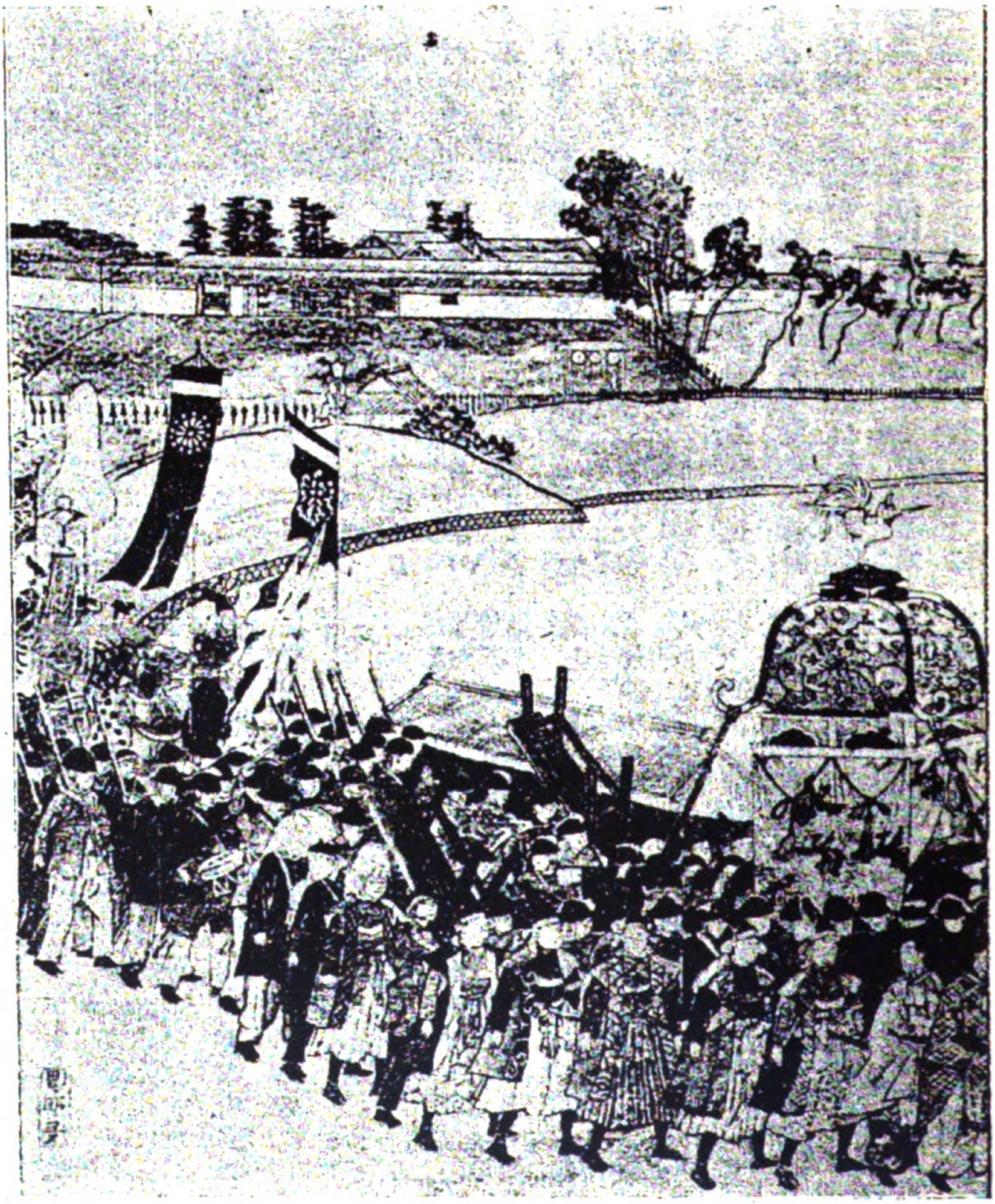

先帝陛下御宸筆

より二名とも御召あり度しと乞ひ、二十日朝電話にて兩博士を御召し遊ばされたるが、兩博士は急遽として參内し、余と共に直ちに御假床に進みて拜診し奉りたるに、果して兩博士も尿毒症と御診察申上げければ、宮中益〻錯愕したり。余も是より以前其の疑ひ十分なりし爲め、十九日夜女官に依賴して特に其日より一度〳〵大小の御便を拜診する事としたり。御尿屎拜見の事は、勿論久しき以前より毎日缺かしたる事なければ、平素は御一日分を纏めて拜見したるものを、御違例と見奉れるより斯く一度一度拜見の事としたるなり。然るに二十日未明に御尿漸く手に入りたるが、蛋白量再び激增して御平素の十倍以上も含み居る事を發見したるより青山三浦兩博士拜診の前より既に尿毒症に疑を置きて其御手當を怠らざりし次第なるが兩博士及び余の三名が廿日朝の拜診に於て愈〻尿毒症に渡らせらる〻事と決定し奉りたれば、其後は專ら其方面の御手當を申上げたり。然かも何分突然の御

明治元年先帝陛下始め



て東京に御入城の光景



發病にて、且つ頗る急性に起りし御重體なれば、御容體甚だ宜しからず、宮内省の公示となり、新聞の號外となり、滿都忽ち錯愕の恐惶に包まれたる次第なり。

### 御恍惚の御狀態

其後の事は既に刻々宮内省より公示されたる如くなるが、陛下には全くの御昏睡狀態と申上ぐるにはあらざるも、絶えず半昏睡狀態、即ち御精神恍惚の御狀態に日夜御彷徨遊ばされ、随つて御食慾更に御進み遊ばさず、御自身御箸を御持ち遊ばさるゝが如き事は絶對に參らざるより、固形體の御食事は一切進めまゐらす能はず、止むなくお横のまゝ液體のものみを參らせ、日々宮内省公示の如き分量を差上げ居たり。左れど是れとて一回に一合五勺など云ふ如き分量は夢にも思ひよらず、女官達が交る交る御枕頭に進みまゐらせて、御睡眠を御妨げ申上げざる限りは絶えず少量づゝ御口に注ぎまゐらせたる次第にて、御容體日々に重らせ給ふのみ。御尿の蛋白量、御熱、御脈等漸次御宜しからざる方に傾かせらるのみ。實に恐懼痛心の至り、胸も張りさくる思ひなるに、恐れ畏みつゝ青山三浦兩博士を始め、余及び侍醫一同殆ど眠食を廢し、何卒御回春あれかしと只管に微力のベストを盡しまゐらせたり。

### 一旦稍や御輕快

然るに二十七日には、御尿蛋白量喜ばしくも減少し、御熱も下降したるより、一同大に力を得、素と天祐に富ませらるゝ陛下の御事、必ず御全快あらせ給ふに疑ひなしなど御噂さ申上げ居たるが、廿八日は再び御重體御危險の狀態に成らせられたるにぞ、宮中の御悲痛一方ならず、申すも恐れ多き御事ながら、皇后陛下には連日連夜の御疲勞と御心痛とに御面やつれさせられつゝ、御枕邊に一睡も爲し給はず、今は新帝となり給へる皇太子殿下、同妃殿下、三皇孫殿下、及び昌子内親王殿下、房子内親王殿下

允子内親王殿下、聰子内親王殿下等の御直宮方、及び渡邊宮内大臣、德大寺侍從長、香川太夫、中村侍從武官長等、青山、三浦兩氏、及び余以下の侍醫は、一刻も御側を去らざりき。是より先き皇后陛下並に皇太子殿下より、必要の場合は注射、滋養灌腸等一切の科學的醫療を施すこと毫も差支なしとの渥き御沙汰を蒙り居たるより、同日より皮下注射、滋養灌腸等を差上げたり。最早や御口よりは何物も參らずなりしが爲めなり。

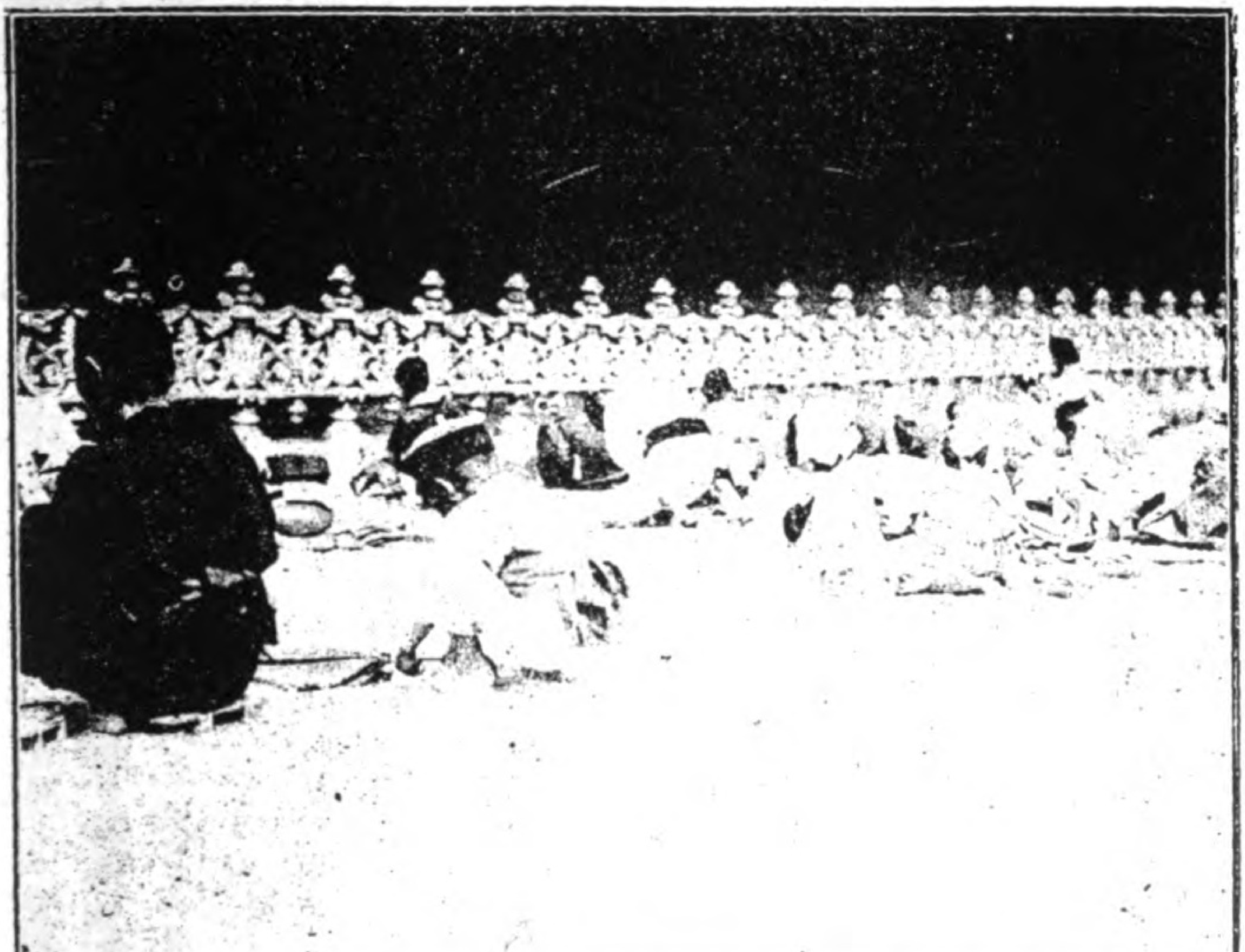
## 『唔』と只御一言

哀しい哉斯く有らゆる御治療を申上げたるも、二十八日正午過ぎよりは全く昏睡狀態に陷らせられ、腎臟の蛋白量著しく增加し、愈々御危險の狀態を呈せさせらると共に、御夢中にて一切何事も御辨じなき御狀態とならせられたり。然るに廿九日午後一時頃の御事なりき、余は御知覺の御狀態を御試し申上げん爲め、玉體近く進みて『如何で厶います陛下!』と聲高く申上げたるに、忽ち御昏睡より覺めさせられ、パチリとお眼を開かれて余の顏を御覽あり、莞爾として御微笑を含ませられつゝ『ウン』と一言。後に尙ほ二言ばかり何事か仰せられしものゝ如く御脣ぶる〳〵と動きたるも、幵は何事とも確かに拜聽するを得ざりき。兎も角も斯く御昏睡より覺させられたるさへあるに、御言葉迄ありたるより、愁涙潸々として打しめり居る宮中は、此時俄かに大旱に雲霓を望み得たるが如く、皇后、皇太子、其他各宮殿下を始め奉り、女官達の御喜びは喩ふるに物もなく『御全快の御兆に違ひ厶いません『必ず御全快遊ばしませう』と大騷ぎにて、久しく御口より御物まゐらねば御衰弱遊ばさん、御覺め遊ばしたる此時にこそ何か御物參らせんなど銘々に犇かれけるが、余は若し其御物の御喉にかゝりなば惡しかりなんと樣樣にお止め申し、扨て御口掃除に用ふる御綿に赤酒を濕し、御脣に當てまゐらせ『陛下御吸ひ遊ばせ』と申上げたるに、御脣を少しとがらせ給ひて

御吸込み遊ばされしかば、愈々御目覺めとはならせ給ひぬと皆々の喜び一方ならざりき。

## 悲しき御臨終

左れど是所謂燈火の將に滅えんとして一度明うなるものにてありき。軈て再び深き深き御昏睡狀態に陷らせられたる後の御模樣は、ア、申すも畏し、御枕頭には皇后陛下、皇太子、同妃殿下、内親王御四方を始め奉り、渡邊宮内大臣 徳大寺侍從長、中村武官長 青山三浦兩博士、及び余以下侍醫、各女官等侍りて、今は早や悲痛なる御最期を待ち奉るのみとなりにき。皇后陛下、皇太子殿下、以下各内親王殿下には、晝間より御續き少しも御側を去らせられず、各御洋裝のまゝ御枕頭を繞りて御着座ありあはれ今一度御回春の御事もがなと御歎きあり、拜しまゐらすだに胸裂け心消えて之を何んとか申上ぐべき、山縣、井上、西園寺 寺内、田中其他元老



深愁に撲たれたる國民



阪下門外文武官の天機奉伺

大臣は別室に詰切りて亦た聲を呑まれたるが、ア、遂に大内山の夜寂々たる三十日午前零時四十三分と申すに、激しき御痙攣御喘鳴と共に御呼吸益〻切迫するや、突如御心臓麻痺を起させられ崩御遊されぬ、ア、哀し。明治天皇陛下には崩御と承りて、別室の元老大臣等バタバタと慌しう驅附け、静かに永へに眠らせ給ふ陛下を伏し拜みて黯然として聲を呑み涙に咽びぬ。ア、陛下は遂に再び歸り來まさす。

## 御居間と御床

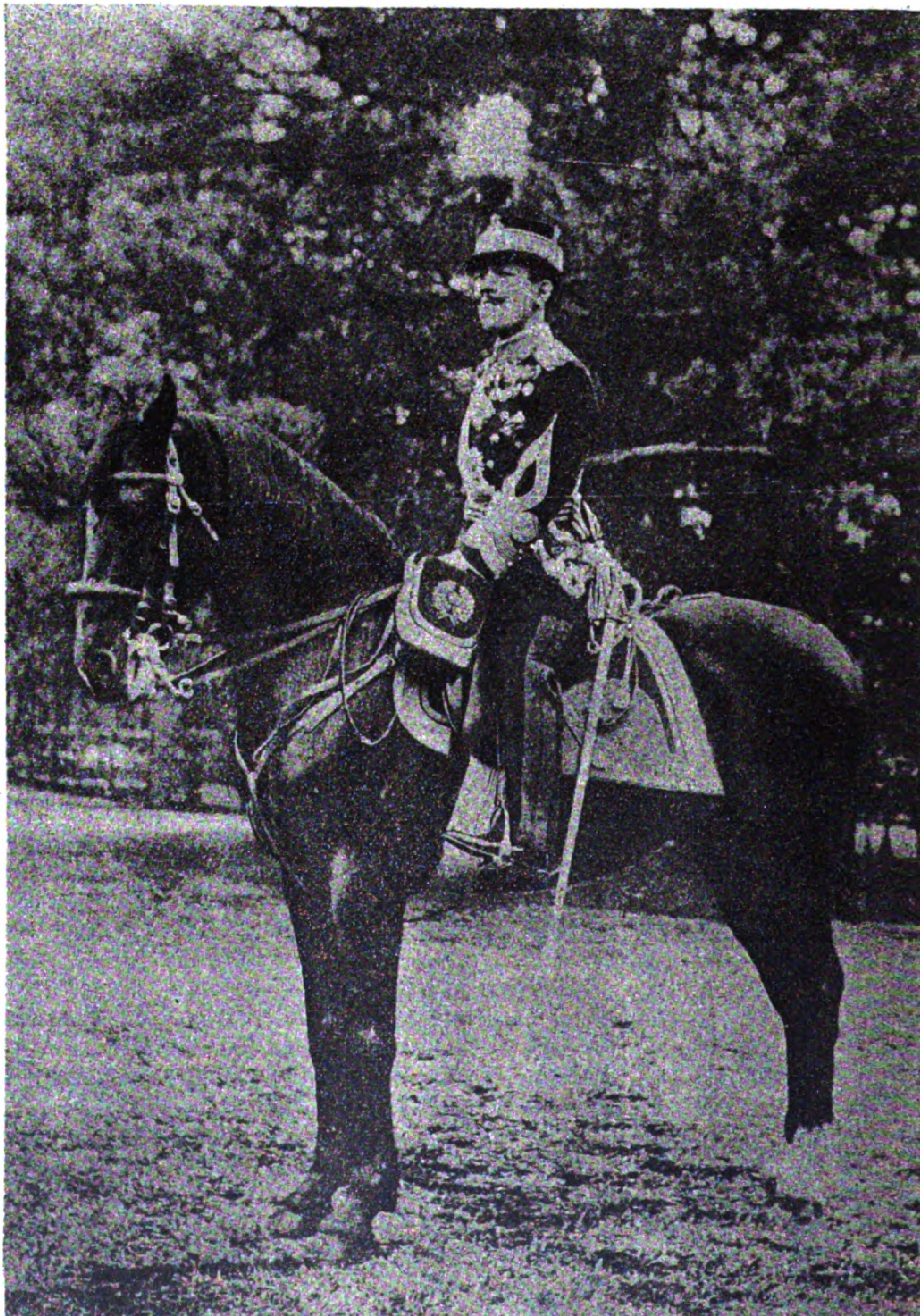
陛下の御病床は御平素の御居間に設けられありき。日本風の廣間なるが、今回は最初より御寢臺は奉らず、白羽二重の御蒲團を高く積みまゐらせて、御寢臺に代へ奉れり。是れ御精神御恍惚の御狀態に渡らせらるゝより、高き寢臺にては萬一の事ありては恐多きより、斯く進めまゐらせたる次第なるが、陛下には白羽二重

の和服姿にて此上に御寢遊ばされたるまゝ崩御遊ばされたるなり。余は恐惶痛哭の至に堪へず、卅日午前三時半頃まで御枕頭にありて御遺骸に差當り適當の御清めを行ひたる後、一旦歸邸を許され又直ちに出仕したる次第なるが、恐れ多きは皇太后陛下の御悲哀の深うましますことにして、崩御後御踐祚の御儀式を行はせらるゝや、新皇帝、新皇后、他各宮殿下には、御一旦還啓あらせられたるも、皇太后陛下には余が退出したる午前三時半頃に至るも、尚ほ御枕頭を去らんともし給はざりき。御深愁素よりの御事ながら、皇太后には御平素より餘り御健康の方に渡らせられざるより、玉體に御障りなかれかしと只それのみを御心配申し居れり。余は豫て聖上陛下の玉體に就て、腦溢血等の御急病なきかとそれのみを御心配申上げ居たるに、俄かに斯る御病症にて御崩遊ばされしは實に玄卿の恐惶に堪へざる處なり

## 御日常

先帝陛下は毎日午前五時御起床遊ばされ、夜の御衣も、晝の御衣も、同じ白羽二重を召させたまひ、此の御召替へありて、御手水を終らせられ、同じき六時賢所御參拜、七時半朝の御食事を取らせられ、而して暫時御休息あらせられたる後、九時當番醫の拜診あり、終りて大元帥の御服を召させられ、十時御學問所に出御、やがて萬機を覽はし各省大臣より奏上する國務は、常に御所へ還御あつて後一一裁斷を下させたまひ、晝の御食事は正午との御定めなれど、國務御多端に渡らせたまふ時は、午後二時を過させたまふこと少からず、夫より再び表御所に出御ありて、政務を總攬あらせたまひ、六時近く御退出ありて、御湯を引かせ賜ひ、夜の御食事は六時半、又七時に及ぶことありしが、夜の御食事のみは皇太后陛下御同席なりしと承る。御食事終りて後睦じき御物語あり、内外の書物に見えたる事ども、

天皇陛下御影



又は獻上の書物など御覽せられて、珍らしと感じたまひし事ども、具に御談話あらせられ、十時より鍼醫の鍼術を享けさせられ、十一時三十分頃寢殿に入らせたまひ、平生の御動作極めて正しく、御定めの時間を十分と違はせたまひたる事なかりき。

御齡十七歳と申すに、御即位あらせられて、今年六十一の寶算を迎へたまふまで、繁忙なる國務に御精勵遊ばさるゝこと四十餘年、未だ曾て避暑避寒を仰せ出されたる事のなかりしぞ畏き。熾くが如く暑き日も、凍るが如き寒き日も、少しの御倦怠だにおらせられず、表御所に出御ありて、總ての政務を攬はせられ、從つて其の他より避暑避寒の事ども御勸め申上ぐれど、絶へて御聽許あらせられず、土方伯宮内大臣にてありし時、斯くては玉體の御惱ともならん。切ては一二週間翠深く風涼しき離宮へも御幸あらせたまへと申し上げけるに、一日も國に政治なくては協はじ、政治は神の御心に由る　暑さを避けつゝ行ふべき事かはとて、御容あらざりき。田中伯宮内大臣たりし時も、同じ心をもて御勸め申し上げたるに、暑さを海邊又は山間に避くる者、幾許あるべきか、と問はせたまひぬ。宮内大臣畏みて、中流以上の者少數に過ぎ候はじと御答へ申したる事を聞かせて　朕は其多きに與せんと、宣はせて、遂に御聽許あらせられざりし。

としく〳〵に思ひやれども山水を
くみて遊ばむ夏なかりけり

の御製を拜する者　誰か大御心の有難さに感泣せざらん、

深く讀書を好ませ給ひて、毎夜一二時間づゝ、此の御樂みに耽らせたまひ、御記憶極めて強く在しまし、一たび御目に觸れさせたまひし書物は、大略御諳記あらせられし、と申す。御學問所には内外の書籍山の如く積まれあれど、最も好ませたまひしは、古今和歌集、平家物語、太平記、資治通鑑、戰國策などなりしと承る。殊に和歌に關する書は、日常御側を放ちたまひしことなかりき。

しばらくは幼心にかへりけり
　讀み習ひてし書をひらきて
此の御製を拜しても、御讀書に深き御興味を持たせ給ひしことを推察し奉るを得ん。

# 畏き御逸事

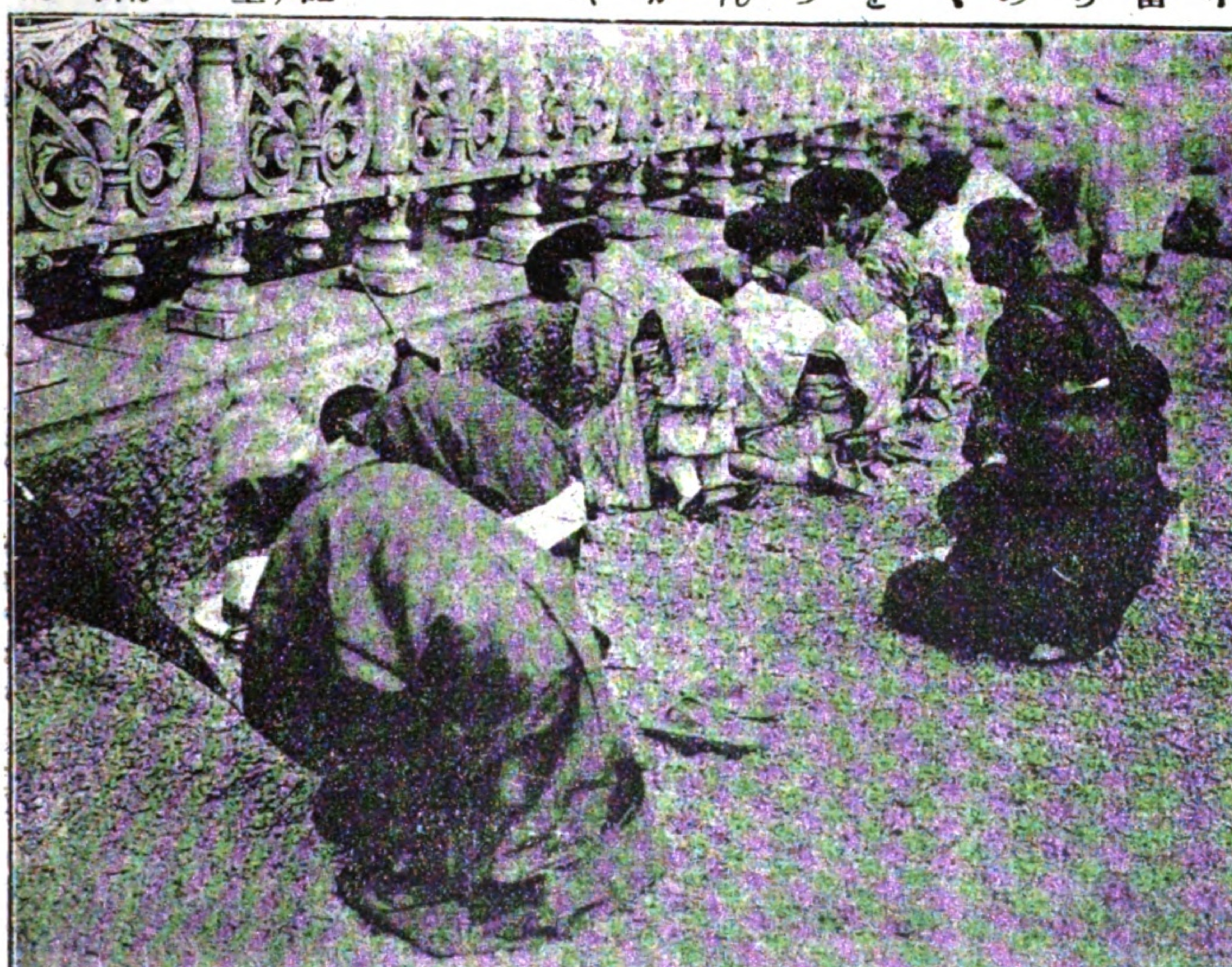
## ガーター勳章の事

先帝陛下の御聖德の宏大なりしことに付て末松子爵の談に曰く、先帝陛下の極めて御聰明に渡らせられ、且つ御機略に富ませ給ひしことは今更らに頌へ奉るもなか／＼畏き事ながら、爰に自分が嘗て親しく陛下より拜聽したる御物語こそあれ。开は他ならず、先年英國皇帝陛下より先帝陛下にガーター勳章を御贈進ありしことは、尚ほ世人の記憶に新なる所なるべし。抑も此勳章は、英皇が最も親しき御間柄に限り、御贈進あるものにして、普通の勳章と異り、胸に佩用する星や肩に掛くる授の外に、尚ほ足に捲く物、又は大なるマントの如く肩より被る物抔も附屬し居れる物にして、之を贈進する時は英皇親ら受贈者に着せ、若くは附けて、親しく贈進の意を明かにするものなり。左れば其時英皇には特に代理としてアーサー、オブ、コンノート殿下を日本に差遣はされたりしが、頓て其御式も濟て、殿下の御歸英ありし後、先帝陛下には我等親任官三十名程に御陪食仰付けられし事あり、御機嫌いと麗はしく種種の御物語を試み給ひし中に、不圖其儀式の時の事共を憶ひ浮べさせ給ひ、『爾時には定めてコンノートも痛かつたであらう』と打笑ませ給ふ。其御仔細に就て尙ほ親しう仰せ聞け給ふを承るに殿下既に陛下に咫尺し奉り、陛下の御足に捲き參らすべき御物を附けつゝある時、測らざりき、殿下の御指より血潮ダラ／＼と流れ出でんとは、多分その御物に飾りあるダイヤモンドか或は金物などにて切りたるなるべし。然も殿下は何事も仰せられず、其儘平氣にて首尾よく御儀式を濟まされ　陛下にも亦その御血

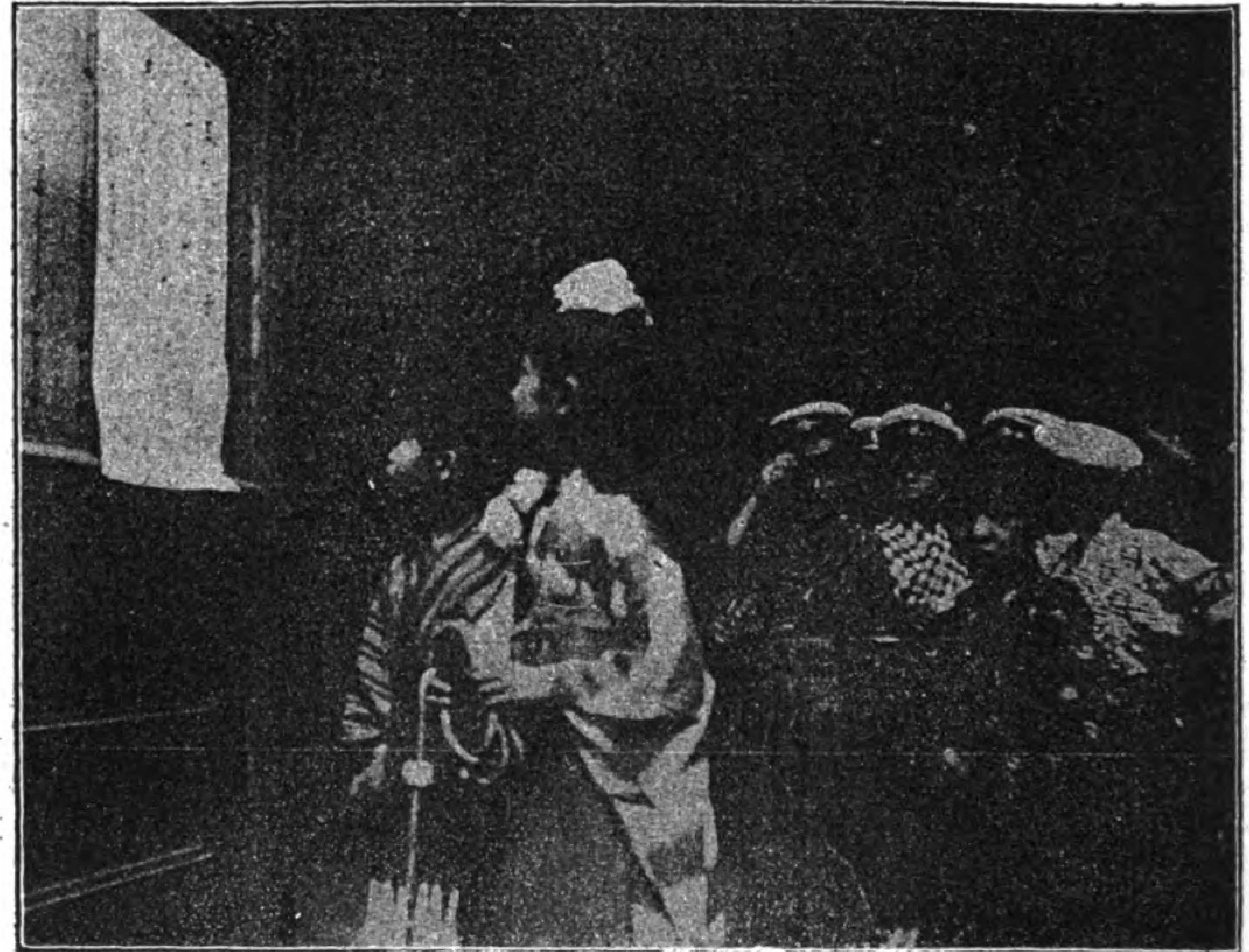
を臠はされつゝ御心付なき態に裝ひ給ひ、殿下の御責務を果さしめ給ひしなりとぞ、機略に富ませ給はでは爭で此臨機の御擧動に出でさせらるべき。陛下には斯く御物語ありて、後『事の序に其勳章を見せやるべし、此通りなり』とて、御席に陪せし二三の者（余も其中にありき）を誘はせ給ひ、別殿に於て其勳章を示させ給ひつゝ『此通りなり』と仰せ給ふ。御諚のまゝに謹んで拜見すれば、其御時の血班附着して尚ほ鮮かなりければ、伺候の面々面を見合せて恐懼措く所を知らざりき。云々

## 聖德宏大

先帝の御逸事にて最も有難く我國民の永く記念して忘るべからざる事は、今の露國皇帝が皇太子にておはし我邦に御來遊あり大津に於て一狂漢のため御負傷ありし時に於ける　先帝の御働き振なり。明治二十四年五月十一日午後二時



庶民拜跪して天に祈願す



小國民の憂懼

三十分頃、この報の達するや、時の宮内大臣土方久元伯は、直に御前に出で、畏る〳〵奏上せしに、先帝は御氣色を變へさせ驚かせ給ふ事一方ならずして、『其後の殿下の御容體は如何』と深く　大御心を痛ませられて、直に侍從に命じて北白川宮能久親王殿下を召させ、取敢ず御名代として急行し、御見舞申上ぐべしと御沙汰あり次で高木、池田兩國手を急派され、其の夜、先帝には、『朕が行いて見舞はん、直に出發すべく準備せよ』と御下命あり、翌十二日午前六時十分御出門京都へ行幸あらせられ、著御後翌十三日常磐ホテルに臨幸露國皇太子殿下を親しく御慰問の上御懇篤なる御見舞の勅語あり、次で同殿下の神戸に向はせ御乘艦あるや、先帝には神戸へ行幸ありて棧橋まで御見送り遊ばされたり。之より前露都にては此の兇報の達するや、時の公使西徳二郎氏は直に御挨拶のため宮中に參内し露國兩陛下に謁見せしに、兩陛下共御氣

色變り、一方ならぬ御心配の御模樣にて、其の事を聞かせたる當時は暫しは御無言に渡られたりと。又時の露國外相は西公使を訪ひ「日本には昔の侍なるもの殘り外人に對し敵愾心を有つと云ふが如何に」と問ふを、西公使が「今は日本も治まれる御代にて決して危險の事なし、今回の兇事たる偶ま一狂漢の擧動にて我政府は嚴重に處分すべし」と說くも、外相は容易に信せざりき。然るに先帝親ら御慰問又御見送りありしとの報達するや、露國兩陛下は始めて御安心ありしのみならず、先帝の御高德に餘程感動せられ、御歡喜の情一方ならず、西公使が參內したる時、同國兩陛下は日本天皇陛下の御德を甚く御頌賛あり、又同國外相は、先帝御親問の事を報せる電報を接手したるは深夜なりしに、夜間を厭はず西公使を訪ひ、日本の好誼を謝し、先帝の御處置は列國に曾て見ざる御高德と賞賛措かず、之が爲め日露の國際上に益〻親善を加へたるのみならず、延いて歐洲各國の新聞紙上、我が陛下の御德を頌へざるものなく、列國との交際上に少からぬ好感を與へ、直接間接に我國運の發展に至大の影響を及したりき。是れ先帝御一生中に於る最も大なる御事蹟なりとこそ申すべけれ。

## 御儉德の一班

明治六年頃の赤阪皇居と申すは、元紀州侯の邸にて、表通には大名長屋などあり、甚だ狹苦しき屋敷なりしが、先帝陛下の御座所として、只僅に八疊の御間と御化粧室とありしのみ　御表向きは折々外國使臣の參向することもあればとて、稍廣き十二疊の室二間を御接見所に充てさせられぬ。其の頃世上の一問題となりたる大隈伯の竹橋官邸竣成したりければ、兩陛下の行幸啓を仰ぐ事となりぬ。此の官邸は流石に世の一疑問となりたる丈、當時の民度不相應に贅澤を盡したるものなりき。壁には珊瑚を塗りこめ、卓上に千金の鉢を飾れるなど、決して陛下の大御心に叶はせらるべくもあらねば、陛下には一

皇后陛下御影



言二言隈伯に對して改まりたるお言葉もありしやに聞き及べり。後に間もなく赤阪御所の新築成りつれど、陛下には三年が間、新御所に遷らせ給はざりき此等は質素簡約を旨とし給へる陛下の御平生を窺ふに足るものあらん。或る大臣が十年間宮中に奉仕せる間に、陛下は三たび其の御食膳の資を削減せさせ給へり。其の頃聖上に進獻する一度の御菜料は二十圓なりき　此れ陛下の親しく取らせ給ふ御食費のみにあらで、實に御下り品となりて女官達を賑する代となりたるものなり。女官達の衣裝は只一枚にて百圓二百圓を値するなれば、此の資を作らん爲に何れも飯のみを持ち來りてお菜を節儉するといふ遣りかたなりき。然るに陛下には日々新聞を覽はして少しにても民に難色ありとおぼす時、先づ御食膳費を減せよと仰せ出さるゝが常なり。爲に二十圓は十五圓となり、十圓となり、三たびして終に五圓の御食膳費と定めさせられたり。之に準じて御洋服も元は一度御着用濟の分はドシ〳〵仕舞はれたるものなりしに、此も畏き大御心より御襯衣、御洋服の類など一週間も御用ひになり、後には一兩度洗濯の上御使用あらせらるゝやうになりたり。御用濟の分は十二月の末に宮相を始め一般宮仕ふ人々に下し賜はるを例とせり。

避暑避寒の御事もあらせられずして　唯國務を覽はす外には、何の御慰みもなし、若し有りとすれば御乘馬と御作歌とのみならんか。午後三時より日の暮るゝ頃までは、日々御馬を打たせ給ひて曾て怠らせ給はず。御歌は如何に御繁用の折にも必ず二三十首は遊ばさる。斯く文武にいそしみ給ひて國と民とを愛し給へる陛下は、今や神去り給ひて龍顏を仰ぎ奉ること叶はざるぞかへす〳〵も怨めしき限りなる。

## 御趣味の一班

古來名君賢主も、所謂老境に及べば漸く政事に倦み、或は土木を起し、或は娛樂を事とする等往々に

して之れ有り。而も　明治天皇の御一代に於ては、未だ曾て物慾に囚はれて所謂御道樂に傾むかせられたるを見聞し奉らず。是れ特筆大書し奉る可き御盛徳なり。若し强ひて御嗜好の在る處を申上ぐれば、只御馬と御歌とのみなりと拜承す。近年に至りて政務の間少しの御暇あれば御歌の慰み遊ばされしも、此は只行餘の御事に過ぎずして、決して耽り給ひし事無し。文書の御愛好に就ても、亦右に同じく、漢學は何分平素御忙はしき事とて如何なる文書を凝つて御覽遊ばされしと云ふ事なく、又其御暇もあらせられざりき。併し御幼年より御壯年に亘れる御修養の結果は、平素些末の御言行の上にも現はれて、種種文字上の事につき御下問あらせられし事多く、而も御下問の文字は大抵字義の穩やかならぬ處を指摘せられて、一々急所を突かれしは、殆んど驚嘆の外なく、斯の如く文意のみならず、文字の上にまで御注意の及びしは、以て漢學の御素養の深くして、御眼光の常に紙背に徹りしを拜察するに餘りあり。是れ畢竟御神性にましますが爲めにして、到底下民の御想像申上べき次第に非ず。

先帝陛下には御性質雄壯に在し、御幼時より苟めの御遊戯にも雄々しき事を好ませ給ひ、我が日本刀を深く愛でさせ給ひ、其の世界に比なき作風には最も御趣味を留めさせられ、御物の名劍は常に數口づつ御座右に置かせ給ひて、時々御鑑賞遊ばし、時には侍臣に命じて特に御文庫の内より御取り出させ給ひて、御覽遊ばすこともあらせられたり。曾て岩崎家より進獻したる備前助平の一刀は、天下の名作なるが、御嘉納の上御佩用の御軍刀に御裝ひ遊ばされたるなど、之れも御眼識高く在せる一例と拜察し得されば諸家よりも銘刀を選んで獻上せしが、中にも廿七八年役に大纛を廣島に進められたる際、淺野家より獻上したる則宗、田中伯獻納の助宗、伊達家獻納の五條國永等は世に聞えたる名作なり。新刀は帝室技藝員月山定一、宮本包則等に鍛へさせ給ふこともありたれど、多くは神社に納めさせられし爲めの

御用と拜承せり。陛下御一代中最も御力を用ゐさせ給ひて御趣味の程を拜すべきは、後鳥羽院菊の御作の御劍、毛利輝元の所持せる宗瑞正宗と稱ふる御小刀二口の御拵へには、何れも佐渡國御料金山より採掘したる黄金にて飾らせられたることにて、明治美術の粹を發揮する結構無比の御物と承る。

## 深沈大度の御德

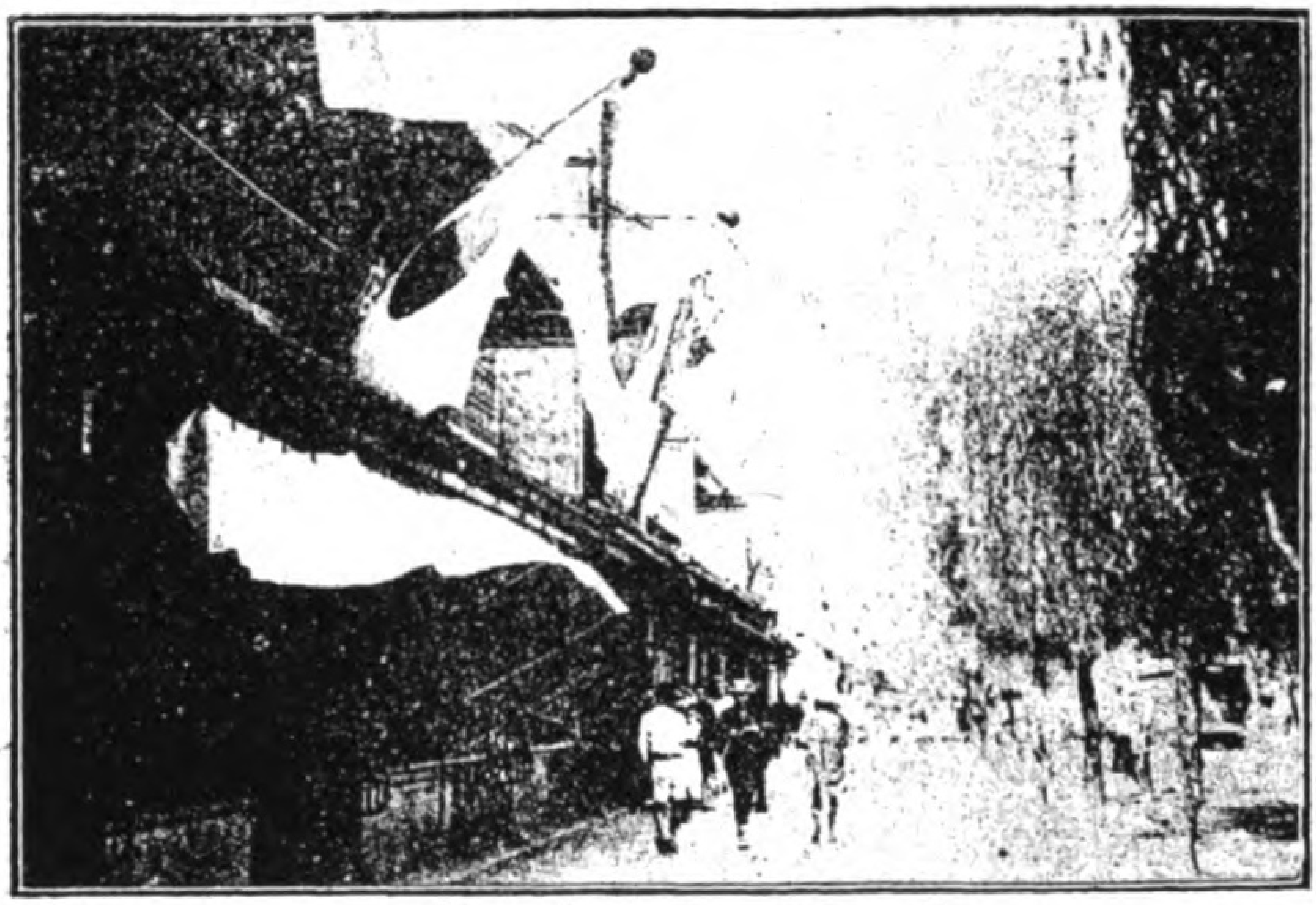
先帝陛下は御心雄々しく、意思鞏固で、其輔翼の臣として必ず最も適任の者を擧げさせられ、一度之を擧げた上は　陛下全幅の御親任を之に置かれた。凡そ日本で行はれた軍事上其他諸般の改革事業は、一々先づ初に　陛下の考慮と御裁可を煩はしたもので、愈々其の事に取掛れば一々　陛下の機敏にして且聰明なる注意を用ひて實行せられたのである。

陛下は多くの日本人に比べて丈も高く、肥え太つて居らせられた。御顏の色淺黒く、御目鼻立きつばりして、極めて稀にほゝ笑まるゝことはあるが、常は冷靜物に動ぜず流石に束の間も天降りまし神の御末の御身に似つかはしい由由しき威嚴を失はせなかつた。

私は色色の異なる折に拜謁を辱うした。先づ年頭の宮中の諸儀式銀婚式の時、觀櫻　觀菊の御宴の時、又此等よりももつと小さな打くつろいだ御接見にも見上げ參らせ

大内山の慈雲





諒闇の帝都

た。觀兵式の折にも拜したが、序次整然として幾萬將卒が　陛下の御前を過るを瞰す時、此の強大な軍隊が一に　陛下の御創意と御熱心とによりて今日あるを致したのを思し浮べられて、定めて御滿足あらせられたに相違ないと伺はれた。又大分前のことだが、或時某砲兵廠で見上げ參らせた時丁度此の日鑄鐵の任に當つた者の粗相で、赤く熱した鐵の片がばら〳〵と　陛下の御座所の邊に散らばつたことがある。其時逸早く逃げ出した者も多かつたが　陛下は泰然として一寸も其場を去られなかつた。

陛下は如何なる場合にも色を變せず心を動かされなかつた。併し鋭い御眼で御身のまはりの一切の物事を見逃し玉はぬ所は、如何にも萬事に御注意を怠らぬ所を示してゐる。又側に立つた侍臣から御注意申上ぐるを待たずして　陛下が下し玉ふ御言葉の節節には、如何にも人をして流石は一國政府の行政的社交的方面に力を致さるゝ王者の御身ぞと思はしむるのがあつた。　陛下は御記憶殊の外強く、一たび　陛下に咫尺した賤しの者の容貌をも一々記憶し居らるゝのみならず、又一々誰は何を喜び彼は何に關係ある人かといふこと迄御存知であつた。思ふに　陛下はわが英國先帝エドワード第七世のやうに、其の臣下ならぬ外國人になつき慕はるゝ樣な御快活な點

はないかも知れぬが、一たび陛下に打解けたる謁見を賜はつた一切の歐羅巴人は、孰れも陛下の御聰明に敬服し、又數ならぬ己等を御心にかけられ記憶し玉ふことを心嬉しく感せぬはない。(前英國領事ロングフォード氏)

# 聖恩のかずく

新山うた子謹話

## 夢のやうな此度の御事

畏れ多い事でございますが　先帝陛下には平素御壯健に渡らせらるゝやうに存じ上げて居りましたところ、つひ七月の十八日に、以前亡夫と一所に侍從をお勤め遊ばされた有地中將が宅へお越しになつた折中將が　聖上にはかねてから糖尿病の御氣味がお在りなされますが、恐れ乍ら私も多年この病氣で難儀して居たのを、先年大島大將から一種の特效藥を贈られ、これを服用してから漸々快くなつて、當節は殆んど全治したやうです。これは野原に生じてヒイラギに似た刺のある一種の植物を煎じたものですが、自分に効能があつたので　聖上にもお勸め申上げて見たいと思つた。併しかやうな事は餘り恐れ多いと存じて躊躇して居ます」とお咄しになり、その時は何の心もつかず伺つて居りましたところ、三日とたゝぬ内に御發病あらせられ、御心盡しの御看護名醫の御治療、さては萬民の厚き祈りの甲斐もあらせられず、遂ひに崩御ましましたのは、夢とも何とも申上げやうなく、唯々恐懼御哀悼申上ぐる他はございませぬ。

## 剛毅の御性質

陛下が國家と萬民のために只管大御心を盡させ玉ひし御高德は、恐れ入り奉るの他はございませんがそれがために自然尊體の御事は左して御懸念遊ばされぬ傾があらせられしものか、漏れ承るところに

依りますと、平常侍醫が拜診申上ぐる際「今日は診察に及ばず」と仰せられた折には、侍醫が如何に懇願申上げても拜診のお許しが下らなかつたさうで、これには侍醫も往々お困りなされたさうでございますが、かやうな剛毅の御性質でいらせられましたので、此度の御病氣にも御忍耐づよくあらせられし事と察し奉ります。近頃侍醫方の御注意を彼是れ申す向もあるやに承りましたが、却々左樣な非難は出來ぬことゝ存じます。

## 皇居炎上の折

十三年前に歿しました良人は、明治五年から侍從の職を拜命いたして居りましたが、良人が御側に侍りました頃は、丁度先帝陛下二十二三の御壯年時代にいらせられましたので、御乘馬についての御用を盛んに仰せつかり實に難有き仰せを頂きましたさうでございます。その内に皇居の炎上がございましたが、丁度非番であつた良人は大急ぎで御所へ驅けつけました際は先帝にはもうお火避に相成り、良人は德大寺樣から神器をお預り申上げて立退いたのでございました。

## 恩賜の時計

良人は腎臟病から心臟を犯され、遂に顏面痙攣を起して、六月二十八日の午前一時頃歿しましたが、申すも畏きことながら先帝の御病氣中は、良人の病性と經過とを思ひ合せまして、膽を冷したのでございます。良人は御側に勤めました頃、先帝から賜りました時計を病中暫くも枕邊を離さず、臨終の朝まで、チヤンと自分で卷き、秘藏して居りましたが、私は聖恩の有難き思ひ出が數々胸に迫りまして今日此頃は只もうぼんやりいたして居ります。

## 皇太后陛下の御仁德

私共の知己に、以前大膳の大夫を勤めた人がございますが、この人は、料理の素養が深く、何によ

らず凡て自から風味の加減を試みて御口に叶ひまゐらすやうに細かく注意いたし、尚ほ茶道の心得もあつて趣味的に心をくばりましたので　兩陛下の御覺え目出度く、殊に皇太后陛下よりは屢〻忝き御言葉を賜はりましたさうですが、先頃宮內省改革の際お勤を退き靜かに餘生を送る身となりました。其後も皇太后陛下にはこの臣の身の上を案じさせ玉ひ、彼は困窮して居りはせずやなどとお漏し遊ばされ、御使を以てお尋ねを忝うすることもありと申すことで、同氏は痛く御厚恩を感謝いたして居ります　陛下がいつ〳〵までも仕へ人を御慈しみ遊ばされる御仁德は誠に忝いことゝ存じ上げます。

## 御報恩の一端

私はいたつて不肖者でございますのに　皆樣のお引立で　永らく赤十字と愛國婦人會の幹事を命ぜられて居りましたが、大分年を取りましてお役にも立ち兼ると存じ、職を辭しましたけれども、お許しがございません。誠に有がたいことでもあり、一つには永年勤めたものが辭すると云ふのは皆樣の御感情を損ふことになると存じ直して　引つゞきお役を勤め、而してこの田舍へ引移りましても矢張前任地の赤坂に會員籍を置て居りますが、赤坂區の愛國婦人會では　幹事が毎月櫻會と申すものを開らき、その折々の相談をいたし、又聊さか積立金をつくつて癈兵又は軍人の遺族を救助する爲めに幹事仲間で狀袋を張ることに定めました。このやさしい狀袋張りでも手紙をいれるやうに作り上げるまでに、二重封筒ですと七遍手數がかゝります。表と中の紙を別々につなぐので二度の手數、底を貼るので三度封じ目へ姬糊を薄く引くので四度、その上へゴム糊をつけるので五度、締の部へ會の記章を捺印するので六度、拾枚揃へて帶封をかけるので七度、兎に角これだけの手數がかゝります反古にしても惜くない位に思つて居ました封筒でも實際手がけて見ますとこんなものでございますから、私共はどの位國家社會の御厄介になつて居るか知れぬと存じます。かう考へますと　私のやうな無能の老婦も、これからは皆樣の後について出來る限りせめて會のためにでも働らき、御報恩をいたさなければならぬと思つて居ります。

# 肺結核新藥の發見

## 誰でも出來る 肺病自宅療法

肺病の恐るべき事は今更云ふ迄もない殊に近年非常な勢ひで患者の數を増しつゝあるに至つては最も寒心すべき一大事である、隨つて色々の奇藥とか靈藥とか云ふ者が頗る澤山流行するが未だ完全なる特効藥のあるのを聞ない、誠に憂ふべき事である、所が獨逸留學より歸朝せられたドクトル松尾先生が効力の卓絶なる新藥を發見せられたと云ふ事を聞いたので未だ此喜ぶべき新藥を知らざる患者の爲に先生の治療談に就て敎へを乞ふた、先生快諾して曰く此病氣は極めて緩漫なる慢性傳染病で治療が仲々困難であるから療法も容易に發見されない私も隨分苦心しました此病氣の大體の容體を御話しすると別に感冒に罹らぬのに時々咳嗽が出るとか、又朝は何共なかつたのが夕刻になるとポーッと熱が出るとか、餘り澤山の熱でもないが定まりなく發熱するとか少しとろ〳〵就眠すると全身に汗が出るとか靜かにして居ても時々呼吸が苦敷なるとか、別段自覺すると云ふ樣な理由のないのに身體が何となく疲勞して仕事が厭になるとか、咯痰が平常より多く又は血の腺が交るとか、夜間眠られぬとか、食物が進まぬとか、胸や脊が痛むとか、少しの事が非常の苦になるとか、下痢があるとか、咯血するとか、非常に發熱するとか、甚敷衰弱して居るとか、夜の明ける時分になると呼吸苦敷なるとか、かう云ふ容態の患者は早く注意しないと再び起つことが出來なくなる、肺病の療法には種々あるけれど只藥を呑む許りでは全治せぬ其れは根本の療法を知らないからであると。

因に本療法は自宅にて誰にでも出來るのであるから詳細を知りたければ返信料三錢封入東京麴町區九段下飯田町四の十六如山堂藥院（電話番町二八八二番）へ本誌愛讀者なる旨記入し申込まるれば親切に委敷根本的療法を敎示せらるゝ筈である。

女(ぬの二)

貴婦人達はナゼ美しいでせう!!!

▲其れはこの樣にしてみがき立てるからであります

# 美顔と化粧法

定價送料共金三十七錢
切手代用は金四十錢

目次の大略 ▲色白くなる方法 ▲赤き顔を櫻色にする方法 ▲シワのよらぬ方法 ▲キメを細かにツヤを出す方法 ▲日にやけるを防ぐ方法 ▲歯を白くする方法 ▲手の色を白くする方法 ▲髮の毛を黑くする方法 ▲毛のぬけるを止める法 ▲毛をのばしつやを出す方法 ▲ふけを去る方法 ▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法 ▲あるべき所に毛なきを生ずる方法 ▲やせる法ふとる法 ▲鼻を高くする方法 ▲聲をよくする方法 ▲入浴の方法 ▲化粧品の選び方 ▲おしろいのつけ方 ▲衣服の模樣と縞柄 ▲衣服の縫ひ方 ▲衣服の着方

此外いろ〳〵の事が書いてありますが皆どなたにもすぐ出來る事ばかりで其效果も面白い程あらはれます。私方へ二錢切手十五枚又は一錢五厘切手廿枚御申越し下されば一千部限り特別に御分ち申上げませう

本書著者 東京神田錦町三ノ二 高柳孝子

# ●色白くなる

色黑き方、青き方、赤すぎる顔の御方は郵便切手二錢封入御手紙下さい、必ず色白く美しくなるよい藥を御知らせ致します、わけて日に燒けて黑くなつたなどはすぐ白くなります。皆樣に御實驗を願ひました所、澤山の御禮狀をいたゞいて居ります。

東京神田錦町三ノ二 高柳こう子

本劑は毛髮專門家**醫學博士リンド先生**の苦心發明せし新藥にして未だ我國に廣く行はれずと雖毛生藥中効能最確實なるものにして他藥を用ひて無効失望せる者にもよく偉効を奏す。乞ふ安心して御用ひあれ。

# 毛はえ藥の大王 ドンリ

本劑を患部に塗布する時は偉大なる効能を表はし皮下に至りて毛根を刺戟し以て毛髮の發育を旺盛にす婦人のはえぎわの惡しきを直し毛髮眉毛の薄きを濃くし、ぬけ毛を止め新毛を發するには並瓶を用ゐ、ハゲ(禿頭病)無毛等には特瓶を使用せよ、完全なる毛髮を發生し其苦惱を去り幸福の身となるべし。此の如く藥効偉大なるも劇毒藥を含まず、皮膚を損せず、毛の發生すべき所なれば本藥にて發毛すべし御安心の上一日も早く此新藥を用ゐ蘇生の喜びを得よ●藥價送料共並瓶一圓十錢●特瓶二圓十錢●注意藥價の高きは世にありふれたる無効の藥品と相違し原料高價なればなり。

# わきが

わきがの臭ひは他人には甚だしく同室に堪へず、故に甚だしく人に嫌はれ、交際上の親密を欠き立身出世の妨げともなる、故に一日も早く之を全治せしめざるべからず。本店發賣のワキガの妙藥は最近の學理と幾多の實驗とにより研究發見せられたる理想的新藥にして効能最も顯著なれば他藥にて無効の方も失望落膽する事なく速に本劑を用ゐて其苦惱を脱せよ●藥價送料共一圓十錢慢性用二圓十錢切手代用一割增

# ●やせ藥●



男にても女にてもでぶ〳〵とふとりたる者は肥胖病といふ甚危險な病症にて時に生命を失ふ事ありまして婦人の肥滿せるは殊に見苦しきもの故速に全治せしめざる可らず、郵券二錢封入申込の方には醫學博士筒井先生の學說肥滿病自宅療法及其良藥を詳報すこれによりて療養せば少しの害もなく程よくやせて速に美容強壯の身となるべし。

東京神田錦町三丁目
電話本局四五六七番
振替東京八六四二番

**東雲堂藥房**

女(三の五)

女（ねの四）

# 女子文壇社發行書目

東京市京橋區大鋸町十二番地

（振替口座壹七貳九番）

全國書店取次販賣

## 女子文壇叢書 第壹編

前島優梨子著

# 町むすめ

大好評 初版將さに盡んとす

▲全一册讀切寸珍美裝

正價三拾錢 送料四錢

女性の作物と云ふ事を最も明かに示せるものは前島優梨子の小說となす、優梨子の小說には女性らしき同情あり、女性らしき理解あり、彼女の作れる多くの短篇小說は、其一篇毎に、それぞ〳〵異りたる人を引きつける力ありて、讀めば讀むほどしみ〴〵と人生の味ひを感得せしむ、世に閨秀作家を以て標榜する者少からずと雖、多くは其名ありて、其實空し、此處に其名は知られずとも、其實力の充實せる若き婦人作家、前島優梨子の處女作を一般の讀書社會に推奬するの機會を得たるは吾人の誇とする處なり。

● 第二編 姿見日記 山田邦枝子著（近刊）

八年九號 九月號 普通發行

# 女子文壇

毎月一回一日發行

| 定價 | 特別號三拾錢 | 送二錢 |
|---|---|---|
| | 普通號拾五錢 | 一錢半 |

本誌は毛色の異つた雜誌、類の無い雜誌で、女學者、人に達すいて持ち居てに若い人に喋りれていすさまりよ御論據下さい、寶物を御覽

（本誌は毛色の異つた雜誌、無類の雜誌で、女學者、人に達すいて持てて居る若い人に喋りされ、ますよ、證據より御論物を寶下さい覽）

九月一日 一卷二號 發刊 好評

# 少年少女 お伽世界

▲毎月一回一日發行

▲石版寫眞版挿畫頗美

價一册七錢 送料五厘

價が廉くて、綺麗で爲になつて面白い、こんな雜誌は外にありません

百聞は一見に如かず、最寄の書店にて實物を御覽下さい。

▲横瀨夜雨先生著 諸新聞高評

再版 夜雨集

全三百卅頁 特製八十錢 並製五十錢 各送料六錢

◉ 女子美文作法 全 特價二十錢 送料四錢

◉ 新文章 全 特價拾錢 送一錢五厘

再版 二人やんちやん

全一册 武田氏密書數葉 正價卅五錢 送料六錢

◉ 娘時代 全 特價拾錢 送一錢五厘

◉ 女子遊學便覽 全 特價十五錢 送料四錢

▲佐々木邦先生著

女（わの五）

第十八卷第十二號……九月一日發行

# 文藝倶樂部

○菊判本文紙數三百頁○原色寫眞版一枚
寫眞版光澤紙別八頁○普通四枚。二色刷
光澤紙二頁○木版彩色數十度刷錦繪一枚

正價二十五錢
郵稅二錢五厘



本誌は、全誌悉く新味潑溂たるばかり也。先づ、卷頭に小山内薫子作長篇小說「結末」を揭ぐ。是れ氏か犀利なる眼光もて藝妓を描きしもの。次ぎに高崎春月子作小說「女と男と」を收む。其題名既に無限の興味を含む。本文是れにかなはでやは。第三は始めて小說に筆を執る沼波瓊音子作「破裂前」を載す。子が小品文と俳諧とに喝仰する人々は、必ずや玩誦すべし。倚天脚本に至りては佐藤紅綠子純日本劇と銘打つ「あきらめ」を公けにす。子が日本劇に劇壇の最珍たる「あきらめ」たらむ。新講談は今尚人口に膾炙する小金井小次郎を同姓の小金井蘆洲子講演す。男の中の男たる俠客の眞骨頂は紙上に活躍せむ。演藝界活社會長廣舌其他各欄酌めども盡きぬ興味津々たらむ!!緑陰樹下清風の裡江湖諸賢の愛誦を俟つ。

東京日本橋區本町
博文館
振替口座二四〇番

女(ぬの六)

女（ぬの七）

手本執筆者 御歌所寄人 大口鯛二先生



# 大日本習字速進會

かりそめのそゞろがき

にも、その人格をあらはして、ゆかしくなつかしい思を起させるものは美しい手蹟でございます。女の寶は樣々あるでございませうが、わけても大切な寶は、美しい容貌と美しい心とそれから美しい手蹟との三つでございませう。大口鯛二先生は現代女文學の泰斗と仰がれるお方でございます。その御書きなされたお手本を、最新式にして最正式との世評ある大日本習字速進會の新式習字法で學ぶのですものこれこそ眞實に鬼に金棒、どんなお方でも見る〳〵能筆とおなり遊ばすに違ひはありませぬ。皆樣方の一生の幸福の爲に、兎に角見本付規則書を取寄せて御覽あそばせ。そして他の習字法とお比べなさいませ。

東京市神田區駿河臺鈴木町

見本つき規則書申込次第進呈 ● 此際入會者は大特典あり

女(ぬの八)

# 先帝御製

先帝陛下には敷島の道に御堪能に御在しまし、風調、歌格兩つながら秀でさせたまひ、御一代の御製九萬首の多きに上ると承る。御精根の程推はかり奉るだに畏き御事なり。御製には謹嚴にましまして御氣象自然にあらはれ、斯ばかり多き御製の中、變體の御製とては一首もなく、月にも花にも大御心を民草の上にかけさせられ、人の踐むべき道の教訓を垂れさせたまひし御慈しみのあらはれたるは拜讀するだに畏き極みにこそ。

親

たらちねのみ親のをしへむら玉の年經るまゝに身にぞ沁みける

同

たらちねの親の心を慰めよ國に務むるいとまある身は

同

國のためたふれし人を惜むにもおもふは親の心なりけり

子

思ふことつくらふこともまだしらぬ幼なごゝろのうつくしきかな

同

思ふことうちつけにいふ幼子の言葉はやがて歌にぞありける

折にふれたる

若竹のおひ行末を思ふよに庭の教をおろかになせそ

老人

つく杖にすがるともよし老人の千歳の坂をこえよとぞ思ふ

人

人はたゞまことの道を守らなむ高き賤しきしなはありとも

四海兄弟

四邊の海皆はらからと思ふ世になど波風の立さわぐらむ

天

淺みどりすみ渡りたる大空のひろきをおのが心ともかな

詞

言の葉の花の色こそかはりけれおなじ心の種ときけども

寶

傳へ來し國の寶となりにけりひじりのみなの詔ふみ

行

よしあしを人の上にはいひながら身をかへりみる人なかりけり

鏡

打むかふ度に心をみがけとやかゞみは神の造り初めけむ

歌

まこゝろを限りなき世にとゞむるも大和言葉のいさをなりけり

藥

へだてなくかくるめぐみの露こそは靑人ぐさの藥なりけり

心

ともすればかき濁しけり山水のすませばすます人の心を

玉

曇りなき心のそこの知らるゝはことはの玉の光なりけり

同

白玉を光なしとも思ふかな磨き足らざることを忘れて

寶

蘆原の國富まさむと思ふにも靑人草ぞ寶(たから)なりける

折にふれたる

家とみてあかぬことなき身なりとも人の務をおこたるなゆめ

同
花になり實になる見れば草も木もなべて務のある世なりけり

同
思ふこと貫かむよをまつほどの月日は長きものにぞありける

武
弓矢もて神の治めしくに人はことなき世にも心ゆるふな

教育
ともすればあらぬ方にと踏迷ひ敎へがたきは人の道なり

同
山をぬく人の力もしきしまの大和心ぞもとゐなるべき

同
世の中の人におくれを取ぬべし進まぬ時にすゝまざりせば

庭訓
たらちねの庭の敎は狹けれどひろき世に立つ基とはなれ

民
國のためいよ／＼盡せ千萬の民の心を一つにはして

賤
おのが身を修むる道はまなばなむ賤がなりはひ暇なくとも

賤家
賤がすむわらやの樣を見てぞ思ふ雨かぜあらき時はいかにと

寄石述懷

雨たりにくぼみし庭の石見てもかたき業とて思ひすてめや

學校

今はとて學びの道におこたるなゆるしの文を得たる童はべ

折にふれたる

開けゆく道にいでても心せよ躓くことのある世なりけり

同

いかならむ事にあひても撓まぬはわが敷島のやまとだましひ

述懐

山の奥島のはて迄たづね見んよに知られざる人もありやと

讀書

今の世に思ひくらべていそのかみふりにし書をよむぞ樂しき

寄草述懐

むたぎもの心をたねのをしへ草生ひしげらせよ大和島根に

筆

國の爲ふるひし筆のいのち毛のあとこそ殘れ萬代までは

馬

久しくも我が飼ふ駒のおいゆくを惜むは人にかはらざりけり

手習

竹馬に心の乗りて手ならひにおこたりし日を今思ふかな

同

鬼神もなかするものは世の中の人の心のまことなりけり

述懷

世の中は高きいやしきほど〳〵に身をつくすこそ務めなりけれ

同

國民(くにたみ)の力のかぎりつくすこそ我が日の本の固めなりけれ

祝言

うけつぎし國の柱の動きなくさかゆる世々を猶いのるかな

仁

國のため仇なすあたはくだくともいつくしむべき事な忘れそ

樂

千よろづの民と共にも樂しむにます樂みはあらじとぞ思ふ

月前言志

我心いたらぬ隈もなくもがな此よを照す月のごとくに

同

いそのかみ古きためしを溫ねつゝ新しき世の事もさだめむ

折にふれたる

あつしとも言はれざりけり沸返(にえかへ)る水田(みづた)に立てる賤(しづ)を思へば

述懷

照るにつけ曇るにつけて思ふかな我が民草の上はいかにと

同

國を思ふ道に二つはなかりけり戰のにはに立つも立たぬも

深夜

軍びといかなる野邊にあかすらむ蚊の聲しげくなれる此夜を

田家翁

子らは皆いくさの場に出で果て翁やひとり山田もるらむ

劔

ますら男が常にきたへし劔もてむかふ醜草なぎ盡すらむ

思往事

天を恨み人をとがむることもあらじわが過をおもひかへさば

氷滿池上

池水はこほらぬかたもなかりけり何處かをしの夜床なるらむ

岡雉子

わらびをる人もかへりし片岡にきゞすなくなり春の夕ぐれ

川鮎

玉川のはやき流れの底すみてさばしる鮎の數も見えつゝ

松上蟬

なく蟬の聲ばかりして吹く風の音もたえたり岡の松原

旅夕立

旅人を野邊にのこして夕立は高嶺はるかにこえにける哉

月前蛬

有明の月もさし入る窓の戶に影さへ見えてなくきりぐす

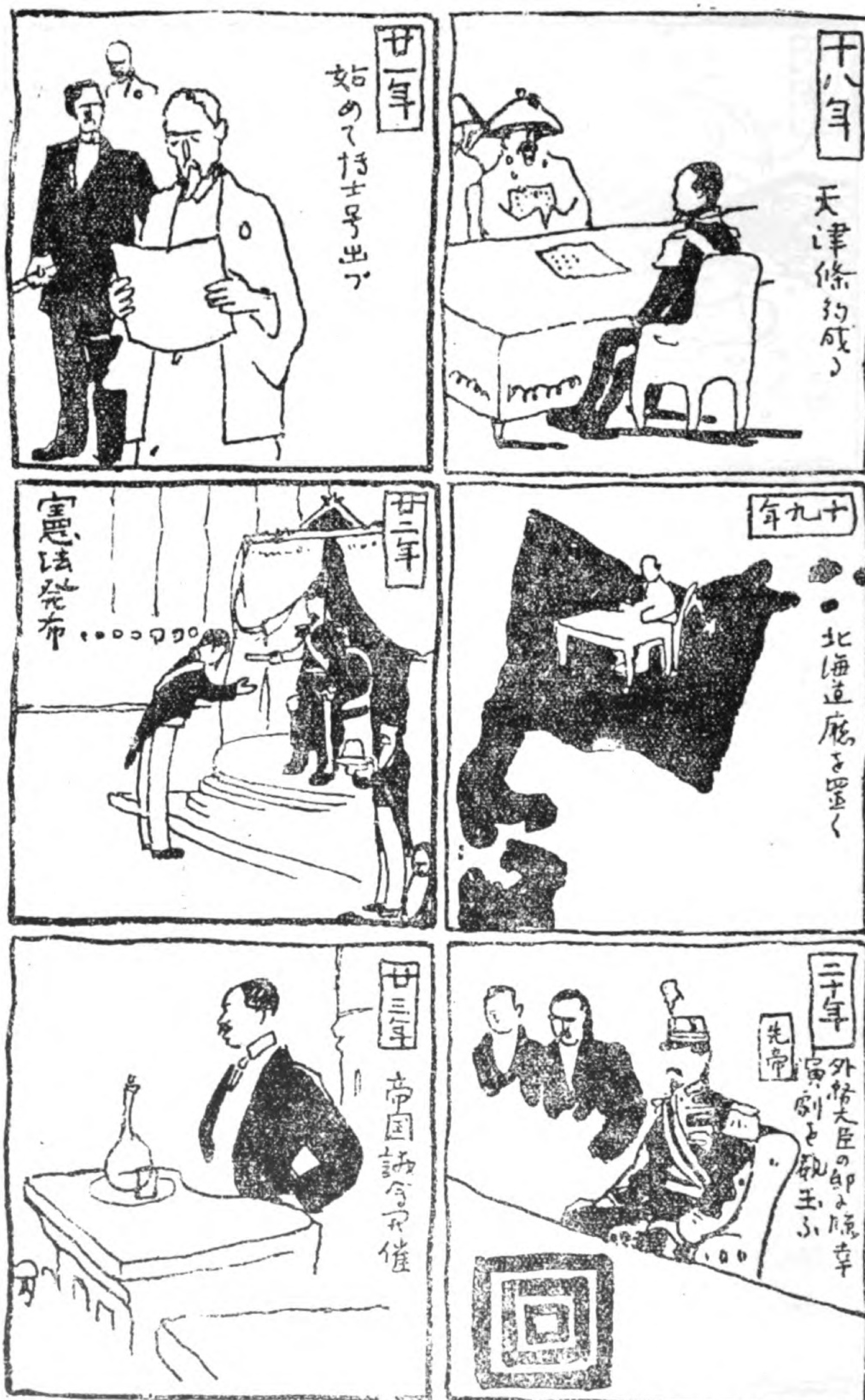
馬上紅葉

鞭うたばもみぢの枝にふれぬべし駒をひかへむ岡越のみち


明治年間繪ごよみ
元年
先帝御即位
三年
郵便局を設く・
人力車始めて行はる
元年
鳥羽伏見の戰
四年
斷髪令出づ
正午の午砲を發す・
二年
京濱電信開通
ヨコハマ
東京
招魂社建立
五年
琉球王華族となる
京濱間鉄道開通


六年
紀元節
天長節を
祝日と定む
七年
西郷従道
台湾征伐
八年
小学児童の学齢を定む
千島と樺太の交換
九年
士民の帯刀を禁ず
十年
十年戦争
十一年
先帝北陸巡幸

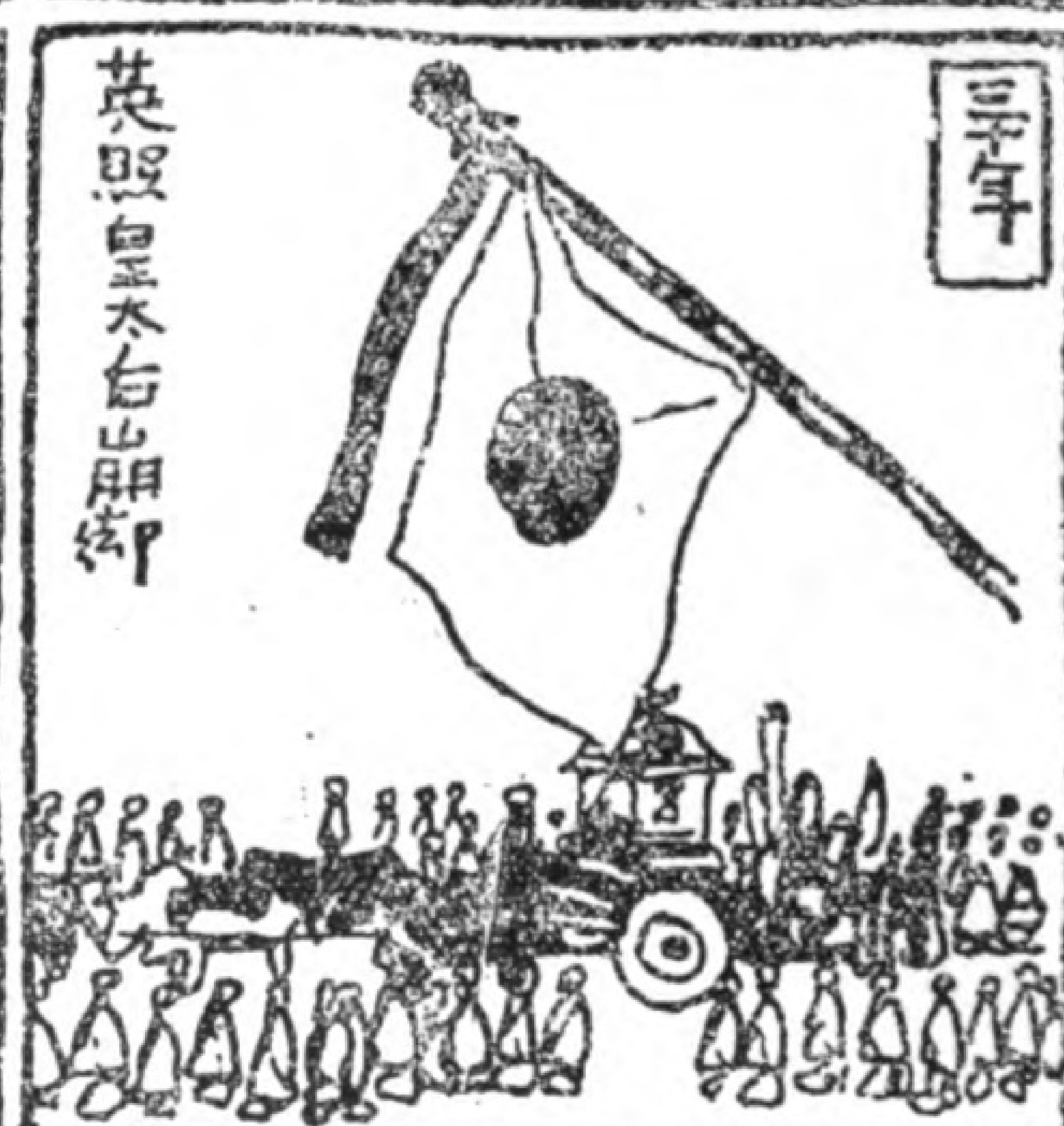

十二年
現陛下御誕辰（八月三十一日）
十三年
先帝伊勢亀山ニ於テ大阪名古屋両鎮台ノ対抗運動天覧
十四年
観桜御会
各国公使を召し吹上御苑に催さる
十五年
博物館成る
十六年
官報発行
官報
十七年
華族令を定め五等爵を制定す
公
侯
伯
子
男


十八年
天津條約成る
十九年
北海道廳を置く
二十年
先帝
外務大臣の邸に臨幸演劇を觀玉ふ
廿一年
始めて博士号出づ
廿二年
憲法發布
廿三年
帝国議會開催



廿三年
教育勅語下る
廿六年
磐梯山の噴火
卅四年
先帝京都行幸
廿七年
日清戦争開始
先帝の成婚廿五年祝典
卅五年
栃木大演習御統監
廿八年
遼東
半嶋
日清戦争終局
台湾我版図に入る
台湾


廿九年
露帝戴冠式ニ伏見宮殿下
御差遣


三十年
英照皇太后山陵御


卅一年
奠都三十年祭


卅二年
内地雑居実施


卅三年
北清事変
未成年者禁烟


卅四年
第一王子
迪宮御誕辰

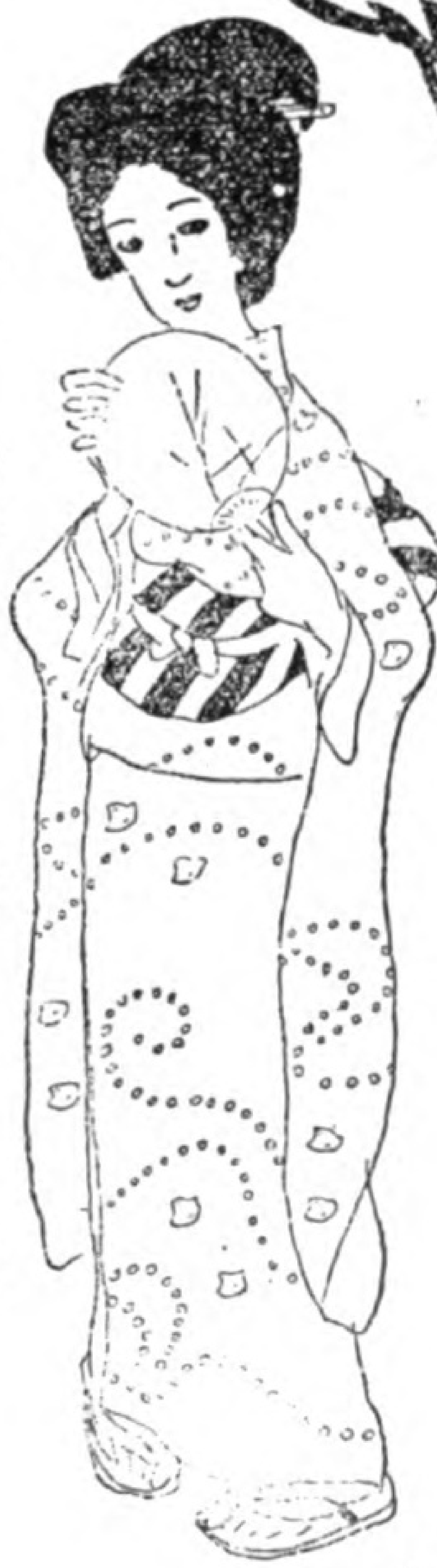

卅五年
日英同盟
卅八年
樺太新領土
講和
卅六年
日比谷公園開園
卅九年
凱旋大観兵式
二〇三高地形の流行
卅七年
日露開戦
号外の速報
貴婦人繃帯を巻く
四十年
文展第一回開催


四十一年
戊申詔書
四十四年
帝劇開場
外国観光団
續々来る
四十二年
ハルビンにて伊藤公狙撃さる
四十五年
先帝乃不例
四十三年
朝鮮併合
四十五年
先帝崩御（七月三十日）

# 九月

24.

秋季皇靈祭



晝は堪へがたき殘暑の中にも秋信自ら通じて、しのゝめの空にのこる月の色、夕方の葛の裏葉を吹きわたる風のそよぎ、露のしげ玉、蟲のもろ聲、何となくあはれなさそふ昨日けふな、神去り玉ひにし先帝の御大喪に、今年の秋は風も一しほ身にぞ沁むなる。

秋はものゝもの皆悲しその上に　禾水

| | |
|---|---|
| 日 | 1.8.15.22.29. |
| 月 | 2.9.16.23.30 |
| 火 | 3.10.17.24 |
| 水 | 4.11.18.25 |
| 木 | 5.12.19.26 |
| 金 | 6.13.20.27 |
| 土 | 7.14.21.28 |

# 警世嘲俗 一人一話

屈曲凹凸の多い活世界に處し、荒い浪風を凌いで來た人には人一倍の自信力がある。一人一話は此の自信力が言はせる警世嘲俗の語錄である。

世間はひろい。人間の爲てゐることは多樣である。どこに何んな人間がゐて、何んなことを爲てゐるかその人たちは日頃何んな考へを有つてゐるか。まあそれを聽取つて見る事にした。ねがはくは活社會に動いてゐる活人の聲を聽かれよ。

## 相場師の人生觀

女相場師　西谷きよ

淺草藏前に西谷お淸さんを訪ふ。お住居は電車通りの大きな米屋、物故された良人の方が米屋町で可なり幅を利かせただけに、この方も相場にかけてはなか／＼明るい。殊に言はれることがよく人生の機微を穿つてゐる。今年四十六の身長のスラリとした、神經質らしい容子。おはなしする度に蟀谷がピリ／＼動く。

私が相場に手を出してからもう十年になります。女だてらにお驚きでせうが、なにもそんなにビックリなさるには及びませんよ。

全體亭主が白米商ですから、定期の事ぐらゐ知つてゐなくつちや不可いといふので、亭主に伴れられて行つたのが抑〻のはじまりで、その頃は、今の大手とは悉皆ちがつてゐて、松澤さん、上滑さんなどが大分幅を利かしてゐました。何と云つても有爲轉變の激しいところですからね。

世間の方たちは、相場でもすると、まるで泥棒か詐欺師のやうに云ひますけれど、あれは大間違ひです。私の思ふのに、活きた世間を渡つてゆくには、たとへ

手は出さないまでも、相場の道筋ぐらゐ知つてゐなくつちやアとてもこの激しい世の中に飯を喰つて行く事は出來ませんね。まあユックリと私の話をお聞きください。（と徐々氣焔が高くなる）

　全體今の若い方は意氣地がありませんよ。自分で仕事を爲ずに、他さまに使用はれて月給でも貰へば、それで大滿足ぢやありませんか。年末に月給が五圓昇級つたとか昇級らなかつたとか、配當が多いの少いのつて、そんなことにケチ〳〵するのが、第一小癪に障りまさあ。少し上役の方に氣受が好いと、直ぐと晩酌にお神さんか何か捕まへて鬼の首でも取つたやうに騒ぎたてるし、その癖すこしお叱言頂戴すると、たちまち青菜に鹽のやうな爲體つちやありませんやね。尤もね一家同勢引つれて月給ばかり目的にして暮して行かうと云ふんぢや無理もありませんやね。

　そこへゆくと、相場の道を悟つてるものは、そんな小さな事に眼目を着けませんから、たとへ貧乏してもすこしもクヨ〳〵なんか爲やしませんし、又お金を儲けたからつて、さう他さまのやうに喜びもいたしません。それからです、よく世間では、あの人は偉いとか、この人はつまらんとか云ひますけれど、そんな事が容易に明るもんですか。つまり勝てば官軍、負ければ賊で、その人に運さへ向いて來れば、トン〳〵拍子に出世して、他からも偉く思はれゝば、自分でも一廉の人物になつたやうに思ふんでさあね。それが一つ間違つて逆にゆくと、好い智慧も出なくなり、爲る事なす事、鶍の嘴に喰ひちがつて、何處まで落るか方途が知れなくなるんです。むかしからよく言たもので、貧すりや鈍するつてね、貴方時に逢はずば太閤さまでも矢張り草履取さね、身分がなくて大きな事言へば葦原將軍と間違へられてしまひますからね。

　まあ斯んな具合で、私の考へには、その人の出世するのも爲ないのも、唯だ運勢一つですよ。賽コロの目は六つありませう。競馬の馬は五頭で駈けだすとしま

せう。相場の目は上るか下るかの二つしかなくつても五錢あがつて十錢落し、二十錢あがつて三十錢落すと云つたやうに、波瀾が多いだけ、その上下が皆な相場の目になつて、人の心をゴチヤマカすことが大きいんです。けれどね、人間一生の荒波は尙と多うござんすよたとへば、私が此家に嫁いて來た時が、相場で云へば高下の分岐點で、それから良人に連添つて商賈したんでせう。いくらお花主の殖えるやうに、繁昌するやうにと祈つてゐても、好いと思つたことが惡くなつたり、惡いと思つたことが好くなつたり、それが又相場で云へば、小波瀾ちやありませんか。併しね、然うふことは長い一生の中には何うせ有りがちのことゝ思へば、何も嬉しがることもなければ悲しむにも當りませんが、そこがソレ、目前のことばかりに屈託するとくだらない事に泣いたり笑つたりして、飛んだ酷い目に遭ふやうになるんです。ですからね、人間は斯うと思ひこんだら何處までもその思惑を貫き透し、又これは惡かつたと氣がついたら、直ぐに其場でヒックリ返るのが肝心なんですよ。それからね、世間の人は誰れでも以前のことが頭腦に殘つてゐて、どうしても其れが忘れられないのが、飛んだ大怪我の基になるんですたとへば若い時に頗るつきの美人で他からチヤホヤされると、いくらお婆さんになつても、ツイ自惚が出て却つて他から嫌はれるやうになるんです。お金持の坊ちやんが一生苦しむのも結局この理窟でさあ。これを相場の方で云ふと、高値覺え、安値覺えと云ふので、一度好いことがあつた跡は、何時でも其事が頭腦に殘つてるんですが、さう何時も柳の下に鰌はゐませんからね。

それから能く世間にあるでせう。親切めかしい人が得て害になりやすく、苦いことをいふ者が案外自分の爲めになる……これなんども、上る相場は下るやうに見せ、下る相場が反對に上るやうに見せるのと同じちやありませんか、眞正に浮世の狀態を描しだして面

白いぢやありませんか。
　ですから一口に相場々々と云つたつて、觀やうに依つちや、その中に何千萬の理窟が含まれてゐるか知れませんやね。「切りむすぶ刄の下は地獄なり一歩すゝめば跡は極樂」なんていふ歌は、よく相場師の心得にする歌なんですが、禪宗の坊さんなんかも大層感心してゐらつしやるさうです。

# 私生兒と不良少年

巣鴨監獄教誨師長　武田慧宏

武田慧宏師は年齢四十五六、眞宗大谷派の出身十年一日のごとく巣鴨監獄の囚徒を教誨してゐる。いかなる極惡の罪人も悔悟せしめねば已まぬといふ自信を以て、その炎のやうな舌は、教界稀れに見る逸材である。

　果して人の性が善であるとすれば、なぜ罪を犯すやうになるのでせう？　これは皆んなが種々の見解を持つてるでせうが、私の多年の經驗に依ると、一に家庭の不完全に歸しますね。
　兩親が子供の躾を甘くしては良くないし、と云つて嚴格にしても宜しくない。父が嚴格でも母が甘ければ尙ほさら良くない。父も母も一致して子供の躾に注意しないと、兎角惡い方に染りやすいのですよ、小松次官を傷けた犯人なども、はじめは良家のお坊ちやんだつた上に、兩親は佛教信者で、何不足のない家庭だつたが、惜しいことには其子が子供の時から甘やかされて育ち、金錢を湯水のやうに消費つて散々兩親を泣かせた揚句、とう〳〵勘當されたんです。すると當人は愈々自暴になつて「なに、勘當するなら窃盜でもして皆んなを困らして遣るから」と、それがつい知らず識らず惡い方面に向つたんです。又或る高等官の令息に窃盜犯が出ました、すると其父が未決監に來て云ふのに、私は子供の教育を人一倍に氣を注けてゐるので

すから、伜が忌はしい窃盗を働くやうなことは断じてありません、と固く信じてゐるのです。その時、典獄が、「窃盗をしなけりや、他日嫌疑が晴れるでせう、まあ貴方もよく奥様をお調べなさい」と云つて歸しました。すると其翌日又遣つて來て、「あゝ私が悪うございました、伜の窃盗を爲た爲ないは別として、家内は私に隱して伜に屢ゝ金錢を與へたさうです、」と云つて泣いて詫びました。親の身として、斯んなことがあつては、何の位ゐ口惜しいか知れません。いかに父が厳重で、高い教育を施しても、母が甘くするやうでは、何の効果もありませんからね。

私たちが能く注意して見てゐると、家庭の不完全は東京が日本一番です。その證據には、東京には私生兒が多うござんせう。その原因は内縁の妻と稱するものが實に非常に多いからです、いくら表面で正式の結婚をしても、法律の手續をふまない中は、一生内縁の妻で終るんですからね。

私の知つてるものに桶屋があるんです。その老爺も婆も六十の坂を越してゐながら、お互ひによく身元を知らないんぢやありませんか。四十幾年も連れそつてゐながら、隨分のん氣なもんですね。おまけに三十を頭に七人も子供があつて、皆んな夫れが私生兒の屆けになつてるんです。

こんな馬鹿げたことは、地方ぢや全く見られないことですな。之れを思ふと、東京は餘つぽど磊落の都會ですよ。

若いもの同士が戀愛に陥つて、それで生れた子供を餘儀なく私生兒とするんなら未だしものこと、中には結婚屆をするのが面倒だからつて拋つて置いたり、すぐ離縁するかも知れないから、まあ〳〵屆けずに置けなんといふ、夫婦關係を無視した者も隨分多いんですからねえ。さも無くつてさへ、夫婦は合せもの離れものなんて、昔から離婚の多い日本に、こんな事つちや全く爲やうがないぢやありませんか。男はまあ可いと

して、よく女が辛抱すると、私はほんとに呆れてしまひます。

こんな不完全な、危險な家庭がある間は、東京に犯罪者の多いのも無理はありません。

いつぞや三宅雪嶺さんが私に向つて、「犯罪人は巣鴨の監獄を自分の家のやうに思つてるぢやないか、一度出ても又無理に泥棒して這入りたがる、そんな事ぢや駄目だ」と被仰つたんですが、私はその答へに、「どういたしまして、あの囚人どもは一日も早く出獄の日を待つてゐます、一日どころか、一秒時間を待ちかねて同じ日の出獄者が我れがちに出やうとするぢやありませんか、いくら惡人だつて、巣鴨は好くない所、苦しい所ぐらゐ誰れだつて知つてゐます。その證據には、一日監獄の門を開けて置いたら、皆んな逃げてしまひます。」と、私が斯う答辯したのです。

私は机上の空論よりも事實を重んじます。どうかして一般社會の人が法律思想、道徳思想をもつと養つて内縁の妻や私生兒を拵へないことをねがひます。

# 娼妓論

第一相互保險會社取締役　矢野恒太

實業界の奇才矢野恒太氏は曩にポケット論語を著はして讀書界を風靡し、今また藝者論を著はして天下の人目を驚かす、なほ引續いて新聞論を執筆中であるとのこと。

いつか新聞を見たら、新しい女が出て種んな新しい試みをしたさうだが、まあアレも結構なことですなアまあ物にたとへていふならば高い窓から飛んで見なけりや、死ぬか活きるかゞほんとに知れるもんぢやない。新しい試みをすると大抵失敗はするが、傍で眺めてるものには、いろんな有益な教訓を敎へて與れる。吾輩の藝者論から引ぱり出すんぢやないが、女學校の卒業生が藝者を志望するのも結構な事つた。今の濁つ

た藝者社會を清くするには、是非とも教育のある藝者が必要だからね。

日本の奥さんやお孃さんが、西洋流に客の相手をしてお酌したり、歌つたりしなくつちや、主人の不品行は直るまいなどゝ云ふのは、もう陳腐な議論ぢやないかね、處で吾輩の考へぢや、まづ第一に日本の家庭を改良し、それから女學校の組織なども一變させる必要があると思ふ。

一體今の女學生はクダラナイことばかり遣つてゐる幾何で圓周律を計算したり、代數でアルファ、ベーターを並べて見たところで、それが何の役に立つもんかその癖雜巾一つ刺せずに母親を困らせるやうぢや、畢竟無用の長物ぢやないか。ね、君、そこで吾輩の娘は女學校などへ入れまいと思つてゐたところが、家内の云ふのに、女學校を卒業させて置かなくつちや、緣談の第一要件が缺けるといふんで、まあ爲うことなしに通はせるやうにしたんだ。女も雌猿のやうに誰れとでも自由に結婚が出來ない限りは、やつぱり何々女學校出身を看板にして、飯の焚きやうも知らない女になつて呉れなくつちや、どうして嫁に貰ひてが無いかも知れないからね。ハヽヽ……。

もしや吾輩が女だつたら、斷じて女學校などへ行きやしない。家庭向の教育だけ受けて、結婚してから一家の主婦として働けば、それで滿足さ。つまり吾輩の說は古いかも知れないが、女はどうしてもヤッパリ男に從つて行かなくつちや不可い、孔孟の敎へに夫唱婦隨といふことがあるが、西洋だつて精しく男女の關係を調べて見れば、ヤッパリ夫唱婦隨主義に歸着してゐるぢやないか、と云つて、家庭の王者たることを忘れて了つて、女子と小人とはやしなひがたしなどゝ云つたのは、聊か孔孟にも筆の誤の譏を免れない。

吾輩が今度『藝妓論』を著はしたのも、どうかして吾輩の道話を萬人に讀んで貰ひたいからである。吾輩は固より學者ぢや無いから、むづかしい學理を吐かす

に、成るべく平易に、萬人の腑に落ちるやうに書いたつもりなのさ。書の表題から云ふと、いかにも藝者通を述べたものゝやうに聞えるが、なあに吾輩が家庭に與へた古い道話に過ぎないのさ。それだけでなぜ『藝者論』としたのかと云ふのに、そこが吾輩の策略なんだ。見たまへ、今日の紳士だとか、紳商だとか云ふ奴のは、容易のこつちや書を讀んで呉れない。そこで先づ第一に『藝者論』として、大に彼等の弱點に着けこんで、それから諄々と判りやすく吾輩の道話を説いたわけさ。つまり云へば、藝妓を肴にして紳士や紳商に道話を聞かせて遣つたわけさ。え、夫れは邪だつて？なあに目的の爲めには種々の方便を使つたつて構ふもんか、救世軍のブース大將だつて、人の注目を引くために軍隊組織の大袈裟なことを行つたぢやないかね。

それは兎も角、吾輩が藝者論を知人に贈つたゞけでも隨分少くない。婦人矯風會の矢島楫子君、早稲田の安部磯雄君‥‥たしかに千部以上はあるね。

併し新聞や雜誌の記者は、吾輩の『藝者論』を何う讀みちがつたか、いろんな非難を加へて、甚しいのは人身攻撃さへしたものもあつた。それを又知らずに轉載した田舍新聞の智慧の無さ加減たらないぢやないかえ、君。

そこで吾輩は思つたね。日本の新聞がこんな不眞面目な態度ぢや、家庭の讀物として頗る危險だから、一つ序でに新聞の方も改良してやる必要があると思つてね、そこで愈々今度は『新聞論』を書き出したのさ。

見たまへ、近ごろはマアいくらか控へ目にする樣になつたが、それでもヤッパリ人の私行を發くことは罷めずにやつてるぢやないか。これもあつた事なら仕方がないが、根も葉もないことまで膨脹して報導するなどは、德義の最も缺けてるものぢやないか。而して何の新聞も一つの通信材料をそのまゝ載せるんだから、毎時も何等の特色もなく、おまけに政治問題でも、經濟問題でも皆んな同じ記者が筆を執るんだから、どう

せ礙なことが書けるやうな筈がなしぢやないか。それに貴重な紙面を、小說とか、史傳とかクダラないもので埋めて置くなんどは、新聞の價値が果して何處にあるか〻疑はれる位だね。若し吾輩をして假に新聞經營者だつたら、出來得る限り閑文字を除いて、多方面の有益なことばかり報道し、決して人の私行なんぞは發きやしない。精しいことは、その中に出版するから、『新聞論』の上で讀んで呉れたまへ。

## モデルの女

モデル周旋業　宮崎きく

朝に、正午に、晩に、一升酒を呷つて得意に話すモデル婆さん。當世畫家の內幕話はいさゝか遠慮して省きます。

そろ〳〵文展が近づいてまゐりました。今がモデルに羽が生えて飛ぶ時季です。私も好きなお酒か飲めるので喜んでゐます。

拜啓、御足勞ながら明日午前九時までに御出で下さるか、明後日午後二時頃迄に御出で下されたく待居候也匆々　　麻布霞町二十三番地　和田英作

これは流行兒の和田さんからモデルの注文を受けましたお葉書です。その他有名な美術家から寄こしたお手紙が山のやうに溜つてあります。私が死んだ跡で、このお手紙だけでも一身代だらうとおもふんですよ。今度の文部省ぢや、和田さんの出物は支那人をお畫きになるさうで、先日二三人の男を御紹介いたしました。岡田(三郎助)さんは、モデル一等の美人の、入谷のお千代さんといふのを使つてゐらつしやいます。中村不折さんは、兎角逞しい筋骨の男をお好みになります。

先達或る先生からお伺ひいたしたんですが、西洋でモデルを世話する所は、恰度日本の看護婦會のやうな按排式に出來てゐて、一軒の家にモデルを幾人も喰べ

させて置くさうです。そして先生からお入用だといふ書狀が來ると、直ぐに派出するさうです。若しか暇の時は、一日絲車をブー〳〵廻させて、つまりお茶挽がはりの内職にさせるのです。

けれど日本では未だ夫れほどでありませんから、憚りながら日本開闢以來モデルをお世話するものは、私一人しかありません。だから美術學校の先生達は、「今にお前が死んだら、上野に銅像を建てゝやるなんと仰有います。中には、「今に日本中の繪師が寄集つて、繪畫展覽會を開いて、生香典を供へて遣らう」と仰有る方もありますが、皆なズボラな方ばかりですから、そんな事は當にしずに、私も働けるだけ働いて、死にたいと思ひます。さうですな、私はかう見えても、もう七十に間がありませんからね。

モデルの値段は半日五十錢の割合です、氣樂で高いお金が取れますけれど、なにしろ素裸で畫板の前に立たせられるんですから、時には顏から火の出るやうなこともあるさうです。最初から四つん這にさせられて眞赤になつて逃出して來る初心のモデルも隨分あります。加之に畫家の厭味なのであると、それは始末が惡うござんす。そんな方の許には、すれつからしのモデルでさへ泣いて歸つて來ます。

忘れも仕ません明治二十六年の夏でした。上野の山で私が茶店を出してゐますと、洋行歸りの岡倉先生が「婆さん。一日茶店を出してゐたら、隨分美い女も通るだらうね」と、ニヤ〳〵笑ひながら仰有るんです。あゝ薄氣味のわるい方だと思つてゐましたが、その時伺へば、先生はモデルを探しあぐんでゐらつしたのださうです。そして、「モデルの世話をして呉れまいか」と頼まれましたのが、私がこの商賣をやり始めた最初です。モデル女の年齡は十七八から二十二三が止り、少々位ゐ醜くつても、肉付の好い、手足の長いのでなくつちや不可いんです。また男のモデルは酒肥りのダブつくのは好くないさうです。荒い勞働をして筋骨の

發達したのが可いさうです。併し左樣御注文通りのものは却々ありません。がつかりして歸つて來ることが幾度もありました。

なにしろ那んなモデルの世話をいたしたんですからモデルだつてね貴方今ぢや高等官の奥樣になつてゐるのもあります。堅氣の家に嫁づいてお母さんになつてるのは何十人あるか知れません。

世間では、モデル女といふと、なんだか不品行の寄集りのやうに云ひますが、なか〳〵左樣ぢやありません。明治三十年前後のモデルは、堅氣の娘さんが多かつた故ですか、總體に温順しうこざんした。それが四十年前後になると、女學生上りの自墮落者が這入つて來たので、一時世間の評判を大層惡くいたしました、現在のとこでは、私の取扱つてるモデルは、女七十人男三十人ばかりありますが、いづれも身持の惡いものはありません。

そして、何處の先生にしても、一日繪を畫いて居らつしやる譯ぢやなし、又氣乘りがなさるまでは、一日でも二日でも滅多に筆をお執りなさいませんでしたから、そんな時には、モデルも奥さんや何かと面白く遊んで歸りさへすれば可いんです。

先日もお千代さんが、岡田先生の奥樣から羽織や襦袢を頂いて、喜んで歸つて來ました。その襦袢を見ますと、襟が汚れた上へ上へと三枚も掛つてゐるぢやありませんか。なんて氣前の好い奥樣でせう。ですからモデルも悉皆八千代さんに馴染んで了へば、私も毎度お目にかゝつて、そのお氣前に感じて居ります。諸家の奥樣の中で、八千代さん位ゐモデルを上手に使つて下さる方はありません。それに八千代さんは、御自身モデルにお成りなさるさうですね。ですから自然お察しのつくのも無理はありません。

## ヒステリー議員の金切聲

法學博士　戸水寛人

戸水博士は、日露戰爭の際に所謂七博士の一人として至極の强硬論を唱へた人である。大學敎授を辭された後代議士として頗る異彩を放つてゐる。會つて見ない者は、何だか喧嘩腰で物言ふ人のやうに思ふかも知れないが、應接間の博士は、身長のズングリ太つた、愛嬌のあることと夥だしい。

小說家が書く作品だつて、女に同情があるものと無いものとは、學生の受けが大變違ふといふぢやないか私共の言論だつて、やつぱり夫れと同じことです。まあ考へて御覽なさい。氣の强い英國の婦人は昔から女子參政權を主張して已まなかつたでせう。それに對して現今の大藏大臣ロルドジョージ氏は大贊成なもんだから、英國の婦人には頗る評判が好い。それと反對に首相のアスキス氏の方は、女子なんどが參政權などゝは、嗚滸がましいと云ふんで、何時も憎まれ役に廻つてゐる。ツイ先日なども、それが爲めに首相の官舍は女權連に包圍攻擊されて、窓硝子を滅茶々々に打壞されたぢやありませんか。

それに就いて私は考へるに、成るほど女子も男子と同じく人間の仲間だから、男子同樣の權利を得やうとするのは尤もかも知れないが、現今のところ、私共は無理やりにお轉婆を作るやうな危險な說は發表したくないと思ふ。

なにしろ女は體格からして到底男のやうな執務を爲るわけには不可ない。男子が外で働けば、女子は家にゐて内助すれば足りるのが、體格の上からも相應しいし、又往時からも大抵さうなつてゐる。

譬へて見れば、男子は野生の松樹のやうに出來てゐる、强い嵐にも當れば、烈しい雪をも凌いでゐる。それ故堅い棟木になることが出來るのである。それに比ぶれば、女子は盆栽の松樹のやうに、多くは曲げねぢくられて、風雪に抗する力は更にない。だから柔かいデリケートな松を植木鉢から野に植ゑかへるのは、折角の風致を損ずるばかりでなく、惡くすると風雪の爲

めに枯して了ふことがある。女子參政權だつてその通りである。そのデリケートな婦人に政參權を許すとすれば、たちまち男子同樣に荒つぽい兵役にも服さなければならない覺悟を有たなくてはならぬ。尤も野蠻國には女子の兵隊があるさうだが、文明國の女子はあまり兵隊には希望者があるまい。若しか希望者があるとしても、白粉くさい兵舍や、香水くさい武器では餘ほど戰鬪力が鈍からうと思はれる。

日本の婦人で、その長身が平均五尺あるとしたつてまあ輜重輸卒がヤットだらうと思ふ。『輜重輸卒が兵隊ならば蝶や蜻蛉も鳥の中』と歌はれる兵隊になつたつて、餘り感心は出來ないからね。

だから私共の考へは、女子の參政權問題は、言ふべくして行はれ難き空論だらうと思ふ。いくら鐵棒曳が選擧運動の手先になつたり、ヒステリー議員が金切聲で蓄妾税を叫んだつて、當世ハイカラ紳士の惡癖が容易に除かれることぢやない、だから一口に云へば、女子の言論が通るやうになるまでは、參政權などはあつても無くつても同じことだらうと思ふ。當分まだ時勢が早いね。

併し女が寄集つて、女子の求むる問題を一つの方法に依つて帝國議會に上す位の參政權は良いかも知れない、たとへば女子が戰時にあつて、樂隊となり、衞生部隊を組織する位のことは良いと同じやうに、凡て程度といふことを熟考しなければないまいと思ふ。

故に今日のところ、女子は體格も變化し、境遇も變化しなければ、政治界に入る資格は無からうと思ふ。と云つて俄かに發奮して、岡田式呼吸法で出尻になられたり、アグリ女史の寢臺體操で姫御前のあられもない風姿をされては却つて恐入る。

これを要するに、私共の求むるところは、女子は何處までも盆栽風に作られた松樹でなくつちやならない、野生の松樹の眞似をして跳つかへる女子は何處かに缺點のある人に違ひない、少しも家庭の用を爲ない

だけ其れだけでも、確かに大なる缺點である。なにしろ三越や白木屋へ絶えず虚榮の首を伸してゐる女子が、天下國家の大事を議する政治に干渉したつて、果して何れだけの効果があるだらう。女子と小人とは養ひがたしとは、獨り孔子の言ばかりぢやない、羅馬の法律も此意味を以て女子に臨んでゐたではないか。まあ今日はこの位にして置いて呉れたまへ。また今度悠然話すから……。

## 新學士と高利貸

高利貸周旋業　武政萬平

本郷四丁目に武政萬平君を訪ふ。三十七八の赤ら顔の大男で、鼻下に美しい髭をたくはへ、よく語り、よく笑ふ、これほどの偉丈夫なら何か他に好い職業もあらうと思はれる。細君もなか〳〵美人で人柄だ。高利貸の周旋屋は大抵間借ぐらゐにしか過ぎないのに、武政君は立派な家に住み、電話まで引いてゐる。さすが十數年間大きな高利貸の間に出入してゐたゞけのことはある。

「や、お久振でした。何うもお暑うございますな。なんですか、金談のことですか。左樣ぢやありません？それは失禮しました。え、私の高利貸觀を話せと仰有るんですか。困りましたなあ。併し舊いお馴染ですから、一寸面白いことだけお話いたしませう。御免なさい。」と胡坐をかく。

さう一概に高利貸々々々々と云つちや可哀さうですよやつぱり同じ人間ですもの。血もあれば、涙もある：：：。私の眼から見れば、債權者よりも債務者の方が餘つぽど罪が深うございますな。まあ考へて御覧なさい三箇月期限の天引二割と云つちやあ、一寸聞くと強慾非道のやうですが、イザ期限と云つたつて、眞面目に返濟するものが十人の中に一人もありませんからね、縱しあつたところで、左樣いふのは百圓返して三百圓借

りる、此度の次には三百圓返して千圓借りる。もう此邊で貸さないと見切ると、跡は野となれ山となれのなんにも音沙汰なしぢや有りませんか、え。左樣いふ時には執達吏を差向ければ可いだらうと仰有るんでんかどうして、どうして、左樣いふ上手な債務者になると疾くの昔に財産は他の名前に書きかへてある。然でなけりや、わざと友人から八百長的に差押へさして置いてある。イヤハヤ何うにもすることが出來やしませんからね。ツイこなひだも斯んなのがありました。今年卒業した法學士の許に差押へに行つたんですよ。なにしろ下宿屋住居で何にもないことは承知ですが、寢込に踏みこんだらと思つて、朝早く執達吏を伴れて行つたとお思ひなさい。すると御當人はチヨツキ一つで寢てゐましたが、私達の姿を見るや否やヒヨイと起きあがつて側に脱いであつた上衣を着ると、もう何にも押へる物がないぢやありませんか。押入を開けさして見ると、其處には塵埃だらけの藥瓶が五六本あるばかりで、イヤハヤ手の着けやうがありませんでしたからね。そこで結局此方は差押の、入費倒の時間つぶしでおまけに歸りに法學士から『どうもお手數を掛けました』と言はれました時には、腦天から氷の塊をうち込まれた樣な氣がしましたからね。

併し斯ういふことばかりあつては迚も遣りされませんが、近頃は債權者の方も怜悧になつたので、滅多なことには差押へしませんからね。なるだけ借手の感情を柔げて置いて、そろ〳〵と回收するやうに計りますまあ何のことはない、お金を用立てゝ御機嫌を取るやうなもんです。けれど斯ういふ具合ですと、貸した時には與つたもの、返して貰つた時には貰つたものと、斯う觀念しなくちやなりません。所で貸出すには、第一先方の人物を看ます。いくら財産家の息子でも、いくら盛んに商賣を營んでゐる商人でも、もし本人に返す氣が無ければ其れつきりですからね。そこへ行くと、本郷の駒澤さんなんかは偉いもんですよ。先づ相

手に扱つて見て、この人ならと思へば心持よくスラッと貸出し、若しか狡猾さうな人だと見ると、體よく謝絶つて了ひます。決して相手方の身分や職業なんかに迷はされやしません。ですからズン／＼金が殖えて、今ぢや東京で指折の金主になつてゐます。

日外大隈伯が、學生中に一萬圓借金した者は養子にする價値があると云はれたさうですが、それは二三十年往時のことで、今では帝大の學生は金主の受けが好いので、五千圓や一萬圓借金してるものは澤山あります、烈しいのになると僅か二年ばかりの間に三萬圓近くも借金を背負いこむ方さへあります。一體どうして斯う借金が殖えるのかと云ふのに、最初百圓か二百圓借りたのが基になつて、書換へ／＼する中に段々證書の額面が殖えて、何時か千圓以上にも昇ると、どうせ既う返濟せるものかと惡度胸を据ゑて、それからは他の連帶をして義務料を取つたり、新しい金主を探しては片つ端から借りるので、ツイ一萬圓にも二萬圓にも昇るのです。私の知つてる法學士で、月給は僅か四十五圓しか取てゐないのに、毎月高利貸へ拂ふ利息の金が百圓以上もある方があります。併し斯なつては迚も一生うだつが上りつこなしですから、學士の方にお嫁に歸らつしやらうといふお孃さんなどは、能く／＼調べて御覽なさらないと、飛んだ借金屋に引掛つて、一生苦しい思ひをしなくちやなりませんよ。

序に金主がお金を貸すのに苦心慘憺することをお話いたしませう。私の知つてゐる三浦いふ金主などは、或る華族の若樣をお花主にして、散々御道樂の入費を出したんですが、その事が三太夫に知れると、三浦も大變お叱りを受け、若樣も當分邸外へ出られないといふ始末、乃で金主は豫て斯ういふ事があつたらばと豫め若樣と打合して置いて、玩具の喇叭をお屋敷の垣根の外で吹くと、それを合圖に若樣はお庭の內から密と約束手形をお出しになる。金主は垣根の隙間から百圓紙幣を挿込むといふ、まあ體の善い密賣のやうな所爲をするんですね。ハヽヽ……。禍は何んな隙からでも這入つて來ますよ。

# 暗愁

糸萩



五日

軒の簾をすつかりはづさせて仕舞ふと、座敷が隅々迄急にきつぱりと、明るくなつた。

すが〳〵しい秋の大氣が冷り衿元に差入つて好い心地。妾はフランネルの衿を犇と搔合せて緣側の籐椅子に凭た。向の島の根を鷗の樣な白帆が一ツ秋風を追ふて走つてゐる。差櫛で洗髮の鬢のそそけるのを梳上げながら紺碧の海の面に目をやれば今し灰色の雲が切て薄い日差がキラ〳〵と波に照る。磯馴松の梢をかすめてツト烏が一羽磯濱に下て來たあとをまた一羽。黃ばむだ松の葉がぼろぼろと沙の上にこぼれて、干潟には貝拾ふ漁家の兒がひとりふたり。今日は風立つせいか磯はさびしい。

お單衣をネルに替てから未だやつと一週間にしかならぬけれど、妾は今朝方の寒さで袷の着初をした。錆靑磁の裾廻しの付いた大島の、かはり辨慶の思切つて華美なのに、帶はクリームの小柳繻子に、少し古めかしいけれ共麻の葉の納戸縮緬の腹合せにしたのを締る。薄心で締心地の好いのを草色の細い絹紐で止めておく。

散歩する心算で玄關へ出たら、雨がパラ〳〵と落ちて來た。淋しい風がしのぶの若葉を吹いて行く。身にも心にも秋の氣配のしみ〳〵とし。妾は居室の障子をひつたりと立てゝ、机の前に坐る。新聞の日曜献立を記して置くのを、大分久しく忘れて居ると思出して手帳を調べて見たら、八月一ぱいしか書てなかつた。先月の六日に秀樣が大冶鐵山へ視察に御出發から妾はずつと本宅へ歸つて居て校友會の授產部や何かを手傳つて上たり。阿母樣と諏訪へ遊びに行つたり、久夫の入院にも暫く附添て居た。今年の夏の短かつたこと。

久夫さんと云へば、未だ退院出來ないのかしら柳子さんが、昨日も妾に手紙をよこして居る。離別れても生の子の上丈は忘られぬ樣子。それでは姉樣も、久夫の母と呼れて居ても、每日本宅に殘した一郞の事許り思つて居らつしやるのかしら、無果花の葉が音もなく落ちて、手洗鉢の水に浮く秋の日は磯の松の梢に落ちて、海の面に夕榮え

の雲がうつる。フト見れば向ふの丘の道を、まだ稚ない巡禮姿の女の兒が、笠を傾けてとぼ〳〵と下りて來た。思ひ出した樣に鉦を一ッ叩いて門の傍の柿の木を見上げ見上げして通つて行く。照子が生て居ると、丁度彼の位に成つて居る筈だ。此兒には親は無いのか。姉妹は――。妾は急いで縁の棚から御所柿の大なのを四ッ五ッ取り、レース織の赤い袋に入れて初に渡して巡禮の兒の跡を追せた。袋の切は亡妹照子の肩掛を解て直したもの。宿世の幸の薄くして、命短かりし彼女が、せめて後世を弔ひの、その一端ともならむかとて。

楢の葉が頻に散る。ひまなく散る。長汀十里浪の音に暮れて窓に亂るゝ芭蕉の影。今日も好いお月夜になつた。羽織を引掛けて待宵草のほの〴〵香ふ四屋の陶榻によれば、想は飛ぶ三百里。海のあなたの我夫が、いとし今宵の夢や如何に。かよふ松風。うつせみの憂を夜寒の身に替て、蓬生の奥に蟋蟀が啼く。

八日

寢室のガラス戸を悉く開放つ。午後の日が一ぱいに差込んでまぶしい程。頭痛の爲さうな好い秋日和である。るり色の空を白い雲が、と切れと切れに西の方へ流れて行く。椎の實がほろ〳〵落葉の下にこぼれて、枯葉の浮た蓮池に風が渡る。櫻の葉もとり〴〵皆な散り盡して仕舞つた。

露白き星月夜。未だ宵やみの涼しきに木犀の香がほのかに漂ふ。夜釣りの火が魔神の眼の樣に光る眞黒な夏の海。渚を洗ふ濤の音の遠く遠く。うつとりと追想に耽つて居る間に、紫色の夜着の袖に、銀杏の落葉が二ッ三ッ。色の黄むで居るのが何かの友仙模樣を見る樣で美しい。

九日

銀の湯沸にお水を足して、唐金の五徳に掛ると、櫻炭がパチ〳〵とはねる。廣い庭は落葉一ッ止めず掃清められてある。見馴た葭戸は取り拂はれて

間每間每の障子の紙の白いのが、松の葉越しにちら〳〵と。池の傍の楓の幹は何時見ても太い。仁王樣の掌見るやうな、飛石だの手洗鉢だの。此樣な物にもお亡父の御氣象がいち〳〵現はれて居るのだ。お父樣は何でも大な物と強い物が御好で有つた。花でも一年で枯て仕舞ふ草花なんぞは大のきらひで。本邸の庭には蓮の外には朝顔の垣一ツ御造り遊ばさなかつた。精力主義。御父樣の人格が偲ばれる。

鍛冶屋の打きから仕上て、大明造船所をこれまでに築き上なすつた立志傳中の御父樣の面影を妾は何時迄も永く此家に止めておきたい。

あゝ御父樣は早世なすつた。五十幾年の御壽命は決して永くないとは云はぬけれど。父の事業と比較して餘りに短い御生涯で有たと思ふ。もう五六年。せめて秀世樣が三十に御成なさる迄の御命が取止めたかつた。

臨終の御枕元で秀樣と祝言の盃をかはした時の悲しさ。「秀世！ 俺の志を繼で呉れよ。俺はもう逝かねばならぬ。艶は何處に居る。艶！ お前も秀世も長命をするんだ。」

妾の手を堅く握つたまゝで冷く成てお仕舞ひなすつた。殘念で御座いました。悲風一陣。ありし日のまぼろしが、あり〳〵と浮ぶ。

かゝなふれば十二年の昔となる。お父樣が春雄秀世兄弟を引取つて中學へ入れ、我兒の樣に可愛がつて。餘暇さへあると、二人共來い〳〵と被仰て、油染んだ仕事服を着せて工場へ連てゐらしつた。

間もなく春雄さんの方は藏前へ轉校なすつて卒業の一年前に、同年の姉樣と芽出度い御婚禮が濟むだ。姉樣に一郎が生れる。四五年は無事で有つたが、フトした處から春雄兄樣が放蕩を初め、それからと云ふものは。全で人が替つて仕舞て御父樣の意見は許より。姉樣の淚も甲斐が無かつた。一郎が學齡に近づくのに平氣で内を外の御身持を

なすつて、御金も澤山に無くなさるし、御自身許りか御父様の世間迄狭くなすつた揚句が一昨年の八月。決算期を前に身を隠して御仕舞ひなすつたそれから間もなく御父様の御病死……

十日

甥の一郎が幼稚舎へ歸つて行くのと一緒に、妾は阿母様と宅を出て。久しぶりで劇を覗く。

番付を見ると柳子様の花やかな藝名が載つて居る。水の滴る様な舞臺姿。いき〳〵と若い誇に輝く目、わざとならぬ技巧の腕の群を抜て。滿場幾千の瞳を己が身ひとつに集て居る。此幸ある得意の女も、時としては梧桐散る窓の許に、戀に生き愛に生きたる越し方を偲び、離愁哀別の想ひを人知れず筆に染めてゐるのであつた。

「我兒久夫の病めりと人つてに聞きしより、寢られぬ夜半の多く相成り候」

樂音のさゝめき。脂粉の香の漂ふ處で、花野の胡蝶の夫の如く、樂しさうに見せて居ても、裏へ廻れば樂屋着の伊達の袂に並ならぬ憂の影を包むかと思へば熱い涙も人知れず湧く。休憩室で秀様へ手紙を書く。阿母様は何も被仰らないのに、妾ひとり寒い寒いと云つて居た。

歸宅て寢床へ入つたが、なか〳〵寢付れない。一時を聞いて一寸うと〳〵としたかと思ふと、氣たゝましい電鈴に目をさました。婢達は皆よく寢入て居て出さうも無いので妾が起て聞く。

電話は病院から掛つたので。姉様が看護婦に云付て、久夫の危篤を知らせて御よこしなすつた。妾は直に羽織を引掛て、阿母様の御部屋へ行つた美代が起て來る。初も着物を改めて出て來た。

病兒久夫は姉様の緣家瀧見の嫡子であるけれど、姉様の爲には義子に過ぬ。けれど妾の姉様は妾と違つて阿母様とは世間で云ふなさぬ中である阿母様の立場として捨てゝ置かれない。直に起て支度をなすつた。

遂に逝く可きものならば、妾は久夫の耳に一言

云つてやりたい事が有る。可愛がつて被居る姉樣にはすまないかも知れぬけれど。柳子さんの寄越た何日かの手紙……。妾は逢ねばならぬ。病兒の意識の有る中に。せめて生の母の名丈なり共知らせてやりたい。宵にぬぎ捨た着物を手早く着る。母子は二樣の思ひを抱て、月白き夜半の町に車を急がせた。病院の玄關から眞直に三階へ登る。深夜の廊下に瓦斯の灯が水の如く燃えて、遠くの方で氷を碎く音、病室は陰に靜り反て人の氣配もせぬ。妾は震ふ手を入口の戸に掛て阿母樣と目を合せた。

久夫は最早や息ある亡骸であつた。やつれた姉と看護婦と瀧見の婢との三人は、聲を飲み病床を取卷て醫員の手許ばかり見詰て居た。

ほの〴〵の東の空の白む頃、可憐兒久夫は遂に歸らぬ旅に上つて仕舞つた。朝風冷かに室に入て惘然と爲て居る姉樣の鬢の毛を弄る。稍あつて阿母樣の低い稱名の聲。妾も姉樣も之に和した。

上野の森は狹霧に包まれて、殘んの月影夢の如く西の山の端に落つ。久夫。久夫お前は自分の生の母が、今夜もお前の身を案じて夜の目も合ずに明して居るのを知るまい。あゝ一日遲かつた。

十一日

姉樣と阿母樣とが亡骸を伴て瀧見へ御引取りなすつた跡で、初と瀧見の婢を指圖して病室を片附て居たら寢臺の足の處に何やら落ちて居る。取上て見たら二つに折た手紙が一通。宛名は姉樣で風聞夫人が仙臺からわざ〳〵寄たもので有つた。平常から御自慢程有つて手跡は可なり美しい。何心なく一尺許り讀下した妾の手はぴり〳〵とひとり打震ふ。六尺に餘る長い物を只の一息に讀で終つて、元の通りに卷て四季袋の隅の方へ差込んで置いたが、身體中の血が燃えて熱い息が焔の樣に……。一輪差を拭て居た瀧見の婢が妾の顏を見て喫驚した樣に其處へ小膝を突た。

高ぶる動悸を抑へて妾は眞直に本宅へ歸つて仕

舞ふ。美代が實直に床をのべて御休み遊ばせと云つて呉れるので帶丈け解て横に成つたが――。妾は額際迄夜着を被つて沈と目を閉ぢた。先刻見た風間夫人の手紙の文句がと切れ〱に胸に浮ぶ。

「……御妹艶子樣の御全盛に引替て御いとほしきは貴君樣の御身の上にこそ……。何不自由なく大明家の長女と御生れ遊ばし候御身も生の母君御他界の後は、萬につけて日陰の御身とならせ玉ひ、艶子樣御成人の後はいとゞ御前樣をば有に甲斐なき御遇も誰やらが遊ばさるゝ由。春雄樣の御不行跡も罪はあながち御本人に許り在す共申し難く……

生死の譯らぬ春雄に操を立通す程の御前樣でも無い筈と奥齒に物の狹まりしやうの御言葉も交へての母上の御進めもだし斷くて。絶がたき恩愛の絆をたち。泣く〱も御いとしの一郎樣を里方に殘して、瀧見とやらへ御縁付遊ばされ候御心の中察せよとの仰はなく共千も萬も。千枝までが泣て口惜がり……。春雄樣今は臺灣に在す由。御家出の後も乳母の手を通じて、絶ず御便も有しか共斯樣に他家の人となりては其れもかなはずとの御述懷。御最もと申すより外に聞え上可き言葉も御座なく候。御許樣も御承知無き中に一郎樣さへ今は他姓を名乘らせ玉ふとや。せめて父上なり共御在世に候へば……。かくて艶子樣の戀聟秀世樣に家督を取せん母上の御心組とは誰も誰も……し

妾は夜着の衿にし嚙み付て泣いた。湯の樣な涙があふれて頰に傳ふ。姉樣貴君は此樣な一家の内情を何だつて風間樣のやうな方に御洩し遊ばすのでせう。大明家の恥は貴女の恥ですよ。

いろ〱と御心に任せぬ事も御有りでせうけれど、他人に被仰る御口で夫をば何故此妾に被仰ては下さいませぬ。阿母樣には義理と云ふ御隔がお有りなすつても艶は貴女の妹ぢや有ませんか。姉樣貴女は此艶をさへお隔て遊ばすのでせうか。姉樣には濟みませんけれど、春樣はあの通り。

御父樣の御遺言は有り、妾が家督を繼がなければ秀樣で無ければ誰が御父樣の御志をついで行て與ませう。兎角人の同情の寄かねる阿母樣の立場もつらいもの。一郎に淸川の姓を名乘らせた事迄が彼人達の當推量の種になつて居るのだ。何を相談しても默つて居らしつて、影で愚痴を被仰るなんか……姉樣は卑怯だわ。妾は頭がわく〳〵して沈として居られない。起て手文庫を引寄た。中はお友達の消息文で一ぱいに成て居る。ハラリと落ちた寫眞を取上て見たら春兄樣と並んだ妹樣の立姿、細りとした撫肩の憂顔が薄くなつて居る。姉樣若いのね。貴女は花の十代を此樣に淋しい御顔して通り過てお仕舞ひなさつたの。

水色の薄葉に銀の薄を散した卷紙をのべて柳子樣へ手紙を書く。

廿日

此處へ來てから、もう一週間餘りになる。しとしとと降る雨に、萩も大方こぼれて仕舞つた。池邊樣から鴫を澤山に到來したが何う仕樣と云つて阿母樣が美代を尋ねに御遣しなさつた。二三日前から森の中や奥の沼池でポン〳〵筒音がして居ると思つたらもう獵期に這入てゐるのだ。

お亡父樣と秀樣は御嫌ひだつたけれど、春兄樣は銃獵だの投網だのによくいらしつた。

鴫はお味噌漬にして秀樣へ御土產に爲たう御座いますと御返事させておく。妾は當分神戶に住はねばならぬ事になつた。秀樣の御望みで神戶のある造船所へ暫く御通ひなさる事になり。阿母樣の御許も出たので一昨日から執事が住居の準備に出掛て居る。秀樣は船の都合で豫定より早く今日は馬關まで歸つて居らつしやる筈である。妾は生れて初めて新家庭の主婦と云ふ者になるので。今度は乳母も連て行かない。阿母樣にもホンの送つて頂く丈けである。今降て居る此雨がやがて時雨て霜を誘ふ頃になつたらば。未見ぬ土地の秋色は遠からず樂しき二人の前に擴げられるであらうよ。

素足では冷い廊下を湯殿まで……。御湯に浸つてちいと耳をすまして居ると、畑の粟が夕風にさら〳〵と鳴る。

廿二日

新橋の待合室で姉様は四邊に氣を配りながらそつと妾の傍へ寄ていらしつて。「艶さん。氣を惡くしないで下さいよ。皆な姉様が惡いの。後生ですからねえ」と云つてホロリとして居らつしやる。大方此間の手紙の事だらうと思つた。姉様の境遇にも同情して上ねばならぬ。妾は一寸考へて快くうなづいておいた。

鈴が鳴る。姉様は妾の後へ廻つて惣縫模様の半コートの襟を直しながら「成丈け早く歸つていらつしやいよね。」妾の跡から姉様は車の内へ這入ていらしつて阿母様に丁寧に挨拶をして居らつしやる。對の御召の横縞がお年に合して細過ぎたし。鼠縮緬の羽織が肩をすべつて落ちさうで。華奢な双の指は爪先まで白かつた。此姉様の前途に幸あれと妾は心の中で靜に祈る。

汽車は次第に西に進むだ。まだ見ぬ土地の美しさよ。そこに樂しき人は待つらむ。

二十九日

諏訪山下の新居へはる〳〵と百五十里の道をたどつて葉書が一枚。柳子さんから來た。

「久夫が亡くなつて此世における私の。すべての弱點が消えました。艶子さん。柳はこれから思ふ儘の放浪生活を致しますのよ。だん〳〵と貴女の御傍へも寄れなくなりませう。夫丈が悲しいけれど……。さようなら。」

朝顔に踊り殘さぬ一夜哉　八重選

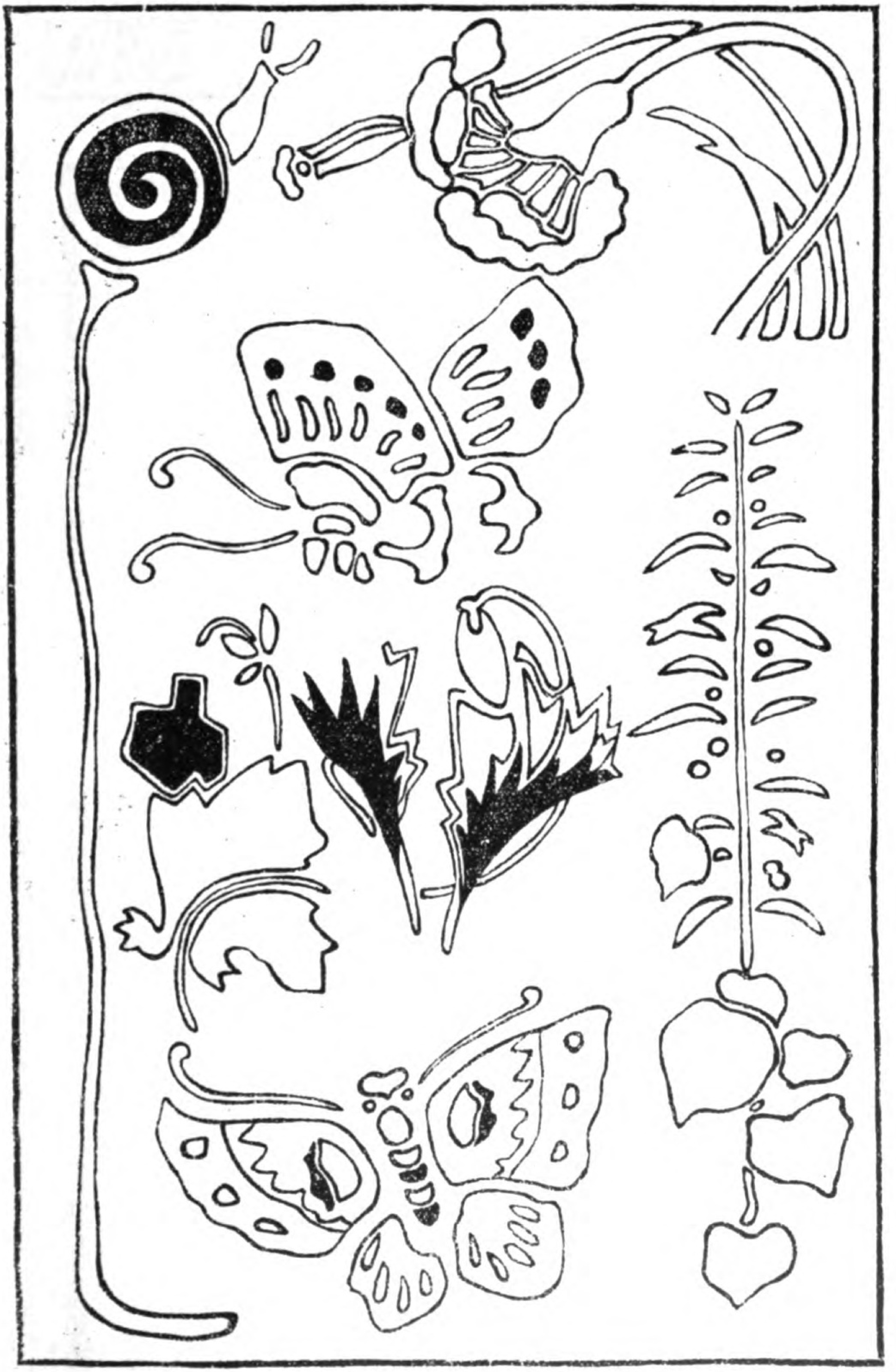
竹伐つて秋立つ露に濡れにけり　月斗

花芙蓉紅露の風にゆれにけり　美峰

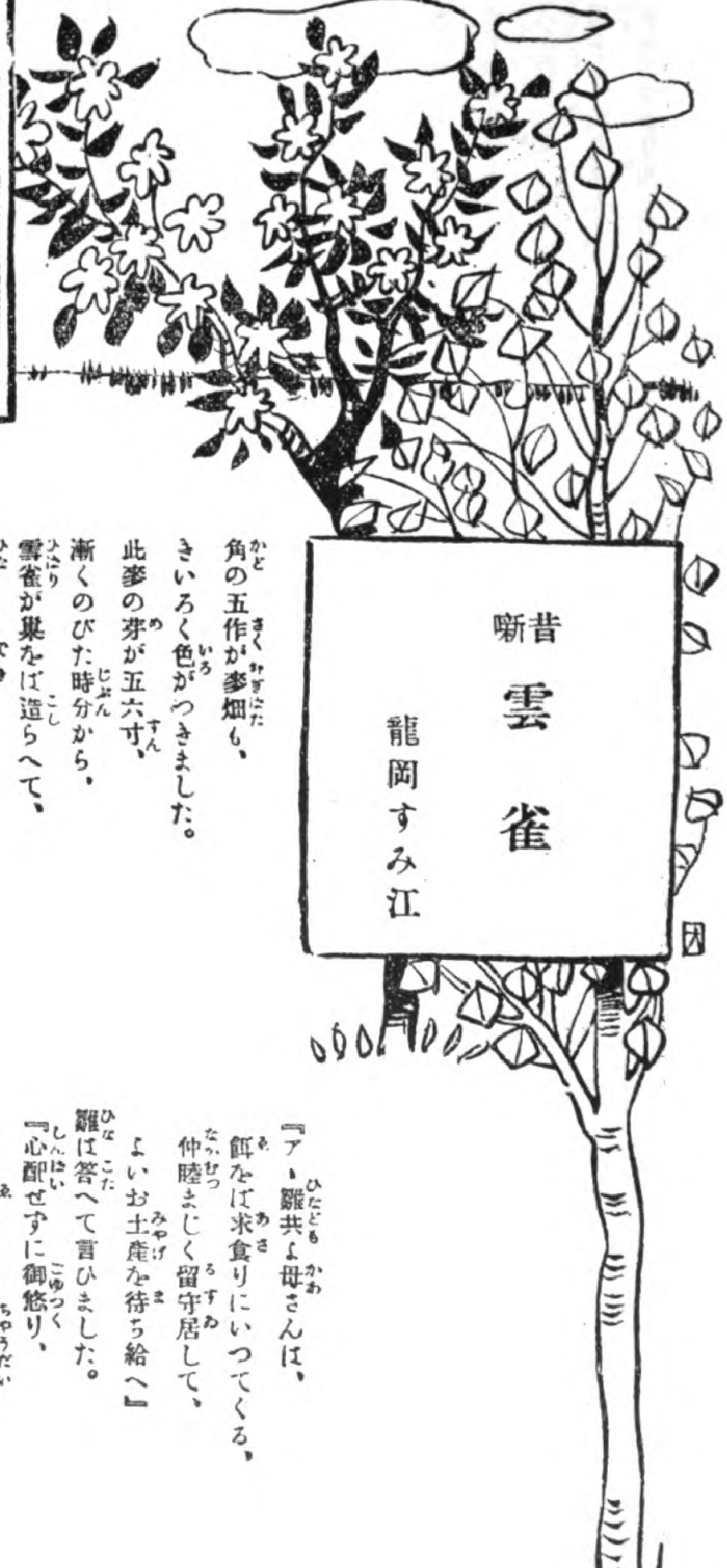
よそ事に女泣きけり宵の秋　泰洋

萩たわゝ四時あけぬ月に寄せておく　月波

# 新案模様







# 昔噺 雲雀

龍岡すみ江

角の五作が麥畑も、
きいろく色がつきました。
此麥の芽が五六寸、
漸くのびた時分から、
雲雀が巣をば造らへて、
雛が三羽出來まして、
三羽の雛も此頃は、
羽振くばかりになりました。
今朝も天氣がうらゝかで、
親がたべもの求食りにと、
出懸る前にいひました。

『アゝ雛共よ母さんは、
餌をば求食りにいつてくる、
仲睦まじく留守居して、
よいお土産を待ち給へ』
雛は答へて言ひました。
『心配せずに御悠り、
よい餌を探して頂戴』と
十時過ぎたる暖かき、
暮春の光が麥畑を、
包んだ時に此畑の、
持主五作の鼻唄を、
雲雀の雛はきゝました。

其鼻唄が止んだ時、
五作は獨言ちました。
『大分きいろくなつたから、
此麥畑もあけの日にや、
人を雇うて刈らせべ』と
三羽の雛は驚いて、
互に顏を見合はせた。

木立の影が長くなつて、
夕日が山に入る頃、
親は澤山餌を獲て、
歸つて來ました麥畑に、

『今日は母さん持主の、
五作が畑を見まはつて、
(大分きいろくなつたから、
此麥畑も明けの日は、
人を雇つて刈らせう)と、
獨言して行きました。
麥をすつかり刈らぬ内、
何處かもつとよい處へ、
お引越して頂戴な』
耳傾けて聽いて居た、
親はかぶりを打振つて、
『まだ暫くは大丈夫、
安心をして居られます』

薔薇色の雲漂ひて、
烏羽玉の夜は明けました。
雲雀は又も求食るとて、
雛をば置いて往きました、
親の姿が梓弓
いるが如くに野の宮の、
しろしの森に入りし時、
又し五作の聲がして、
『全然きいろくなつたから、
新家の與太でもあすの日は、
頼んでみんな刈らせべえ』
表は雲にかくれても、
巣なる三羽の雛のへを、
離れて囀や今頃は、
待ち疲勞れて居るだろと、
子を思ふ道に迷へども、
吾家へ還る一筋の、
路は違へず嬉然と、
『今日は幸よく澤山の、
餌を拾うた』といつもより、
疾く歸り來し母親を、
見るより早く雛共は、
口をそろへて言ひました。
『母さん今日も五作奴が、
(すつかりきいろくなつたから、
明日は親家の與太どんを、
頼んで麥を刈らせう)と
麥を刈られて家内中、
うき目を見ない其中に、
もつと安心なよい處へ、
お引越して頂戴よ』
親は優しく言ひました。

『イエ大丈夫母さんが、
　引越せうといふまでは、
　安心をして睦まじく、
　お留守居をよくするのです』
雛は從順に點頭いて、
其夜は早くいれました。

鷄の八聲に音もなく、
夜の帷の落た時、
雲雀の親に今日も亦、
三羽の雛を巣に置いて、
餌をば求食りに往きました。
雛は仲善くピヨ〻〻と、
うたなうたうて留守居して、
母の歸りをまつ内に、
暮る〻を知らぬ初夏の、
日もやうやくに傾いて、
瞭莱摘〻とて野へ行つた、
椋が妖のおよし坊も、
ざるを抱へて歸る頃、

五作は今日も麥畑を、
見まはりに來て言ひました、
『人を賴もと思つてりや、
日一日とおくれるで、
明日の朝には早くから、
己が一人で刈りますべ』
きいた三羽の雛共は、
晩の御飯の濟んだ後、
しづかに母に言ひました。
『母さんくどい樣ですが、
私等は心配でなりません。
今日も亦五作が來た時に、
畑を眺めて言ひました。
人を賴もと思つてりや、
日一日とおくれるで、
あすは朝から自分して、
全然刈つて了はふ』と』
きいた雲雀の母親は、
『オ〻雛共よ持主が、

自分で刈るといふからにや、
明日はかうして居られない、
山の麓によい家を、
晝間見付けて置いたから、
夜がしら〳〵と明けたなら、
五作が畑へ出ない内、
皆で引こし仕ませう』と
雛三羽は喜んで、
まだよく伸びもせぬ羽を、
擴げたりして居りました。

翌くる日五作が麥畑を、
すつかり刈た其時は、
雲雀はもはや引越して、
空家となつた巣ばかりが、
むなしく殘つて居りました。

人たのみせず刈らんとの一言に
　雲雀は巣をば移しけるかな。



# 天下の大事路傍の小事

內田魯庵

△騒ぐ程の事はない

一部の新らしい女が飛び離れた奇拔なまねをしたのが新聞種になつたので、非常な大問題であるやうに騒ぐ人があるさうだが、何もそんなに騒ぐ程の事は無いのサ。あんな事は新らしい女のモノポリー（一手販賣）でも何でもない、待合の女將とか請負師の女房とか俠氣を看板にする女はあれ以上の圖拔けたまねをする、二十五か六のうら若い內儀で鬼のやうな相撲を二十人も茶屋へ呼んで徹宵の底拔け騒ぎをして新聞に出されたある請負師の女房があつた。こんな奇拔なまねをする女がどんな女かといふと極キサクでガラ〱して居るが、人には親切で、世間の義理も能く心得てるし、女一と通りの道もわきまへてゐる、亭主が藝妓狂ひしたり妾を圍つたりしてゐても悋氣などはしない、決して浮氣もしない、唯亭主が道樂をするから自分も面白く遊ぶんだと時にこんな奇拔なまねをするんだが、微塵も女の道に外れたやうな事は決してないのだ。男の顏を正面に見てさへ何とか云はれる四角四面の堅氣な側からみたら飛んでもない事だらうが、相場師とか請負師とかいふ社會の空氣では家常茶飯で何でもない事なんだ。

△是認するわけではない

と云つたら相場師や請負師風情の女づれは夫れでよからう。新しい文明の教育を受けた女が夫では困る、

と云ふ人があるかも知れぬ。が、新らしい文明の教育と云つても論語を○・イクラ、聖書を○・イクラと調劑したお藥をいたゞくわけではなからうから、新らしい女が無暗に「お前は新らしいぞ、新らしいぞ」と責任を背負せられては堪らぬ。

それでは新聞に載つたやうな、あゝ云ふ奇抜な行爲を是認するのかといふと、イヤ決して是認するのではない。

が、それは女だから是認しないといふのではない。男だからつて是認出來ぬのだ。一體今日の若い人たちの間に専ら流れてる一種のヘレニズム（希臘文化）とでもいふやうな空氣は果して推奨すべきものであらうか否かは猶ほ疑問である。尤も一派の人から云はしたらすべての哲學は皆未解決―疑問である疑問が宇宙なり人生なりのツルー・フエースであるといふかも知れぬが、少くも無神論が有神論の證據の否認であつて積極的に無神を證明する能はざると同様に、ニーチエ以後の反道徳説は踏襲の道徳の範疇を破つただけでまだ何物をも與へてゐない。批評としては極て犀利尖鋭であつても哲學とし



ては極めて尫弱である。今日の最も流行してゐる——殊に一部青年間に喜ばるゝイズムは哲學上處士の横議たるに過ぎない。何等の權威もない（かういふのは所謂新思潮を無視するのでも藐視するのでもない。私はむしろ新思潮の味方である、私の座右の書籍の大部分は新らしいものばかりである、唯私は所謂新思潮の全部を丸呑みにするのを感服しないのだ。）

## △紳士の待合這入り

話は横道へとんで了つたが、この舊來の道德を蹂躙つてしまつて何にも新らしいものを與へられない結果が、不規律、不節制、沒人情、非常識といふやうな事を却つて高い事、大なる事、立派なる事と思ふやうになる。世間で不良少年を頻りに攻擊するが、强ち所謂不良少年のみが不良行爲の單一なる生產者でなくて實は不良少年よりももつと恐ろしいものがある。世の中に何の勢力もない青年の一人や二人（總數から比例したら何萬分の一位なもんだらう）が墮落するよりは一部の社會から仰がれてゐる堂々たる名士が自動車で待合入りする方が遙かに惡感化を世間に與へる。

たつた二人か三人の若い女が偶々氣紛れに（恐らくは生れて初めて）大門を潜らうと、十二階下を徜徉かうと、何の之が問題になる。統計は知らないが、何萬といふ男が每晩墮落してゐる中に二人や三人の女が氣紛れに交つてゐたつて攻るにも咎めるにもあたらぬ。どうでも宜い。

## △看板にされては困る

たゞ今も云ふ通り、こんな事はさわぎ立てるほどの事でないから看過ごしてしまふので、無論是認出來ぬのだ、女だからではない、男でも是認出來ぬのだ。そこで、たゞこんな事がして見たかつたから仕てみたのだといふなら何でもない。（無論さうに違ひない）。が、もしこんな事をしなければ新らしくないとか藝術的でないとかいつて此の不規律な奇拔なまねを賣物にするなら困る。女だから困るといふのではない、男で

も困る。今の若い男の文人たちの中には十二階下を知らないと新らしい氣分が味へないやうに思つたり、茶屋酒の味ひを知らない文學は乾枯らびてるなど〻高言してゐる人があるやうだが、かう云ふ態度は甚だ感服しない。唯、私一個の感情から感服しないといふのではない、かういふ態度から生れた文學が權威を有する筈がない。

今日の道德を無視したヘレニズムといふやうな歎美主義を基礎としてアーチスチカル・ライフは本來が藝術的の方面から生じたので、最も藝術家に投じ藝術家に喜ばれてゐるが、私の考では之は昔から云ふ『名人氣質』に哲學的意味を與へたものに過ぎんので〝Artist-dom〟にのみ限りて許される。

### △お雛樣のお酒盛

例へばジオージ・サンドとかサラ・ベルナールドとかいふやうな人なら何度艶聞を流さうと亭主を換へやうと社會は其人の藝術的手腕そのみ見て其の行爲に眼を閉いでゐるが、何の能も取柄もないそこらの細君や娘がこんなまねをしたら大變だらう。今の問題になつてるある一部の若い女たちも日本の女としては相當な技倆を持つてゐる人たちだから少と位な事は洗ひ立て〻騷がずともよからう、あ〻云ふ人達はア、云ふ人でまだ外にもいくらもある。一々女と云ふ女が皆重箱へ入れて寒天で堅めたやうでなければならん樣に思ふては無理だ。あの位な事はよい、五色の酒を飲んでうれしがつてゐるなどはお雛樣のお酒盛をしてゐる可愛らしいお芥子のお孃さんを見るやうな氣がする何も騷いで咎めないでも宜いさ。唯あれを賣物にしては困る、生盛藥館の藥のやうに『新らしい女』といふ看板を建て大きな聲をしてこんなまねをして歩いては困る。でなくつてコツソリやつて見るのなら之も宜からう。

祇王寺の近き徑に桔梗哉　露石

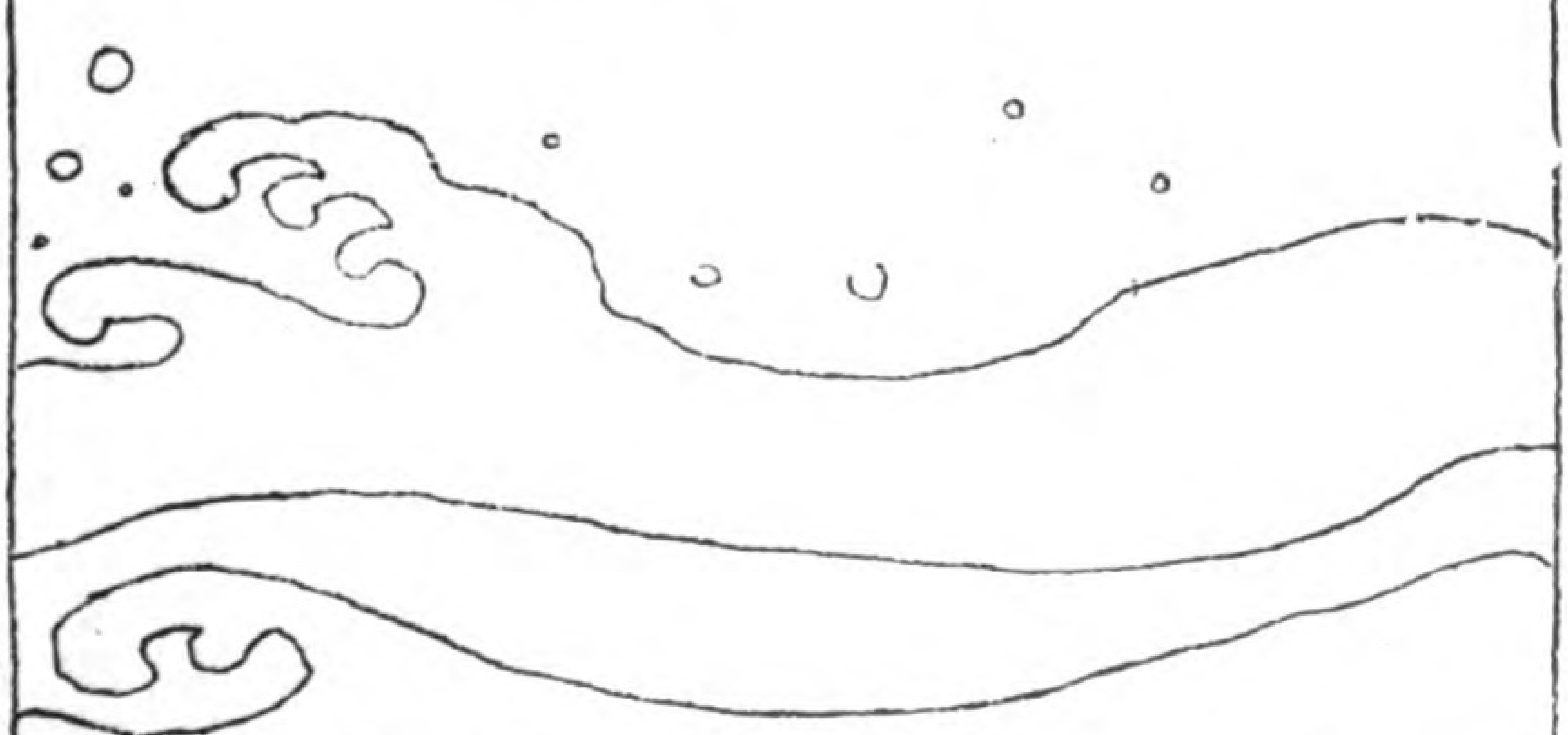
侘しらに烟籠しろし宵の秋　青波

椽の露木犀の香の運坐哉　水巴



あまりに ひとのはかなさに
ひとり秘めたるきみが名を
濱のまさごに記せしが
哀しや波の消しゆきぬ。
あゝこの文字の永劫に
消えじときかば死なましを

―暮笛集―





# 姉の責任

並木英

風もなく、珍らしい平穏な日曜。家にジッと坐つて居るのが惜しいやうです。先刻「日比谷に行かう」つて、宿の内儀さんに誘はれたけど、人込の中に出て、若い美しい人の、綺麗な着物や、帶の刺戟を受けるのが、煩はしさに堪えぬやうで、斷りました。

かうして、靜な日向に頸を曝しながら、勝手な問題を考へて、泣いたり笑つたり、一人劇を演つてた方が……どれだけ伸々してるか……。實は座布團を縫はふと思つて、龜子形に刻んだ小布を、こんなに並べて見たのですけれど、縫目や配合が器用に出來なかつたので止してしまひました。

妹が嫁いでから今日は二月目、もう餘程家事にも馴れていゝ奥樣になつてることでせう！　姉さんが嫁くまではどうしても……と、言張つたが……、私が人妻の名をうけるのは幾年の後だか、先の知れぬものをそれまでどうして二人の妹を待たしておけやう。自分の獨身を妹たちにまで、讓り渡さなくとも……といふ知人の皮肉な陰言を忌んだばかりぢやない。

あの瞳の光が消せないうちに、人並に圓滿なホームの歡樂を吸はしてやりたかつたからです。長い振の幾重、重い帶の幾條はなくとも、適當な人物を探して、親代りになつて嫁るまでには、見えない苦心をいたしました。

今更兩親に不足は申しませぬ。むしろ、親の滿足な供給を得ぬ子供よりも、愛兒に思ひ通りの情を表はされぬ貧しい親の心は？と、苦勞性の母親や、老衰した父上が姿を思ひ浮べては、たゞ泣かされました。

「此の腰紐は姉さんが二三度用つた丈けで、さう見苦くはないから、もつてらつしやいな。それから、あの襦袢ね、少し質素過ぎるけど平常着にはいゝでせう？なんでも數の多い方がいゝからね。」

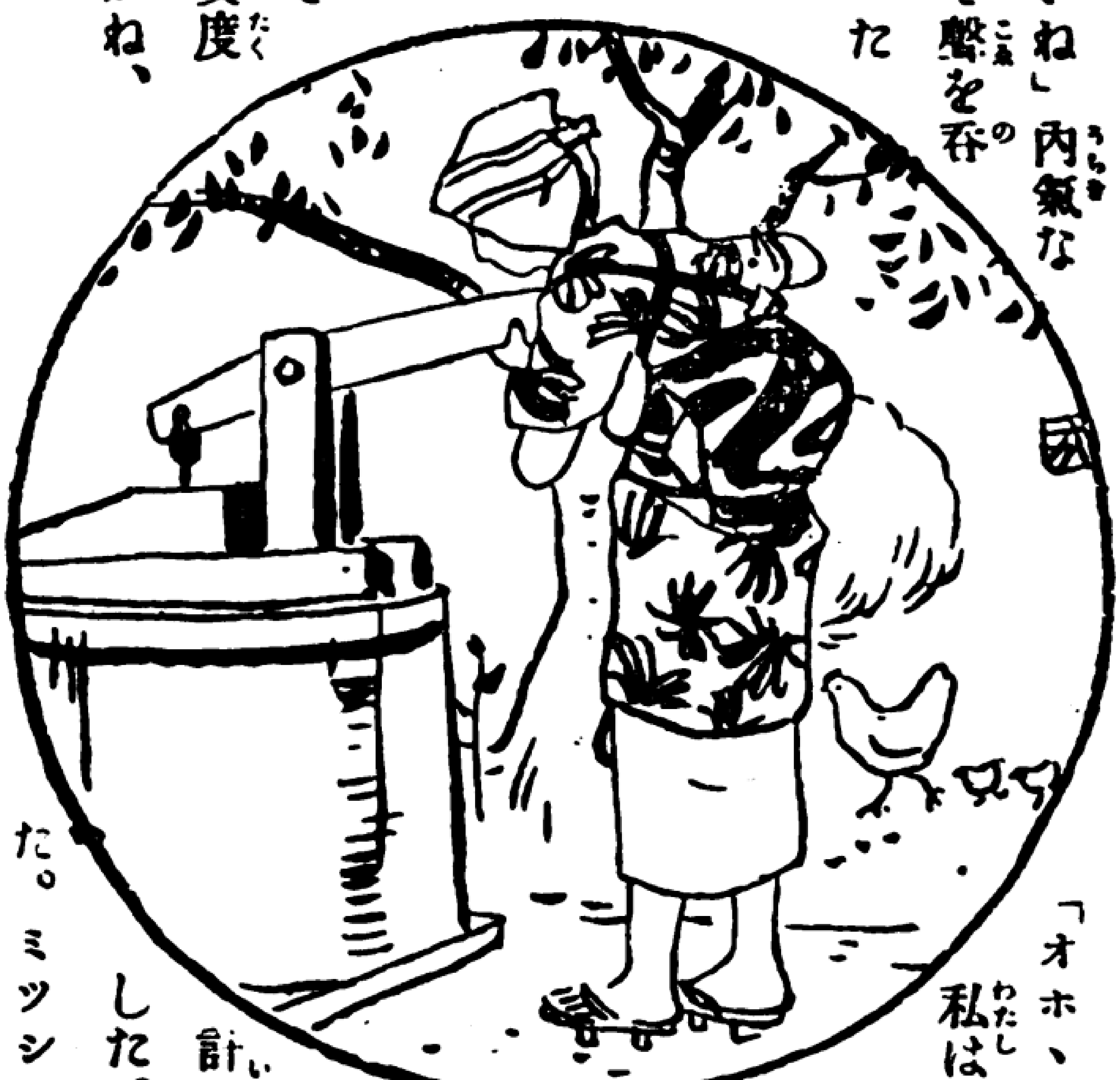
嫁ぐ前夜は、雨瀟々と枯葉をたゝいて、それは〳〵

静寂な晩でした。私の古い柳行李から、役に立ちさうな品は、みんな拔き出して妹の新しい簞笥にうつし代へた。

「姉さん、私…御めんなさいね」内氣な柔順しい妹は、肩をふるはして聲を吞んだ。悲慘な家族の境遇を考へたのでせう。

「あのお前姉さんに氣兼したり、家の事を心配したりする必要はないですよ。あとの二人ね弟姉達の世話は、私が出來る丈しますからね。たゞ姉さんは、長男だつたらもう少し支度も出來たらうに…と、それがね、殘念…よ」

はかなきもの丶反抗よ。何故默つて女の運命に服從しないのか。男子でも、自分の身一ッ扱ひ兼て居る意氣地なしが大勢ある。



「姉さん、もう何も被仰らないで下さいな…貴姉にばかり、家の重荷をみんな負はせて仕まつて…。其上私が先に嫁くなんて…考へると私は…。」

「オホヽヽまあ何て氣が小さいのだらう私は、自分勝手で、いつまでも獨身にしてるのですからね」

事もなげに笑つた眼に、熱い泪がこみあげた。十年も後から生れた妹さへ、人生の光榮ある階段を昇りつゝあるのに。

弟妹の多い…の長女に生れた私は女學校を卒業すると直ぐ家計の一部を擔當せねばなりませんでした。學校といふても、宣教師の建てた。ミッション、スクールの校費生、現今のやうに華美な風は、夢にも見られぬ時でしたから、母が手織の木綿着に、月々八十錢許の小使で不平も云はず卒業した。其時代は、地歴代數幾何など皆原書で習

つた位で英語の進步は驚く程、卒業早々、渡日ばかりの米婦人の通譯となつて、横濱に從いて行きました。肩上の跡も初々しい十九の春……

二年間は義務年間といふので、僅七圓の月給。五圓の食費を拂つた殘り、二圓の小使で、時候の變目には新しい單衣の一枚、羽織の表皮位求むる餘裕を作ろうといふのですから、中々の骨折でした。天長節にかける三十錢の白襟を買ふのに、財布の底をたゝいて、術い息ついたこともあつた。外出してあまり御腹が空いたので、考へもなく最寄の汁粉屋に飛び込んだ。二杯食べて巾着を見たら……マー驚いた!! 二錢と五厘きり……。あの時のはづかしさつたら……、顏から火が……。穴に這入り度い位。貧が生む度々の失敗や、滑稽は、笑ふにはあまり寂しいものでした。容赦なく寄り崩るゝ生活難に、若き日の誇も、輝も黑々と塗りつぶされて仕まひました。

同級生の九分までが、新しい奧樣や御母樣と變られ、校友雜誌の消息欄を賑はして居られる頃、兼て希んで居た檢定試驗に及第した。先づ〱これで一安心……とホッと洩した歡喜の吐息……!! 二十三の年も忘れて出京してから、毎日午前は私立に英語教授、午後は水曜を除く外、築地の英人に日本語教へに……、夜は内職の飜譯物、七年目の今日まで、忙しい生活の壓迫と絕え間なく戰つて居ります。

大きい妹は私と反對に、裁縫學校に入た。先達嫁づいたのが其妹なのです。あとは中學四年の弟に、昨年母校に御願ひした十五の妹、一番末子のが田舍に在る母の元から、小學校に通つて居ります。

煩雜な會社の務に堪へられなくなつたと、先月父は職を退いて、郷里に歸つた。他に何か適當な仕事を……と探したところで、銳氣あふれた青年さへ就職に苦しむ世の中ですもの! 時勢と大分にかけ離れてテクテク歩いて來る老人を、慈悲にも雇つて呉れるやうな、悠長な場所はどこにもありません。

勢ひ萬端の責任が私の細腕にかゝつて來る。

「思ひこゝに到つて、我、嘆息千百度」と、展く瀬のない將來を眺めては悲觀したくもなる。

# 自由奔放の女性

## （模造ノラ及び擬似マグダ觀）

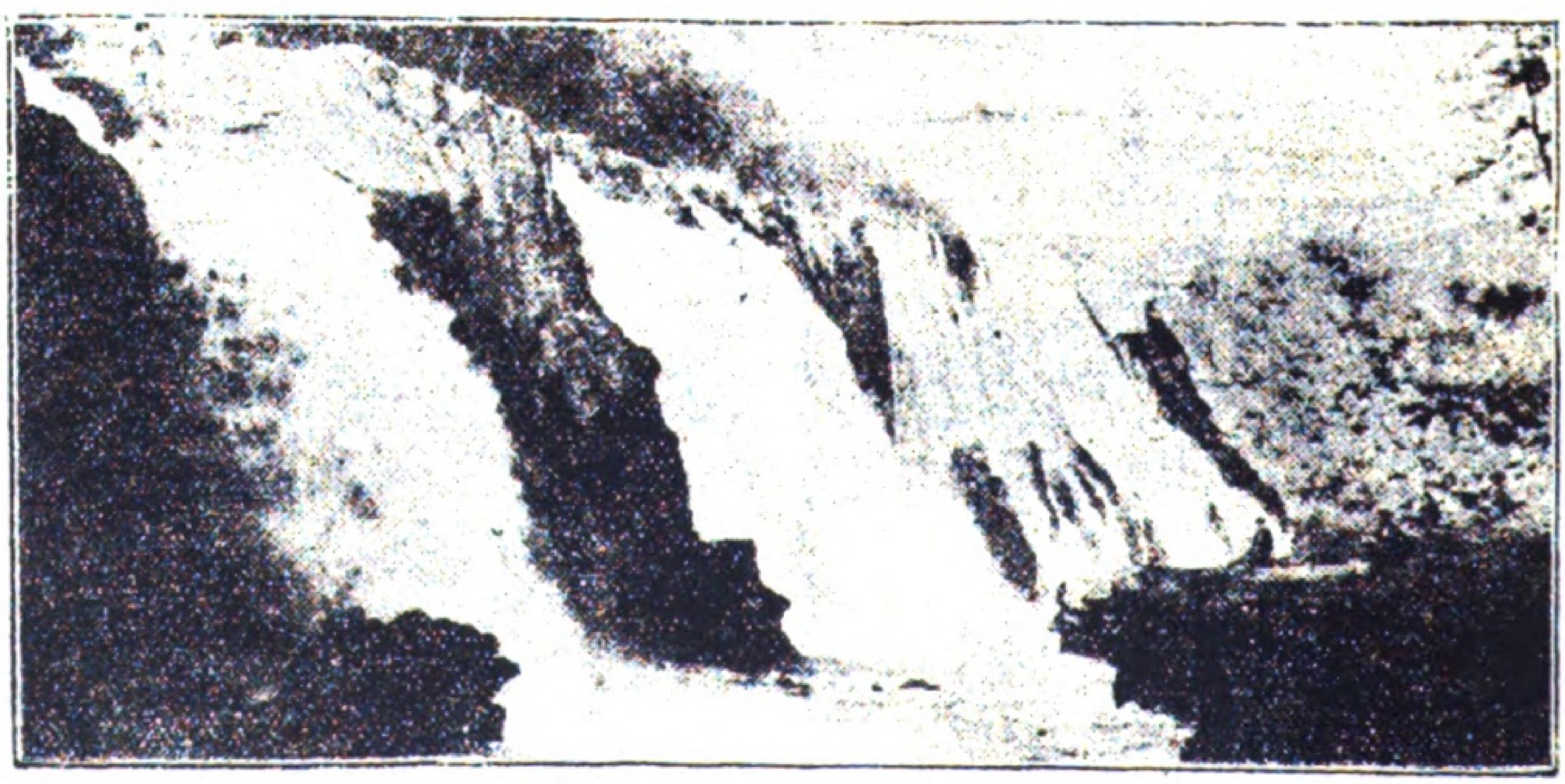
隣の人

### 一　高等遊民の自覺

◎曰く夢の女、曰く魔の女、曰く謎の女、曰く新しき女――と、優麗典雅なる柔性の特質氣分は漸次稀薄となり、剛情の氣性、行動を眞似びて、聊か世に反抗を試み來る、彼等は破壞されたる儘なる明治思想界の産物にして、ローマンチックより直ちにデカダンに沒入する也。

◎『新人』の熟語、既に耳馴れて、世人之を怪まざるも、『新しき女』の造語近時天下の視聽を聳動す。蓋し、一は宗教にはぐくまれたる敬虔の熟語にして、一は文藝より生れたる嘲笑の造語也。自然主義の絶叫されたる數年前、イプセン劇のノラに冠するに『新しき女』を以てし、自覺せる女性に對する善惡の稱呼なるかの觀ありしに、最近女性の進步（？）は此の稱呼の品位にすら墮落を來せり。

◎然れども、『新しき女』は明治が大正と改まれる今日に於ても、矢張新し



豐後魚住の瀧

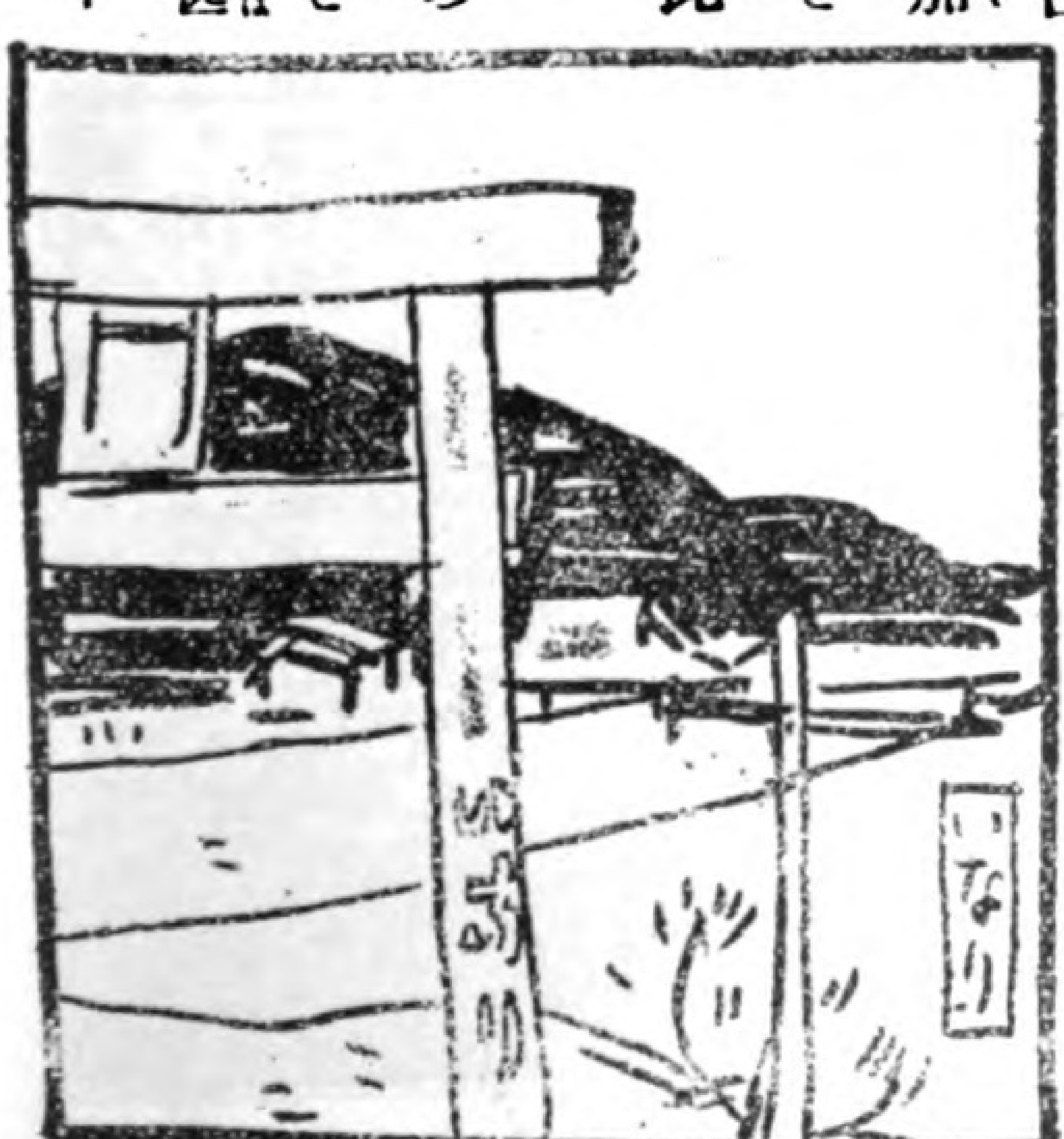
き女にして、現下最も興味を惹くべき問題の女たる也。稱呼の品位如何は暫く措き、現代新しき女と稱せらるゝ者は、確かに一種の新しきにほひを有する女性ならずんば非ず。

◎斯の『新しき女』を近頃具體的に説明せるは讀賣新聞也。其の『新しき女』の新しき實行、突飛なる活動を傳へたるは萬朝報也。而して、更に『新しき女』の素行をすッぱ拔きたるは國民新聞也。是等の紙上に現はれたる所謂新しき女は、多くは女流作家の集團たる青鞜社の年少女豪にして、新聞眼に映じたる彼等は、單に教育ある道樂者——高等遊民として取扱はれたるに過ぎず。

◎男子に浪人會あり、時事を慨する政治家、新聞記者等の集合にして、舌端火を吐き、豪氣世を蓋はんとする慨なきに非ず。浪人に一味の『新』を加へたる者に高等遊民あり、官に仕へず、鞭を執らず、又一定の月收を有せず、一管の筆、一枝のペンに依りて努力す。書家及び文藝作家の如き、此の類に非ずとせず。

◎高等遊民は野に放たれたる羊也。何等の羈束を蒙むるなく、自由奔放の生活をなす。女性の高等遊民、又然り。唯彼等は『新しき女』の下に總括せられて、女浪人、女高等遊民と稱せられざるも、實質に至りては相去る甚だ遠からず。但かの大學卒業者の未だ職に就かずして、下宿屋にゴロ〳〵



する自稱高等遊民とは、全然其趣を異にせり。

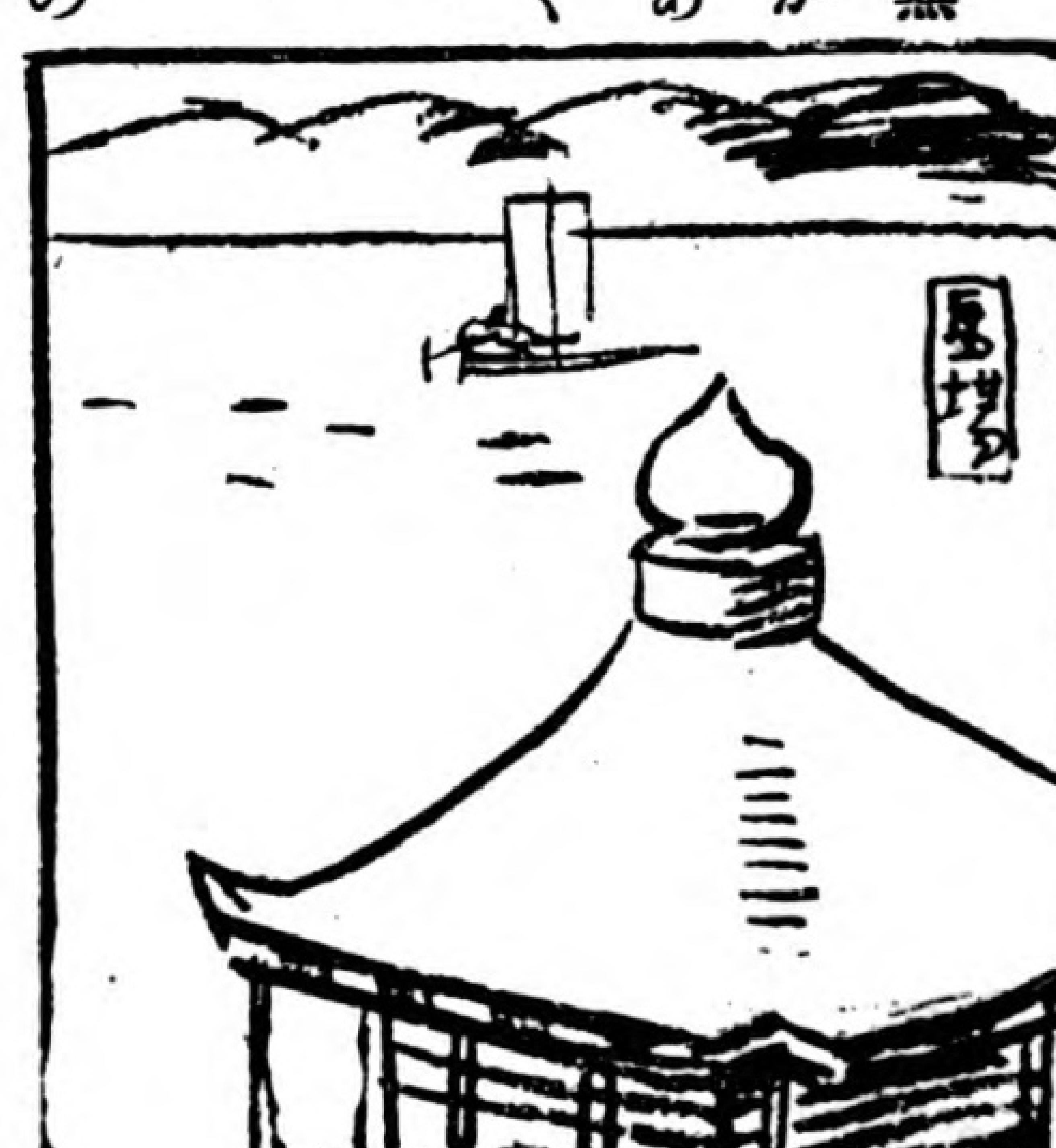
◎藝術家は須らく高等遊民たらざるべからず。恒産の如きは有るも可、無きも亦妨げず。さばれ、必ず藝術的人格と藝術的良心とを有せざるべからず。今の文藝の上に立せんとする『新しき女』に、這個の人格と良心とあらば、高等遊民たる甚だ可なるも、何等の操守なく、自覺なく、確信なく只管に時流に衒はんとするに於ては、斷じて不可なりと謂はざるを得ず。

## 二　職業ある婦人

◎『新しき女』の意義、一見明瞭なるが如くにして、實は甚だ朦朧たるものあり。世の所謂新しき女は、官能の刺戟より觀たるにほひに非ずして、時代の色彩より觀たるいろ也。新古の對照より名づけられたる女性也。此の意味よりすれば、今日の新しき女は、必ず將來の新しき女に非ず。

◎歐化思想に孕まれたる田邊（現姓三宅）龍子は、當年の所謂新しき女なりき。彼女は夙に鹿鳴館裡の舞踏の群に入りて男女交際を實行し、更に筆を論壇に進めては男女同權論を喋々せり。時代の眼を以て觀れば、其の行動突飛ならざるには非ざりしも、自ら節制あり、操守あり、「婦人界の先覺者」を以て任じたるの意氣に至りては、大に愛すべきものあり。

◎此の時代よりも一歩進み、覺醒せる女とも見らるべき龍子は、博士雪嶺





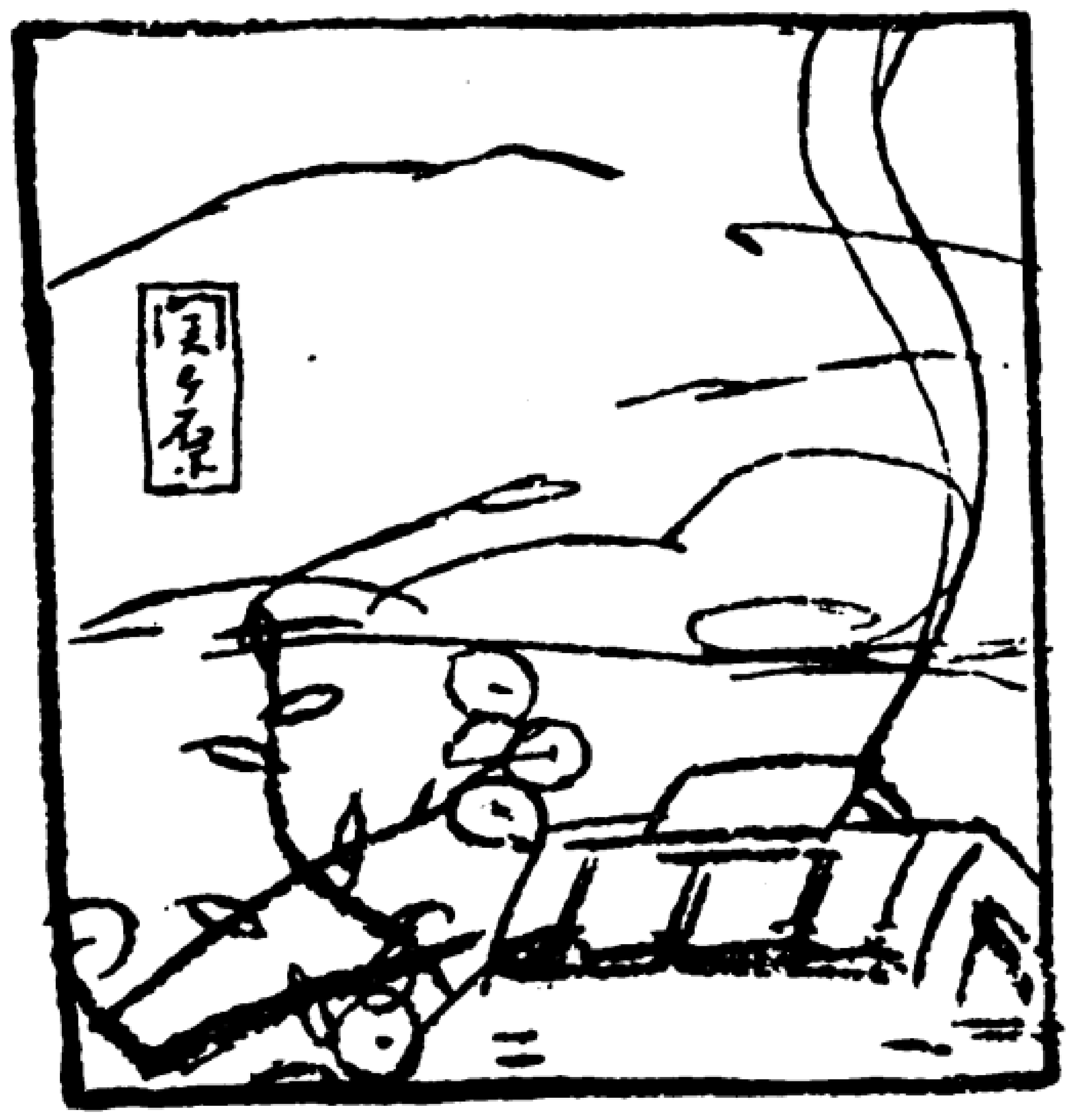
の室となり、家庭の人となりて、婦人の天職を盡すことを忘れず。今日觀の所謂新しき女には非ざるべきも、酸いも甘いも嚙み分けて、眞の人生の意義を解せる『新しき女』の如く思はれざるにしも非ず。

◎然れども、斯の如きは到底今日の『新しき女』には非ざる也。今日觀上の新しき女たり得る第一資格は獨身也。是れ覺醒せる女性の取るべき當然の徑路にして、結婚其物を屈辱と感じたるに因る也。而して、その第二資格は放縱也。是れ自由奔放の生活を以て人生の第一義とする以上、男子に對しては反抗の態度を取らざるべからずと爲す也。

◎內田魯庵の所說に據れば、『所謂新しい女と云ふのは職業を持つて居ると云ふ事である。あの新聞(讀賣)にあつた女は一人のこらず何か仕事をして居た。何もしないでゐる普通の娘とか、一家の主婦となつて家を治め子女を敎育しつゝあると云ふやうなのは一人も見當らなかつた』と云ひ、新しい女の『重大なる一つの資格』を職業ある婦人に發見せり。然れども極端に云へば、琴曲の師匠、お針、あねご等も亦職業によりて自活す。職業あるもの、決して今日の新しき女のみには非ざる也。

◎又、『新しき女』の搖籃とも云ふべき女學校の經營者たる、下田歌子、三輪田眞佐子、棚橋絢子、跡見花蹊、嘉悅孝子、津田梅子、山脇房子の如きは、孰れも職業ある婦人也。而して、前者四名は未亡人、中者二名は獨身





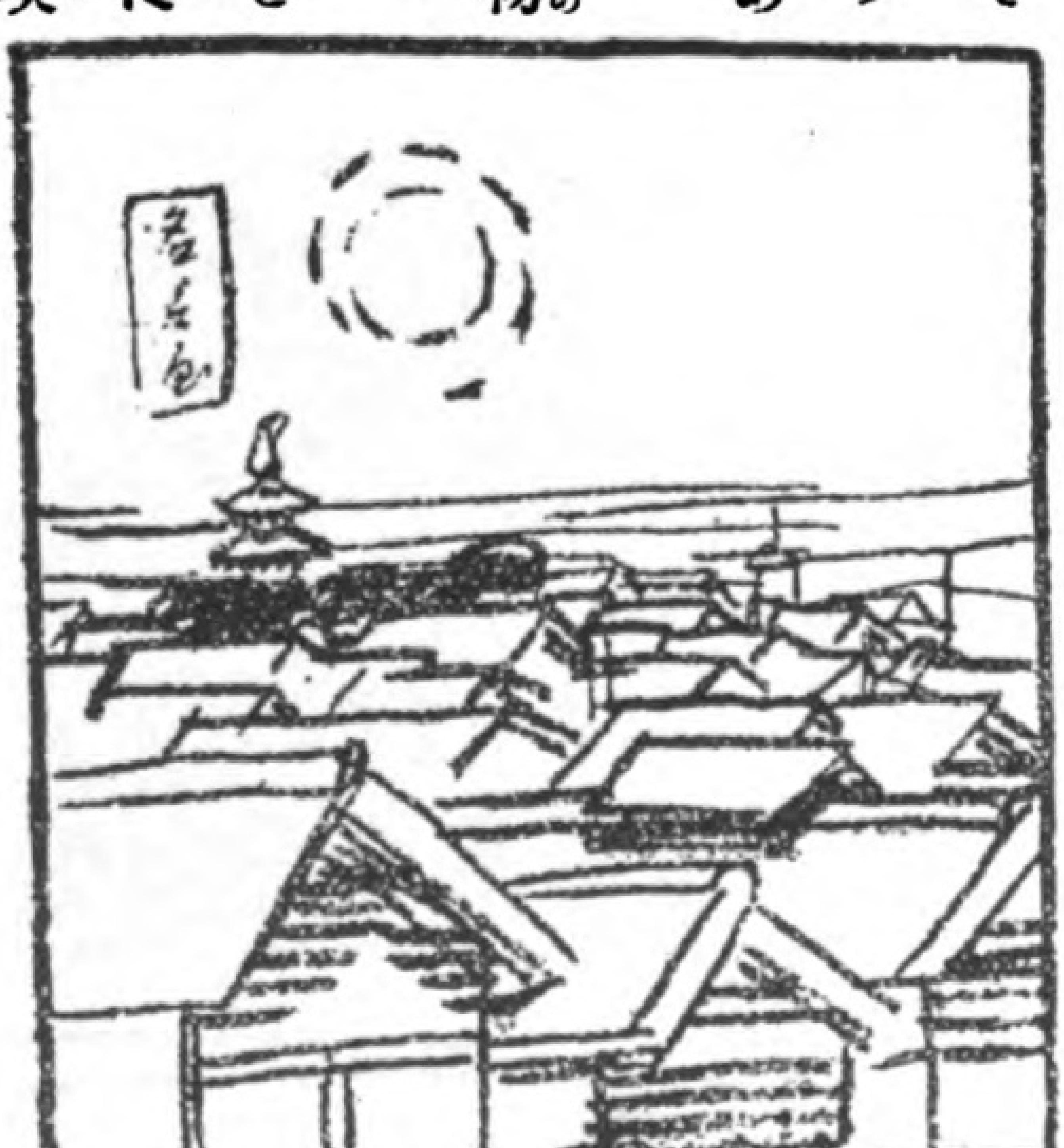
後者は現に博士夫人也。其の寡婦なるも、獨身なるも、職業ある婦人にして良人なしと云ふの外『新しき女』の氣分あるなし。されば『新しき女』としての條件は、如上の外更に年若きこと（美にても醜にても）新思想を抱けること等ならざるべからず。

◎職業ある婦人は、獨立をなし得る女也。男子に養はれざるも、生存し得る女也。是等の婦人の男子の前に、鼻息を荒くするは當然ならんも、未だ獨立の資格を有せざる年若き女の、新思想を誤讀し、己れ自らが劇中の女となり、男子に對して反抗的態度を取るに至りては、烏滸の沙汰也。

◎獨身と獨立とは、字面稍似たるも、其の意義大に異れり。獨身は決して獨立の謂にあらず。獨身にして父母に頼り、兄姉により、將友人に寄りて衣食するに於ては、是れ獨立の人に非ざる也。良人の家を飛び出せるノラも、家庭を遂はれたるマグダも亦職業を有する婦人にして、獨立の資格ありし也。

◎淡き戀に生き淡き戀に死したる樋口一葉は、一個獨立の婦人也。洗濯物を引受けて家計を助けたる少女は、半井桃水の紹介によりて文壇に出で、鬼才を小說に認められてよりは、其才筆を揮ひて一家の生計を支ふる事となりぬ。縦令灰色の自覺に達せざりしにせよ、人生の機微を解せり。深夜聊か酒を試みたるも、歡樂を追はんが爲めに非ずして慰藉を得、感興を喚



ばんが爲めなりけらし。

◎一葉は淡き戀する程の優しき婦人也。居酒屋に入りて火酒を呼り、剛情を痛罵して一時の快を貪らんとするが如き、不敵の、捨鉢の女に非ず。又自ら獨身を標榜して、天下に呼號せんとするが如き衒氣と勇氣とを有せず然れども、何となく新しきにほひのする、優麗なる女流作家ならずんば非ず。

◎一葉を朝顔の花に喩ふれば、與謝野晶子は眞紅なる牡丹の花也。其の濃艶なる色彩と、火の如き熱情は自らのハートを燒き盡すと共に、他の胸をも併せ燒かずんば歇まず。多くの婦人の家庭に入りて平凡化するが常なるに、獨り晶子は人の妻となり、母となりて愈〻その才藻を擅にせり。

◎晶子は始め良人の庇陰にて名を成し、良人の激勵によりて才藻を發揮せること勿論なるも、今日に於ては其の評判遙かに良人の才名を凌ぐ。而も良人を慕うて海外に押渡る程の親愛あり。彼女、自由奔放の思想を以てして、尙女性の優し味を保持す。所謂『新しき女』には非ざる也。

◎若き晶子と時を同じうして、ローマンチックに生きたる『夢の女』に、山川登美子あり、増田雅子あり、當時物議を釀したるも、彼等の天地は空想也。詩歌に孕まれたる戀愛なりき。現に雅子の如きは人の妻となり、茅野雅子として靑鞜社の名簿に列るも、其の思想、歌風自ら異るものあり。





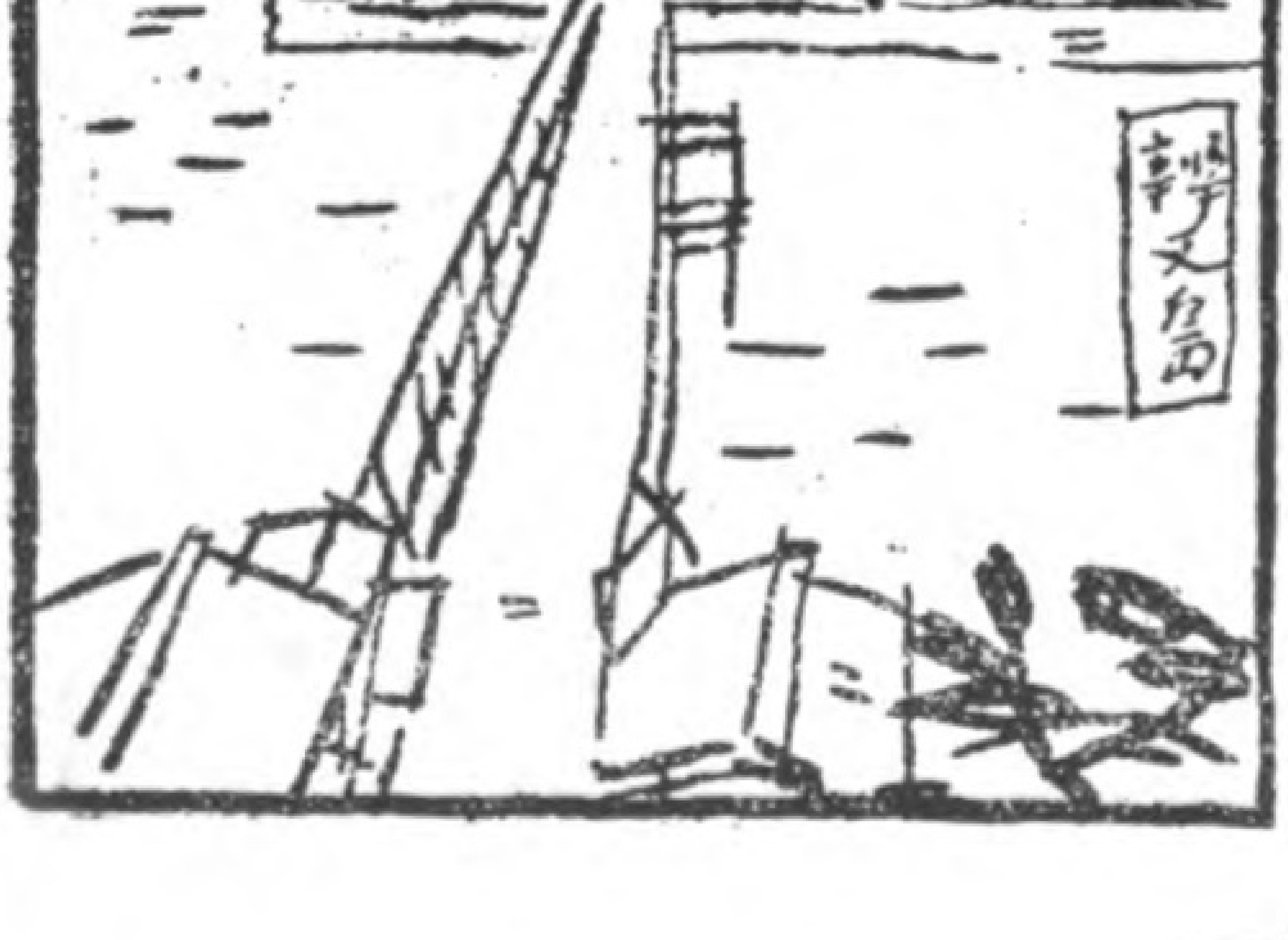

◎『謎の女』と稱せらるゝ内藤千代子は、現代式の女性に非ずして、寧ろ空想と憧憬とを生命とする少作家也。其の作物に何等の印象なく、深刻なく、思想なきも、何となく輕快なるチャームを有す。幵は悉く東京に憧るるの聲也。近時少しく人生の殿堂を覗ひたるものゝ如く、其の聲の漸く悲調を帶ぶるに至れり、『新しき女』の群に投じて、其の浦若き血潮を黑くする事なくんば可也。

## 三　青鞜社同人の新運動

◎青鞜社は、囂々として各紙上の問題となれる、所謂『新しき女』の本山也。此の本山の建立されたるは昨年にして、新秋九月始めて機關雜誌『青鞜』は發刊されたり。而して誌名の、ブリユースタツキングに因みて、森鷗外の命じたるものなるを聽き、世人は半ば嘲笑の眼と、半ば好奇心とを以て之を迎へたりき。

◎平塚明子の森田草平と共に駈落して、雪の鹽原に『死の勝利』の一幕を演じたるは五年以前の事に屬す。女子大學出身の無名の一少女は、此の愚劣なる一事によりて江湖に喧傳せられ、社會より葬り去られたりと思の外、若き二つの軀は文藝の華壇に甦れり。

◎此の事ありてより明子は草平と絶ちたるも、若き思の悶々を遣るに由な



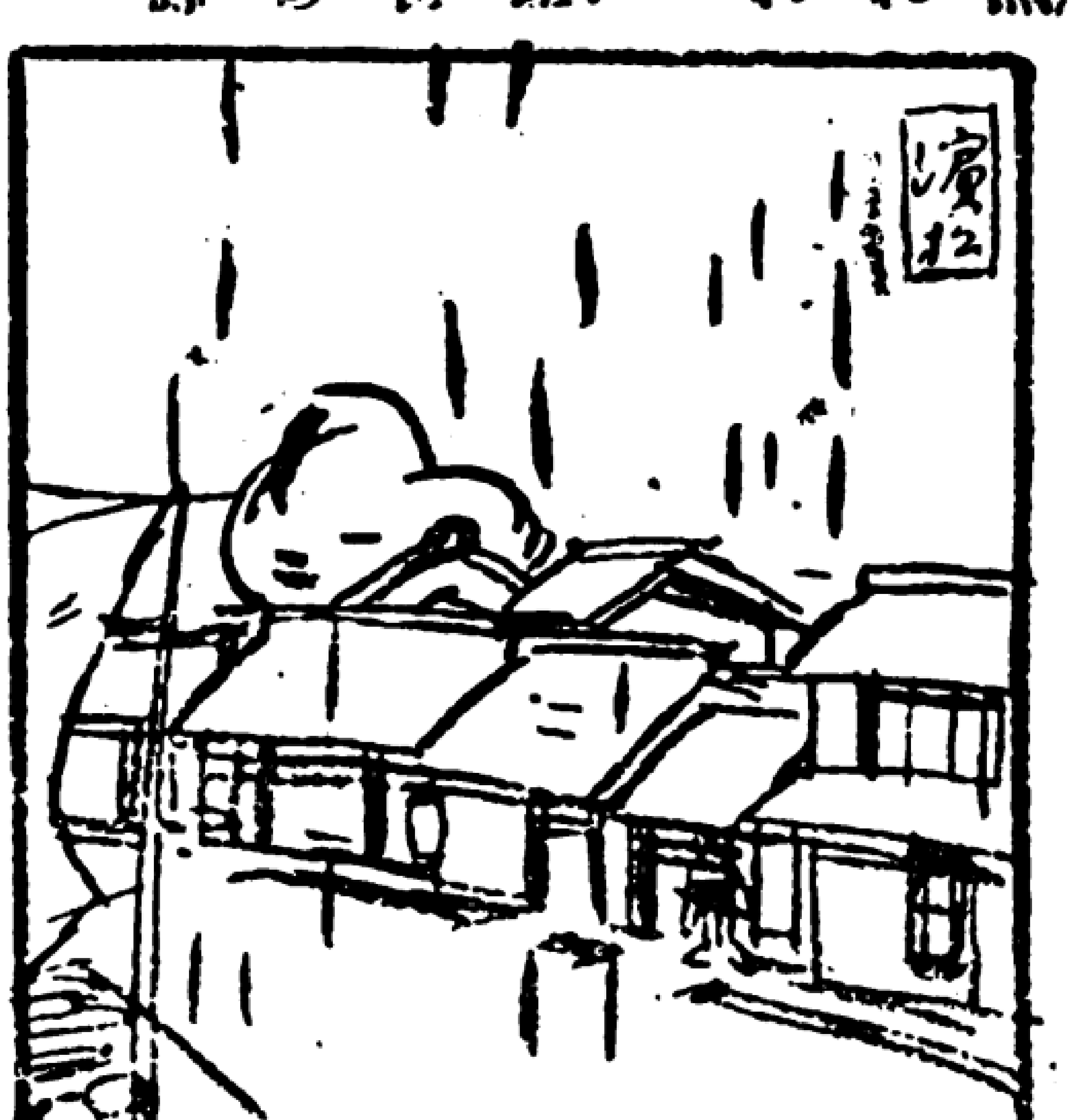


く、或は參禪に耽り、或は文學研究に努力したりとも傳へられしが、果然草平の友人たる生田長江、阿部次郎等の贊助を得て、雜誌發行は計畫され茲に我身の一生を思想界に捧げんとの臍は固まりぬ。美名を以て評すれば、肉的生活より靈的生活に入らんと決心せる也。

◎却說、此の藝當を實行するには、先づ同志者を糾合せざるべからず。茲に於てか女子大學出身の保持研子、中野初子、木內錠子、及び文學博士物集高見の愛孃和子等を語らひて發起人となし、閨秀作家として多少の名ふる小金井喜美子、森しげ子、瀨沼夏葉、岡田八千代、與謝野晶子、加藤籌子、國木田治子、長谷川時雨の輩を贊助員となし、茅野雅子、水野仙子、田村俊子、荒木郁子、神崎恒子、野上八重子、佐久間時子、尾島菊子、岩野清子、大村かよ子、加藤みどり、田原祐子、上田君子、阿久根俊子、杉本正生等の有夫者、獨身者、再婚者十有八名の會員を得て、靑鞜社の大旆を樹立せる也。

◎其後野上八重子は家庭の事情を理由として退き、新に井上民子、江木榮子、上野葉子、小林歌津子、尾竹かづえ、柳濟美、岡本かの、永安初子、小磯とし子、長沼智惠子、林千歲、原田琴子、田澤操、三ケ島葭子、橋爪梅子、藤井夏子、小笠原貞子、北原末子、木村幸子等四十餘名の新婦人、或は月白臺より、或は大阪より加盟せるを以て、現下總員七十餘名に達し





女流作家の一大集團として勢力頗る緊張せるかの觀を呈せり。然れども作家として將來あるもの幾人ありや。K氏の所謂「唯女のみの知る天地、唯女のみの築き得らるゝ獨創の王國」の建設さるゝ日の、前途遼遠なるを思はずんば非ず。

◎さもあらばあれ、靑鞜社の首領雷鳥は、其の創刊號に於て『私共は隱されて仕舞つた我が太陽を今や取戻さねばならぬ』と叫び、『然らば私の希ふ眞の自由解放とは何だらう。云ふ迄もなく潜める天才を、偉大なる潜在能力を十二分に發揮させることに外ならぬ』と、進軍の喇叭を吹けり。マグダを評して『所謂新しい女かも知れぬが、眞に新しい人ではない。新しい女ではない』と謂ひ、更に『ノラの所謂自覺なるものも怪しい』と冷笑せる彼女は、婦人の自由解放を潜める天才の發揮にありとし、一隻眼を文藝界に向つて開きたるの外、現實の問題に對しては風馬牛たるに似たり。

◎要するに彼女の叫びは、思想界に於ける女流の天才を需むるの聲にして社會的の女豪を產まんとするの準備に非ざる也。思想界の畸形兒、ヒステリックの女性を以て、所謂新しき女、自覺せる女となさば、是れ婦人の向上に非ずして、寧ろ墮落也。

◎雜誌『靑鞜』を檢するに、最初の數號は贊助員の作を主とし、會員の作を從とするの傾向あり、情熱なく、活氣なく、穩健の態度を持せしが、本年





二月號に至りて漸く異色を呈し來り、其の姓名の如きも男性的の稱呼を以てせり。而して、其の作物の如きも肉的なる、柔かなる氣分のもの、多きを占むるに至れるは『青鞜』の一變革と見ざるべからず。

◎斯の變革の起因は、雷鳥の自發的のものに非ずして、周圍の狀勢の變化より來れるものゝ如し。即ち大阪に奔れる荒木郁子の歸京となり、新に加盟せる女子大學出身の畵家長沼智惠子、同大學出身として夙に兎角の批評ある女優林千歲等の氣焰漸く高きを致したるに由らずんば非ず。

◎青鞜社の珍現象は、平塚、中野、尾竹の三者が新吉原に遊興せるを以て世間に暴露されたりと雖も、抑も此の珍現象の先驅は今春劈頭の新年會にあり。場所は大森森ケ崎の富士川、會衆は總數僅かに九名、一月二十一日午前に始まりて、翌日午前の二時に終れるだけありて、『全世界の女を皆幸福』視したるの盛會なりしと傳ふ。而して此の會合の中心は『不思議の魔力を有する』麥酒とお肴となりし也。幵は『長沼氏と荒木氏とらいてう氏と林氏は、いつまでも泡立つコップに未練を殘して、席を立たざりしに徵しても知り得べし。

◎潜める天才の發揮も、旭日昇天の勢を以て此處まで進み來りては、容易に止むべきに非ず。更に尾竹紅吉の大阪より來り投するありて、歡樂派の鼻息ます〳〵荒く、或は鴻の巣に不良少年の跡を追ひて五色の酒を啜り





或は居常强烈なる洋酒を味ふに至れり。殊に紅吉の銘酒屋覗きと、雷鳥の左手の戀とは、殆んど極端より極端まで進める惡巫山戯ならずんば非ず。

◎更に他の一方を見れば、最も熱心なる創立賛成者たる安持は戀の成立によつて流石の强き意志も挫け、木内は幹部を辭して英佛和女學校に佛語を專攻するの人となり、物集は親戚の苦情の爲めに脱會の止むなきに至ると聞くが如くんば、獨り是等の幹部員のみならず面白半分に入會せる者の如きは、嫁入口を氣遣ひて動搖するの傾向ありと。彼等『所謂新しき女』の歡樂の頂點に達する時、靑鞜社は四分五裂の悲運に際會するやも知る可からざる也。

## 四　新作家の性格と作品

◎今、靑鞜社同人の爲す所を見るに、巫山戯半分ならずやと思ふの節なきに非ず。明子の左手に美少年を戀しつゝ右手を以て事業をなすと云ふが如き、徹夜會の記事をさも誇りかに麗々しく紙上に發表するが如き、紅吉の銘酒屋の女を發見して悦に入るが如き、赤き灯の廓の氣分を味ふと云ふが如きは、如何に贔負眼を以てするも、篤實なりと許すべからず。彼等の雜誌經營には眞劍なるも　其の行爲たるや甚だ不眞面目也。






◎琅玕洞に美術を賞し、カフエープランタンにアブサントの杯を含み、鴻の巣にウヰスキーを痛飲し、而して歡樂の宵に談笑せるは、官能の刺戟を喜ぶ放縱なる若き作家也。靑鞜社同人の琅玕洞を覗き、鴻の巣に遊びて以て通がるは、即ち是等の若き作家の顰に習へる也。斯の如きは男子に對して反抗の態度を示すに非ずして、却て男子の後塵を拜して得々たる也。

◎其の作品に至りても、矢張獨創の王國の產物として誇るに足る物なく、女ならでは出來ざる素晴しき大作もなく、多くは放縱なる若き作家の模倣也。彼等の苦心する所は如何に深く人生を描寫せんかに非ずして、如何に際どく、刺戟的に肉の氣分を表現せんかにあり。所謂モーパッサン風の作物と、デカダンの空氣とによりて紙上を色彩す。

◎發賣禁止を以て現代作物の左劵とせば、荒木郁子の情人と幸福の時を作らんとせる『手紙』は『靑鞜』第一の作なるべし。次に尾島菊子の『夜の汽車』の如き、小笠原貞子の『或る夜』の如き、孰れも柔かなる氣分の作物也『男はあたゝかな表情のある瞳をして』とか『娘は此室で此若い男に逢ふ樣になつてから、今迄の間に今夜の樣な不思議な氣持を味つた事が無かつた』とか、『やさし味のある若い男の聲』とか云ふ紅い氣分は、『或る夜』の到る所に流露す。

◎詩作家には『十二階下』に人を曳く赤い女を歌へる小林歌津子あり、『悔恨胸にあふれて身浸るもあらぬ名負ふも戀なればよし』と賦せる三ヶ島葭子あり、『戀と云ふ掟の外に掟なきわが世はものゝ美しきかな』と高吟せる原田琴子あり、靑春の血潮に動搖する彼等の思想と、彼等の情緒とは是等の數篇に窺ふを得べし。

◎就中猛烈なるは、紅吉の日記『或夜と或朝』也、銘酒屋の女、抱擁接吻、歡樂の小唄等の字句處々に散見し『ウヰスキーを持つて訪ねて來た』とか『ビールを拔く』とか、『ウヰスキーとベルモットを混せて飲む』とか云ふ事を誇りかに明記せり。是を以て見れば、彼は歡樂と酒壺を双手に持ちて微笑するの女也。

◎荒木は女子美術學校の出身にして、戀には最も苦き

經驗を併めたる女也と聞く。下宿屋廢業の後、髮を斷ちて大阪に奔り、印刷工場の版下書きとなれる事あり。當時の事を紅吉は『赤い扉の家より』に書せり。曰く、

『K氏は停車場にゐました。紫色の土耳古帽をかぶつて、ズボラツとした黒い羅紗のマントを著て。そしてね、私が驚いたのは、あのお自慢の束ね髮を切つちやつて、例のアブサンのお連中の樣なチヂレツ毛になつて。若さを持つと云ふK氏、生にいきたいと云ふK氏はこんな思ひ切りの好い、あの人にとつては大膽な事をした』と。

◎彼女の閲歷の奇なる、雷鳥の怪に劣らざるも、尙大にあまき所あり、小說『手紙』の如きは彼女にして始めて成し得る作品にして、冷たき雷鳥の到り得る境地に非ず、又、杉本正生の『習作』の如き、岩野清子の『暗闘』の如き、到底男を知らぬお孃さんの作り得る小說に非ず。されば、其の作品により推するも、彼等の此處に至れる徑路の偶然に非ざるを知るに足らん。

◎小笠原は前代議の女、早く父に別れて母兄の許に成人す。長野高女卒業の後東京に出で、大塚に八雲館なる下宿屋を經營せしが、家道の傾くと共に之を廢業せり。彼女は曾て白馬會に學びたるを以て、現下某美術店に勤務し、自活の道を講じつゝありと。素より荒木の奇行なきも、其の境遇の變化彼女に似たるものあり。

◎尾竹は年少なるも、風采骨柄何となく男性的の所あり、長面の平塚の尊大の性格を現はせる、肥りたる中野の比較的冷靜なる、頭髮の天分に貧しき木內の觀察に銳敏なる、各その評論に、創作に髣髴し來る。此の三人者は、年齡二十六歲前後也。

◎年齡よりすれば、彼等は將に老孃生活の淋しみに入らんとするの時期に際す。身邊の色彩漸く減却して華やかなる空氣に呼吸せん事を欲する切也。茲に於てか、アブサント、ベルモツト、ウヰスキー、キユラソーを感情の杯に盛りて自ら慰め、溢れんとするビールの泡に人生の歡樂を味はんとするなりと。然れども之を以て男性を恐にせりと思ふは、甚しき心得違ひ也。

◎夏目漱石は曾て社中の女作家に向ひ、『一度は亭主を持つて見るが可い、亭主を持つて見なきや人生の味が解らぬ』と云へりと。是れ皮肉に非ずして眞理也。田村俊子の如きは、松魚に嫁してより技倆を上げ、文藝の自由に逍遙しつゝあり。彼の徒らに猖々として瘦狗の如く獨身を叫び、動もすれば性を呪はんとする女性に對して、吾人は一再の婚嫁を奬めんとす。

# 閑人の多い世の中

平塚明子

## △つまらないぢやありませんか

一體新らしい女なんて何處から出た言葉でせう。どういふ意味があるのかよく解りませんが妙な言葉ですね。はあの新聞の記事ですか、勿論あれは新聞が誇張したんです。つまらないぢやありませんかあんな事。併し一部の社會ではあれが問題になつたんですつてね。私はそれを聞いて世の中はずゐぶん忙しいとばかり思つてゐましたのに、まあ暇人も多いものだと案外に感じたので御座いますよ。紅吉なんかつていふ若い人はあれを見て心配してゐたやうでしたが、あんな事に貴重な頭を使ふのは損でせう。何故かつて云ふと今の新聞といふものが、どれだけ識者の眼から見て價値のあるものだか、どれだけ信用があるものだかと云ふ事も疑問ですし、またあんな記事を一々眞實に信じもしないだらうと思ひまして……でも最初新聞にかゝれた時は大分氣にもなりましたが、もう隨分度々新聞の御厄介になりましたから、今では又かと思ふ位なものです？

## △行つてみたかつたから

で自分ではまあこんな考でゐましたんですが他からいろ／＼と喧ましく申て參りますには困ります。現に或る處からも私に直接ではありませんが、あゝいふ事をした動機如何、目的如何といふ筆法で辯明を求めてきましたから何とかその中に返答をしなければならないのですが、動機や目的は後からつければ何とでもつけられるものです。けれども人間といふものがさう一一手を動かし足を働かす度毎に動機だの意義だのつて考へてしてゐると一日で神經衰弱になつて仕舞ますからね。私共だつて別にそんな六ケ敷いことを考へてしたわけでも何でもありません。世間ではいろ／＼の臆

断を下してゐるやうですが、元より特に高尚ぶつた考を以てした事でもなければ世間の人を驚ろかしてやらうなんてそんな野心があつたわけでもないのです。たゞ一寸どんな所だか行つて見たかつたからで、至く好奇心にかられ、興味につられて登つた迄ですよ。例へば珍らしい玩具を持つた子供が大人しく外から眺めて居ただけでは満足が出來ないでとうとうこわ　で中まで見るつて云つたやうなわけなんです。外に意味はありません。




△動物的には恐れ入つた

いろ〳〵と云つてよこされた中にも、自覺したとか徹底したとか云ひながら、解放してやらなければならない憐れな同性に對して、同情もなくそれを相手にして遊興するなどとは、何處が自覺したのか、徹

底したのかわからない。そんな動物的の行爲をすると云ふのは如何にも情けないことだと書いてありました。何處らまで想像して居られるのか知りませんけれど、動物的には少々恐れ入りましたね。少し解らなすぎて可笑しかないでせうか。眞面目といふことは實に尊ぶ可き事ですが、糞眞面目のわからず屋は厄介です折詰のやうな頭になつて仕舞つては困つたものです。それは私共だつてかう云ふ同性に對して何とも考へないわけではありません、同情もして居ります。實に可哀さうだ、どうかしてやりたいとも考へます。けれども救濟するとか何とかいふ心は又別です。それを一緒にして仕舞つてとやかう云ふのはあんまり解らな過ぎるやうに私には思はれます。とにかく世間の人々は何處までどんなに批評いたしますか、皆さんの仰しやる事を殘らず伺つてその後に何れ改めて私の意見も申し上げることに致しませう。

## 東京人の食べる靑物

東京二百餘萬の市民が日々に食する靑物は、出處に依つて甚だ異ふ。東京市内には神田の多町、京橋の大根河岸を始めとして、問屋は各處にあるが、問屋は板橋方面の産地を西山と云ひ、大森から六郷川邊を南と云ひて、西山は靑物、南は果物の産地だと大方定めて居る大根とし云へば名古屋を聯想するが、東京人の口には練馬大根でなければならぬやうにしてある。同じ練馬大根でも、澤庵にするのと生で喰ふのとは栽培からして違ふので、漬けるには首尾の細く中央の太きが良く、生用には大黑樣の繪像に付き物の如き大根要之一體に太いのを宜しとす。

以上は普通の大根であるが、所謂二年子の大根と云ふがある。即ち千住邊から少し宛來るので、値も高く到底素人や小料理屋では使ひ切れない。大凡オロシは東京人の殊に好む處で、天麩羅は元より、刺身にも付けなければ氣が濟まない。併しオロシにするのでも、水分が皿に流れ出る如きものでは眞實のオロシではなく、水分を一體に含んで居る處に眞の味があるのである、夫れには二年子が良いので、人は天麩羅が甘いと云ふのみでオロシに依つて味の良いのを知らぬ、と靑物屋は一方ならず世の食通を罵倒して居る。

漬菜には葉の多い普通の漬菜と、白莖の長い唐菜と二種あつて、葛西或は砂村に多く、三河島の漬菜と世間に名こそ謳はれて居るものの數は、極めて少ない。又葱は重に千住から葛西、砂村から運入つて來て、何れも根の深い俗に軍鷄葱である。茗荷は高田の馬場に限られたものであつたが、東京市の膨脹に伴うて茗荷畑は開墾されて立派な町が出來た。斯くの如く市の人口が増加すると共に畑が少なくなるので、靑物は勢ひ遠方から呼ばればならぬ、現に瓜類は靜岡縣下或は神奈川縣中郡から澤山に來る。大根の如き地の中に出來る物は地味との關係もあつて、何處でも甘く出來ると云ふことはないが、葉物は栽培さへ良好ならば、何處でも上等に出來るのである。

何處の百姓でも左樣であるが、進歩した栽培法以外に、其家々に傳はる秘法があるので、自然練馬の太郎兵衛の大根と、太郎兵衛の大根とは作り方が異り、從つて問屋で引取るにも顔を見て大根の値を定める、素人に靑物の鑑定は到底出來ぬものだと多町の問屋者は言うて居る。

# 遷り變る世の中

蜑乙女

大八洲、國の內外に普く輝き渡り給ひにし天津み光りは、おほけ無くも遂に神去り隱れさせ給ひぬ。

風は死して秋ならぬに闃寂の氣充ち、雲は低く垂れて惆悵の色、天が下を掩ふ。三伏の暑も、猶粟する許りに恐れ謹み奉りては、只々大空のみ打仰がれて事とも覺えやらず、暗淚徒らに頰を傳ひて、我人ともに心のたづきも知られざりける。

畏くも九重の雲居、御惱重らせ給ふと承りぬる其日より、民の心は一つに凝りて鍾まりて、一日も早く御藥の事止みて、再びや麗しき大御光り、仰ぎ得させ給へとこそ、天にも愁ひ、地にも歎かひ申しつれ、今は中々に列ねむ言の葉も知られず只管謹みに謹み、畏みに畏み奉りてぞ、かくなむ。

天津空、雲隱りますみ影逐ひて
　　十億の民只しめり渡る

御惠みにうるほふ民と生ひて今日
　　しほるゝ草のひと本ぞ我れ

春秋のお彼岸、同じ樣な品遣つたり貰つたり、異に何の益も無き事、さる虛禮は廢すに如じなど、のたまふ人も在すめる。

人さま〴〵の心ながら、さるにても思ひ起さるゝ幼き折のお飯事よ。萩の花、薄の穗など、折につけたる庭草、可愛きお重箱に盛り入れては、母に縫ひて頂きし友禪のお帛紗勿體らしう。是は作らへましたから差上げまするど、御口上のみは[illegible]にしなして、緣側より垣根の下の蔭のお家にもて行きし。其頃の樂しさは、今に猶なつかしく忘られず。はや大人びたれども、猶お彼岸などいひて、お配り物の御使見えたる程、何となく嬉しき心地のせらるゝは、幼心のかつ失せぬにや有らん。

お萩餅にもあれ、お壽司にもせよ、始めつ方に頂きたるは、物珍らしき心地にもてはやしつれ。既にお中日過ぎたる頃は始め程にも思はれざりけり。

ひとつ日に同じき品を貰ひ合せたる程、御志の嬉しけれども小人數の家とて頂き敢へず。其時に來合せたる御用聞なり誰なりを引き止めては食はするなど、かゝればこそ廢止を唱ふる人の在すならめ。

ひと日都より來ませし友と、道を散歩の行きずりに、昨日はどうも御馳走樣でと郵便配達の丁寧に辭儀して行きたる、後にて故を聞きたる友の、ほんとに田舍で無くてはねえとて、熟々と申されたるもをかし。

○

盆暮の御贈品、其他吉といはず凶と云はず、總じて人に物贈る時、我と等し並

みの向きへは相應じたる品、又それより以下には日用の物品、ちと過ぎめに遣るもよし、以上にして何不自由無く富みたる家へは、失禮ならぬ限りの輕品もて、只松の葉の志をぞ參らせける。

身分不相應の佳き品、強て構へ出でゝは權門に媚を賣りに行く人、風上にも置き難し。家貧しうしては親知少なく、賤しき身には故人疎してふ。

人影涸れ行く我家には、銅臭に集り來る蒼蠅の群の、心見透かさるゝ御進物に、あたら男一匹の神宿りまします頭ひよこ〳〵、惜しげも無う下げらるゝ其氣障さ加減、見せ付けられる憂も無く、然も猶管仲鮑叔の交りかへぬ眞の知己、五七人はもたりけるこそ、此上無き我家の富なりけれ。

○

明けても暮れても、いつもこつ〳〵として、塵に塗らせ汗に押浸りて、西に東に走せ歩きつゝ、只々稼ぐに眼の無き人。

美食するにも有らず、遊ぶをも知らず、さりとて着物は年百年中、淸げなる着けしを見し事もあらず、何が樂しくて、何が面白くて、此世にさは精力の限りを盡すやらむと怪しむに、只是蓄財が唯一無二の快樂なりしとは。

お道樂としたらば誠に太平無事のお道樂なり。但し餘り吝に過ぎては、人に迷惑を及ぼさゞるを保せず。

趣味よりいへば、眞に共に伍するも厭やな趣味なり。蓄まればたまる程、樂しき

中にも心の休まる日や無けむ。

さりとて宵越しの錢持たぬを自慢する江戸ッ子、それも又危いかな。男は兎もあれ、始めより弱きてふ名に生れ來し女、出來得べくは途方に暮れる危さより、遁れ得る丈けの途をば開かんには。

それ三尺の車を行るに三尺の道を以てする、往くには行きても、方向を轉ずる事能はず、是非共其處に幾分の餘裕無かる可からず。

生ける身に病あり、浮世の旅に故障多し。其の時其の場合、直に差支へぬ程の用意は、常に心掛けんこそ有らまほしけれ。

○

おもしろや馴れても須磨の夕まぐれ。

實に面白やなれ馴れて、見れども〱更に見厭かで、常に新らしき景色を見する山よ海よ雲よ。其雲より、海より、山より、足音も無くして初秋ぞ來る。

……其上此の須磨の浦に心有らん人は、態とも詫びてこそ住むべけれ……

須磨ならねども、𡋽松風にも浪の音にも、更に疎からぬ詫びたる宿り、十歩の庭の石に踞して六合に立初むる金秋の氣を吸呼すれば、此五尺の體に我が天地、餘り廣々と獨り領め了せたるや。

東の空、夢まだ殘る横雲にほの〲として、白露滿地の朝ぼらけぞ。

又西の空遠く、夕べを飾る玉鈎の淡として光り初むる頃、かつ殘る夕映の名殘に

心遥けく飛ばする時。
亂るゝ千草に只立ち盡しては、戀も無く、怨みも無く、人無く我無く。歌や、詩や、句や、眞に生きたる形と現れて、迸る清泉の如くも、心神是に浸され了る。
樂しきや我が世！
うとましや我が世？
野飼の駒のそれの如くに、誰鞭あてんものも無く悠々として放縦に走り居たるよ。
形のみ徒に大きうして、心こそ空なりけれ、要無くも更け行く身哉。

○

夏休みの間は、必ず日記ものせよとて、學校より課せられぬる友。月も既に半ばならんとする頃に至りてより、今始めて知りたらん程の驚き顔して、まあ今月はまだ始めから記て有りませんのよ、今日は夜へかゝつても不殘書いて了はなくちや。とて、頭押さへつゝ犇と机に縋り居給へる。そは日記ならぬ月記にこそ、始めの方猶幾分記憶に止まりて在すにやと、少からず驚かされにき。
さるを又一人の友、私はもう今月一ぱいのを、不殘記けて了ひましたのよ、御手廻しでせう。後半月樂が出來ますわ、と。
まだ踏みも見ぬ天の橋立、千里見通さぬ眼もて、如何にしてか先々の日記を迄書い付け給ひけんと、驚きをば通り過ぎて、直に感心したりし。
かゝる日記をしも勸め給ふ、學舍の師の君逹よ、さりとは知らず在しての事にか。

○

某日、半晴半曇、氣溫幾許、何時起床、午前中讀書して、それより遊ぶ。午後某氏來訪あり、誰某へ手紙をものし、夜は談話などして何時に就寢。日毎に記し給ふ君の日誌披き見たらんには、其の多くは斯の如き、同一の型に入りたるものは有らじか。

○

趣味なき日記よ、無意味なる文字よ。單に人の來訪、書信の要、記憶に止めんとのみの爲ならば、備忘錄の半行にして足る。追憶の價値無き日常の出來事に、何ぞ一々筆を勞するの要有らむ。

若し、時には取出だして、過去の我をかへり見るも、又興ありとやのたまふ。無用の事、湯の盤の銘ならねども、人は日に〳〵新ならざる可からず。昨日の幼き我を追憶する暇には、明日の我をば作れかし。時は瞬時の間斷無く移りもて、現在は直に過去と變じ行くなるを、古き心は時と共に葬り去るこそよろしけれ。あな、樂しや未來は常に我が前に開け來るよ。

○

市松が渦卷となり、麻の葉となり、又今夏は辨慶が流行初めたりと云ふ。田舍に住まへば、常に是等の流行より超然として、向ふ河岸の火事視す。超然など〻納まり給ひそ、無い袖は振られぬなるべし、なんど〻彌耳り給ふ可からず。振りたい人は借金しても無い袖を振り廻す世には侍らずや。

我とても女の、心より欲しからぬにも無し。人が買ひて遣らんと仰せれば、嬉し悦んで頂戴すれども、さて出來た處で此地に在ては着る要もなきこそ哀なりけれ。銘仙一枚で何度々々迄も手を振つて行かれる人には、虚榮の心も起らざりけり。

さる蠻骨を誇りとする我乍らも、居は心を移すてふ。都に出づれば、無暗に紅粉に親しくなり、帶の結びめが氣になり、三越白木に行けば見る物毎に欲しくなる。萬引する婦人が中流に多しと聞くは、成程斯樣な寄切れ場などにも、一品や二品盜つたりとも知れまじとは誰が心にも直ぐ起り來る處、かく人の心、そゝらする樣に飾り立てゝ置き乍ら、若し萬引する人有れば、警官は其客のみを拉し去り行く。

さる心起させんとて企める者と、催されて其心起す者と、何か多くの罪と定めむ。

いざやかゝる肩持ちて、盜つた仲間かとの疑受けむもよし無しや、筆擱かん哉。

近頃男子の貞操といふことを聞く。まことにうれしき言葉なり。女子にのみ不貞操をせめて、男子のは名譽の如く云ひなすは何故ぞ。女子に必要なる如く男子にも必要ならずや。

京都に於て、小さき少女の遊ぶ言葉をきくに、「あんたはんの旦那はんはだれどす」「あてのか、あてのはな!、お寺はんどす」「ようおすな! あての旦那はんは、おたなはんどす」まだ東西もわきまへぬ五六歳の少女にして此語あり。不品行を功名の如く語り合ふ京都に私生兒の多きもむべならずや。

# 歐洲貴婦人の美顔法

蛾眉

○歐洲諸國でも皇后陛下とか、内親王殿下とか云ふお名前を拜聽いたします時には、何となく其方がお美しくつて、此上なく美人にお生れ遊ばして在らせられると推想して、居りますが、上つ方は必ずしもお美しい方と定つた譯ではありません。

○けれど上つ方にお綺麗と云ふ語は付言葉でありますから、上つ方も其處はよく御承知でお在で遊ばしますから常に美顔法や美容術などを遊ばされまして、長年お若く、お美しく在らせられることを御希望なされます。今歐洲に名たゝる女皇や皇后に就いて少々申し上げませう。

○和蘭女皇ウイルヘルミナ陛下は雪をも欺くやうな眞白な肌で在はすと申しますが、それは平生宮殿外に御逍遥遊ばされて、屋外の新鮮なる空氣に觸れてお在の爲でありますが、陛下の三度のお食事はラセデモニア式で日本の所謂精進料理のみ聞召され、獸肉魚肉は勿論藥味香料葡萄酒をはじめ酒精のものは一切御膳に供へさせません爲だと申すことであります。

○では女皇陛下には毎日何う遊ばされますか、と云ふに、陛下は毎朝御入湯遊ばされます。而してお湯槽の中に香水一瓶注けさせ、其れに玉體を入れさせられます。それから玉顔はグリスリン薔薇油數滴混せましたものでお拭きになりますと聞きましたが、近頃の傳説によりますれば、女皇陛下の御化粧の間には佛國巴里のあらゆる化粧品がうづ高く積まれてあると云ふことであります。

○露國の皇后陛下には思ひきつて御化粧品を御購求に

なります。グラッスから奉る香料ばかりでも年に十萬法の高額に上つて居ります。春になつてグラッスに行つて見ますと若い娘や婦人達が大勢でスミレの花を摘んで居るのを見受けますが是れが即ち皇后陛下がお召上げになりますところのスミレ油の原料に成りますのです。猶陛下のおシャボンは直接佛國巴里からお取寄せになりまして、それは〳〵え も言はれない香氣のよい、他に又と類のない品であります。御間だの皇后陛下が常に玉歩を運ばせられるお縁側などには、終日水仙や龍仙香のやうな香氣ある草花の水蒸氣を絶やしませんさうです。

○

ルマニアの皇后陛下には數種の草で御手づから化粧水を御調製になりまして、それをお湯槽にお入れになつて、御入湯遊ばされますが、製造法は誰にもお明かしになりません。お近しい仲の方々にのみ皇后陛下の御手製の化粧水を御下賜になりますと承りました。而して女官だけに御口傳で化粧水製造の秘訣をお敎へ遊ばすことをお約し遊ばされて在らせられるさうです。



○

西班牙の皇太后陛下は鯨油で製造したシャボンをお召になります。而して皇后陛下には御入内遊ばされた時の花嫁風のお美しさは消失なりましたけれども、英國婦人に見る御肌目の細やかさは昔と少しも御變りがありません。皇后陛下が毎朝の御習慣は自働車

にお召になり屋外を御運動遊されて玉體を大氣にお觸になりますことでございます。國王陛下は有名な御運動好きで在らせられますことは人の能く知るところであります。皇后陛下は國王陛下ほどでは在らせられませんが、御乘馬のお姿で朝六時半頃郊外に御逍遙遊ばされますのを度々お見受申上げます。御好みの香料は香水でありまして、皇太后陛下のやうにクリームはお嫌ひでお出遊ばされます。

○

獨逸皇帝陛下は皇后陛下の御頸筋、御胸、御腕のお美しきは世界第一で在はすとお賞めになつて在らせられます。皇后陛下にも大層それを御自慢で在らせられます。而して御肌の艶々してお美しいのは全く平常お召遊ばされるムスクシャボンの効でありまして、此のシャボンは實に表皮の强壯劑であると仰せられました。御歯磨には薄荷酒をお召になります。御好みの香料は細かに切つた乾草の香ひであります。御間には一日に幾度となく香水の水蒸氣を立てさせられて、白粉も多量にお召遊ばされます。而して皇帝陛下の御註がなければ御髪は始終洗髪になされるのをお好みで御座います。

○

英國の皇太后陛下は御年七十であらせられますが、御顏ばせのお美しさは聊も衰へさせられません。御眼鼻立の若々しさ、實に容貌を大切に遊ばす嗜み深い婦人の生きたタイプでお出遊ばされます。お召になります香料は僅に香水とバイオレット水のみでございます。御化粧時間は一日に二三時間に渡らせられますが、御髪の飾や御服裝など御美貌に似つかはしい御品のみ御撰になりまして、見事に御化粧遊ばされます國母と云ふ尊い位に在はしまされますから、何んな御化粧でも御意の儘に遊ばされることが出來ます。又流行の品は何んでもお召になりますから、お美しく在らせられますことは當然のこと〻誰でも思ひますが、なかなか左様ではありません。流行の品をお用ゐ遊されても過ぎますと御品が下がつたなど〻言はれることがあり




# レーベン

## レーベンの特色と効能

レーベンは常持醫學士の發見に係るものにして米食人たる東洋人種に適合すべく和漢洋法を折衷して得たる植物性の藥物にして「リンサン」の多量に加味せる絶好の良劑なる事は醫學博士岡田、森戸山脳病院長等の證明せる明白なる事實なり。

**醫治効用** は回性、興奮、鎮痙の三作用を兼備せる最新式の錠劑なれば脳、神經衰弱、頭痛、眩暈、逆上、便秘、不眠ヒステリー等を治癒し心神爽快元氣旺盛ならしめ殊に人生の快樂を奪はれて長へに悲歎憂愁の涙に暮るゝの人は皆何れも脳神經衰弱其婦人にありてはヒステリー患者なればなり故に以上記載の其一を患ふる人は最後の試藥としてレーベン百錠乃至二百錠を試みよ其効神速に顯はれて平靜和樂の健康體となり、得も云はれぬ愉快に其日を送る事を得べし、夫の大黄の下劑を主とせる粗藥にあらず、論より證據今直に試みよ ●本病患者には脳神經衰弱自然療法と精神療法とを發行所へ「ハガキ」にて申込次第進上す

| 定價 | | |
|---|---|---|
| 三十錠 三十錢 | 五十五錠 五十錢 | 百錠 八十五錢 |
| 二百錠 一圓六十錢 | 四百錠 三圓 | 八百錠 五圓五十錢 |

各藥店にあり無ば發行所へ全國送貨無料
信用なき藥店にて他藥を賣付んとす注意

發行所 弘濟藥院 中南定太郎

東京銀座弓町 電話京橋三〇八番 振替東京七七七七番
大阪市安土町 電話東三二四六番 振替大阪三四四番

女(るの一)

○注文山の如く賣行飛ぶが如し!!!(本品は百年後でも發賣す)

大好評

# 機械不要 輕便 早取寫眞インキ

▲▲特製大瓶一個送料共(金拾貳錢上製金十錢(説明書付

今や日進月歩の世界にして文明利器の發明せらるゝ枚擧に遑あらず、而して本法は**シャノ寫眞界大發明**にして其方法頗る簡易なタイプと稱し實に何人と雖も熟練を要せず此インキを塗りて作りたる原紙と一枚の普通硝子とを以て速に少しも機械※品を要せず人物風景意の如く凡て其通り美麗鮮明に速寫するを得て愉快限りなし●本品を用ひて自分の背像入繪葉書肖像入名刺を製し又は景色を寫し萬一寫らざる時は**返金**す安心注文せよ

速寫 用とせば頗る妙なり

**額面説明**書は人物風景速寫法より幻燈寫眞、硝子寫眞の寫法まで丁寧明細なれば誰にもよくわかる●速かに試みよ(送金は切手代用でも振替でも宜し)

●發賣元 岐阜縣高須町一ノ二 振替東京八七二五番 **盛報館**

---

# あざ

小石川區大塚辻町(電車大塚辻町停留場側)

ほくろ そばかす いれずみ 治療

内外科、婦人科 花柳病科一般

**後藤醫院**

---

◉進呈 甚面白く實益多きあれ

**繪葉書交換會** 規則進呈送料二錢封入

東京小石川久堅町十四 ホリエイ・シークラブ

---

# わきがの人に告ぐ

弊店主毎年夏期は腋臭に罹り種々な薬を持用するも更に効驗なし故に苦心し更に薬化學應用して新薬を發見し不臭薬と命名す他薬にて根治せざる人は一度不臭薬を試られよ 送料共一剤金壹圓六十錢・別製貳剤・參圓五拾錢

東京麻布笄町五九四 口座東京七八五〇番

**宮崎薬店**

---

天下一品にきび取薬



艶美液(えんびえき)

此の薬液は氣休めの化粧水と違ひ不思議に効力を現し幾瓶も用ひずして有効卓絶大概のニキビ吹出物そばかすも跡形殘さず實にキレーになり艶美白色ならしむ

**禮狀**來る==取次各地藥店になき時は本舖へ又は藥店へ取寄せ願め △小瓶廿△中瓶卅五錢△特一個送料六錢郵券一割增

●御求めの節は必ず「艶美液」と御指名あれ

本舖 東京日本橋新和泉町六番 **長江校商店** 振替九八二二番

---

# やせる薬

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの人に害なく●やせて●中肉美容となる新薬たり試みたき方は郵券二錢送れ詳細報知す

東京市牛込區赤城元町三三

**池田製薬所**

女(るの三)

◎宮内省御買上の光榮ある

男女方に極くよき髪油

# みやけ油




東京人形町通り

本舖 三宅堂

長電話浪花六二〇番
振替東京八七五一番

◎定價 壹合入四十五錢 貳合入八十五錢 送料拾二錢

# 各種繪葉書調製

一私製葉書 葉書文字印刷。寫眞版、コロタイプ版

石版、木版、三色版。浮出、ブロマイド。押繪其

一他精巧細工。

▲弊堂調達部は繪葉書に關するものは總て葉書文字の印刷より彩色印行までの多少に關らず尤も迅速に確實調製可仕候。弊堂調達部は最新式の機械と熟練なる技師を有し居候へば印刷の優美卓絶なるは云に及ばず最も廉價に調製仕り何時如何なる大注文に接するも毫も支障無之誠實に御註文に應ずべく候へば何卒御用命の程希上候

東京市小石川區久堅町百八

精美堂調達部

# 巴里繪日記

## 橋本邦助君著並畫

巴里―此二字の響きは、如何に若き人々の血を躍らすべきぞ、しかも其巴里を譯述せる書はあれど、未だ巴里を語れる畫集あらず

著者が巴里滯在中に、各方面より得たるスケッチは集めて此書中にあり寄席、カッヘー、踊の場、公園、畫室、セーヌ河畔、巴里風俗等華やかなる巴里の風物を見よ、

著者が得意の繪畫以外、巴里日記は亦敏感なる著者が其日其日に觸目せる興味ある事象を記す。文章と繪畫と相待つて巴里を傳ふるに於いては些の遺憾なし

東京本町 博文館

菊判南京上製
瀟洒美本本文
百八十餘頁

口繪
△三色版…四枚△凸版色刷…二枚
△寫眞版…八枚△イ版色刷十三枚
△凸版…三十六枚

正價金壹圓 郵税八錢

女(ろの五)

文部大臣　長谷場純孝君題
賞勳局總裁　正親町實正君辭
賞勳局書記官　藤井善言君
武田仁恕君編

# 明治國民善行表彰錄

口繪　褒状雛形　勳章雛形　石版彩色刷

發兌元　東京本町　博文館

全一冊

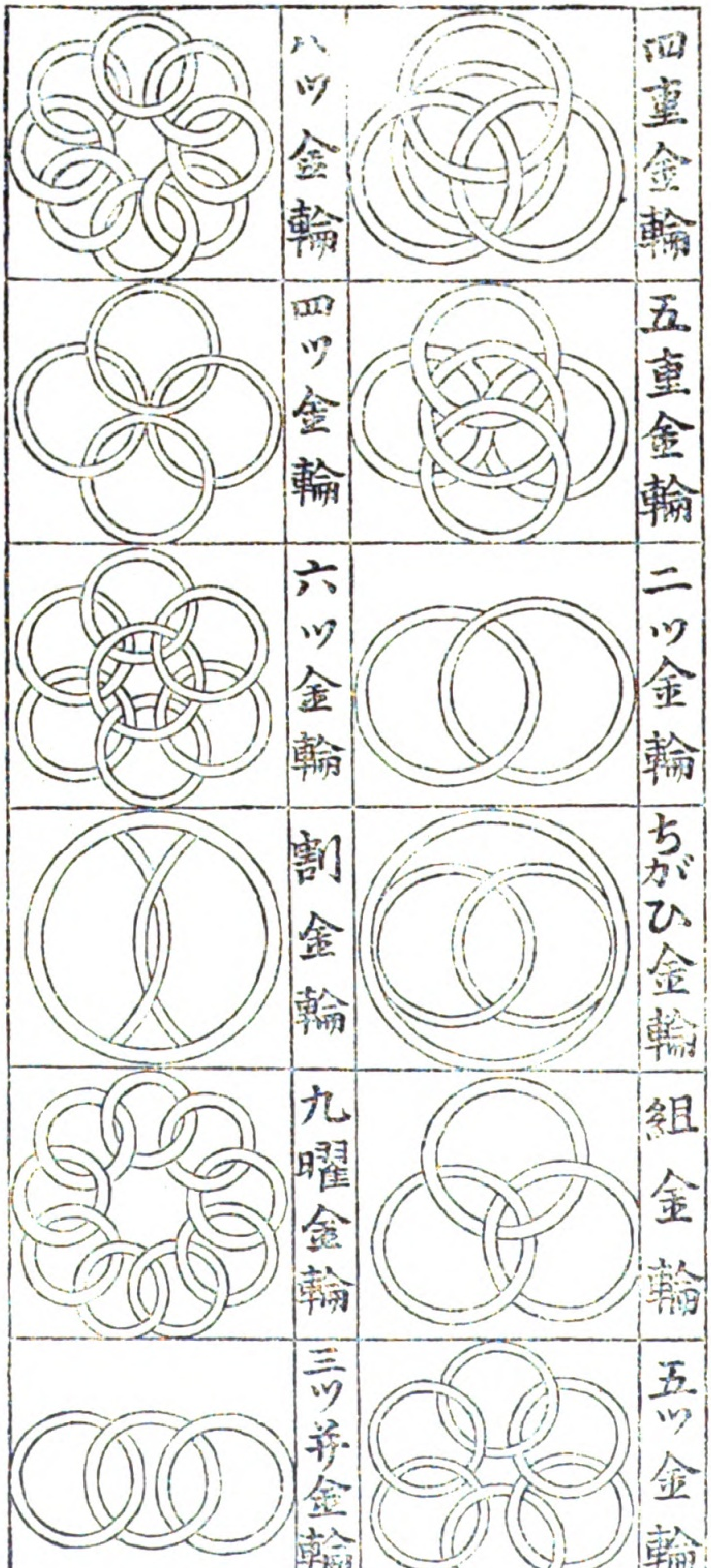
洋裝菊判　並製
紙數三百卅餘頁

▽近刊△

本書ハ褒章條例實施以來明治四十四年末ニ至ル三十ヶ年間内閣賞勳局ヨリ藍綬褒章ヲ賜與セラレタル全部約七百名ノ事蹟ノ要綱ヲ列敍シ各自日常ノ國家的行爲ノ指針トナシ併セテ現社會ノ大勢ニ鑑ミタル施政上ノ參考ニ資セシメンコトヲ期シタルモノ也世人或ハ現時此活キタル龜鑑ノ存スルアルヲ知ラズシテ殊更ニ其模範實例ヲ遠キ古ノ史乘ニ求メ時代後レノ事蹟ヲ採リ强テ今日ノ儀範典型ニアテハメントス難イ哉畏クモ詔勅ノ　聖旨ヲ奉體シテ此改進窮リナキ國家社會ノ發展ヲ企畫スルコト冀クハ本書ニ依リテ現代模範國民ノ事歴ヲ知リ徳化ヲ奬メ風敎ヲ正シ公益ヲ擴メ國力ヲ充タシ進ンデハ一等國聲威ノ發揚ヲ企テ退テハ君子國忠良ノ臣民タランコトヲ期セラルベシ

女(ろの七)

金輪の意匠




ますので、御氣の勢を遊ばされます。

○我々が想像するやうに皇后陛下は御自身の事でも御意の通り遊ばされることが出來ない場合が幾らもございます。近き例では、和蘭女皇ウイルヘルミナ陛下は少年同じ御髮にお上げになります御習慣でありました。或時御髮の上げ方をお代へになつたことがありました。左様致しますと夫人達が陛下の御髮が御平素と代はりましたのを拜しまして、『女皇陛下は我々婦人に御同情遊ばされて今迄お好きの御髮をお止めになつてたゞの夫人風の御髮にお上げになりました』と感涙に咽んで語り合ひました。

# 月經時に於ける婦人の犯罪

醫學士　寺田精一

日本では月經時と犯罪に關する研究が、歐洲諸國のやうにあまり發表されて居りませんが、社會の一現象として、又緩にすることの出來ない問題です。

月經と犯罪とは、其間に何等の關係もないやうに思はれますけれども、此月經といふ生理上の變化が女子の感情にも多少の變化を與へることが、何も不思議な事實ではないのです。感情の上に多少の變動が來る時には、只でさへ感情に支配され勝ちの女子は、此時機に於て往々犯罪をなすことのあるのも又有り得べき事實であるので、月經と犯罪との關係は、別段突飛な事ではないのであります。

月經時には、如何なる婦人も、多少は精神上に變化が來るものです。中には全く何等の變化もないといふ方々もあるか知らないが、さういふ方々にも極めて、低い度合の變化は必ずあるものであります。

婦人の月經時には、多くは精神が鋭敏になります、種々なる感覺が鋭敏になります。又氣がそわそわとして落着きません。伊太利のロンブロゾー氏や、フェツレー氏などは、月經時の婦人は、一寸としたことに、腹を立てたり、又何氣なしに、虛言をいふやうになる、と云ふて居ります。又女子の身體の異狀によつて、月經の閉止することがある。その時にも又精神狀態に變化を來すことは、通常認められて居る所であります。

月經の爲め精神狀態に異狀を呈して來ますと中には通常ならば、爲すまじきことでも、おし切つてするやうになる、それが爲めに法律の禁を犯して、罪せらるやうなこともあります。それで此月經中にはあの人がこんな事をしたとは、思へないやうな隨分飛離れた思ひ切つた事をする婦人があるのであります。

獨逸のグロース氏の書いたものゝ中に擧げてある實例によれば、或る片田舍に、その邊では非常に令名あり且つ慈悲深い夫人があつたが、はからずも他人の名譽を毀損して訴へられた時にその夫は、其妻の平生を次のやうに語つて居る、私の妻は常には非常な

好人物でありますが、どういふものか月經の時分になると、不思議なことには、丸で惡魔にでも取つかれたやうな、恐ろしい女になつて、誰彼れの差別なく人に喧嘩を吹きかけるので困りますが、程なく我に返つたやうに、後悔をするのですと云つて居ります。

又佛蘭西のヘンリ・レガールといふ學者は、世の中に令夫人とあがめらるゝ如き人は、月經中及び月經閉止の初期に、竊盜罪を犯した例は、思ひの外に多いと云ふて居ります。

以上揭げましたのは、只二三の例に過ぎないけれども、此月經時といふ精神狀態の變化を來す時に色々の犯罪が行はれる事は、歐米の精神病學者が唱導して居るから我國でもよく調査をしましたならば、こんな例は隨分あることだらうと思はれます。私は嘗つて、月經時に竊盜罪を犯す習慣のある、或上流夫人に就いての話を聞いたことがあります、その夫人は月經時になると外出好きになつて、處々の吳服店を素見して歩く、さうして何か自分が氣に入つたやうに思はれる品が有つた時は、うまく萬引きをやつて素知らぬ顏で歸宅する、けれども その萬引も本心から出た事でないから、家へ歸つてから氣が靜まるにつれて、その萬引きをして來た品物を見て、今更の如くに其非を知り、大層すまないことしたと後悔して、直ちに小包郵便で、その吳服店へ送りかへしたことが、再三に止まらないといふ話であります。

其夫人が、月經時に吳服屋廻りをするのも初めから萬引きをしやうと思つて出掛けるのではないが、何か氣に入つたものを見ると、無暗に欲しくなつて、人目を盜んでまでもそれを持つて歸るのであります。面白いのは大吳服の賣出しなどに立派な貴夫人で萬引をするのが少なからずあるが、それは大抵、その婦人の月經時にのみ此事實の存することであります。此やうな特殊な婦人は別として月經時に氣がそわそわしたり、又は之と反對に氣のふさぐ婦人などは多くあるものです。

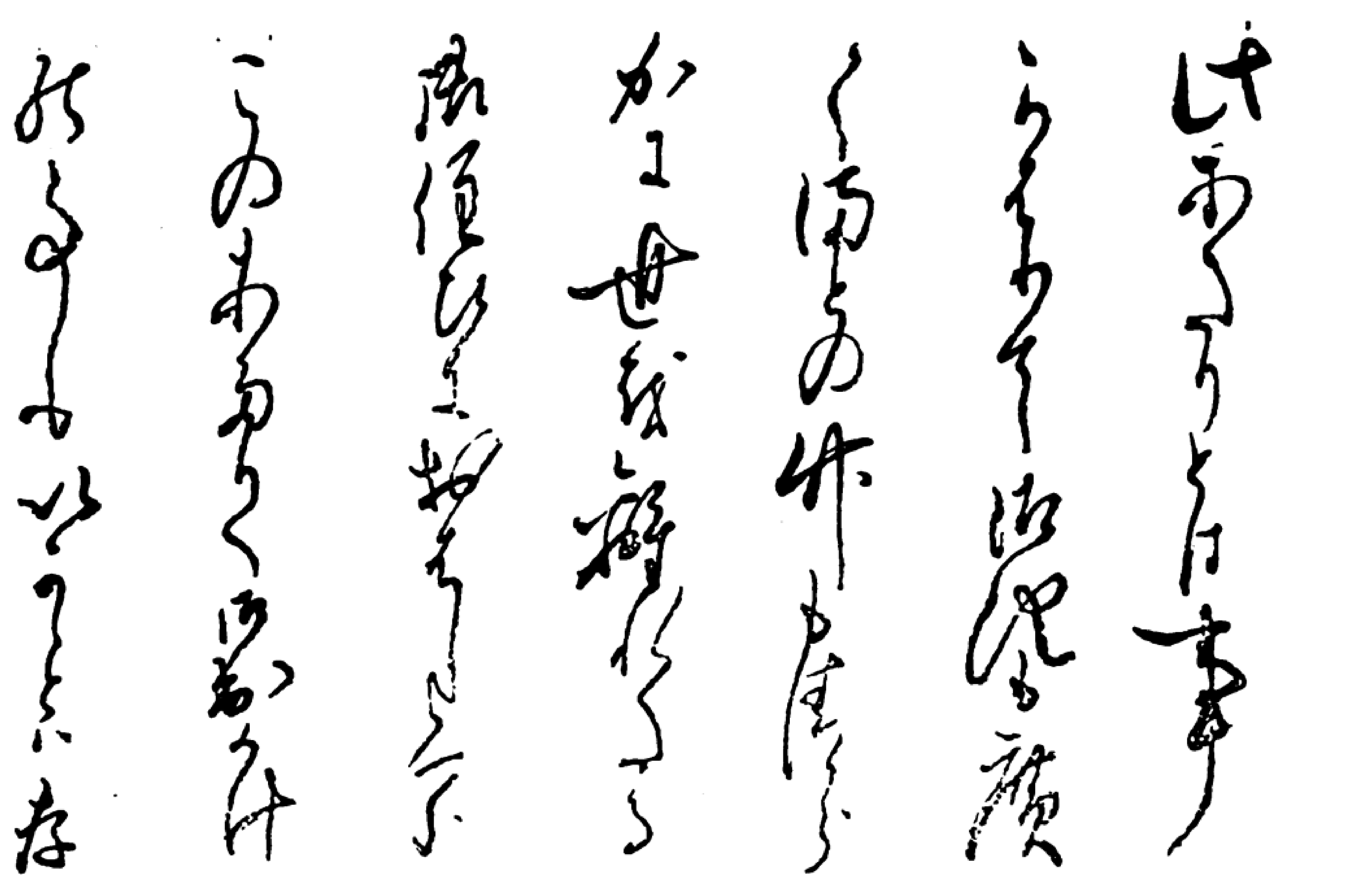
又竊盜、其他の罪を犯す貴夫人が多くありましても被害者の方は先方の身分を氣の毒に思ひ、殊に秘密にするので偶然 警察官の耳目に觸れた人の外は世の中へは知れないのでありますから、今迄あつた事實は全く百分の一程も世間には知れて居ないのであります。たとへ又警察官の厄介になつた所で、その犯罪がその婦人の月經時に於て、行はれたか否かといふことは研究されずに、只竊盜罪として葬られてしまつたのが多からうと思はれます。其他一般の婦人の犯罪者に對しても月經時であるか平時であるかに注意することは、頗る必要のことであらうと思ひます。

# 手紙はどうして上手に成るか

鎌倉笹目谷　星野天知

明治の代も三十年四十年頃に成つては世間一般の手紙が非常に下手に成つた。今日も亦益々下手に成つて居る、今日の中等家庭即ち「家庭」といふ敎育のある家の內で、一番手紙の下手な人は誰、一番上手な人は誰と調べて御覽なさい、一番學校で長く敎育を受けたといふ子息や令孃が一番下手で、却て今の敎育がないと言はれる祖父祖母の方が一番手紙が上手だといふ不思議な現象が往々あるであらう、素より下賤な人が突然出世したといふ異數の家庭は別として見ねば成らぬ、成程一字づゝ書き競べをしたらば左樣はゆくまいが、これは手紙に付て言つたのである。

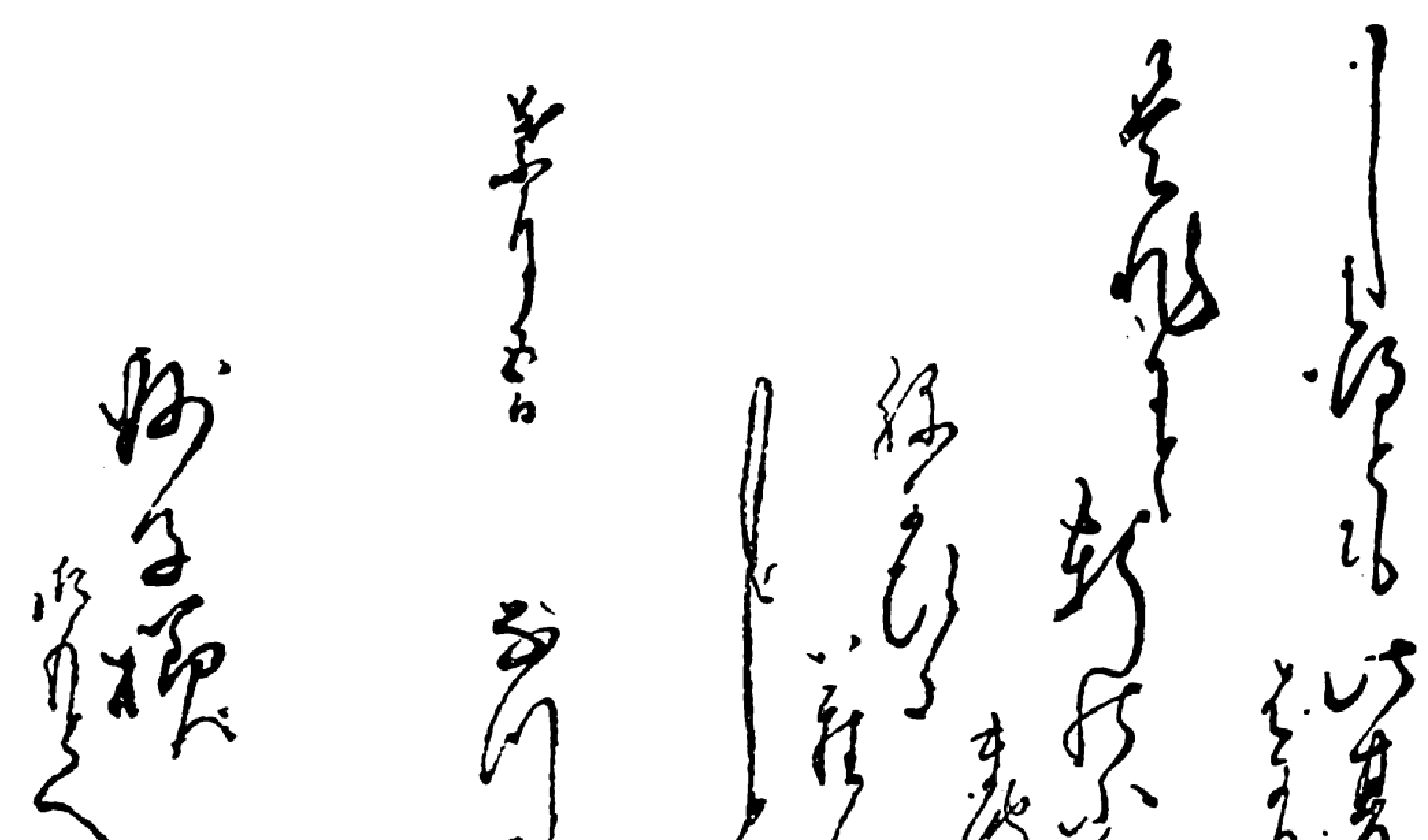
抑々此不都合な現象は何に據るかといふに、此頃は段々と書を習ふことの趣味が世間に覺えられては來たが、それはやうやく書を習ふといふ事に氣が付き初めた丈けで、未だ手紙を習ふといふ事が行はれない、素人は無論字さへ書ければ手紙も上手に成ると思ふは至當な事であるが、敎へる先生なる者が一向に此素養がなく研究がないから、まだ〳〵手紙は容



易に上手には成れまい。深く高尙に一字々々の研究はしても手紙などには方角が違つて居る、少々字が手下でも手紙に成るやうに習はねば成らない。

かういふ先生の敎へを受けるのは今日の若い人に多く、昔は「手紙の文字」として研究された字を敎へたから今の年寄りの人々には手紙の上手なのが多くあるのである、今日六七十歲の年寄りの若い時代には一人前の手紙が書けねば中流以上の交際は出來ないといふ觀念が良い家庭には必ず在つたものであるから、其人達が今日の女學校から出た若い奧さんの手紙を見ると興が醒めるのも尤もである、敎育が無いと言はれるのを殘念に思つて居る姑などが此一事でも嫁女に飽き足らぬ所が出て學問なるものを輕蔑し始めるのも、亦其理が無いでもない。

女子の言葉と態度と衣服髮飾りに美しく柔かな敬ふべき快感の表出を必要として敎育する譯は何であるか、「女」といふ光輝ある柔かなる力を他人の上に發揮させて人世の纒りを調和させる意義ではないか、此美的の敎育が必要なる以上は、それより更に大なる使命を持てる手紙が何故熱心に研究されぬのであらう、何となれば手紙は自分の意志を他へ傳へる名代人で其の文句の柔かな禮儀ある言葉と共に、之を現はす文字の快感が如何に重もなる感じを其人に與へるか。



試に問はん、綺麗に整ふて流るゝやうな文字の手紙を手にした時如何なる感じを覺えるか、見悪い亂雜な悪筆の手紙を手にした時如何なる感じを覺えるであらうか、未だ其人を見ずして早くも其人格の尊敬と輕蔑は朦朧と其外郭を眼前に描かしめるではないか、斯く大切な役目を持つ交際道具を何故熱心に研究せぬか、これ婦人に對する一の疑問では無いか。

されば如何にすれば上手に成り得らるゝかといふにこれは唯假名を習ひ草書を習ふ許りではいけない、少なくとも左の四課目を習はねば成らない。

第一に　假名を習ふ事

第二に　手紙文字を習ふ事

第三に　墨繼ぎ法に熟する事

第四に　手紙の式と作法とを知る事

此の四個條に付いて習ふ時は意外に早く綺麗な手紙が書けるやうに成るは受合である、自分で受合ふなどと言ふのは無遠慮のやうではあるが、之は自分の確信でもあり、又卒業した方々の成績が之を證するからの事である、此法を知らうとして古人の遺した手紙の法を種々研究した曉に三五六回敎へて卒業させる法を案出したのは密かに自分の誇りとする所である、弘く廣告こそしないが習ふた人は必ず其知人や友人や親戚の人を連れて來ない事はない、招かずして來り習ふ人の多いのは其實功に信用がある故と自ら快心の至りである、今此四ヶ條に付て其大略を左に述て見やうならば、

第一に　假名を習ふ事

これは前號に述べたゆゑ分る事と思ふから省く事にして

第二に　手紙文字を習ふ事

これは世間で普通敎へて居る草書の字を言ふのではなく、昔から吾邦で手紙に相當するやう出來た草書のことである、世間では獨草と言つて額などに一字づゝ書く草書も手紙へ書く草書も同じにして居る故、書家などゝいふ先生で字が上手で居ながら手紙が下手なのが多いのも其區別を知らぬ故である、手紙用の草書といふのは、第一に讀み易く普通に崩した草書でなくて

は成らぬ、これは昔から出來て居るので今日出版される草書の字引にあるやうなものはない。第二には假名と調和した草書でなければいけない、第三には左右や上や横へ餘り撥ねない草書で續け良い形である事、第四には手紙だけに都合よく出來た字があるから其を習ふ事である。

第三に　墨繼ぎ法に熟する事

これは日本書のやうに筆に墨を付ける方法から何行日毎に墨を付けるとか、太く書く所や細




く書く所を習ふて文面の調和を整へるのである、昔しは公家の家々に據つて此墨繼ぎ法を工夫したものが在て各々秘傳とした程のものである、故に昔の書き物は綺麗で且雅趣がある、今日のやうな初めから終りまで眞黒でペンキで書いたのか版で押したやうな無風雅なものではない。

第四に　手紙の式と作法を知る事

これは手紙の書き方ともいふべき型がある、それに當箝めて書けば何分位ゐの字の幅には行

と行との間は何分明けてよいか、前明き、後明き、天地の明き、略式の明きなどゝ一定した事を覺えれば、人ならば座敷への坐り方の位置や道具の置き場所などを知る譯ゆゑ自然と調和が取れる事は手易いことであらう。それに又尊敬すべき文字や其文字の置き所などを覺えれば行儀作法を心得た人と成ると同じゆゑ手紙が教育されたものと成る道理であらう。

以上四ヶ條を大略話せば斯ういふものである、さして六かしいものではない、習へば直に出來るものであるから、自ら惡筆が恥かしいなどゝ思つて何時までも習ふ事に奮發しなければ生涯の恥と成るのである、それで習ふ時は自分の恥が知れるやうな氣もするので大に躊躇する人が多いが、之は大きな間違ひで其惡筆や書けない事などは、いくら隱しても人々は疾に知り拔いて居る事ゆゑ一層一と思ひに早く習ふのが賢い事である。

## 盜賊の入り易き家

泥棒が一仕事を行らうとする時には、大抵目指す家を附け狙ふた上愈々忍び入ることに決定するのであるが、或泥棒は斯う言うて居る、玄關の取亂してある家の、入口に下駄を脱き散らしてある家等は、必ず何處にか隙のある家で、必ず忍び入る所がある又夜遲く火を點けた儘寢る家は、如何に戸締を完全にして居ても、些少の隙からも歴々と内部が覗き得るの便利があるけれど、燈火を消す家は屋内を知るに由なき爲め、忍び込むを甚だ不便である、次に宵張りの家は丁度賊の侵入する午前一時から二三時頃が熟睡して居るので忍入り易い、元來人が寢入つてから一眠稍は、少々の音を立てゝも覺めるものでない、又新築した時、新居を作つた時に、賊に往々見舞はれるのは、未だ落附かず隙の多い爲である。現に或所へ一人の賊が忍び込んで愈々屋内で活動を始めかけると、又た他の一方でゴト〱人の氣配がしたから、此の賊は非常に驚いて逃げ出さうとして、熟々樣子を窺ふと、其ゴト〱も他の泥棒と判つて、互に顏見合せたと云ふ珍談もある、或人が夜遲く道を辿つて居ると一人の男が來て、色々話しかけた、暫く步いて居る中に、此の男は腹が空いたから酒を飮まうと言ひ出したけれど、夜は靜かに更け渡つて立寄るべき家がない、處が件の男は「此家は駄目だ、是も駄目だ」と一々一戸々々を覗つた後「此所だ〱」と叫びつゝ、トン〱表戸を叩いたら、案の如く其家の人は起き出でたのであつた、餘り不思議であつたから能く樣子を訊ると、其男は有名な盜賊であつたが、彼れは家の外から樣子を覗ふと、衰微した家には何となく拔けた所があつて忍び込み易いが、隆々と榮え行く家は、陽氣溢れて少しの隙もないから、到底這入れないと言うて居たとの事である。

# 料理食品文盲手引（九）

小泉迂外

## △観月の献立

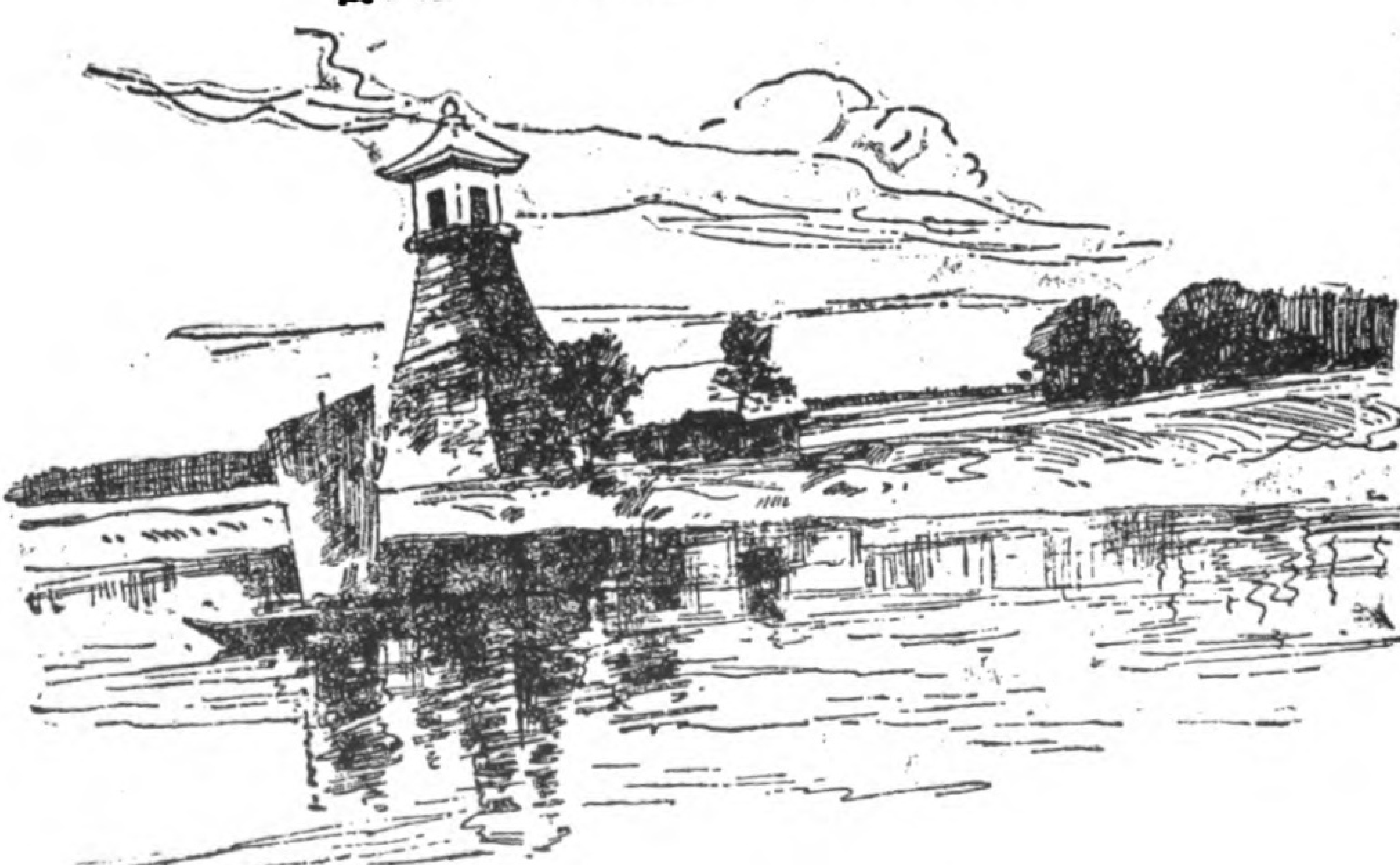
陰暦の八月十五夜には、何ちらの家庭でも月見の宴が開かれます御家族のみで打寛ぐのならば別段手數もかゝりますまいが、主人が趣味性の方で、歌とか詩とか或は俳諧などの雅筵を催して親しい方々を招くといふ場合になると、それ〴〵饗膳の準備も要ります。料理屋から取寄せれば雑作もありませんが、斯ういふ雅筵などには十人向の黒人料理の無趣味なのよりも、却て主婦の手を勞された食品の方が面白く、客も亦却て其れを望みます。

當夜の料理は觀月といふ趣味よりおしてもあまり贅澤な品は用ゐず、質素な献立にして器物に少し注意を加へ、皿などもなるべく白無地の圓形の磁器など、擇んだら妙だと思はれます。

御參考までに、當夜の献立をつくつて見ますと、

△汁　小團子、摘み菜、

△向付　ずいき胡麻酢和か或は柿膾、



（境住吉景）

△椀盛　蛤、
△喰燒　さび鮎付燒、前盛に枝豆を添ふ、
△小皿　きぬかつぎ、

などの處で、之れに鯖の押鮓でもつけて侑めれば手輕にすみませう。

椀盛の蛤は古句に、

京になき淺黄の椀や夜蛤　超波

と申すのを應用いたしたのです。之れは現今廢れましたが、舊時江戶の風俗に、十五夜には必ず蛤の吸物を食いたもので、文化時代に國學者として有名な村田了阿の「市隱月令」にも、

八月十四日、芒賣來る、枝豆賣も哀れ也
蛤賣も三月の如く陽氣にはあらず。

と書いてございます。

### △十五夜の供物

誰やら句にある、秋海月の供物や門の秋などゝいふ情景は、漸々物質的な都會から追ひはらはれて、現時では古例を尙ぶ片田舍の農家か、さなくば一部の好事家の家庭にその影をとゞめるばかりではございます。

正式に致すと此供物の飾付も中々嚴格しいので、故實によりますと、緣側の中央に庭に向つて壇を設け、其壇は淸らかな白布で張りつめるさうです。それで上段の處には、右方に對の瓶子、左方に團子を十五個、杉形に御三寶に盛つて置きます。下段には大花瓶に薄を總々と插し、その根元に雁來紅等の秋草を彩り交せ其傍の大三寶には、柿、栗、きぬかつぎや、枝豆一莢形に組む）を盛り、其前に葡萄を積み重ねるといふ配置です。

しかし一般に行はれて居つたのは、團子も栗も柿も枝豆も里芋も一つ三寶に盛り込まれるので、團子は周り三寸五分位の大團子と定まつて居ります。

舊時は前日に粉を挽いて置き、十五日にはほの暗い明方から家內打揃つて此團子を作るのを吉祥といたしたので、人數の多い家庭では、別に小團子を澤山つくり、十五個宛、栗、柿くらゐを添へて銘々に頒けて祝

つたといふことです。

### △御　難　餅

毎年九月十二日は、日蓮宗の僧俗は胡麻の牡丹餅をつくつて、開祖日蓮上人の像前に供へ、其殘りを親族縁者に頒けて食かせるといふ風があります。

之れは昔文永八年九月のその日に、上人が北條氏の爲めに捕はれ、鎌倉龍の口の刑場に曳れんとする路である老婆から情けの餅をうけられたところ、いかなるはずみか餅は上人の掌から落ちて、轉々と沙にまみれました。

のち上人は偶然にも白刄を免がれて刑場の露とならずにすみました、俗說は此の餅が上人の命に代つたと說き生みました。

胡麻は沙を形容つたとも言はれます。

あかぬ世に御難の餅も搗きにけり　　長翠

### △菊　花　膾

畏くも高貴の御紋章に描かれます、菊の花は我國固有の花ではなく、支那から渡來致したので、其證據には奈良朝以前の和歌に菊を詠んだのが一首もありません。

菊を詠まれたのは桓武天皇が平安城へ遷都の後、延暦十六年の秋宮中御宴の折、

この頃のしぐれの雨に菊の花、ちりぞしぬべきあたらそのかほ、

と、御製あらせられたのが最古の菊の歌だと申すことです。其後宇多天皇の寛平年中に、菊合せが催され菊の秀歌も見え初めましたが、何れも支那思想の影響をうけたのが多く素性法師の

ぬれて干す山路の菊の露の間に、いつか千歳を吾れは經にけん

などは其一例でございます。

此千歳を延ぶるといふ事は支那人が得意の誇張的言葉で、其原因は、昔恒景といふ學者が病に犯されたとき、其師の長房といふ翁の敎へに從ひ九月九日を卜し

て、茱萸を入れ　絳の袋を臂にかけて、或る高山に登り菊を絞つて入れた酒を飲んだ處忽ち災厄が去つたといふ傳説があるからです。彼國では年々九月九日に必ず高い山に登つて菊の酒を飲むといふ風であつたのを其儘我國に遷したので、後ちには重陽を菊の節句と申して菊の酒と菊花膾を食く事が殆んど儀式のやうになりました。

菊花膾は素と重陽の宴に限つた料理でしたが、足利時代から一般に秋の献立に加へられまして、殊にちか頃では此れが需用の夥しいところから、特に之の食用の菊を培養して花ばかり靑物市場で販るやうになりました。

長門の萩で行ふ菊花膾は其調理法が殊に精しいさうで、彼の井上公爵などは愛翫の料理に數へられて居るといふ話です。

### △蕎麥の味

初秋の風がそよ〳〵と吹き渡ると自然に食慾が進んで何を食いても美味く、故人蕪村の今朝の秋朝精進の初め哉は自ら舌端に動いてまゐります。蕎麥などは何時も美味さうでありますが、其趣味よりしても秋季が殊に適切して居ります。

東京には昔から隨分蕎麥屋が多く、一丁毎に必ず行燈が見受けられますが、又不味い家も頗る夥しいのには驚きます。一體東京の蕎麥は生蕎麥と稱へても眞誠の生蕎麥は一軒も無く、皆蕎麥粉八分の饂飩粉二分で製られるので、本當の生蕎麥は粘り氣がなく、舌ざはりも荒く却て美味くないものです。

それに蕎麥は汁の吟味が第一で、いくら粉が上等でも汁が惡いとトテモ喉には辷りません。『芭蕉は俳諧と蕎麥は田舍ぞよき』といはれましたが、今田舍などで蕎麥を食きますと、醬油の代に味噌の溜りを侑められますが、之れでは折角の饗應も、進んで箸をつける勇氣がくぢけます。

信州は昔から蕎麥を自慢にいたした國で、土地の俳人一茶にも、

信濃では月と佛におらが蕎麥

といふ氣焔が吐いてあり、又汽車の窓から蕎麥を呼べるのも此國ばかりでございます。

しかし本場の更科は、名物に何とやらの諺の通り、期待した味も見えず、第一に汁加減の不味には驚くので、精々買冠つて、新開地です〻る位の格でせう。

もつとも此汁は人々の舌加減で、東京の者でも甘い好きと辛い好きがあるので、一方に片寄つた蕎麥屋はどうしても世評が區々であるに徴して解ります。つまり、甘い側にはもう少し甘い方がと謂はれ、辛い側からは、もう心持辛くしたらと謂はれる汁が最も中庸を得て上手な加減なのです。此點に於て池の端の『蓮玉』などは傑出して居りませう。

蕎麥の眞の味の出るのは、どうしても笊蕎麥で、天ぷら蕎麥や鴨南蠻等の種物類は婦女子の食くものとして蕎麥通は笑つて斥けます。饂飩は江戸時代には贅六の食物としありましたが、近來では衛生上善いとされて需用者がとみに殖えたのは、追々蕎麥通が凋落しゆく運命に到つたのでせう。

## △ゆかりの袖

江戸時代の通人達が寄りますと、直ぐ食物の噂に移つた事は、恰度今の紳商連が會合すると直ぐ株の高低を語合ふと同じやうで、隨分馬鹿氣た研究も行はれます。鰈の食べ競べなど〻稱へて數人打つれて料理屋に赴き、鰈の煮肴を杉箸で見事に肉をほぐしながら綺麗に食き、食き終ると互に皿の中を檢べて、何某は見事であるの、何某はお若いなど〻評し合つて遊んだといふ話がございます。

一時馬琴の師事した戯作者の山東京傳等も一方の食通の旗頭で、此人が弟の京山と共に『天ぷら』といふ食品を初めて江戸中に流行らせた等は有名な話です。從つて自身の考案に成つた料理も多く、殊に『ゆかりの袖』などは名も優しく庖刀も粋で今の家庭に入れて極く調法です。

これは秋茄子の小さいのを擇んで、蔕を去つて兩端

を截り捨て、更に縦に三四分ぐらゐの薄截にして餅網の上で、文火で狐色にこんがりと炙つて、全く水氣が斷れたのを見て筵の上に列べて天日に曝し、から〳〵に乾し上げ、其れを紙袋に納れて、しめらぬやう火鉢の抽出などに貯へて置きます。それで御客でもあつた時、即座の吸物種として出す趣向なので、正月の雜煮餅に加へれば殊に面白からうと思ひますがいかゞでせうか。

## △鹽瀬の饅頭

今數寄屋橋で、宮内省御用の看板を掲げてゐます鹽瀬は、其源流を索りますと、支那から歸化致した者で噂には宋の林和靖の末孫が先祖だといふ事です。初めは奈良に住んで居りましたのが足利義政公時代に京都の烏丸に移つて饅頭店を出しましたので、今も同地に饅頭屋町といふ名が殘つて居りますが先祖の名は顯然と致しません。天正の頃の主人の黒右衛門といふ人が茶を利休に學んで、意匠も豊かな處から鹽瀬帛紗といふ茶帛紗をこしらへて流行らせました。

又此人は支那貿易を營つて、印金をとりよせ、蕪村の句で有名な、

　　春の月印金堂の木の間より

の印金堂も此時つくられたといふ話もあり、能衣裳に箔で印金を模したなども此人の工夫に出たのだといふ事です。

江戸へ店を開いたのは、三代將軍が上洛の折鹽瀬饅頭がいたく意に適つたので、江戸へ出て來よとの命があつたので、取敢ず支店を日本橋に設け、増上寺黒本尊の御用を承け給つてから年々に繁昌して、今も連綿と家名を汚さずに在りますが、反對に本家の京都の方はいつの間にやら滅んで、僅に茶帛紗に其名を謳はるゐのみでございます。

## △薯蕷饅頭

、、、やまと新聞の煙村君がまだ『食道樂』を編輯つて居る時分でした、何かの折に八百善で支那から到來した

といふ曰く付きの茶を侑められ、味はよいが苦が過ぎると、流石の茶人も大當てられの體でしたが、後ちに其茶は砂糖を忘れた蘭茶だといふ事が解つて、私などに八百善の不注意を怨んで廻つた事がありましたが、實際黒人でも斯んな失敗は折々ございます。

夕前は御預りに致しますが、大層亭主が茶人だといふ觸込みで、新たに開きました料理屋がございます。どんなものかと友人を誘つて早速まゐりましたが、なる程家もよく、器もよく、先づ薄茶を出し、菓子は染付の鉢に薯蕷饅頭を盛つて出しました。

そこで薯蕷を何氣なく取りましたら、底に竹の皮が敷いてあつたので、案に相違し、友人などは、是れでまう歸らうかと言つた事がございます。之れは言ふ迄もなく饅頭などは通ひ箱に入れた時には塵埃がつくので竹の皮を敷きますが、菓子鉢に盛つて座敷で侑めるには無論竹の皮はへがすものであるのを、半可通の亭主が何かの穿違ひから起つたので、鯛の刺身に大根卸を付けたより、尙一層見事な失敗でございませう。

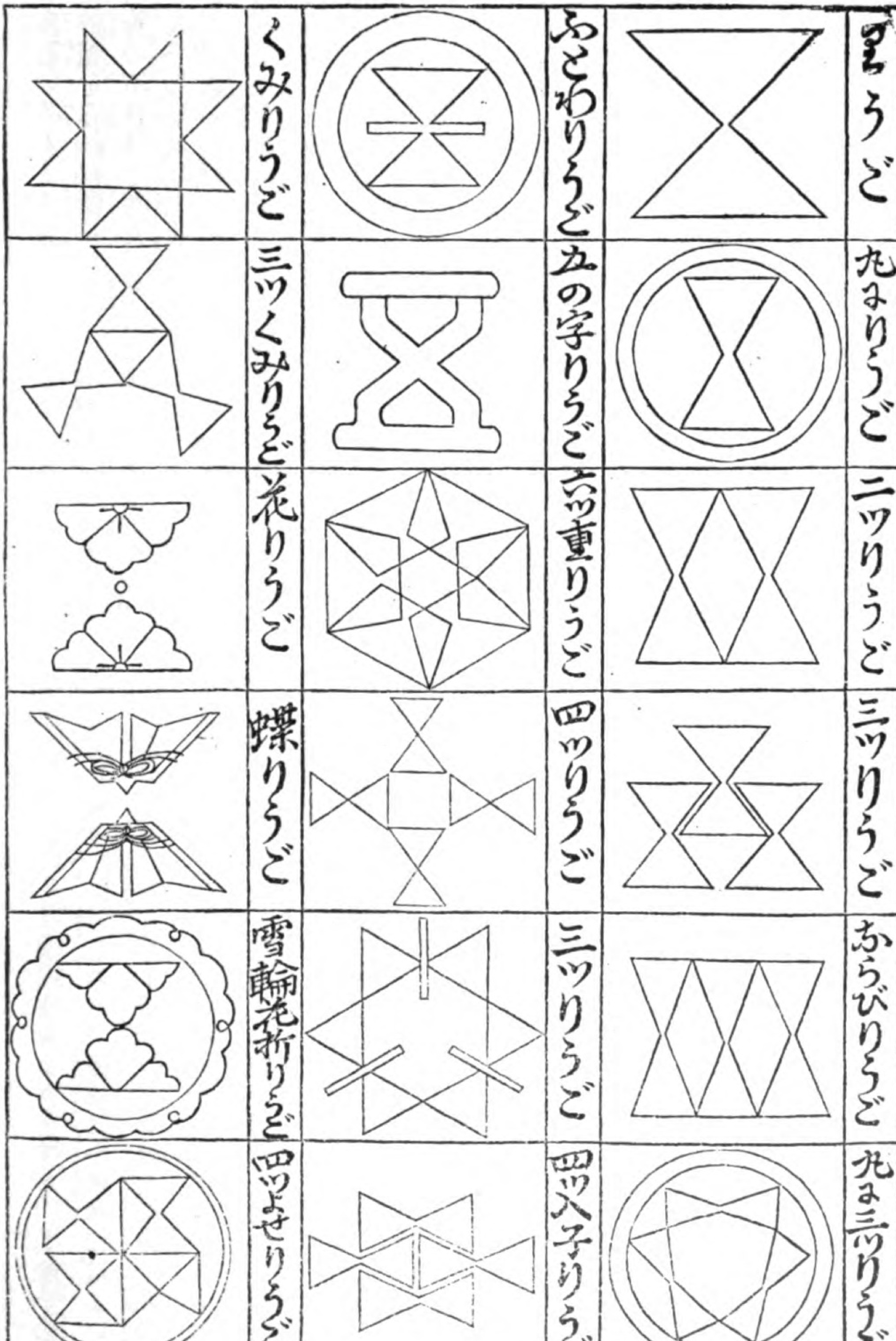
## △鰌料理

士用から殘暑へかけますと鰌の賣行きが殊に夥しく又此間の鰌は藥になるといふくらゐです。鰌は極めて平民的で、いろ〳〵調理法もありますが、美味いのは柳川鍋か味噌汁に限るので、蒲燒は小供衆にはよいが鯰の方が遙かに勝ります。いつぞや埼玉地方で丸揚の天ぷらを食きましたが、珍物過ぎて二度食かうといふ氣にはなれません。洋食にも種々應用しましたが皆失敗に終りました。

此魚は千葉、茨城、近くは葛西邊から多くまゐりますが、これには黒白とございまして、黒い方は泥の中で育つて肥えて居りますから味も宜ろしうございますが、白い方は沙中で育つので色も薄く、斑も明かで瘦せて居りますから自然品も劣ります。天ビンを肩にして泥鰌や々々などと呼びながら賣るのには、よく此白が交つて居りますから御注意が肝心です。

序でに申上げますが、現時東京で鰌料理専業の家は兩國藥研堀と淺草駒形の二軒のみで、數年前までは中橋に一軒と淺草埋堀に百五十年も永續して居つた元祖どぜうの一軒がありましたが、利益の薄い爲か店を閉ちたのは惜しい事です。

# 立五の意匠


りうご
ふとわりうご
くみりうご
丸みりうご
五の字りうご
三ツくみりうご
二ツりうご
六ツ重りうご
花りうご
三ツりうご
四ツりうご
蝶りうご
ならびりうご
三ツりうご
雪輪花折りうご
丸に三ツりうご
四ツ入子りうご
四ツよせりうご



# 何の時代にもある女の底流思想

山路愛山

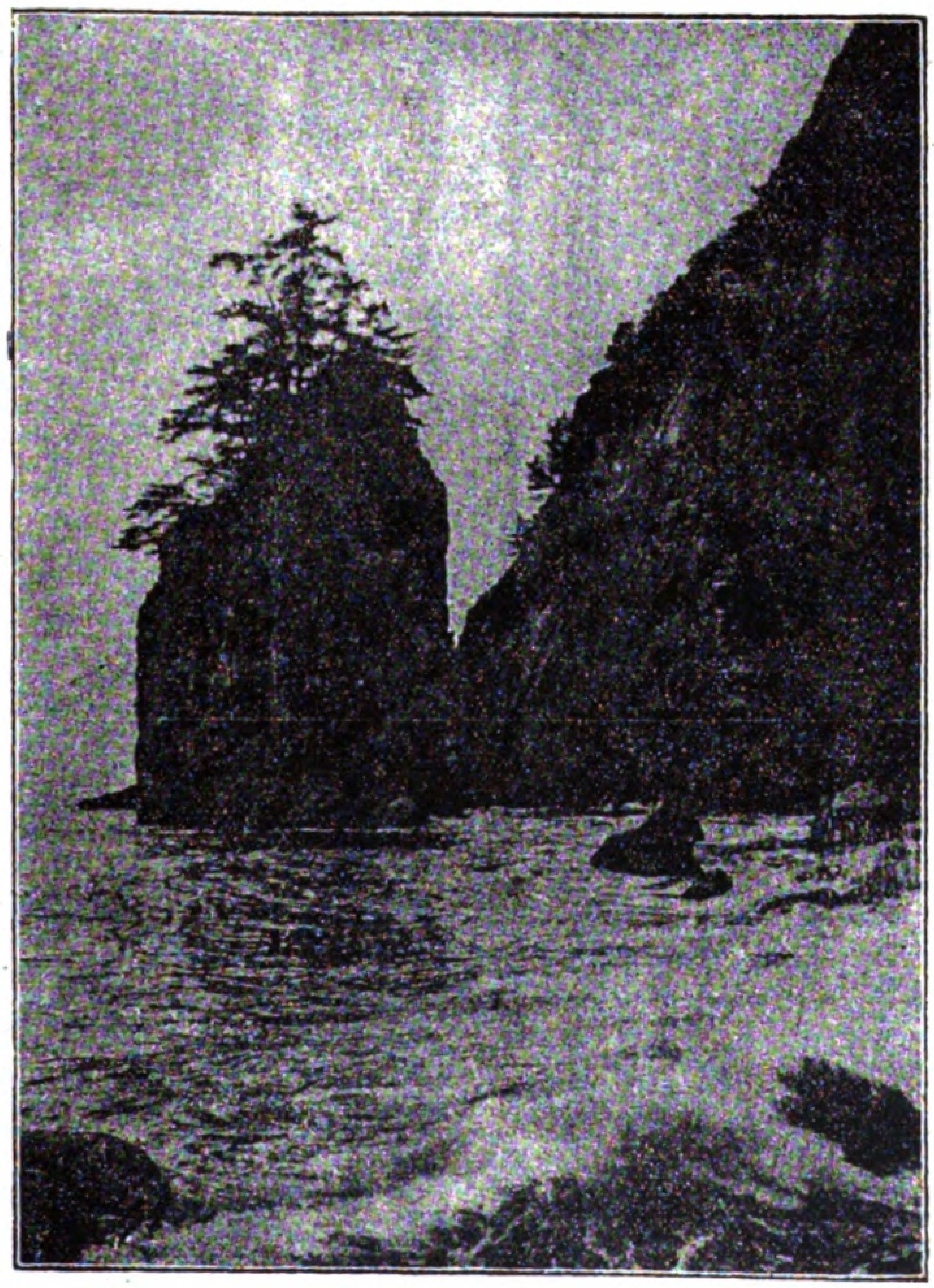
## △平安朝と徳川時代

近頃世間で新時代の女性だとか、新らしい女だとか云ふて珍らしがるが、決して新らしくも珍らしくも何ともない。その時代から云へば何時の時代も皆新らしいので、別に女ばかりが新らしいと云ふ譯ではない。併し自分等の如く隠居して社會を一の歴史として見て居る者の眼からは、一つも新らしくは見えないのであるが、兎に角世の中の事は時々刻々新らしくなつて、社會の進歩を來しつゝあると云ふのは疑はない、それもたゞ無茶苦茶に新らしくなるのではなく、新らしくなるには相當の原因があり又順序がある、それは社會の制度によるもので、例を擧げると平安朝の女と、徳川時代の女とは全つきり違ふ、和泉式部と云ふ奴などは始末にをへぬ女の放蕩者で、誰彼の別なく殿上人を弄ぶ、若い公達をそゝのかす、寺の坊主迄だますと云ふわけで、殆んど話にならぬが紫式部の如きは頗る節操の正しい女と稱せられてゐる、彼の日記によると前の關白道長が或時に呼ばひに來たが、遂に戸をあけなかつたとある、戸を明けなかつたのは今日から見ればあたりまへで、大した後世にまで誇る可き美擧と云ふ程ではないが、その時代に於ては得がたき貞操堅固なるものとしてある、全く當時から見れば得がたき大英斷で、道長に思はれたことも式部には大なる誇で、

彼自身はむしろ光榮に存じて居たかも知れない。これを見てもその時代の女の傾向は略解るが、下つて德川時代になると武士の家庭は甚だ嚴重なもので、女子の貞操は唯一のものとしてあつたから稀に間違ひなどがあつても、平安朝のとは全く趣が變つて、近松の戯曲にもある堀河浪の鼓、云ふやうなものであつた。

## △生活の問題

この相違は何から起つたかと云ふと、全く財産の關係からで、平安朝には女でも財産を有する事が出來たので、生活に困らない女は必ずしも一人の男子を守つて居る必要がない德川時代になると一人の家長たる男子が財産を所有し又その人が働いて一家を養つてゐたので、女は財產所有の權利がない、全くの三界に家なしで、一旦男子から捨てられるとか去られるとかすれば、生活して行かれない、それであるから戰々恟々として男子の命これ従ふと云ふ風であつた。これは何れも當時の社會制度がかくせしめたの



龍窟の聲澄む空や秋の港

で、女子そのものが變つたわけではない。

### △途はさまぐ

凡そ人間がこの世の中に生れて來ると、第一に起る問題は生きんと欲する欲望で、次ぎに起るのが生きんと欲する意義を知らんとする心である。即ち最初に如何にして生きやうかと云ふ事が誰でも浮ぶ。併し、其の望が達して生きて行かれるやうになると、何の爲に生きるのか、如何なる生き方をしやうかと云ふ事になる。しかし今迄はたゞ本能的に生きてゐたので、何の爲に生きるかなどと事ふ事は、死ぬ迄考へなかつたものが多い。この生きると云ふ心は、人間にとつて極めて切なるものである。然るに女が生きる爲の財産もなく、生産力もない時代には、勢ひ百年の苦樂他人によるで、男子にすがらねばならなかつたのであるが、今日の時代は又平安朝の昔の如く、女でも財産も持てるし、中には職業に從事するものも出來てゐながら、男子に便らなくても生きて行かれるものが出來た。生きて行くと云ふ事に最早や心配が要らなくなれば、今度は何う云ふ途をたどらうかと云ふ事になるのは當然でさうなると中にはずつと高尚にかまへるものもあらうし、又は口腹の慾ばかり充たせばそれでよいと云ふ快樂主義に走るものもある。しかしそれは人々の勝手でそれが最も自分にとつて都合のよい生き方だと思ふのなら他からどうとも、出來ないし、又別に咎める事もない。そこでひとしく自分の力で生きて行くからには男だからよいとか、女だから惡いとか云ふ區別はない即ち男も女も若い中は二度ないと考へるのも惡くはないから、若い中には充分その若さを味はうがよい。何時迄若くて居るものではない、さう云ふうちには年をとる、當年の新らしいものも、時の力は之を直ぐに古いものにして仕舞ふ。

### △氣の毒な女

我々でも一度は新らしい男であり新らしい女であつた時代もあつた。今は人の妻となつて居る五十位の婆

さん達も、若い頃に耶蘇教の女學校に學んだ頃は、夜になつて垣根をこえて男の許へ出かけて行つたやうなものもあるし、旗本の娘でも居酒屋へ飛び込んでコップ酒を引つかけると云ふものもあつたのだから、所謂新らしい女達がすべつたとかころんだとか云ふ行爲を評する前に、酒を飲むには金が要る、遊びに行くには費用がかゝると云ふ事を考へる必要がある。それは家が有福で、小使が充分にあるとか、又は自分の働きが多くの收入となつて、彼等をしてさやうにせしめたとか云ふ二つの中である。男子でも財產家の息子は、放蕩をする、自分の收入が豊かになれば不品行をすると云ふのは常だ。しかしそれがよいとか惡いとか云ふ事は、男子の方では既に解決がついて居る。今日に於ては女子が更にこの煩悶をくりかへしつゝあると思ふと甚だ氣の毒に思ふのである。それで問題は種々に分れるが、男子の方では生きんと欲する意義をば生きんと欲するが故に生きると云ふ結論にしたが、女子も何處迄行つてもこれ以上解決は出來まいと思ふ。

### △遠慮なく自覺せよ

そこで今日の女子に向つて一つ注意して置きたい事は、女子が自覺すると云ふのは、男子の壓迫が烈しいからと思ふのは間違ひで、覺醒するとか、自覺するとか云ふのは、女子が自覺するに最もよい位置に置かれたからで、今日の時代の如きは云はゞ男子の方から、否社會全體から自覺を促されて居るやうな有様なので決して壓迫されてはゐない、佛蘭西の革命でもその通りで、佛蘭西が最も壓迫を蒙つてゐたからではなく、最も壓迫が弱かつたから革命騷ぎも持ち上つたので、自分の見る所では從來も女子は左程男子の壓迫を受けては居なかつたと思ふがもしも、壓迫されて居たとならば、少くも今日はその境涯を脱して居ると云はねばなるまい。それを何處迄も、婦人の自覺は男子の壓迫の反動であると心得て、男子に對して一種の反感を持つてゐるやうな人があるならば、それは女子自身の爲にとるべき所ではあるまいと思ふ。で折角今日の如き

都合のよい地位に置かれてあるからには、女子も憚りなく自覺し、遠慮なく覺醒するが宜しい、それも一時の發作的では面白くない、飲んだ酒ならさめずばなるまいで、歡樂の酒を飲まされ、それに醉ふて一時狂ふのではいつか本當にさめる時が來やう。新らしい女、自覺した女と名乗るからには、充分自重して、直ぐに古くならない事を希望する。

## △一の波動に過ぎない

今日の世の中は、この先どうなるか、今の處では殆んど歸着する點が解らない、何時の代にでも大體その進路は見當がつくものであるが、今は全く五里霧中である。即ち科學の進步につれて工業が開け、大いなる工場が至る所に設けられ、大規模な機械が備へ付けられて人民は如何ばかり幸福になると考へた事は、全く豫期に反して、英國の如きはストライキ、ストライキで旅行したくも船にも乘れず、汽車にも乘れないと云ふ有樣で、貧富の區別は愈ゝ甚じくなると云ふので實に歐洲今日の狀態は文明の進步を祝福してよいか、呪咀してよいか解らない。かゝる時代に於ては保守主義が出て文明の進步を妨げやうとするのは當然の事であるが、更に古へにかへさうとするのは愚の極みであるこゝの處今暫らくは成り行きに任せるより外に途はない。全く狂亂怒濤の有樣であつて、新らしい女の出現も、やはりこの一の波動に過ぎない。であるからその勢をどうする事も出來るものではないから、自分は今娘が新らしい女になつても決して後悔も何にもしないのである。

### △鼻と足に現はれた人の性格

梨のやうな大きな鼻の人は幸福の人。鼻の膨れて居る人はラムネ屋になると大金持になると云ひ、鼻口の擴がツて居るのは笑ひ易い人。鷹のやうな曲つた鼻の人は貴族又は勇士に多い。鼻の細い人は臆病者鼻孔の廣い人は働き好きの人であると云ふ。足も人の性質を顯はすと云ふので、西洋では『足の言葉』と云へば、人は直ぐにそれと判る。チョコ〳〵歩くは輕佻浮薄な人。牛歩遲々と云ふやうなのは心の落付いた人。大股に急いで濶歩するのは喧嘩好きの人、大股に徐々と步く人は考へ深い人だと云ふ。其の結論として、適宜に步まんと欲する人は、先づ其の性質の缺點を矯正せよ。

# 三つの文がら

山田小枝子



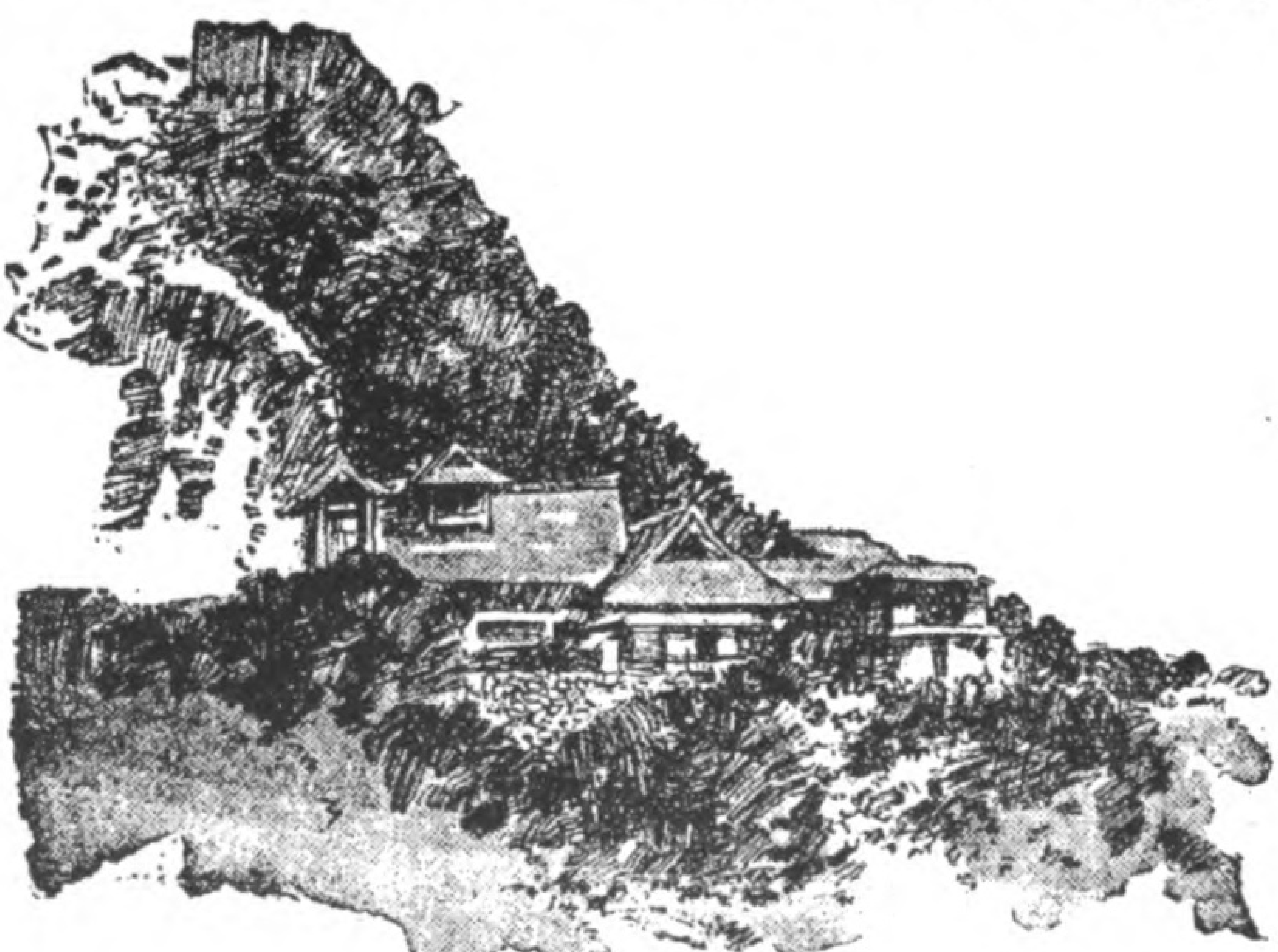
やどりせし人のかたみかふぢ袴
忘られがたき香に匂ひつゝ
（貫之）

## 若き母より

よく降りますねえ。今日で丁度五日お日様の影を見ませんもの、閉口致します。さらでだに裏日本の陰氣な重い様な日の多いのに、こんなに降りつゞけられちや、一郎の守りに困ります。その昔、例の田中先生の物理の試験に見事失敗して、散々にあのネチ〳〵したお口で油を絞られて困りましたねえ。それ位ゐの騒ぎぢやありませんよ。ホヽヽ、先日からお伺しなければと思ひながら、――又小枝様から思つた許りで何になると云つて怒られるかも知れませんが――實の所子供が一人でも増しますと、その忙しさはとても小枝様なんかにおわかりにはなりませんよ。よく修二が、お前一人の子にそんなに困るが、五人も六人も有つたら如何するか、と申ますけれど、いくら私だつてその頃

になつたら、經驗も出來ますし、年も取りますものをねえ、夕方なんか修二は歸つて來て、飯を早くしてくれ、と申ます。暑くて汗はダラ〳〵流れるのに、何の遠慮もなく、一郎も大きな聲を出して乳をほしがつて泣きます。蚊はソロ〳〵なく、下女は十六になりますが、少々お目出度い方なので、一向役に立たず、昨晩なんかお客様が有りまして、御挨拶に出た間に、お汁が溢れる、お隣の猫が來てお魚は咬へて逃げる、私臺所で泣きましたわ。到頭主人も笑らふやら、とんだ演劇をしましたが、今後どんなに鼠が多くとも猫丈けは飼ふまいと思ひます。

まー泣言ばつかり並べ立てゝホヽヽ、御免遊せ。先日はお手紙有難く拜見致しました。お二方様とも御機嫌よろしくて、何よりと存じます。中隊長の大田大尉が、山田樣と同期で居らつしやいますつてねえ。よくお越し遊す度に、御噂を承はりまして、お喜び申て居ります。何事にも御成績よろしき中に、わけてフレンチが餘程御堪能で在らつしやいますつて。お羨ましうございますわ。遠からぬ中に大使館へもお移り遊しませう。私共のクラス六十何名の中、半數は早や人妻ですが、その中には種種なのが有りますねえ。だけど幸福な方よりも不幸な方が多い樣ですが、あなたなんか



耶馬溪羅漢寺

殊に神々の寵兒ですよ。お目出度い御樣子はございませんの。ホヽヽヽ。みつ子樣は其後如何遊しました。今年の二月お手紙を頂いた限りですが……。秋にはお父樣もお歸宅遊しませう。何卒今後の御幸をいのります。

貞雄樣は御結婚遊しましてよ。今度は兵庫縣の多額納税者の愛孃で、お年は二十二だそうです。三輪田の御出身と承はりましたが、御顏立はみつ子樣よりもずつと落ちますけれど、お土藏の幾棟、田畑の何十町にお見込が付いて、御兩親樣が強てのお言葉でしたつてね。同僚の田中中尉の奥樣が、貞雄さんのお從妹に當りますとかで、詳しい御樣子を承はりました。貞雄さんは、御兩親のおすゝめに、餘儀なく今の奥樣お迎へ遊したものゝ、いまなほみつ子樣の忘れ難くてか、とかくうつ／＼と遊して、昔の面影は殘りませんさうです。仇し縁!! 一と年餘りはお互に夢でしたのね。飽きもせず飽かれもせぬ仲を無理に裂かれて、心にもあらぬものを妻と呼びながら、なほ過ぎし幻を逐ふてゐらつしやる。お心弱き貞雄さんもお氣の毒ながら、女ですものみつ子樣はさぞ……。いづれ近日の中にお伺ひする心算ですけれど、小枝樣からお便りの節には、恐れ入りますが、私よりもよろしくと御加筆をねえ。

竹内さんはいかゞ。相も變らず旦那樣と御召物との御自慢ですか。あんな方とお話するには、ハイ／＼ときいてさへ居りや御機嫌なんですもの。罪がなくていゝ。

先月の會報見て驚きましたが、井上さんは御死去遊したつてねえ。將來は天晴れ外交官夫人と思つて居ましたのに。あのスラリとしたお姿と、何物をもチャームするお目とを、なぜ私に殘して下さらなかつたのでせうホヽヽ。邦子樣は何とお感じなさるでせう、ずゐ分烈しい競爭をなすつたのですがねえ。まさか後妻とは……。

長い手紙を書いてる中に、一郎が起き出して了ひました。小枝樣も餘りお早くから母樣におなり遊すな、樂しい空想も靑春も子の手に移つて了ひますよ。午後

は婦人會へも一寸出ませんと都合が悪いさうですから何かと氣がもめますので。今日はこれで。近頃はゆつくりとした手紙はさし上げませんのねえ。いつも〳〵泣言やら小言やらホヽヽヽ。

筆末にて失禮ながら、山田様に何卒よろしく。主人よりは多忙のために御無沙汰申して居るでございませう。小枝様からよろしくおとりなしをね……。

若き母より

## 悩める友より

御親せつなる御玉章、ならびに『たちばな』、今朝たしかに相届き、いつに變らぬ御情けのほど、身にしみてうれしうくり返し拝見致し候。仰せの通り、御暑さ凌ぎ難く覺ゆる折から、御揃ひ遊され、御機嫌よろしく御過し遊され候由、何よりの御事と深く〳〵御悦び申上參らせ候。じつに御羨ましき御身の上、幸うすき私に引比べてなほさら、御羨ましく存じ上參らせ候私共も身體のみはいと健かに候へ共、心の病はいつ治すべしとも測られず、夫婦は名のみ、一度外出しては十日も十五日も歸り不申、會社より急用起りし際には、いつも別莊の方へ電話かけらるゝ有様、奥様てふ空名を奉られて主なき家に朝夕を過す身の、いかに甲斐なきものに候べき。何卒おさつし給り度候。御察し給はれと申しても、この苦しき經驗なき御許様に、私の心中の切なき、恨めしさの、十分の一だもおわかり遊すまじ。この悩み知らし召さぬ御許様こそ、げに御幸の御身の上に候よ。

風の便りにきけば、彼の女早や五月餘りの身と相成居候よし。四十二の今日まで子なきを喞ちし夫の喜びさこそと思ふにつけても、行末淋しき身のなほ心細く日々胸苦しうのみ暮し居候。仄かに承はれば、あさ子様も私と同じ身の上にて御悩み遊し候御様子、何とはなしに限りなうおなつかしくて、直ぐにも御文參らせ度存じ候へ共、例の勝氣の御性質よりして、御實家の御兩親様にさへ一言の御話もなく、心一つに御をさめ遊すと承はりては、餘りにはしたなき私の恥しくて、



備後鞆津港

今だに御伺も得不申、他所ながら御良人樣の御心の一日も早く昔に歸らせ給へといのり居候。

　春季の「たちばな會」相變らす御盛んなりし御樣子富田先生と林先生の「八千代獅子」は承はり度候ひし。富田先生は相變らずミスにて御過し遊さるゝ御樣子。かゝる身となつては、オールドミスなど密に申上げ居りし先生の御身の上こそ、なか〳〵に御羨ましう候。北川さんの獨唱、あの美しき御聲のいまだ耳邊に殘るやうに候。卒業式の午後、クラブの送別會開きし折、理科教室の前なる松の下蔭に私をソト招きて、

　黄金の光りにや心まどひ給ひし、本田樣は御許樣の父樣にしても好き御年頃とこそ聞きしが、今一度思ひ返させ給はずや、

　涙流して仰せられしお姿、いかでか忘れ候べき。御文參らせぬは、仰せに從はざりし私の今の有樣が餘りに御恥しく、僞らむには餘りに淸き心の恐ろしく、かにかくと惑ひし故に候。

　徒らに嘆き悲しみ候とてもいかにかならむ。御親切なる御言の葉に從ふて、今後は能ふ限りの誠を盡して夫に仕へ申すべく、固く厚く閉せし北極の氷さへ、春來れば自らとけて流れ出で候ものを、冷やかなる夫の

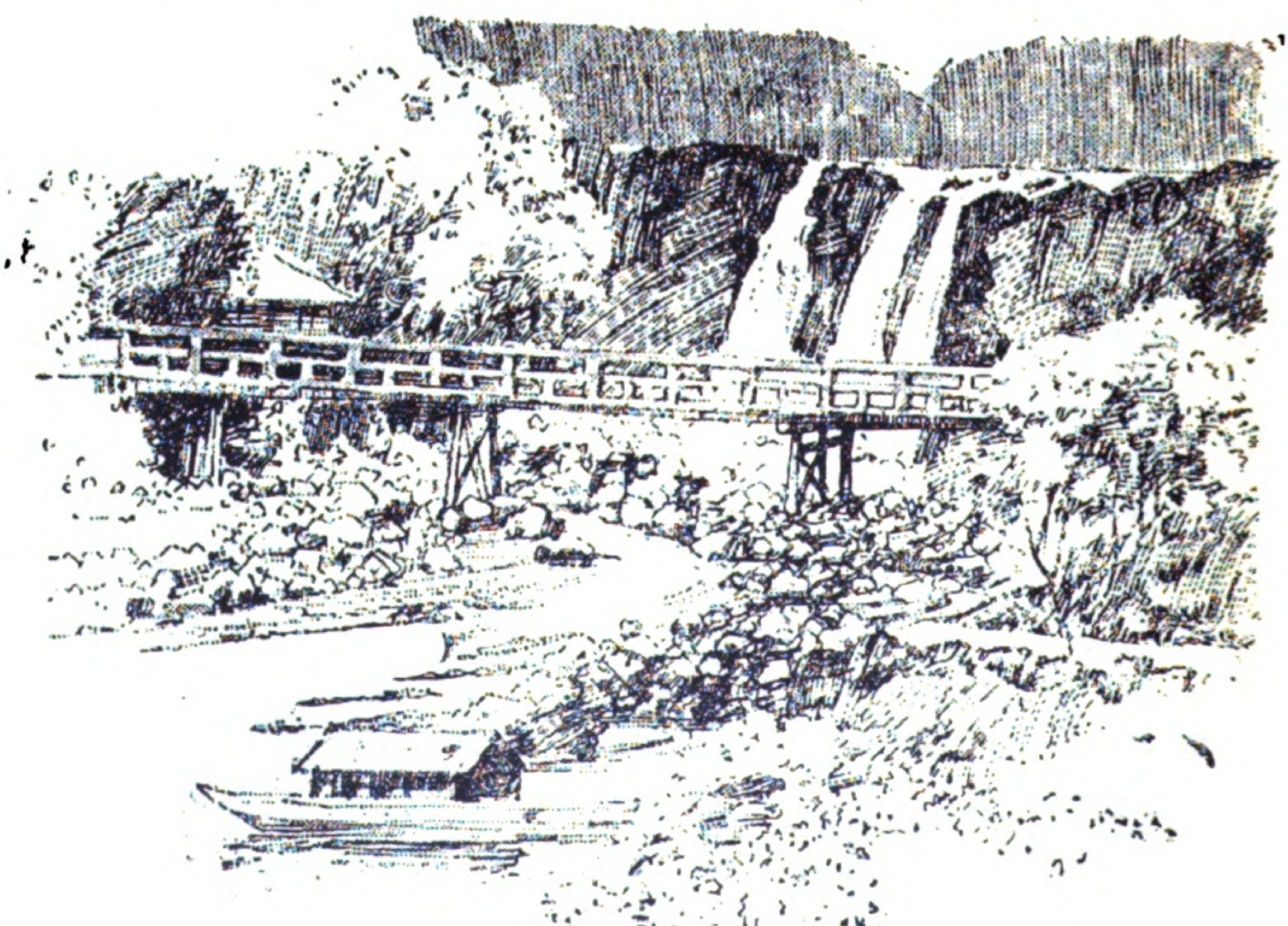
心の僅かにても柔らぎしその時こそ、私の心の届きし日ぞと御よろこび頂き度く、そのうれしき御報參らする日の一日も早かれといのり候。

百度に近きこの節の御暑さ、何卒御いとひ遊され候やう、はるかの空より明暮れ念じまゐらせ候。いまだ御目もじは致し不申候へ共、御良人樣へよろしく御傳へましの程、くれぐれも御願申上候。あなかしこ

たき子

## 新婚の人より

小枝樣、私この度倉田と改姓致しました。何卒相變りませずよろしく御願ひ申上ます。最少し早く御報知申上る筈でしたけれど、何分急に起りました話で、一週間ぶりに早や結婚と云ふのですもの、忙しくつてどなたへも御知らせする間もありませんでした。夏休の前でしたので、學校の方が非常に忙しく、皆樣の御心配で三日ほど休みました限り、四日目から例のクルクル卷に袴はいての學校通ひ、ニューマダムもこれぢや



相模佐野瀧圖

ねゑ、、、。主人も小學教師です。目下は當地から三里ほど隔つた處に居りますので、困つて居りますけれど、新學期にでもなりましたら、又何とか考へて、お互に都合のいゝ處に家を借ります心算です。兩親とも壯健でして、何事にも經驗なき私をよく敎へて吳れますし、義弟は町の中學校に居ります。田舍の事ですもの、親類はずゐ分澤山でして、五月蠅いさうですけれど、私例の超然主義を取る心算ですの。入嫁致してから未だ廿日餘り、充分には明りませぬけれど、まづ食べる位ゐの事には不自由はないらしく、皆の人柄はよし、これならばこの深山の奥でも辛抱が出來ようと思ひます。その代りに、この高野村はねえ、どちらへ出るにも峠を越えなきやなりません。人力車なんか云ふ贅澤な事は、まづ出來ぬと諦めねばなりませんもの。ましてや汽車や自動車なんか、この村中で自轉車が二輛、一つは村長、一つは主人ですつてねゑ、、、。こんな有樣ですから、一世紀位ゐはたしかにおくれて、何事も昔風です。夜は行燈出すのですもの。これ許りは主人が閉口してランプに改めましたら、母の曰く、

あんまり明くて勿體ないが目が痛い。

勿體ないが面白いぢや有りませんか。

朝は早くから赤い襷に姉さんかむりで、母と茄子もぎに畑へ出ます。日はまだ昇らず、朝霧込めた畑の中に立ちますと、言ひ知れぬうれしさが身にしみまして

私茄子もぎに行くのが、うれしくつて畑へ行と紫色なのが、コロ／＼してるのを見るときのうれしい事つたらありません。

と話ましたら、兩親も夫も大笑ひ致しました。

田舍へ來て淋しからう、廣島へ歸り度くはないか、來年の夏は連れて行つてやる、

と夫はよく慰めて勞つてくれます。何の淋しいものですか、五月蠅き都よりも、こんな谷間の仙境の方がどんなに心安くつていゝかわかりません。川から獲れる香魚は、そりや美味しうございますよ。秋は松茸やら、栗やら。松茸は御送り申ますよ、田舍の自慢にねゑ、、、。

お暇でもございましたらお手紙を‥‥。それから竹内様や森様にも御通知する筈ですけれど、混雑に暮しますので、此の度は失禮致します。恐れ入りますが、あなたからよろしく御願申ますわ。申し上げ度きことは澤山なのですけれど、何だか氣がソハ〳〵して、落付いて筆が取れませんの。だつてお冷かしは大閉口ホヽヽ。

私の奉職してるのは今までと同じですから、お手紙は學校宛にてもよろしく、其内居を定めましたら御知らせ致します。

まづはとりあへず御知らせまで、かしこ

きみ子

この手紙かいて居ましたら、いつの間にか主人が來て、

實家へか、と申しますの。

イエ山田さんへ、

お友達か、

殊にお親しく願つて居ましたの、

さうか、今後もよろしくお願ひするがいゝよ、まだお目にはかゝらぬが、僕からもよろしくと申上げてくれ。

右の通りに御座候也。ホヽヽ。

鳥花模様



△河骨

△牡丹

△鳳凰

△雁

# 九月の惣菜料理献立（一）

| 日 | 朝 | 晝 | 夕 |
|---|---|---|---|
| 一日（日） | とうふ、みそ汁 | ぼら、山しやう醤油やき | きうりもみ |
| 二日（月） | やき茄子、花かつを、大こんおろし | 玉子やき、大こんおろし | こち、とうふ、みそ汁 |
| 三日（火） | やき麩、ゆば、すまし汁 | あぢ、しほやき | 松たけ、とうふ、みそ汁 |
| 四日（水） | わかめ、味噌汁 | 牛肉つけやき | さゝげ、くろごまあへ |
| 五日（木） | 福神漬 | いわし、しほやき | かうやどうふ、茄子、うま煮 |
| 六日（金） | 牛じゆくやき、玉子、パン | 茄子、しぎやき | まぐろ、さしみ |
| 七日（土） | さといも、みそ汁 | かれい、につけ | 茄子、しぎやき |
| 八日（日） | 焼のり、生玉子 | いぼ鯛、みそづけやき | わかめ、むきみぬた |
| 九日（月） | 海苔つくだ煮 | ぼら、につけ | たゝきごぼう、ごますあへ |
| 十日（火） | わかめ、味噌汁 | 豚肉玉ねぎ、玉子やき | わかめ、まぐろぬたあへ |
| 十一日（水） | ゑび、つくだに | 烏賊と子芋の煮つけ | 小だひ、しほやき |
| 十二日（木） | わかめ、みそ汁 | いわし、田がく | さといも、はす、やきとうふ、にしめ |
| 十三日（金） | やき茄子、花かつを、大こんおろし | さば、みそに | 生あげどうふつけやき、大こんおろし |
| 十四日（土） | さといも、とうふ、みそ汁 | いわし、すむし | しのだまき、子芋につけ |
| 十五日（日） | 茄子、油いり、大こんおろし | にしん、こぶまき | はつたけ、とうふ、すまし汁 |

# 九月の惣菜料理献立 (二)

| 日 | 朝 | 昼 | 夕 |
|---|---|---|---|
| 十六日(月) | ずゐき、みそ汁 | あげちくわ、はす、にしめ | このしろ、しほやき |
| 十七日(火) | すまし、入はいどうふ | 小鯛、みそづけやき | 胡瓜、なまり三ばい酢 |
| 十八日(水) | わかめ、味噌汁 | いわし、フライ | いか、いも、につけ |
| 十九日(木) | はつたけ、しほやき | はんぺん、つけやき | くじら、さゝがき、ごぼう、味噌汁 |
| 二十日(金) | 豆腐、みそ汁 | まぐろ、つけやき | はつだけ、さといも、ゑび、につけ |
| 二十一日(土) | ねぎ、油あげ、すまし汁 | 松だけ、やきかまぼこ、うま煮 | まぐろ、さしみ |
| 二十二日(日) | 小芋、みそ汁 | いな、つけやき | 牛肉、はす、うまに |
| 二十三日(月) | 福神づけ | 玉子やき、大こんおろし | まぐろ、つけやき |
| 二十四日(火) | やきメシ、半じゆく玉子 | あぢ、につけ | ねぎ、むきみすまし汁 |
| 二十五日(水) | さつまいも、味噌汁 | いわし、につけ | わかめ、まぐろぬたあへ |
| 二十六日(木) | とう瓜、すましうすくず | あぢ、しほやき | 里いも、はす、やきどうふ、煮しめ |
| 二十七日(金) | 初だけ、とうふすまし汁 | さば、みそに | 豚肉カツレツ |
| 二十八日(土) | のり、佃煮 | さば、みそ煮 | 茄子、花かつを、いり煮 |
| 二十九日(日) | やきまつだけ、大こんおろし、しやうゆかけ | かれいの切身につけ | なまり、わかめ、こせうみそあへ |
| 三十日(月) | とうふ、味噌汁 | いわし、酢むし | 牛肉、こんにやく、煮しめ |



# 新夫婦の冒險

磯千鳥

「――かうだと思ひ込んだ心程怖ろしい物はありませんねえ……」と或夏の晩、此山家へ避暑に來て居られる外交官の奥様は、團扇を玩び乍ら仰いました。何だか初秋の樣に冷々する夜で、藁葺の軒から釣した岐阜提灯がとぼ〳〵と薄氣味惡く妾達の横顔を照して居りました。……恰度あの戰爭のあつた時分でした。大變秘密な用件を帶びて良人は急に北陸の○○地へ行かねばならぬ事になりましたが、其時妾も旅をした事もないし一緒に行く事になつたのです。秘密の要件に細君が從いて行くなんて隨分可笑しいと仰いませうが、それは斯うなんです。あゝ言ふ時には世間の人が唯さへ神經質になつてる上に、例の新聞屋が鵜の目鷹の眼で睨んで居て、少々はお國の爲に都合の惡い事でも素破抜くのですからねえ。其時の用事が何であつたか主人は未だに申しませぬが。

「××書記官公務を帶びて○○へ急行せり」なんて新聞に出やう物ならそれこそ、駄目になつて了ふ事だつたんです。それで良人も人目を惹かぬ種々の工夫をして、態と妾を連れて、遊半分の旅の樣に見せかけた譯なんでした。妾は何時結婚したと仰るの？ えゝ其戰の初まる一寸前、言はゞ用事を相合傘にした新婚旅行と云つた調子なんですよ。その用事と云ふのも或機密書類を先方へ屆ければ良いので心配は心配だけど緩然とした旅なんでした。

まあ翌朝になると主人も私も可成お粧をして停車場に顯れたとお思ひなさいな。今でこそ妾は隨分度胸が

# 少年世界　第十八巻第十三號　增刊

# 大正第一年

九月十日發行……菊判紙數百廿八頁口繪澤山　正價金十錢　郵税一錢五厘

□口繪□

今上陛下（三色版）……

皇后陛下
皇儲殿下（光澤紙二色刷寫眞版）……

外に石版數色刷口繪寫眞版數葉

□記事大概目□

今上陛下御少年時代

■お伽ばなし　菊童子……巖谷小波

■奮勵せよ大正の少年……

■教育展覽會……

■少年對話　これからだ……竹貫佳水

外に有益にして面白き記事滿載

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替貯金口座東京二四〇番

# 幼年畫報 第七卷第十二號 增刊

# 甘柿渋柿（アマガキシブガキ）



赤い柿は甘いぞ、青い柿は澁いぞ、甘い柿をば自分が食べて、しぶい柿をばなげつけて、蟹を殺した山猿も、天の罰は早いもの、石臼栗や蜂などが、殘つた子蟹の味方して、仇を討つたものがたり、赤い柿より美しい、御本の出來たうれしさに、さアさアみんなで歌ひましよ、さアさアみんなで歌ひましよ。

九月十日發行

小波作
永年畫

菊判美麗畫本

石版極彩色十六頁◎活版二色刷十六頁◎光澤寫眞版四頁

正價十錢　郵稅五厘

東京本町 博文館



（廣告の五）

■第七卷第拾貳號■九月一日發行■

# 文章世界

# 創刊百號記念

●現文壇の人々（月旦）相馬御風
○夏の悲哀（歌）若山牧水
●自分に還れ（評論）片上伸
○海（歌）土岐哀果
●北へ、谿へ（旅行記）吉江孤雁
○枕草紙と清少納言（研究）窪田空穗
●郊外雜記（隨筆）蒲原有明
○散文詩數編 生方敏郞

○初秋（隨筆）黑頭巾
●八月の歌のうちより（歌話）前田夕暮
○微弱な權力（感想）田村とし子
●今人の名月の句（俳話）內藤鳴雪
○有明泣菫以後の時壇（評論）服部嘉香
●文章隨話（文話）德田秋江
○小說と小品との區別（文話）中林星湖
●最近の俳句の中より（俳話）荻原井泉水

▷小說◁

□白晝……正宗白鳥
□足袋の底……德田秋聲
□薔薇……水野葉舟
□題未定……森田草平
□野崎村……上司小劍
□遠くへ行く船……田山花袋

新著批評

▽岩野泡鳴氏の『發展』……安倍能成
▽小川未明氏の『少年の笛』……小宮豐隆
▽木下杢太郎氏の『和泉屋染物店』秋田雨雀

菊判 口繪如例豐富
紙數三百六十頁
正價三十錢
郵税三錢

東京日本橋區本町三丁目 博文館 振替貯金口座東京二四〇番

# 少女世界

第七巻 第十二號

菊判本文紙數百廿八頁
口繪 石版寫眞版澤山

正價十錢 郵税一錢

## 九月一日發行

**口繪**

・スイス風景……丸山晩霞
・ゆふ月……井川洗厓
外に寫眞版四ページ

**先帝陛下崩御**
**今上天皇陛下御踐祚**
明治天皇の御聖徳……記者謹識
明治天皇の御製……佐佐木文學博士

□落花の巖……巖谷小波
□少女訓話 女ですもの……第一高女教諭 市川源三
□忘れずの記……長沼世喜子

□パラソル物語……黒田湖山
□叔母の家……村岡多摩子
□橄欖樹の陰……武田櫻桃
□歸校前……永代美知代
□少女小説 さくら貝……三宅花圃
□父を待つ夜……ちどり
□手帳の中より……沼田笠峰
□磯部雜記……記者
□印度神話 紀念の瓔珞……木村小舟
□懸賞繪畫「お縁側」

**少女會館**

涼しき装ひこらせる少女會館には學藝室、娯樂室、顧問室、談話室などあり。こゝ何れも少女諸子の音づれを待つて居ります。

東京本町 博文館

第一巻第六號　九月一日發行

# 淑女畫報

四六倍判口繪光澤紙寫眞版四
十頁石版三色版數頁本文百頁

正價廿五錢

郵稅
二錢

六壹卅錢二二六錢要
冊圓五十冊圓拾外税

## 畫報

大行天皇御影
天皇陛下
皇后陛下
皇儲殿下
原頭の稜威
先帝にお册き遊されたる女官の方々
先帝の御乳人
諒闇書譜

朝見式當日の二重橋＝四條侯爵夫人＝松平子爵夫人＝加納子爵家庭＝酒井伯爵二令孃＝大島中將令孃＝英國皇后陛下競漕會臨幸＝竹柏會小集＝碓氷峠大曲におけるる＝蕉園女史と蘭香女史の此頃＝面白き小鳥の飼育……

▲赤酒の薫　彩色石版畫　太田三郎君畫

▲花野　原色版　佐々木林風君畫

●令孃かゞみ　白桔梗○蘭の薫○月光の下○島の影○葛の影○初秋○鈴虫○秋の色○糸秋○松蟲○十五夜○

## 讀物

⦿ハイカラ罵倒録　坂井久良妓
⦿捨鉢日記　岩野清
○長火鉢の告白……（霞丹子）○實効ある化粧料……（小倉逸郎）○女の信仰標……（北原十三男）○

●太ッ腹の女●名古屋美人論……（呉羽鳥）

●女の自惚鏡……（趙飛燕）●婦人の虚

最も尊い時代……（三輪田眞佐子女史）

榮心を養成する母親……（跡見花蹊女史）

○化粧髮飾二百年間の變遷（前田芳柳）○歯と女の容貌（志村ドクトル）○隆鼻術と鼻の衞生（和田昌訓）○道德のない女の社會（在米高宮一郎）○一生涯派出な着物をきる女（加藤みどり）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番　博文館

出來ましたが其時分は、ほんのお孃樣でした。停車場へ行く／＼と何かなしに動悸が高くなるのでした。其時も妾達の乘る汽車には卅分もあると云ふのにもう出るか／＼と其心配が並大抵ぢや無かつたのですから……ですが今から思ふと矢張り蟲が知らせたのかも知れません。

軈て時刻が來たので人の居ない二等室を見附けて入りましたが、ダアリアの花の樣な天鵞絨の腰掛に腰を下すと、ほつと安心しました。そして主人が麥藁帽の半身を窓から乘出して、後から人の來ない樣に杖の柄で掛金をかけ、二人向合つた時は、旅の危險と云ふ樣な事、これつぽつちも考へませんでしたが、でも「禍」は何處にでも潜んでゐるんです。話はこれから怖ろしくなつて來ます——



處が今汽車が出ると云ふ瀬戸際にあたふたと驅け込んだ、五十そこ／＼の紳士がありましたさうね一寸田舍銀行の頭取と云ふ樣な人で、此方が二人切の處へ入つて迷惑だらうとでも思つたのか、隅つこへ席をとると。

「──斯う言ふ處へ御邪魔をするのは遠慮せうと思つたのですが他の客車には生憎物騒な奴が居ましてね、かう云ふ物を持つてるとつい……と横に置いた鞄を指し乍ら髯むしやの中から罪の無い笑顔を見せるのでした。そして「まあ一寢入しやうか」と獨語の樣に云ひ乍ら鞄を押しやつてころりと横になるのでせう。でも暫くすると、いゝもどかし相に鞄を開けて旅行案内を取出し眼鏡をかけて操つて居ましたがそれが濟むと今度は大きい紙幣の束を頻と勘定し初めました。そして主人の方を向いて、K町に若しか兩替屋がありますまいかと訊ねるのです。

「えゝ確にあつたと思ひますよ」と、答へるには答へましたが、妾達は目と目と見合せずには居られませんでした、何故だと申しますと良人の行かうと云ふ處へは直行の汽車がありません。是非途中で一晩泊らねばならん其中泊の驛に此K町を選んで居た譯なんですから……

其内に列車はK驛に止り、三人共下車しますと、次の客車から今一人、見窄らしい服裝をした漢が降りて參りました、そして今云つた銀行家とは知合の間柄と見えて、つか／＼と側に寄つて何かしら、言つてる樣子なんです。

「畜生、どうなと勝手にしろ」かう云つて紳士が振切つて構外へ出やうとすると見窄しい漢は「それぢや後悔なさるな！」と後姿を睨つけて嚇す樣に言ふのです。處で何と思つたのですか紳士は良人の居るのに氣がつくと、

「一寸之を預つて下さい」とか何とか云つて、例の鞄を脚下に置いた儘一方の漢を曳きずる樣にして物陰へ連れて行きました。……

何だか厭な氣がするぢやありませんか。

處がそれ許なら良いんですが。ね、此二人の人が宿屋へ行つてからも一緒なんです。

此Kの町と言ふのは當時衰へて了つて、旅館と名のつくのは妾達の泊つた處一軒しかありませんでした。それも荒れに荒れた宿屋で、妾達の案内された間は一

番の處だと云ふにも關らず、袋戸棚に新聞が貼つてあつたり、軸物の小犬に眉を描いて、煙管をくはへさせたり樂書の儘になつてる樣な間なのです。かう南向の、前には凄い程茂つた前栽があつて、北の方に薄暗い廊下を通つて表の方へ出る樣になつて居ました。處が其廊下を何氣なく此方へ參りますと妾達より早く西隣の間を占領してる人があるのでせう。誰だつてしますわ、こんな時に、少し開いてる戸口から覗くと明るい方を向いて男が坐つてゐる、それが訝しいぢやありませんか、以前の老紳士なんです。其事を良人に話すと良人は

「なあに、宿屋だもの色々な者が泊るさ」と別に氣にもかけぬ樣子ですが、それが唯の旅ではなし何かの諜合があつて斯う迄附纏はれるのではないかと思ふと氣味が惡くて仕方がありません。それとはなく、壁を檢めて見ると隅の方に隣へ通ふ開扉が一つありましたが頑丈な錠前が懸て居るので幾分か安心しました。

處が禍は一つは來ぬ物と見えて日暮近くなりますと今度は東隣の廣間では、其日或聯隊の宴會が初まると云ふ騷ぎ、初めはそれ程でもなかつたのが、段々と興が增すに從つて喧しい事。戰爭で氣の立つてる人達ですから堪つた物ぢやありません。到頭良人が下女を呼んで何處か他の間を周旋しろと吩咐けたのが、どう間違つたのか向へ知れたんですよ。必と其下女がお酌をしてる上役に告げた、それを醉漢の將校がきゝ咎めたんでせう。

「喧しい？　喧しいとは何だ、帝國軍人を何と思つちよるか――。若い夫婦だ？　それなら酌をしに來い」

などゝお仕舞には此方へ飛込み相な見幕なんでせう。妾は固より良人だつて慄へ上りました。でも結局は重の人らしい聲で和めて吳れて無事に濟まし、幾分か騷も治りましたが、一時はほんとに生きた心地は無かつたのです。而し、此丈で平和條約を結んだと思つてたのは大間違、夜の十二時頃にコップを投げたり四股を踏んだりして三四十人一齊に「萬歲――萬歲――萬歲とやるんですから。而し其が最後でした。其代り妾達

の室の前を通つて行く時にはサアベルをがちやつかせ作ら口々に「奥様お眠みなさい」だつて。まあ仕方の無い者です、兵隊と言ふ者は。

でもまあ之で靜になつたと胸を撫で下して居ると、今度は西隣で銀行屋が廊下へ飛出して

「おゝい、葡萄酒を持つて來い——あんな旅つたらした事がない。腹は立つし蒸暑いし、

雨戸を開けて風を入れると、外は晝の樣な月夜でした。而しふと向の植込の中を見ると——妾達の眼の加減だつたのでせうか——其處に一人の漢が突立つてゐる。から腕組をして卷莨をくはへて居る風が確に晝間、隣の客を嚇したその漢ぢやありませんか……

「まあさう急き込まないでお聞きなさいよ。」と夫人は息をついで。

是から先は良人の話の受賣なんですがね、妾は幸か不幸かすつくり寢込で了つて起される迄何も知らなんだのです。良人は大切な役目が氣にかゝつてつい眼が閉らない、でも一寢入してから、ふと眼を覺すと、西隣の部屋で只ならぬ響がします。それに續いて、ばたばたと呻く樣な物音に雜つて何とも言へぬ物凄い唸聲がきこえると云ふぢやありませんか。

「ふん大將夢を見てるんだな」と思つて見ても其唸き聲の物凄い事、流石の良人も脣の色の變るのが明つたと申します。處が其聲が二聲程で止んで後は寂となりましたが暫くすると、如何でせう、隣の間の襖がそつとそつと開いて、此方に氣を配る樣な足音がぱつた〳〵と消えて行くではありませんか——それを、貴女、宵の内なら兎に角。誰も彼も寢靜つた二時三時と云ふ頃に、曇つた丸心の洋燈一つ點いて居る、薄暗い八疊間で聽くのでせう、氣味が惡い、何ら男だつて……

こんな時には何でも無い事迄妙に氣に掛るものです。良人は隣の客に附纒つてる若者の一癖ある相な顔相を一番に想出したと言ひます。何でも其男は無心を言つてる樣子だつたが、あの鞄に紙幣の入つてる事を知つてるに相違ない。あの屈強な男だもの、隣の部屋へ忍び込んで、老人一人片附けるのは譯もない。さう

思ふと禿頭を棒で打つける樣な先刻の音、も說明がつくし。凄い唸聲は苦悶の聲だともとれる。でも一方から考へると人を殺さうとする程の惡漢があんな下手な事をするとも考へられぬしそれに其隣の客だつて向の人間を知つてゐんだもの用心をしたに違ない。ですからそんな事はほんの想像丈で別に起上らうともせなんだと申します處がどうした機かふと夜具の裾の方、から隣の部屋との境目の、戸の處に眼を遣ると其處に何があつたと思ひます。



（夫人は團扇の手を止めて妾達の顏を見較べて）

一體宿屋の建合程お粗末な物はありません。襖の間から人が覗いたり、壁の隙から火が漏れたりするのは當然なんですから。

先刻隣の室に通ふ開扉があると申したでせう。錠前の掛つて居る——此扉と疊との間に五分許の隙間があるのです。その隙間から、眞黑な、薄平たい、恰度小刀の刃尖の樣な物が出て來るのが微な洋燈の火で見え

るのです。

蟲だらうか、蟲ぢやない。

よく見るとどうも液體らしい、洋燈の火で黑く見える液體が二筋か三筋の流になつて、靜に、靜に此方へ流れて來るのぢやありませんか。

もう疑ふ餘地はない。血、血、正しく血なんです。

＊　＊　＊　＊　＊

御承知の樣に主人は決して大膽不敵と云つた方ではありません。何方かと言へば氣が弱い方なんです。それを一目見た時は今にも大聲を擧げて宿の者を起さうとしたのですが、待て待て、自分の體を思ふと其は考物だ。と暫く其血の前に坐つて腕拱をした相です。咄嗟の間に良人の考へたのは斯うでした。

今騷ぎ立てたら宿屋中大騷になつて軈て巡査や探偵が來るに違ない。こんな人達は職掌柄他人の事は根問ひ葉問ひ、要らぬ事迄知盡さねば承知しない。自分等に少しでも隱立があると見たら肝心人殺の方は棄てておいて尋問するに相違ない。そして此方に用事があらうがあるまいが此事件の證人として曳出されるに決つて居る。ひきだされるのは良いとして大切な使が遲れて了ふ。――此場合主人の頭を支配したのは秘密事件の外何もありませんでした。一刻を爭ふ要件を帶びてるのだもの田舍の警察などで愚圖々々辯解はして居られない。

いざと云ふ場合には男つて大變な事をする物ですね良人は六時幾分に、驛發の列車がある事を時間表で見るや否や、隣の事件が露れぬ前に立つて了はふと決めたのでムいました。

＊　＊　＊　＊　＊

間の惡いお話ですが妾はそんな事少しも知らなんだのでした。ふと眼を開くと良人が洋服に着更へて妾の名を呼んで居るのでせう。蒼い顏をして何處となく樣子が異ふ物ですから喫驚しました。何か云はうとするのを押止めてこれこれの事件が起つたが脊に腹は替へられぬから思切つて立たうと思ふ事、妾が周章てるか周章てぬかで破滅か扶かるかが決るのだ此場さへ外せ

ば後の辯解は省の方から如何でもつくと例のはつきりした調子で云ふのでせう。初は狐につまゝれた樣に呆然として居ましたが直に其冗談でない事が明りました。斯うなれば絕體絕命良人の言葉に從ふ外仕方がありません。妾は人の殺された恐ろしさよりも、自分にそれ丈複雜な見當が出來るだらうかと言ふ心配で、胸一杯でした。額から油汗はだくだく流れるし立たうと思つても脚がわなく〳〵慄えます。かう眼に見える物がくる〳〵廻つて良人の顏が巡査に見えたり探偵に見えたりするのでした。

其内に永い永い夏の夜は黎明になりました。妾達はすつくり用意を整へて、いざ一か八かに取懸らうとする間際に、良人は例の開扉の方に行きました。それはもう流れる丈を流れたと見えて疊の凹みに黑く水溜になつてゐる、良人は其上にそつと座布團を載せました。

其時はもう宿の者がそろ〳〵起き出して、廊下には下男が顏を洗つたり、泊の將校の從卒が靴を磨いたりしてゐたと覺えます。而し死骸のある部屋は寂としてゐました。

まあ妾はあの廊下をどんなにして歩きましたらう。軈て二人は別に怪しまれもせず勘定場へ參りました。未だ勘定を濟まさねばなりません。良人は顏こそ蒼くなつてゐましたが憎らしい程落附いた調子で金を拂つてゐます。

今起きたばかりのお上はこんなに、早くお立ちなら其支度を致させましたのにと頻に斷つてる。昨夜は誠にお氣の毒樣で…あの三號のお客樣（と西隣の客を指して）さぞお喧しうて仕方がなかり相に厶ります、……へゝゝゝとお世辭許り云つて中々勘定書を呉れません。

處が折も折、其處へ下男が大狼狽に狼狽てゝ馳けて來たのです。妾達の部屋の方から馳けて來たのです。あゝ萬事休す！　妾は手近の柱を捕へたと思ふと、何も彼も見えぬ樣になつて終ひました。妾は卒倒したのでした………。

＊　＊　＊　＊

「しつかりしろ」とにこ〳〵し乍ら妾を抱き上げて居て與れたのは良人でした。物を言はうとする妾を眼顔で制して「なあに大した事はない、睡眠不足の精だらう」と快活に笑つてゐるのです。見ると何處にも大事の起つた樣な跡はない。お内儀は頻に恐縮し乍ら、

「あの葡萄酒を今拭かせますから、そしたら暫くお眠み遊ばせ。誠にどうも、はや……」と云つてるのです

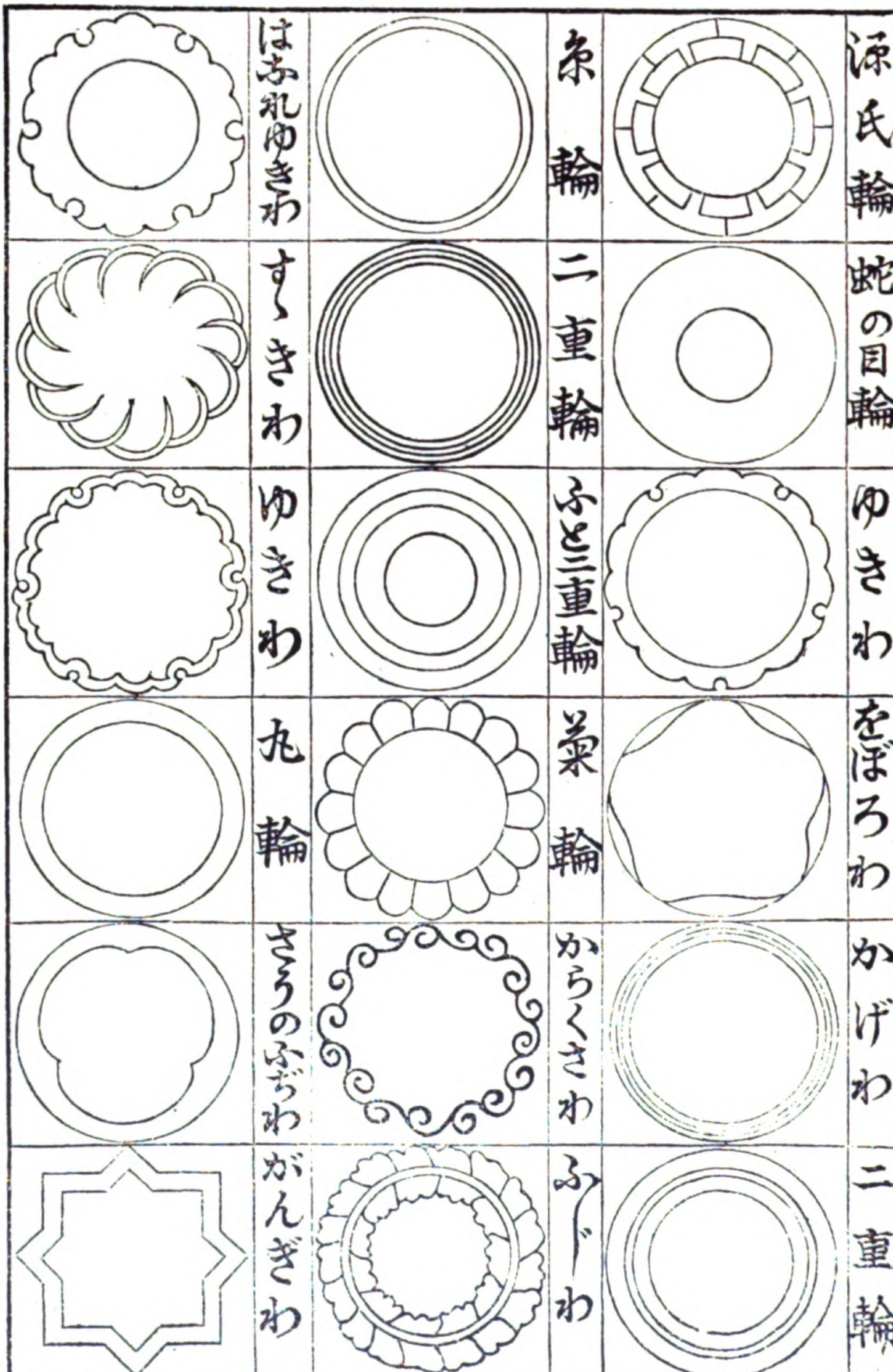
あゝ明つた、葡萄酒！　葡萄酒！　妾は頭を針でさす樣に痛い中にも主人と顔を見合せて、はつはつゝゝゝと心行く丈笑はずには居られませんでした。――

（了）

## 化粧料胡瓜の水

脂な肌に塗つて荒れるといへば、素人は不思議に思ふかも知れないが、クリームを常用して居る皮膚は、是を用ゐぬ皮膚よりは、ずつと　くなつてゐる、何となればクリームは皮膚を保護するものだから、若し常用して居る人が是を少しの間でも切らすと、丁度襟巻をしつけた人がそれを取去ると直に風邪を引くやうに甚だしい刺戟を受けるのだ。それで歐洲あたりではクリームを使ふ場合は、水を交ぜて掌でよく溶いて顔に塗るといふ風にする、さうすると皮膚が餘り弱くならず、又下手な人が白粉をつけてもよらないやうに誠によくつくのだ。然し何方かといへば西洋人はクリームを用ゐる事が漸次少なくなつて來た、有名な英國の重要輸出物品たる水の混り易いゴールドクリームの輸出高の減つてゐるのを見てもよく分る。さてそれでは何を多く使つて居るかといへば、クリームの如く皮膚を覆うて終はぬものを用ゐる事に勉めてゐる、即ちクリームより漸次濃潤なる化粧水に移つて居るのである。毎日化粧せねばならぬ人等は、化粧水の方がいゝと思ふ、殊にクリームは百人が百人の皮膚にあふものは殆んどない、化粧水として最良のものはキユーコンボ（瓜）を原料としたものでこれが現在非常に賞用されて居る．日本の花柳界に目下流行して居るキユーカンバグリセリンは瓜の種類にグリセリンを交ぜたものに過ぎない、若し自分で拵へるなら、舶來品の五十分の一位の値段で出來る、最良の香料を加へても十分の一で出來る。日本は地味の關係上香料は餘りよろしくないが、胡瓜許りは日本の方がすつと勝つて居る、昔から糸瓜の水を用ゐて居るが成程いはれのある事だと熟々感じたフランスやドイツの田舍へ行くと、あんな方法で少女が水をとつて喜んで居る、此頃は胡瓜の季節である、若し美しい皮膚にならうと思ふ人は胡瓜の心をとつてそれに少量の酢を滴し、これを袋に入れて糠を使ふやうにして顔を洗へばいゝ、劇藥のやうに急な効能はないが、そばかす等は一夏ひどいものでも二夏位もやれど殆ど除れて了ふ、鉛毒性の皮膚炎等は實によく治る。胡瓜の水で化粧水を拵へるには熟した胡瓜の皮をむいて適宜に刻んで土瓶にでも入れ、其の口にゴム管をはめ、冷却管（藥種店にある）につなぎ蒸溜する、溜つた液をとつてこれに等分のグリセリンを混ぜれば上等の化粧水が出來る。（北原美容院長）

# 輪の意匠



源氏輪
糸輪
はふれゆきわ
蛇の目輪
二重輪
すゝきわ
ゆきわ
ふと三重輪
ゆきわ
をぼろわ
菊輪
丸輪
かげわ
からくさわ
さうのふぢわ
二重輪
ふじわ
がんぎわ



# 月と女性美

白芙蓉

◎春の月

春まだ浅く料峭の氣肌に沁る夕、ゆくりなくも二人の客を得て、半ば咲きたる梅花を照す、七日ばかりの月光を評しあへることありけり。一人の友は、十二三の氣高さ少女の、けば〳〵しからぬ佳き衣着たるに似ると云へば、他の友は、若く美しく姫君の、さる事情ありて綠の黒髪を落し、墨染の衣着たるが如しと云ひぬ。われも些は童貞の淋しさを思へど、そは寧晩秋の月にも譬へつべし今宵の月は爽に籠る若き少女の、やや面やつれして色蒼白く、姿すつきりとして氣高きが如しと云へば、二人の友は、そは少しく慾深き言方なりとて笑ひぬ。各見處の異りたる中にも、何れも若くして氣高く、姿のすつきりとしたるを云ひあてたるは面白し。

櫻花の香霞む朧夜の月は、十八九の稍肥り肉にて愛嬌あり、色は薄紅を帶びて白く、顔の小道具一つ〳〵に美しからずも、大體に於て整へたる、心優しき婦人にも譬へつべし。温情人を惹きつくる處ありて好まし

◎夏の月

しと〳〵と降る五月雨の夜半に霽れて、鼠色せる雲の切目を洩れし月は、噂に高き美人の半蔀より庭の面など眺め居るを、垣間見たるやうの心地せられ、雷神いかめしう鳴り響き、黒雲空に走り、盆を覆す如き白雨のけろりと霽れて、東の空に十三日頃の月の出たるは、二十二三なる意氣な美人の、沐浴を終へて大柄なる好みの浴衣を纏ひ、薄化粧の面を涼風に吹かせゐるにも似て、水際立つて美し。肥りたる人よりは痩形なるが似つかはしく、優しき内儀などよりは、俠にして姿よきそれ者の方ふさはし。

同じく夏の月にても、花白き夕顔棚にかゝる月は、つゝましき人を思はしめ、波平なる海の果より洗ひ出されたる如く、團々として登る満月は、水色の絽の重にても着たる、肉付きよき優しき嫁御寮を偲ばしむるもをかし。

◎秋の月

蟲の音喞々として庭の隅より起り秋冷肌に快き夜、一天高く拭へるが如き空に懸れる明月は、月の中の最たるものなれど、餘りに氣高くして親しみ難きを覺ゆ。所謂三十三相を備へたる人は稀なり。若し天女なるものありとすればそれにも譬へんかまことや嫦娥は月の異名なり。

雲を伴へる月は却て趣多し、几帳の中に隱れんとする美人の後姿は殘り惜しさに一入人の心をひく。若夫れ明月の夜、一天雲を以て蔽はれ、月の有處のほの明るく、たゞそれのみ知らるゝ折は、幕を隔てゝ美人の行動を察する如く、ゆかしくも亦妬ましき心地す。

十日頃の晩秋の月は、三十を過ぎたる童貞の淋しさを思はしむ。身に黒き衣を纏ひ、頭に白布を蒙りたる舊教徒の婦人の、殊に痩せ姿なるは之を譬ふるに似つかはしきものと覺ゆ。

◎冬の月

裝へる老女に譬へられたる冬の月は、實にも物凄きものなるかな。彼の木枯吹く空に懸れる白き光は、人をして親しむ心を失はしむ。冷たく、凄く、而も冴えたる其の光よ、安達が原の惡婆が乃か、一つ家の老婆の眼にも譬へつべく、執念深き毒婦にも譬ふべし。婦人の溫情は其の何れの形に於ても求むること難し。

◎三日月

美人の眉に譬へらるゝ三日月の姿は、優しくも亦神秘的のものなり。八月十五夜や九月十三日のそれは別として、昔より二十三夜の月と等しく人に拜せらるゝも宜なるかな。細く西の空に懸れる其の姿は、眞や人の信心を惹くに足る。譬へば美しき貴女の犯し難き威嚴を備へたるが如し、濃情と床しさとはあれど狎れ近づけぬ思あらしむ。

# 家庭の風儀

植村俊平

## △御自慢の三枚襲ね

私は日本の親達くらゐ自己本位――親本位の親はあるまいと思ふ。多くは子供に綺羅をかざらせ、鮮やかに化粧させ、美々しく裝ひたてさせて、謂ゆる蝶よ花よの鍾愛かぎりなき有樣を衆人に見せて之を誇りとしてゐるが、それが果して眞に子供を可愛がるものか、即ち子供がそれを何よりの樂みとして喜んでゐるかどうかと思ふに、恐らく然うではあるまいと思ふ。一例をあげて見ると、子供をよく芝居につれて行くが、其時には紅白粉を限なく塗りたて、着物は縮緬の二枚襲ねとか、裾模樣の振袖とかをきせ、帶はまた非常に厚ぼつたい大きなのを立矢の字とかいつて脊丈ほどに脊負はせる。たゞ着てゐてさへ重苦しく熱苦しからうにそれがムッと咽せかへるほど人いきれのする土間や棧敷の、それも身動きも出來ぬほど詰めこんでゐる狹い桝の中へ、お雛樣然ときちんと坐つて居なくてはならぬのだからたまらない。汗は出る、顔はほてる、耐え性のない子供ほど苦痛は餘計ひどからうに、額の汗一つ思ふやう拭ふことができない。拭へば折角のお化粧が滅茶々々になる。子供の身になつて見たら、苦痛は何のくらゐか知れない。可愛がるのか虐待するのか全く



仰ぎ見る金鯱光る殘暑哉　（紅花）

判別に苦しまざるを得ぬ。

△不思議な世界に徨ふ

それで居て、親達は無上の滿足で、私の娘は容貌なら衣裳なら何處の御息女に比較しても敗は取るまい、見て呉れ〱と、可哀想に子供が汗ビッショリで苦んでゐるのも知らずに、己れ一人有頂天になつて喜んでゐる。子供に對して察しも何もあつたものでない。氣がつかぬといふのか、自分の樂みのために子供を犧牲に供してゐるのか、わからずやとも殘酷とも何とも評の仕様がない。それも子供が苦みながらも一方に面白がつてゞも居るといふなら未だしもだが、肝心の芝居といふものが亦子供に解りさうにもない。世話物、人情物を見たとても、お母さんは一體何が悲しくて泣くのか笑ふのか、子供は不思議の世界に案内なしに投込まれたやうに、たゞ呆然してゐる外はない。もし亦喜劇の類にしたところが、幼稚な子供の頭に、諷刺や諧謔がわかりさうにも思はれない。殘るところは可笑しな身振と卑猥な所作を見るだけで、歸つてからの眞似事は、いづれ碌なことではあるまい。しかも夫れさへ面白いと言つてやんやと囃したてる不心得な親さへある。

△關西の家庭と芝居

子供をいぢめ苦めるばかりか、知らず識らず子供を



澤蟹の爪赤らみぬ秋の水　（不水）

魔道に引き込むやうな芝居見物の、親達は競うて娘をつれて行かうとする。別して關西の家庭と來ては、芝居行が何よりの樂みで、日曜や祭日に娘をつれて行かるゝ所は、大抵お芝居ときまつてゐる。それもお伽芝居なら未だしもだが、今いつたやうな濡れ場、心中場が主もで、中には自分ばかりでは飽き足らず、子供にまで一緒に泣けとすゝめる母親さへある。恐れ入つた次第である。西洋では、劇場には子供の影など見やうとしても見當らない。一般の風として、充分に劇の趣味を解し、出し物の狙ひ所を解する人でなくては觀劇に行くものではないとなつてゐる。劇は大人の見るべきものか、子供の見るべきものか、芝居好の親達に御勸考を願ひたい。

### △野外の娯樂とおめかし

こは芝居の一例であるが、斯ういふ不注意は、單に芝居見物其他の室内娯樂場のみでなく、屋外運動場に於てもまた平氣で行はれてゐる。例へばお花見とか、紅葉狩とかは、實は屋外運動であるべき筈なのに、不心得の親達は例によつて三枚襲ねの振袖に、履物まで花見草履とかいつて無暗と厚い重いのをはかせて、パタリ〳〵と行らせて喜んでゐる。かういふ折りに、廣い處で思ふ樣跳びまはりたいと思ふのが子供の常であらうに、親達は依然として自分の娘を見せ物同樣にして、汗がにじんでも額一つ拭かせず、通行人の賞め言葉に夢中になつて、たゞ帶が解けはせぬか、白粉がはげはせぬかばかりに氣をもんで、親子共々運動などは其方退けの有樣で、何のために野外に出たのか、譯がわからない。これと云ふのも、つまり親の樂みが主で、子供の樂みは何うでもよしといふ自己主義でないまでが、親が樂しければ子供もまた樂しいだらうといふ愚かな推測からで、いづれにしても親本位から割り出した間違つた考である。

### △子供を審判官にする親

それからまた、上流社會の常識の發達した人であ

りながら子供のゐる前で人の噂、それも好い噂なら兎も角も、盛んに惡口をいふ人がある。子供のことだから解りもしまい。又わかつた所が別段氣にとめても居まいと、子供の傍にゐるのを全く眼中に置かぬ人がある。が感覺の鋭敏な、好奇心のつよい、印象のつよい子供の前で、他人の惡口を言ふと云ふのは飛んでもない間違である。頑是ないほど印象が强いのだから、子供のゐる前ではかういふことは別して愼むべきである。また更に恐るべきは、子供の前で親達相互が惡口を平氣で云ひ合ふことである。かくては親の威信も尊嚴もあつたものではない。特に甚しいのになると洗ひ浚ひ打ち撒けて自分達の短所、缺點、惡癖何も彼も子供の耳に入れて了ふ人がある。或は子供を審判官にして、「ねえ坊、お前のお母さんぐらゐ馬鹿はありやしない。困つた人だ、ねえ坊」と無理に母親を惡いと納得さする父親もあれば、「ねえ孃、お父さんこそ呆れた人だ、然うぢやないかと、これ亦無理强ひに自分の味方とする母親もある。中には又まだ舌さへまはらぬ乳呑兒を捕へて、「お父ちやん馬鹿」とか、「母ちやん馬鹿」とか惡口させて喜んでゐる親もある。何とも呆れきつた次第ではないか。今少し親は親、子供は子供と區別して、充分の注意を拂つて子供を敎養して貰ひたいものである。親本位でなく、子供本位で養育して貰ひたいものである。

### 一種の美髪法

一筋に長く延びる筈の女の頭髪の尖端が、時として樹木の林の如く三ツにも四ツにも分裂して然も醜き赭茶色を呈する事がありますが之れは甚だ髪の體裁を損するのみでなく、枝毛の烈しき髪は、如何なる髪結の名手に結ばしめても、決して完全なる髷に結ひ得る事はありません。且つ枝毛の增殖につれて、何時となく梳る度毎に切れ損じ幾程もなく見る影もなき短かき頭髪にして了ひます。それで若し此枝毛を生じたる場合には、頭髪を指程の太さづゝに分けて左右何れへかそれを强く捻れば、枝毛の尖端は自然跳れ上ります。それを絲蠟燭にて一本づゝ丁寧に燒き切るので、枝毛の髪は時々之れを行つて居れば頭髪の老衰を防ぎ且つ漸次に髪の美觀を增してゆきます。

# 天氣豫報

眞壁一郎

## 一　由るべくして泥むべからず

翌日の天氣を前日に豫報し得るまでに科學の進んだ今日でも、日常の生活に大關係ある晴雨の問題には誰しも朝な夕な心をなやますことが尠くはあるまい。色ある雲と靡く花の盛りはいはずもがな、秋郊の遠足を友と約せし朝の霧にも、もし、この儘の雨ともならばの心づかひに、嬉しかるべき門出をもだゆることは、しば／＼ある例ではないか。しかし、これらは何れも學校生活をつゞける間のことであるが、すでに、一家の主婦となつて、子女の敎養より奴婢の使役にいたるまで心を碎かねばならぬ人は天候の如何によつて、その仕事に影響を與へられることも多くなりますから、「明日の天氣」を氣遣ふことも一きは深からうと思はれます。一體、晴雨と人生とは、極めて密接な關係をもつものでありますから、今日の樣に科學の進歩せぬ時代にも、長い間の經驗を基とした種々の占候法があつて、晴雨を豫知しようと企てたのであります。

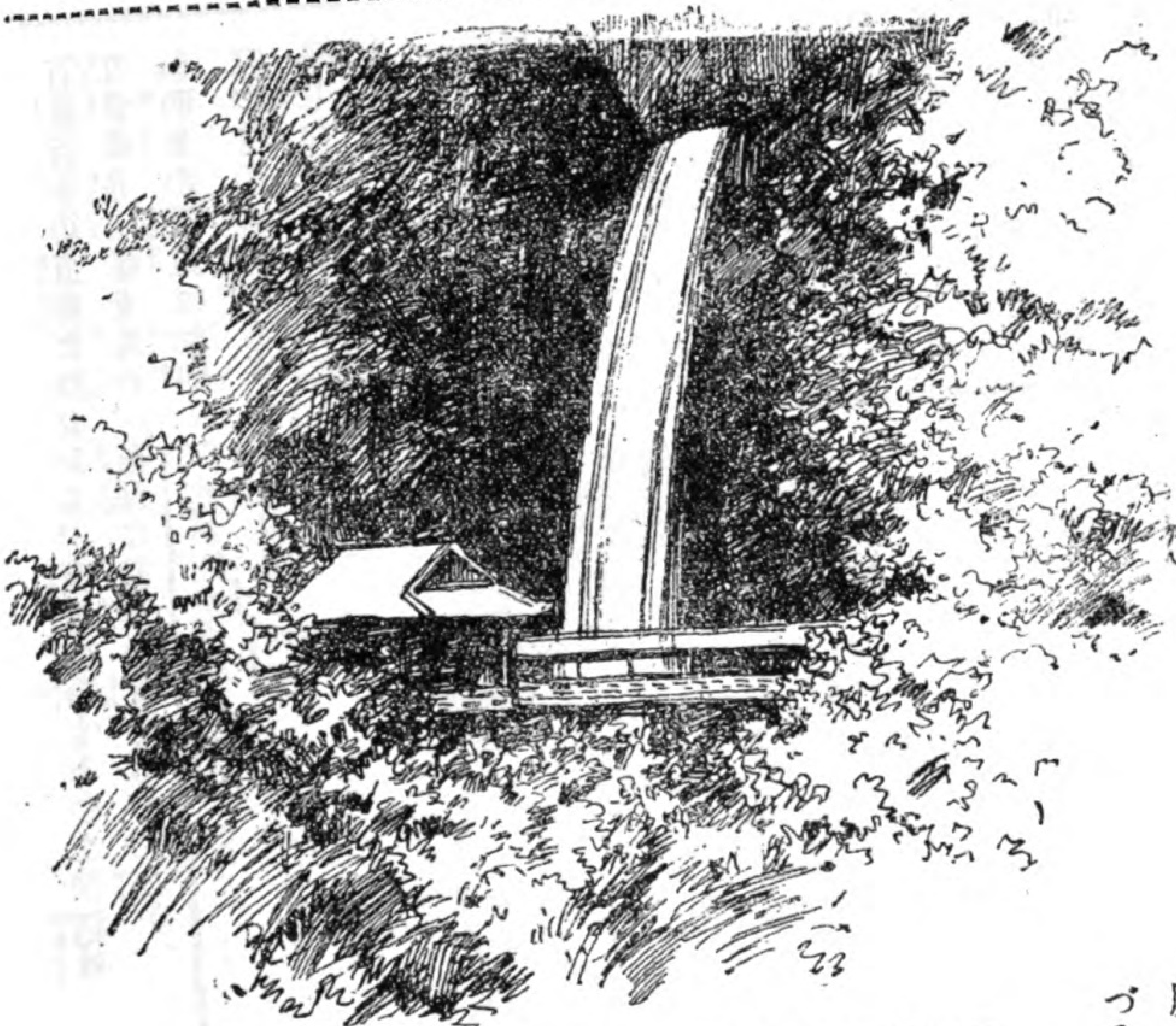
(1)朝雨に蓑をまけ。
(2)夕燒に鎌を磨け。
(3)姑のにつこりと朝日のにつこりとは當にならぬ
(4)七つ下りの雨と四十男の浮氣は急にやまぬ。

などといふのは、乃ちそれで、中には、隨分原因結果をとりちがへた樣な、いかゞはしいのもありますが、鳥獸蟲魚の動作や、樹木や天象の觀察によつて、普通の場合と異つた何ものかを發見し、之を基として晴雨を豫知しようとする所に、餘程面白い點もあれば、また、成程とうなづかれる節もあります。けれども、斯ることは、よるべくして泥むべからざる性質のものでありますから、あまり信じ過ぎますと、却つて馬鹿馬鹿しい目にあはぬとも限りますまい。昔話に、越後のさる處に占候の妙を得た老人があつて、その豫言は、

百發百中の有樣だつたから、領主の命とあつて、遥々江戸に召しよせられ、藩邸に能樂の催しあつた時、「明日の天氣は如何に」とのお尋がありました。すると、老人は、「晴れ」とのお答を致しましたが、翌日は、この豫言全くはづれて、篠をつく樣な大雨であつたので、いたく領主のお怒に觸れ、わづかに命だけを助けれて國元に逃げ歸つた。老人の知人は、この話をきいて、「何時もに似合はぬ不覺では無いか」といふと、老人は、「いや國元に居つた時は、彌彥山の雲をみて晴雨をいひあてるが、江戸では一向それがみえぬ。富士山に雲のかゝつたのをしるべに、明日は晴れとお答したのが不覺の原だつた。」と歎息したといふ話があるが、民間の占候法なども、ことごとく之を信ずるところの話に類例を加へるやうなことがあるかも知れぬ。その邊のことは、豫め御承知の上、民間に行はる占候法の一讀をお願する。



## 二　鳥獸に關する占候法



神戸 布引の瀧

鳥獸の動作を以て占候の資料とすることは、大分、廣く行はれたものとみえて、その種類も頗る多い。まづその重なるものを擧げると。

鳥類に關する占候法

(1)朝鳶は雨、夕鳶は晴。
(2)朝鳶に蓑を着よ、夕鳶に笠を脱げ。
(3)鳶が川の上で舞ふは雨の兆、山の上で舞ふは晴。
(4)鳶が高く舞ふは晴、鳶の鳴くは風。
(5)海鳥の多く騒ぐは大風の兆。
(6)鳥が水を浴びるは雨の兆。
(7)鳥が梢に巣をかけるは洪水の兆。
(8)鳥が下枝に巣をかける年には暴風がある。
(9)行々子の巣が高い所にある年は洪水がある。
(10)燕が低く飛ぶは雨の兆。
(11)雲雀が高く上るは晴。
(12)鶴が仰ぎ鳴くは晴れる兆、俯き鳴くは雨ふる兆。
(13)夕方、鳩のなくは晴天の兆。
(14)梟の宵なき糊すつてまて。

(15)宵の梟　雨梟　夜明の梟日梟、

この中で、(14)と(15)とは、同じものを殆ど反對にいつて居る。

獸類に關する占候法

(1)猫手水耳をこせば雨。

(2)猫が草を食ふと雨がふる。

(3)犬が顏を洗ふと雨がある。

(4)犬が草を嚙むのは晴天、高い所にねるは雨の兆。

(5)牛が吼えると、空が曇つて風が吹く。

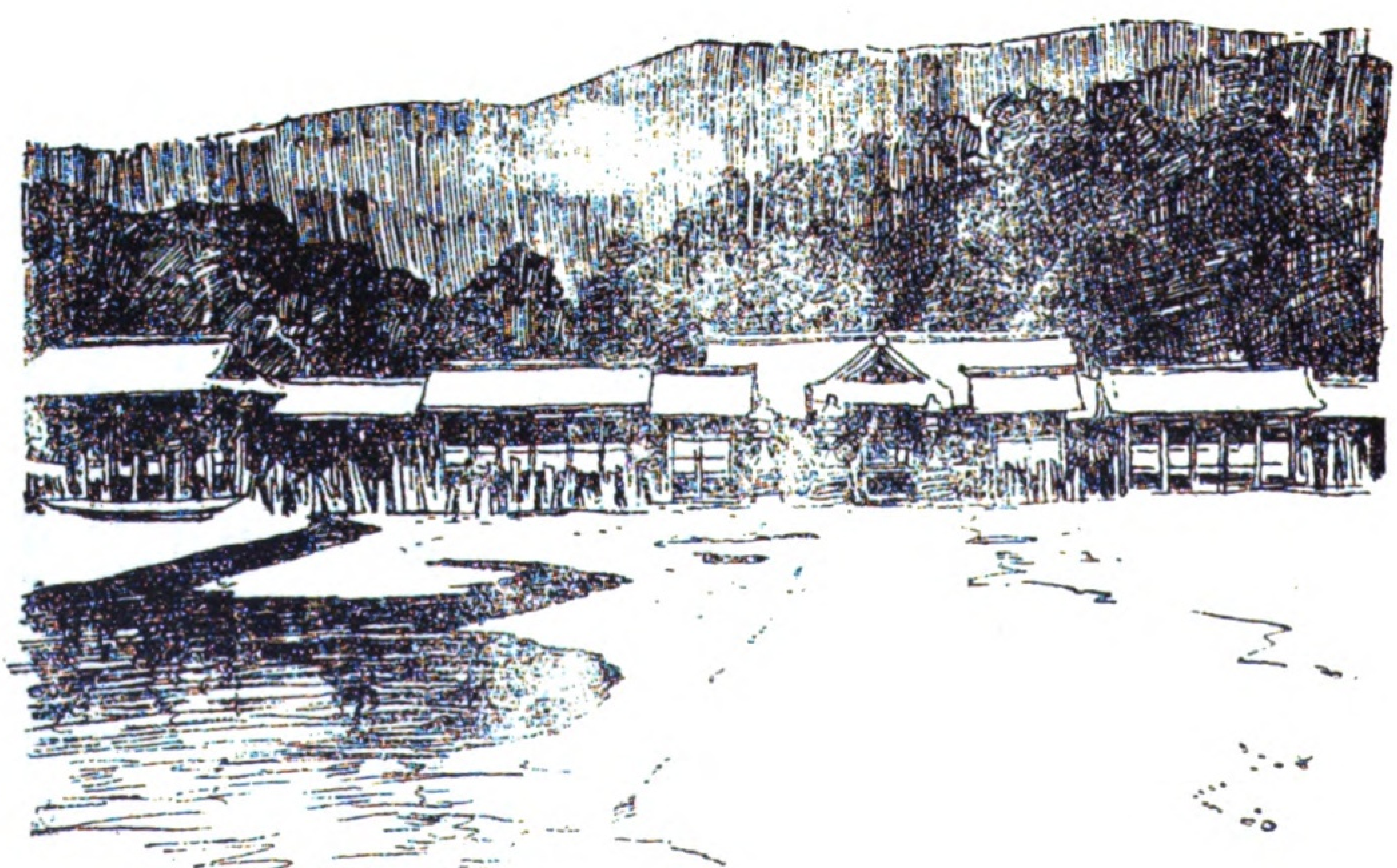
(6)馬が嘶くと天氣になる。

(7)狐がなくと三日の中に雨が降る。

(8)獺が高い岸に巣をかけるのは大水の兆。

(9)熊が深山を出るは大雪の兆。

獺の巣が高い岸にあるのを大水の兆とするのは、鳥の巣のそれと同じである。(2)と(4)とは、猫と犬との差があるだけだが、晴雨のちがひがあるといふので、『虎嘯けば風おこる』は一種の形容であらうか、『牛吼ゆれば風が吹く』と、民間の占候は敎へてある。



安藝宮島の廻廊

## 三　魚に關する占候法

鳥獸に關する占候法は、前に示した通りであるが、蟲魚の動作についても、やはり次の樣に占候の資をとつて居ります。

(1)蜂が物蔭に巣をかけた年は大風がある。
(2)蜂が南面の軒に巣をかけた年は暴風がない。
(3)蟻が穴を塞ぐは大雨の兆。
(4)蟻が穴の周圍に堤をつくるは降雨の兆。
(5)蟻の多く行きかふは大風の兆。
(6)羽蟻の群れたつは風雨の兆。
(7)蜉蝣の群れ飛ぶは風の兆。
(8)雨蛙が鳴くは雨の兆。
(9)雨蛙が低い所に居るのは晴の兆。
(10)蚊が空に集れば降雨がある。
(11)蚊が集つて動ずるは雷のある兆。
(12)ケラが家へ飛び込むは長雨の兆。
(13)蟹が陸へ多く上るは海嘯の兆。
(14)蛇が木に登ると、近き程に降雨がある。
(15)促織が家に飛び込むは雨の兆。
(16)蜻蛉が多くとぶは暴風の兆。
(17)蜻蛉が家に入るは雨の兆。
(18)蚤を火にくべて音がすれば天氣、音がせねば雨。
(19)朝、蚯蚓の出るのは晴れる兆。

(18)などは、廣くいはるゝことではあるが、如何はしいことの樣に考へられる。(13)の蟹が陸へ上るは海嘯の兆といふのは、海岸の民のよくいふことで、海嘯といふ程のことが無い迄も、海は必ず暴れると傳へて居る。魚の方は少いが、

(1)鮎の腹に砂のあるは降雨の兆。
(2)魚の岸に集るは晴れる兆。
(3)魚が口を揃へて水面にあらはれるは雨の兆。
(4)魚の多く泳ぎ出づるは雨の兆。
(5)鯉の跳るは降雨の兆。
(6)魚の餌につかぬは降雨の兆。

漁夫や船頭は、天候について絶えず頭をなやまして居

るだけ、占候に關する一種の能力を持つて居るものでありますが、彼等は、多く魚の動作に注意を拂ふからだといはれて居ます。私の知人で魚釣の名人がありますが、この人などは、魚の餌につくとかつかぬとによつて晴雨は豫知されるといつて居ます。（6）のそれなどは、この間の消息を窺ふに足りるではありますまいか。

## 四　さま〴〵の占候法

樹木や天象に基く占候法も大分數が多いやうですが、その中から、やゝ合理的なものをぬきますと、

（1）梅の花が下むきに咲く年は雷鳴が多い。
（2）梅の花が下むきに咲く年は雪が多い。
（3）茶の花が上むきに咲く年は雪が少い。
（4）梅の花が下向きに咲く年は霜が多い。
（5）栗の花盛りには日和が續く。
（6）梨の花の多い年には暴風がある。
（7）土用後に樫の若枝が生えると秋になつて暴風がある。
（8）唐黍の根が高いはの秋、暴風のある兆。
（9）唐黍の根が北にさす年は風年。

樹木に關するものは、動物のそれとは違つて、明日の天氣を豫知するといふのではない『秋になつて暴れる』「雪が多い」などといふ類で、頗るぼんやりしたものである。しかし、細かな注意を拂へば、そこに必ず、發見の緒は得られるものとみえて、二宮尊德翁が野州櫻町の復興に從事された頃、土用中に茄子を喰べて、この茄子は秋茄子の味がある。これは、天候の順調を失へる結果で、必ず凶荒の歲が來るであらうといはれて、櫻町附近の民に、蔬菜の栽培を奬勵したゝめ、他の地方は饑莩途に橫はるの慘狀をみたが櫻町領だけは、その憂をまぬかれたといふ話があります。話が橫路にそれたから、また、もとに歸へつて、

（1）朝霧は雨夕霧は晴。
（2）降る霧は晴れる霧、上る霧は降る霧（註、空から降るやうに見える霧は晴れ、地より空に上る霧

は雨となるの意。)
(3)夜あがりの天氣はもたぬ。
(4)夕虹は廿日の旱。
(5)朝虹に川越すな。
(6)朝虹はその日の洪水。
(7)晩の虹は鎌を磨げ。
(8)八つ時晴れ(午前十時)に傘はなすな。
(9)巳の時(午前十時)晴に笠ぬぐな。
(10)乾(北西)の夕立は鍋釜がわれる――(雷鳴の烈しきをいふ。)
(11)大風の翌日は舟を出せ。
(12)霧が深いと三日の内に雨が降る。
(13)大水が出ると天氣になる。
(14)大風の翌日は一人子の舟旅も出來る。
(15)日暮の雲やけ明日の風。
(16)星の光の定まらぬは風の兆。
(17)夕立は一日降らぬ。
(18)山が近く見えるは雨の兆。
(19)川の水が急に減ると雨がある。
(20)斷雲の亂れ飛ぶは暴風の兆。
(21)五月旱に米買ふな(その年の必ず豐年なるをいふ。)
(22)五月虹をみると麥の價があがる。
(23)三月の節句に雨が降ると果實がはづれる。
(24)十一月に虹をみると來年大豆が高い。
(25)十一月に雷があると、來年米が高い。
(26)初夏が早いとその冬は暖かい。
(27)夏の夕燒は秋の豐作。
(28)十月十五日に晴れるとその冬暖かい。
(29)夏沖の秋山(夏は沖方晴れ、秋は山の晴れてみゆるは晴天の意。)
(30)未の時(午後二時)に晴れる雨には蓑笠を脱げ。
(31)三日月の下に横雲があれば四日のうちに雨がある。
(32)月がお笠をつけると三日のうちに雨がある。
(33)旱の朝曇り。

(34)朝雲は禿頭がなく。
(35)草腐しの雨(秋雨をいふ)は七日つゞく。

## 五　俚諺化したる占候

この他、家庭をつくれる方には、すぐ頷かれるだらうと思はれるのは、

(1)小供が騒げば雨が降る。
(2)鹽が水になれば雨、乾けば晴。
(3)竈の火の燃えのわるいのは雨の兆。
(4)雪ふりの翌日は裸蟲の洗濯。
(5)燈火に丁字の立つは風の兆。
(6)鍋すみに火のつくは、雨の降る兆。
(7)鍋すみのやける翌日は風が吹く。
(8)瀬の音の高くきこえるは雨の兆。

この中で、(5)(6)(7)はあてになるまい。(8)は必ずしも瀬の音のみとは限らない。電車の音、汽車の音、波の響、汽笛の音、心をとめれば、晴雨を豫知する資料ともなりませう。また、いひまはしの巧妙なのでは

(1)乾の夕立と伯母御牡丹餅は來ぬ時がない。
(2)北風と賃取は日のうちだけ。
(3)北風と夫婦喧嘩は晩になるとやむ。
(4)乞食の袋と西の風は晩になる程大きくなる。
(5)夜あがりの天氣と貧乏人の嫁入は「ながもち」がない。
(6)七つさがりの雨と四十男の浮氣は容易にやまぬ。
(7)西風と夫婦喧嘩は夕べ限り。
(8)朝曇と女心は見る間に晴れる。

などいふのであらう。關東の一部にのみ行はれるものではあるが、

筑波晴れ淺間くもりて百舌鳴かば
　あめは降るとも旅もよひせよ

などいふのは、占候のそれとしては、その云ひまはしの傑出したものとみられる。地震の歌などゝいふのもあるが、これに比べると殆ど顏色が無い。(尾)

# 婦人記者の生活

青 磯

## △敏腕家が多い

何だ女の記者か、と一口にケナしてしまへばそれ迄で御座いますけれど、これだつて多少の抱負もあれば、自分相當の自覺もあるので御座いますよ。

堂々たる男子の方が、文官試驗では落第するし、やうやく學校は出たもの丶、就職の口が無く、銀行會社員も好ましくなければ、諸官省の臨時雇ひも氣が利かぬなど丶申ところから、流れ〳〵て所謂る羽織ごろ的の記者とは、失禮ながら一風逆つて、敏腕家も隨分多う御座いますよ。申過しは幾重にも御免あそばせ。

まづ第一に時事新報の下山京子さんは、神戸に御出の頃、常盤の女中に成りすまして、ずゐ分おもしろい觀察を紙上に發表遊ばしましたし、報知新聞にゐらつしやる婦人記者の方だちもなか〳〵一流のちやき〳〵だと承はつて居ります。何でも英語が大變よくお出來遊ばして、おまけに洋裝がよくお似合になるところから西洋人の訪問なんかは何時も此方が御出になるんだと申す事であります。今年の春から御出になりません樣ですが、東京日日の山崎千代子さんは、女子大學の國文科と英文科とを御卒業になつた才媛でしたが、何でも今は御結婚遊ばして一家の主婦となつてゐらつしやるさうです。いろ〳〵の雜誌や新聞で縱橫の才筆を振つてお出になつた與謝野晶子樣は、記者と申す側ではないにしろ、やはり筆を持つ女として有髯男子を後へに投げ飛ばす程の御精力御自信よく彼んな事を思ひ切つて歌にお作りなさると思ふ程でございます。それから禪學令孃で有名な平塚さんも青鞜の經營に從事して御出になるし、長谷川時雨さん八千代さん、田村俊子さん、尾島菊子さん、或は近頃ちと下火だけれど内藤千代子さん、何れも當代女文學家の白眉であらうと思ひます。さうして見れば、たゞ馬車馬的跳ノ返りの女だなど丶、一口にケナされは致しませんでは

御座いませんか。

それは兎に角、記者と一口に申しても、新聞記者もあれば、雜誌の記者も御座いまして、其實力及び人格は素より玉石混淆で御座いますが、私は自分の經驗上雜誌記者の生活を御話し申上げませう。




△婦人記者になつた譯

私が記者の末席を汚す樣になりました道行は、先づかうなので御座います。小學校に居ます時分から一番好きなのは作文で御座いました、と申すと天才振るやうですが、實際他の學科はまるで駄目でしたけれど、作文だけは何うやら滿點ちかく戴いて居ましたので、從つて課題以外に自分でいろ〳〵の文を作つては先生に添削していたゞきました。それで雜誌などに投書してたまには懸賞に當選したり、やれ天才だの才媛だのと褒められるので何より嬉しく、加之に自分の作が綺麗に活版になつて多くの讀者の視線に入るのかと思ふと、小さな誇りながら絕えず投稿を續けるやうになりました、其内に追々と雜誌の編輯の方とも御懇意になり、無理にお願ひして入れていたゞいたのが、今日までの道程なのでございます。

併し自負心の強い私には、これでも自分で開拓した運命だと思ふと、自から獨り嬉しく思はれます。

## △訪問記者の困難

私たちの仕事はいろ〳〵御座います。編輯の方から何々に就て調べろとか、又何々氏を訪問しろとか、さま〳〵の問題を出される事もありますが、自分から其方面の新聞の切拔を注意してゐて、ブラ〳〵出掛けて行つて材料を取つて來ることもあります。然しこれは其社の編輯の方針に依つて、決して一定しては居りません。

それから私の一番むづかしいと思ひますのは、訪問でございます。この訪問といふのはたゞ誰れでもいゝといふわけには行かず、學力徳望共に秀でた方のお話を聞いて、それが讀者の感興を引いてどんな結果があるかといふ、多少敎育といふ意味を含んで居る方でなくてはならぬので御座います。つまり趣味と實益とを有して日進月歩の活社會の先導者たる資格を備へてゐる方でなければならないので御座います。

それに婦人の方になりますと、記者と申すだけでもう、怖氣をさして、只今は旅行中だとか、病氣引籠中だとか云つて御面會をお斷りなさる方が多いので御座います、中には執事が横柄な顏して乞食を追つ拂ふやうになさる事もありますが、その時には、少しも顏色に出さず禮儀を亂さず丁重に會釋して引下る程の襟度を備へて居なければ、その邸へ二度と參ることが出來なくなります。

それから又先方に依つては、履き古しの駒下駄で乘り込むわけに行かず、便利の道迄電車で行つても、それから先はゴム輪ですつと乘込む場合もあります。殊に記者でも引見して下さる樣な夫人や令孃は、皆樣相應のおたしなみがありますから自分も相應に頭から足の先までもさつぱりしなければなりません。その骨折りつたらありません。

一回より二回と場馴れて來さへすれば、うまくお話しを引出して、粗末のない樣に筋を立てゝ聞きとる事

が出來ますけれど、最初の中は思つた事の半分も口が利けずお辭儀ばつかりして居るやうな間の惡い場合が多う御座います、然しこれも習ふよりは慣れろで、次第に度胸が据はつて來る樣にもなるのが可笑しいじや御座いませんか。

### △編輯からの御叱言

さあ御話し下さいましと、鉛筆なめて手帳を出すのは失禮で御座います故、私は決して筆記帳は出しません、然し物の名などを承はる時は、記憶が惡う御座いますからと挨拶して、そつと記入する事も御座いまするが、兎に角話の要點を頭に筆記して、お茶を飲みお菓子を頂戴しながら承はるのが、最も馴れた方の遣り方で御座います。

然し初めの中は筆記帳も出しますし、たまに出さない時は電車にかけ込むや否や、直ぐに忘れぬ内にと自分で覺え書をする事も御座いました。

こんなに辛苦して書き上げた原稿を編輯の方へ差出しても誤字が多いとお小言を頂戴したり、加之に、女記者は應用が利かなくて困る、吩咐けたらそれぎりで他に應用の頭が少しも働かない、話題に附隨して丙も丁もと話に實を持たせなくては駄目だと御眼玉をいたゞく事もあるのです。然しこれも修養の足らぬ故だと反省して、又新規蒔き直しをするイヤハヤ却々遣りきれたもんぢやありません。

### △一箇月の收入高

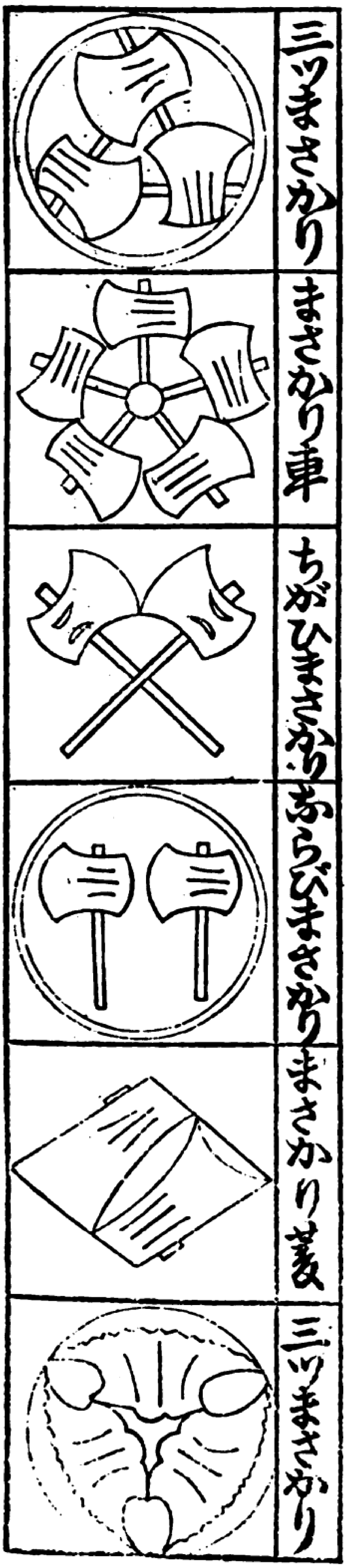
一箇月に何の位收入があるかとは、よく皆樣がお尋ねになりますが、私は何と御答へ申上げてよろしいか、自分で判らないので御座います。まづ一定して居ませんとお答へ申すのが一番正直なので御座います。

月給契約で入社して居らつしやる方なら直ぐ明りますが、原稿紙一枚何程といつた樣な風の方になると、其發行雜誌社及び其人の腕次第ですから、決して一定しては居りません。逝ける文豪國木田氏の未亡人治子樣の述懷談にも筆一本で生活するのは困難だと申さ

れた樣に、迚も充分な報酬を得ることの出來ないことだけは確かでございます。私のお友だちの矢張り婦人記者をなすつて居らつしやる方がありますが、此の方は三種類位原稿を書いて二十五圓位も貰つて居るので御座います。そして然も日々其社へ出勤して、編輯をも御手傳ひするのだと申して居ましたが、先づ月給で二十圓から三十五圓位迄と思つて居れば大差は御座いませんやうです。ですから單に自活をするなら宜しいけれど、この收入で一家を支へるのは、一寸困るので御座います。

又原稿料の方でも、何程でも書いたゞけ採用して貰へると云ふのではなく、自分でこれならばと興味を持つて充分力を入れて仕上げたものでも編輯の眼鏡にかなはない時には沒書される事になるのです。そして一枚の原稿紙でも、其内容によつては三十錢、五十錢、どうかすると一圓にも買上げて貰へることがありますが、こんな事は先づ當には成りません、ですから之もやつぱり月給制度と同樣で、平均二十圓以上三十圓迄と思へば先づ大差なからうと思ひます。然し女記者なんぞは、日本では恐らく明治の御代の產物で御座いますから、其實力の修養と精神の鍛練によつては、今後とも尙發展するでありませうし、また發展させなければなりません。

斧の意匠





# 女丈夫橫幕刀自の數奇談

婦人記者

私はこれまで不肖を顧りみず、軍人遺族授産會を企て、一生懸命に働らいて見ましたところ幸ひに七名ほどは一ヶ月九圓餘りの賃錢を得るやうになりましたので、非常に力を得まして充分授産場を發展いたす心組でございましたが、愛國婦人會の東京支部でこの事を聞傳へ、同じく足袋の授産場を設け初めましたから、最早この神田區には必要なきことゝ存じ、仕事する人々を支部に移し、引續き企てた今度の貧民兒童奬學會は幸ひに名士貴婦人の賛助を得て、どうにか物になりさうでございますから、誠に有がたいことゝ喜んで居ります。

私がこんな事業に微力を盡しますのも、畢竟サンザン貧苦を嘗めた經驗から聊か不幸な人達に同情を寄せ、御國恩の萬分一に報いたいと云ふ精神からでございます。

## ▲破鏡の不幸に遇ふて志を立つ

私は十九歳の時郷里岐阜で縁付ましたが、二十一歳の折、已むを得ぬ事情の許に離婚いたしました。二夫に見えぬ訓へを堅く守つて居る頃でしたから、終生獨身と意を決し、一修業して身を立てることを考へました。昔の士族は算盤を持つのを恥として居りましたけれども、私は性來數學が大好で八算見一位は略ぼ獨りで會得した位でしたから、大阪へ參つて專門に研究したいと親に乞ひましたが、却々許してくれませんので、勘當同樣の姿で家を出たのでございます。

### ▲按摩に導かれて雪の山越

只今なら汽笛一聲三四時間で往かれる大阪までの旅路に、一通りならぬ難儀をいたしました。家を出たのは丁度明治七年二月半ばで、雪は小歇なく降しきり、家々の氷柱は軒から地に達し、摺針峠を越ゆる時などは身を沒するほどの積雪がございましたが旅慣れぬ私は、合羽や草鞋の用意もせず、お召縮緬の羽織をぞろりと着流し、駒下駄を引ずつてとぼ〳〵と歩いたのです。丁度手引を連れて大阪へ行く按摩と道連れになり、その跡について不案内の山路をやつと辿りましたが、烈しい吹雪に眼が眩んで却々道は陟どらず、一日に三里か四里づゝ歩いては泊り、十二日もかゝつてやつと大阪へ着きました。

### ▲失敗した蠟燭の内職

大阪へ辿り着て或家に宿を定めましたが、懐ろには天保錢が一貫八百（八錢八リン）しかありませんので、早速糊口に差支へますから取敢ず宿の内儀が内職にして居た蠟燭の心撚をさせてもらふことに致し原料を求めて若干の物を拵へ、問屋へ持て往きましたら、一つも用ひにならぬと返されて了ひ、失望して居ますと、内儀が氣の毒がつて賃仕事でもなさつたら如何ですと勸めてくれました。裁縫は



石狩熊飛の瀧

子供の内から仕こまれて單衣なら朝から午後三時頃までに五枚、綿入でも三枚位は縫ひますから、差當り適當の內職と存じて先づ宿の物を三四枚縫ひましたところ、内儀は大層喜んで丁寧で早いと云ふことを近所へ吹聽いたしましたので、諸方から頼まれ生活だけは出來るやうになりました。その頃は月に一圓五十錢もおれば獨りの口すぎは出來たものです。



岩國錦帶橋

## ▲數學の教師に斷わられる

自活の方法がつきましたから、志望の數學研究を始め、高松と云ふ教師について開平開立を習ひましたが、苦なしに會得が出來ましたので、師匠が、貴女は天才があるから珠算よりも筆算を學んで高等の數學を修めた方がよからうと申し、兵庫の某氏に紹介してくれました。早速同地へ參つて師に見えますと、女が數學をやるのは無理だが、折角だから平算だけは教へやう。兎に角ローマ字（數字の事）が解るかと云はれた。私は昨夜覺えて置きましたと答へて一日の中に加減乘除の方法を一通り學び會得しましたので、師匠は見込があると云て熱心に教へてくれましたが、或時師匠の出來なかつた比例の一問題を私が考へて答式を得ましたところから、師匠がもつと良師に就けと云つて教授を斷り神戸の橋本氏に紹介してくれました。私は止

むなくそれへ參りましたが、又候斷られては困ると存じて不遜と知り乍ら先づ師の力を試みるために、正比例、轉比例、合率比例の中から難問題を三つ撰り拔き豫かじめ自分が答式を立てゝ置き、弟子入りの際、師に提出して見たのです。一人の師は三時間も頭を捻つて出來ず、他の一人の師も矢張困つて點竄でやれば出來ると云はれる。では點竄で願ひたいと申しましたら平算を學んで居る者に未だ點竄は敎へられぬと逃げられました。斯樣申すと私が豪いやうに聞えますが決して左樣ではありません。畢竟其頃一般に敎師の學力が低かつたのでございます。こんな次第でどうも適當の師に遇り會はず困つて居る內算術書の著者川元友之氏に就くことを考へついて境なる師の許に參り、例の三問題を提出しましたところ、流石に川元師は三十分間で解決されましたので、私は大いに喜んでこゝに留りました。

### ▲飲まず食はず宣敎師と論判

暫らく苦學をつゞけて居る內、外國人の學校に招聘されて敎授の手傳をしましたが、その外國敎師は私に度々基督敎を勸めました。私は、耶蘇敎は結構でせうが、日本には日本の宗敎があつて、四恩報謝の道を重んじて居ります。私は未だこの大切な四恩を送り得ませんのに、耶蘇敎に入つて極樂に往くことを望んでは濟ませんと斷りました。敎師は、貴女そんな事を考へて居る內、基督を信せずして若し明日にも死んだら地獄へ往かなければなりませんと勸めましたが、私は、四恩報謝が出來ぬ內に死んだら潔よく罪に伏して地獄へ往ますと言ひ張つて聽きませんでした。敎師はこの頑固なところが氣に入つたと見えて非常に私を愛し、倘更傳導を怠りませんでした。或時この外國敎師の命を受て私の宿へ來られた日本宣敎師は、午前十一時から夜の十一時まで熱心に說敎をつゞけましたが、困窮の私は御茶一杯御飯一膳出す餘裕もなく、飲まず食はずで論判した揚句、私は基督が暴波を鎮め、病者を癒したのが眞實であるから、そのお弟子の貴君方も私に

實證を示して下さいと肉迫しました。併し宣敎師はこの悄らしい私に對して少しも憤る色なく長時間溫顔を以て諄々と說き、雪の夜道を從容と歸り往く姿を見送つた時は、何となく神々しい感に打たれ、耶蘇にならうかとも思ひましたが、素志を遂げぬ内は漫りに心を動すまいと思ひ返したのです。その後もズッとこの刀自主義でやり通しましたが、樣々な境遇を經た今日は遂に兜を脫ぎました。その理由は、自分が一身を賭しても二三の人を感化することさへ難しいのに、千載の後、三歲の子供にまでその名を記憶される宗祖の力は實に偉大なものと感じたからでございます。

* * *

### ○髪と着物の釣合

日本の衣服に就いて見ると襟となるのは頸で其の上に比較的長い胴が載るから更に其上に來る頭は小さくなければ釣合を失ふと云つて坊主頭では却て大きく見せる傾きがある。つまり徒らにばつとして散漫の感を起させるからだ。其處へ行くと髷は能く出來たもので何れも皆見る者の注意を成るべく狹い範圍内に集めようとするもので又其髷に散漫な感じを與へさせない原因には衣物の襟の形が與つて力がある其の三角形が襟の三角形と反對に向いて居て其の間に帶が横に入り爲めに全體の形が非常に見よくなると同時に襟の上に向つて開いて居るのが頭を割合に小さく見せる原因をなしてる、從つて大きな髷も襟の中に入る程小さな作用をする事となり引いては上下の釣り合上髷が日本服には最も適したものとなるのであります。（田邊理學士）

## ▲煙草一服の間に考へた特許品

その後轉任先の新潟で肺患に罹りましたが、幸ひに全治して、それから東京の女子獨立學校に敎鞭を執つて居る内、或事情の下に職を辭しました。抑も私は若くして寡婦となり家庭の責任を盡さぬのですからせめて社會のために働らいて償ひがいたしたいと云ふ考へで暫らく敎鞭を執つて見ましたが兎角理想が實現されぬところから、慈善事業に着手して見たいと考へました。併し何をするにも生活の基礎を立てゝかゝらないと、自然利己心が出る恐れがありますから先づその方法より工



箱根白糸の瀧

夫しました。その間も矢張賃仕事は續けて居りましたが、或日袴の洗ひ張りをして、一寸煙草を一服吸ふ間に、ふとワク付シンシと云ふ物を發明したのです。御承知の通り普通のシンシ張は場所を塞げて市仕居の仕事には不便ですが、ワクへ入れると狹い場所で工合よく張れる、そのワクを工夫したので、試みに特許局へ願ひ出ましたら、幸に登錄されました。併し販賣法が少しも明らず、登錄の看板を見て買に來る人も偶にはありますが一向商法になりません。その内知人の勸めで新聞に廣告したので名古屋の人が特許權を二百五十圓で買ひに參りました。

### ▲男らしい商賣を探す

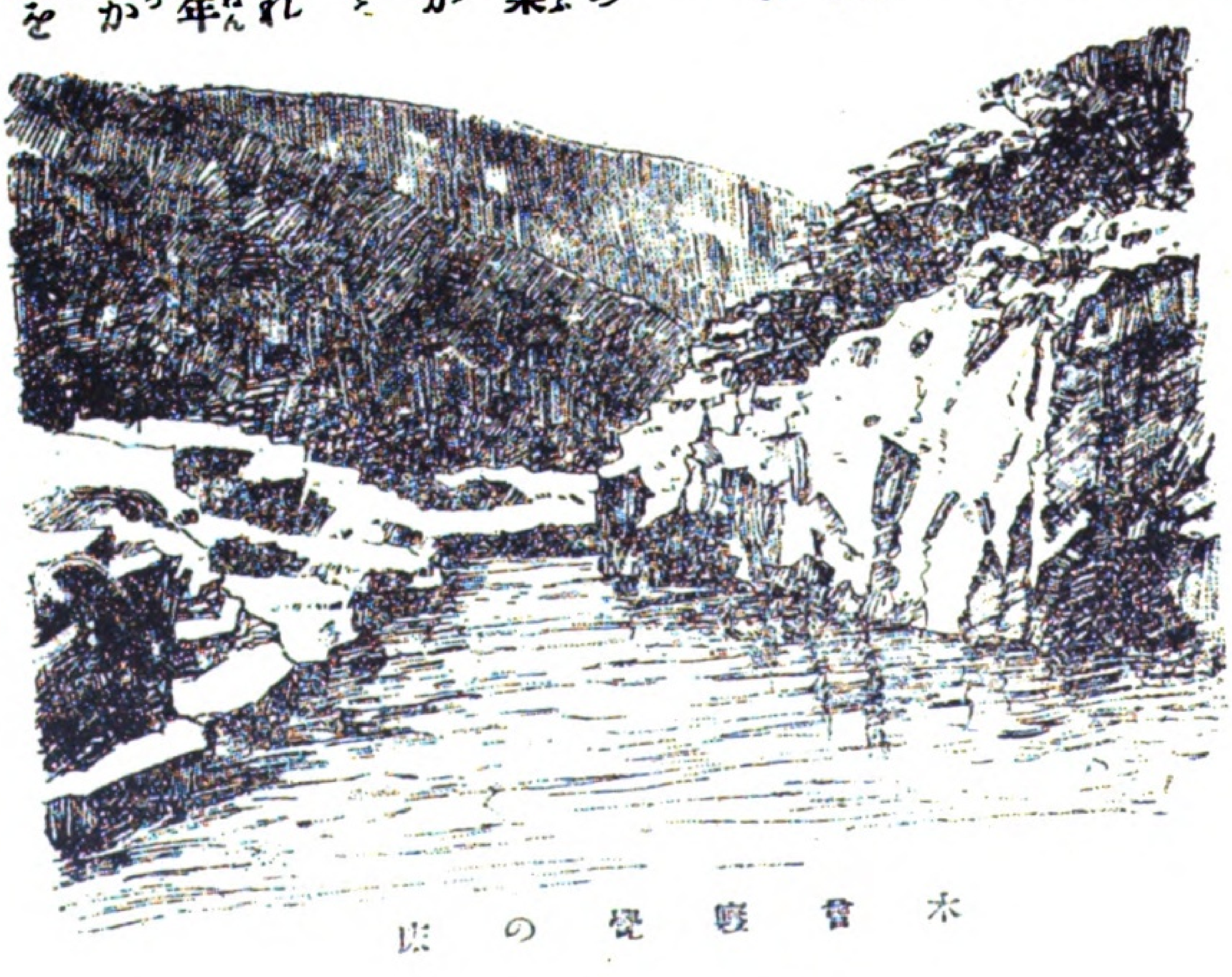
僅かながら資本が出來たので、何か男らしい商賣を爲て見たいと、無鐵砲にも材木屋を思ひ立ち、深川の問屋で聞合せて見ますと、材木商は男でも却々難しい上に、少くも千圓の資本が要ると云はれ、今度は鰹節屋を問合せますとこれも多額の資本がかゝるとの事、去りとて煙草屋や小間物屋はにやけて嫌だし、有金で出來る男らしい商ひは何であらうと考へて居ますと、或日出入の車屋が、安い炭屋の株の賣物がありますが如何ですと申込だので、丁度良い商法と早速これに定めました。

## ▲正義で行れば必らず勝つ

私は素より商買の道を存じませんが、私慾を捨て公益を圖ることを目的とすれば必らず成功する。假令成功しないでもこの主義で倒れるのなら遺憾はないと決心してかゝりました。商品の始末方は經驗のある奉公人に任せ、自身は得意先を廻り、主に銀行會社、學校などに賣込ましたが、商人風がないのと、品物の確かなのとで大層信用を得、可成繁昌しました。私が今日聊か會のために働らく基礎を作り得ましたのは、全くこの商賣のお陰でございます。商買には別に秘傳はありません。畢竟正義が勝を得るのでございます。

## ▲軍人遺族へ授產の計畫

日露の役後、軍人遺族授產の計畫に着手しまして、三十九年の一月から足袋縫を始めさせました。昔士族の家庭では、皆足袋を縫ひましたから、實は容易な仕事と思ひ、始めさせて見ますと、却々容易な職業ではありませんから、專門の足袋師を雇ふて教へさせましたが、初の内は恰好の惡いものばかり出來て賣物になりませんでした。併し元々救助が目的ですから稽古中でも相當の日給を與へましたので、日々人員が殖えましたが、無計算の慈善事業は永續が出來ぬと忠告されて、翌年の一月から規則を



木曾寢覺の床

改め、成績に應じて賃銀を支給することに定めましたから、ズッと人員が減つて眞面目に働らく者ばかりが殘りました。

### ▲足袋販賣の苦心

多勢の軍人遺族が毎日精出して縫ひ上る足袋は授産場へ山のやうに溜り、賣捌方に當惑しましたが、この會の設立以來、幹事をして力を盡された區内の貴婦人方と共に度々歌舞伎に出張して幕間に賣り、又夜分は錦輝館へ出掛て賣りました。足袋は不完全でも遺族の製品と云ふので大いに同情を得まして非常に賣れましたが、幹事方の骨折は一通りでありませんでした。私が足袋屋の奥様と評判されたのは、その頃のことでございます。

### ▲兒童奬學會の起り

皆樣の同情で遺族の製品が都合よく賣捌けましたので、相應の賃銀と二期の賞與を給し、尚一般遺族の慰籍として、年に一回づゝ慈善演劇を催すことも出來ました。この會は明治四十一年に一旦局を結びましたが私は別れに臨んで遺族に向ひ、貴女方の中に若し貧困で子供を就學させられぬ者があるなら、及ばずながら世話すると云ふ旨を述べましたので、爾後ポツ〳〵依頼して來るものがあり、遺族以外にも聞傳へて參るのが追々殖えました。私は初めて神田區内にもかく貧民があるかと驚いたのです。そこで會員組織の必要を感じ區長に御相談いたしましたところ、大いにこの主旨を賛成され、尚十五區八郡に擴張せよと奬勵されましたので、有力者の賛助を仰ぎ遂ひに兒童奬學會を起すやうになつたのでございます。

### ▲貧民の精神教育

私は嘗て貧民の精神教育方法を或名士に御相談いたしましたらば、それは大難事だから先づ上流婦人の精神教育に着手した方がよからうと云はれ、少しも合點がゆきませんでしたが、實際貧民の實情を觀察して成

程と感心しました。一體貧民を敎育するには、勢ひ物質の救助から始めなければなりませんが、等彼は兎角恩惠に慣れて怠惰となり、忍耐と義務の觀念に乏しく懐手して不足ばかり云つて居るものが多いやうです。以前私は不幸女會を設けて薄命の女子の相談相手となつたこともありますが、本當の不幸者は殆んど稀で大抵は我儘から不幸の淵に沈んだものでありました。特別な運命の者もありませうが元來貧乏や不幸に唯なれるものではなく、必らず自分が作り出したところがあるに違ひありません人間の幸不幸は、畢竟足ることを知ると否とにあらうと思ひます。私などは極度の貧や不幸に出遇ひましたが、どんな時でもその境遇に滿足して居ましたからいつも快よく日々の用務を盡して居ました。私は向後一身を捧げて貧民の精神敎育の方面に働らきたい希望でございます。

## ▲私の履歴を讀んで過つた細君

いつぞや私のお恥しい履歴が雜誌に載りました時、獨立で商買に成功した女と解釋されたのか、大分色々の相談を持ちこまれ閉口しましたが、或良家の細君などは、良人の仕向が少し面白くないとか云つて愛兒まで置て家を去り、私の許へ獨立生活の相談に來ました。私は驚いて懇々その不心得を悟し、自分は逼迫詰りし事情

### 女に最も害ある姿勢

□婦人科醫の立場から見て、女に最も惡い姿勢は髮を洗ふ時の姿勢と跼んで洗濯する時の姿勢、其他之に似た姿勢である。
□孰れも腰を浮して前に俯向くので胸部腹部の壓力が皆下腹部へ集り、其處に鬱血を來たし恐ろべき疾患の原因となる。
□健康な婦人でさへも、知らず知らすの中に障害を起すから況して婦人病の兆ある人は一層病を重もらせ往々死を招く。

□髮洗ひや洗濯する時の姿勢は、側から見ても窮屈さうに思へるが、世人が上品だとして怪まぬものは琴を彈く姿勢である。
□琴を彈く時は矢張體を前に屈めて盲人が物を搜ぐる樣な手つきをする。從つて深呼吸が出來ぬから、歌ひ出す聲も盲目聲だ。
□琴はどうでも、其妙齡の婦人の發育を妨げ姿勢までも惡するとを思へば琴は、殊に考へものだと思ふ。（醫學博士榊順次郎氏談）

で離婚して已を得ずかう云ふ成行になつたのですが、妻たり母たる天職を盡し得ぬ償ひとして、身を捨てゝ聊か御國のために働きたい覺悟であります。獨立生活は自由が利く位で私の眞似をなさるのは、以ての外の心得違ひ、早々御緣家へお戻りなさいと悟しましたところ・一旦出た家へおめ〳〵と歸られませんと云ふ。それなら七重の腰を八重に折り何遍でも詫言してお歸りなさいと申したのですが、かう云ふ誤解が出來ますから、私の履歴は成るべく申上たくないのでございます。

## ▲婦人と國家觀念

生意氣な申分ですが、近頃舶來裝飾品の需要が盛んになりつゝあるのは心配なことでございます。御承知の通り戰後の國債を日本全國民に割當ますと、赤兒にまで四十六圓餘づゝの負擔がかゝつて居る次第ですから、婦人方はせめて輸入品の需要だけも節約して御國の憂を省く心掛がありたいものと思ひます。內地製にも結構な裝飾品がありますのに流行に趁はれて下々の者まで舶來品を身に飾るのは大に考ふべきことであらうかと存じます。

## 豆腐の鑑別法

豆腐の滋養分に富んで居ることは牛乳以上だが・其の腐敗の速かなことも牛乳に優るとも劣らない程です。豆腐の新らしいのは輕して嗅いで見ると一種の佳い味を覺えます、之れを嗅ぎ分けるのは畢竟習慣であるから、新らしい豆腐の香を五六度も注意して嗅いで置くと其習慣は立派に養はれます。今一つの鑑別法は肌と光澤であるが、之は原料たる大豆の種類や水の性質に依て一様には云はれませぬが、新らしいのは何とはなしに肌がしまつて光澤も良く見えるものです。保存法も理窟の上からはいろ〳〵有りませうが・暑い時に氷に漬けて置くなど云ふ不經濟は迚も一般に行はれず、去りとて冷水に浸して置いた位では思つた程の効能はありませぬ。其れで今日作つたのを明日まで保存して置く必要のあつた場合は、矢張り茹でゝ置くのが一番安全です。併し唯普通の水を沸かして茹でたのみでは、豆腐中の蛋白分が凝まつて硬くなる許りでなく、多くは鬆が立ち易いものです。それで少量い葛を溶いで其れを湯の中に混ぜて茹でると、硬くもならず鬆も立たずに新らしい時其の儘に保存が出來ます。湯豆腐をする時などは必ず少量の葛を溶いで湯に入れる方が・風味の上に特別の趣きが味はれます。都會地に在ては一日三回も四回も豆腐賣の呼聲を聽きますから、何時でも新らしいのを買はれるやうに思はれませうが、能く鑑別法を心得て買はぬと時として、酸味のある腐つた豆腐を買ふ虞れがあります。



# エスキモー乙女物語（後篇）

佐々木邦

娘は美事お世辭で丸められて、たわいもなく有天頂になつた。さうしてお仕舞際の批評に對して再三謝意を述べた。彼女の聲と眼とは明白に心の底の感動を示してゐた。間もなく彼女の言ふやう。

『しかし矢張り浮世でムいますわね。お天氣の日ばかりはなく、曇つた日があるのでムいます。財產といふ重荷はナカ〳〵肩に答へるもので、時とすると貧乏の方が――少くとも無暗に金持でない方が結局幸福ぢやなからうかと思ふ事もムいます。近所の人樣が通り過ぎながら目を睜るのを見たり、『彼だ――彼です――金滿家の娘は！』と愼みやかに囁くのを聞いたりするのが辛うムいます。さうして人樣は時々悲しさうに、『有るところには有り餘つて、無いところは皆無ないものは釣針だ。彼の娘は釣針の裡にゴロ〳〵してゐるが俺の家には一本もない』と被仰るのでムいませう。眞正にお氣の毒でムいますわ。私が子供で家が未だ貧乏だつた頃は私共は戶を開けた儘寢たいと思ふ時は開けた儘寢ましたが、しかし唯今では私共は夜番を置かなければなりません。其頃父は何人に向つても溫良で愛想が好うムいましたが、唯今では嚴めしく横柄に構へてゐて他人に心を許しません。昔は何よりも家庭を大切に致しましたが、只今では釣針の事ばかり考へて歩いて居り

ます。さうして財産があるものですから、皆が父に媚び諂ひます。以前には父が冗談を申しても、笑ふ者は一人もムいませんでした――其筈でムいますよ――何時も古臭い牽强けた拙い洒落で、冗談の要素となる滑稽趣味が全く缺けてゐるのでムいますからね。しかし只今では何人でも此の詰らない冗談に大笑ひをして、お腹を抱へるのでムいます。さうして若し然うしない者があるから、父は酷く氣を惡くして、其を面に表すのでムいます。以前は父の意見を訊きに參る人もなく、縱し又父の方から進んで申したところで少しの價値もないものでムいました。今でも價値のない事は矢張り同じでムいますが、其にも拘らず、皆は事毎に父の意見を尊ねて、褒めちぎります――さうして父は元來節制もなく掛引は全く知らない方でムいますから、褒められたら褒められたで、益々鼻を高く致します。這麼次第で父は此部落の氣風を下等に致しました。昔は卒直な男らしい人種でムいましたが、唯今は鄙しい僞善者ばかりで、奴隷根生は骨の髓まで沁込むで居ります

私は密に富豪と呼ばれる方々の遣口を憎みます。私共の部落は以前は質素な單純な人民で、先祖の拵へた骨の釣針で滿足して居りましたが、唯今では貪慾に心を奪はれて、外國人の鐵の釣針を手に入れる爲めには名譽も品性も悉く犧牲に供して顧みないといふ有樣でムいます。しかし斯ういふ情ない事柄を長々とお聞かせ申してはなりません。で、お話を以前に戻しまして、先刻も申上げました通り私丈けの爲めに愛されたいといふのが豫々私の空想なのでムいました。

待てば海路の日和とか申しまして、私の此空想が到頭現實になりかゝつたのでムいました。或日他所の人が通りかゝりました――名はカルラと申すと其方が被仰いました。私は其方に私の名を敎へ、其方は又私を愛すると被仰つて下さいました。私は難有いやら嬉しいやらで、胸が躍りました。と申すのは私は一目見て其方が懷しく、又お慕ひ申してゐると申上げたのでムいます。すると其方は私を抱き締めて、難有い、實に滿足だと被仰つて下さいました。そこで私達は連れ立

つて、身の上の事や樂しい將來の計畫を話しながら、大浮氷の上を遠くの方まで歩いて參りました。さうして到頭草臥れた時、其邊に坐つてお辨當を開きましたと申すのは其方は石鹼と蠟燭を持つてお在になり、私は鯨の脂肪を少し持つて參つたのでムいました。私達はお腹が空いて居りましたから、那麼に美味く戴いた事はムいません。



其方の部落はずつと北の方を歩いてゐるので、承つたところ其方は私の父の噂を一向に存じません。是が何より嬉しうムいました。私の申す意味は此邊に金滿家があるといふ評判は聞いて居りましたが、其名は知らなかつたといふのでムいます。それでお判りでムいませう。其方は私が其金滿家の總領娘だとは存じつこないのでムいます。無論私からは那麼事は話しませんでした。で、私は到頭私丈けの爲めに愛されたので、滿足致しました。私は眞

正に嬉しう厶いました――迚も貴君にも想像がおつきになりますまいね。

其中に夕御飯の時刻が迫りましたから、私は其方を家へ御案内申上げました。屋敷へ近づきますと、其方は大層驚いて、斯う叫びなさいました。

『立派で厶いますなあ！ 彼が御尊父さまのお宅で厶いますか？』

其言葉の調子を聞き其目に浮んだ感歎の色を見た時私は情ない心持になりました。が、しかし其感は直樣消失せて了ひました。其くらゐ私は其方を愛して居り又其方の御樣子が如何にも立派で氣高く見えたので厶いました。伯父叔母從兄弟家中皆其方がお氣に召しました。そこで私共は大勢のお客さまをお招き申し、家を緊乎と閉めてランプを點け、室内が程よく暖つてから、私の婚約の祝宴を始めました。

御馳走が濟むだ時、父は例の虚榮心を壓へ切れず、其財產を見せびらかして、思ひもかけず一大富豪の養子になつたといふ事をカルラに悟らせたくてなりませんでした――要するに父は相手の喫驚する樣を見て慰めたかつたので厶いました。私は泣いて宜いものなら泣き度う厶いました――しかしお諫め申すも益ない事と承知致しましたから、私は何にも申さず、唯其場に坐つて、凝つと怺へて居りました。

父は皆さんの見てゐる前で、ツカ／＼と藏に入り、例の釣針を持つて參つて、其をパラ／＼と私の頭の上へ振り蒔きました。すると釣針は忽ち高座の上私の許嫁の膝の邊へキラ／＼として飛び散りました。

申上げるまでもなく此の驚くべき有樣に青年は稍少時息をつく事が出來ませんでした。彼は唯茫然として目を睜り、何うして一個人が這麼莫大の富を手に入れたかと怪むばかりで厶いました。それから間もなく彼は晴々したやうに面を上げて、斯う申しました。

『成程、其では貴殿が彼の音に響いた財產家で厶いましたか！』

父始め其他の者は皆嬉し笑でお腹を抱へました。さうして父が這麼物は塵芥同樣何でもないといつたやう

な無頓着の様子をして寶物を掻き集め、藏へ置いて來た時、カルラの驚きやうは全く一通ぢやムいませんでした。彼の申しますやう、

『斯ういふ御大切の品を貴殿は勘定もなさらずにお藏ひなさるのでムいますか？』

父は然も得意さうに大笑をして、申しますやう、

『はてさて、高が釣針一二本を然う大仰に申すのは今迄貧乏を爲通したといふ白狀と同樣ぢや。』

カルラは慌てゝ首を下げました。さうして斯う申しました。

『眞に御道理でムいます。私は彼の寶物の中一本は偖置き、一本の尖丈けの財產も持つた事がムいませぬ。實を申しますと、今迄に私の承知の中で一番の金持が三本と申す有樣で、三本ぐらゐは數へなくても分りますから、數へて實際面倒甲斐のする程御所有のお方には唯今始めてお目にかゝつたのでムいます。』

父は又たわけもなく喜んで再び大笑を致しました。さうして釣針等は勘定も見張りもした事はないといふ風を其儘押通しました。御覽遊ばせ、父は外見を張つてゐるのでムいます。勘定しない所ぢやムいません。父は毎日勘定致すのでムいます。

想へば私は黎明に愛しいお方にお合ひ申して懇意になり、其から三時間して、夕暮に其方を家へ御案内申上げたのでムいました——と申すのは最早半歳の夜が間もなく來る頃で、日脚が短くなつてゐたのでムいます。私共は晩くまで謡つたり踊つたりして、竟にお客まさがお歸りになつてから、各自床に就き、間もなく私の外は皆安々と夢路を辿り始めました。私は餘り嬉しくて又胸が高ぶつて眠られませんでした。長い間床の上に寢轉んで居りますと、何か朦朧した影のやうなものが私の側を通つて、家の奥の方の闇の中へ紛れ込みました。其が何誰でしたか男でしたか女でしたか私には明りませんでした。少時すると其影か又他の影か私の側を前とは反對の方へ通り過ぎました。何だらうと私は考へました。しかし考へても何の効もなく、倘ほ何うも變だと思つてゐる中に私は眠つて了ひました

私は何時間眠りましたか記憶がムいませんが、兎に角急に目を覺しますと、父が恐ろしい聲で「大變ぢや釣針が一本足らん！」と被仰るのを聞きました。其刹那に何とはなく此事が私の不幸の前兆になるやうな感がして、私は慄然と致しました。さうして此の蟲の知らせは即座に疑念の餘地がなくなりました。と申すのは父が「起きろ、皆起きろ、彼の旅の者を捉へろ！」と叫び出したのでムいます。次いで四方八方から喚き罵る聲が聞え、人影が彼方此方と薄闇の中を慌しく往來致しました。私は大切のお方を助けに驅けつけましたが、唯待つてゐて身を悶える外何が出來ませうか——其方は最早人垣に圍まれて、高手小手に縛められるところでムいましたもの、ちやんと縛つて了ふ迄、私は其方に寄付く事を許されませんでした。私は其方の上に身を投げかけて、聲を惜まず泣き出しました。此間父や其他の者は私を嘲つたり、又其方を嚇したり罵つたり致して居りました。其方は這麼酷い目に遇ひながら毅つと凛々しく堪へてお在になりました。是が彌増して其方を愛しくし、其方と御一緒なら又其方のお爲めなら甚麼難儀を致しても露不足のないやうな心持になられました。其中に私は父がカルラを拷問に掛ける爲めに部落の長老を呼集めるやうにと命じるのを聞きまして、

「何でムいます？　失つた釣針を少しも探して御覽なさらずに？」

「失つたと被仰る！」と皆は嘲笑つて異口同音に申しました。さうして父は譯ひ半分に、「否、お控へ召され皆の衆。冗談事は御中止になされ。娘は盗まれた——否々、失つた釣針を探し出すと申す。嘸かし必ず探し出す事でムらう！」と附加へました。此言葉に皆は又哄と笑ひました。

しかし私は平氣なものでムいました——私には懸念も疑惑もムいませんでした。そこで私は斯う申してやつたのでムいます。

「澤山お笑ひなされ。今は貴殿方の笑ふ番でムいますが、追付け私達の笑ふ番が參ります。待つてゐて御覽

なされ』」

私はランプを持つて參りました。此厄介な品物が直ぐ樣見つかるだらうと思ひました。それで私は傍の連中が或は是は自分達の早合點かしらと思ひ直して眞面目顏になつたくらゐ落付拂つて、心あたりを探し始めました。が、しかし考へ出しても辛う厶いますわ。最初少時の間皆は固唾を飮むで居りましたけれど、私は其中に尋ね厭むで落膽して了ひました。すると私の周圍に冷評の囁が再び起り始めました。さうして其が段々と嵩じて參つて、到頭私が諦めた時皆は用捨ない笑聲を幾度となく私に浴せ掛けました。



其折の私の苦悶は何人にも察し切れますまいと存じます。しかし私の愛情は私の杖とも柱ともなりました。妾はカルラの側に坐り、其頸に縋りついて、斯う囁きました。

「貴君には罪も科も厶いません——私は能く存じて居ります。しかし私の安心の爲めに何卒貴君のお口から然うだと一言被仰つて下さいませ、すれば私は是から先什麼事になつても辛抱致しますから。」

彼は斯う答へました。

「ヲスカさん、御安心下さいませ。私は神かけて惡い事をした記憶はないと誓ひます。」

「それでは長老が參つても大丈夫で厶います。」

と私が言ふか言はないに戸外の方で雪を踏碎く音が聞え、次いで腰の曲つた連中が戸口に姿を現しました——

——長老で厶います。

父は繩目に掛つた人を式の如くに告發して、夜前の出來事を逐一申述べました。それから見張番が家の多にゐた事と家の中には家族と此の旅人の者の外何人もゐなかつた事を説明し、家の者が家の財産を取りませうか?」と言つて口を噤めました。長老達は稍少時默つて坐つて居りましたが、竟にお互同志耳打ちをして「是は自然旅の者に嫌疑が掛る。」と申しました——聞くに忍びない言葉で厶います。それから父は坐りました。嗚呼私は何とした因果なもので厶いませう!私は其瞬刻に愛しいお方の無罪を證據立てゝやり度う厶いましたが、何うして宜いか判らないので厶いました。

裁判長が斯う尋ねました。

「被告の辯護をするお方が厶るかな?」

私は立上つて、斯う申しました。

「何で此方が其釣針なり何の釣針なりを盜みませうか——?間もなく皆此方の有所になるので厶いますもの。」

私は返答を待つて立つて居りました。長い間何人も物を申しませんでした。唯皆の口から出る息が霧のやうになつて私の周圍に立ち昇りました。竟に長老は屢順に幾度か大きく頷いて、『此娘の申す事には一理あるわい。』と被仰いました。嗚呼此言葉を承つた時の心丈夫さと申したら——嬉しさも嬉しさで、其の短さも短さで厶いましたけれども。私は坐りました。

『何か此上申す事のあるお方は唯今申しなされ。後からは受付けませぬ。』

と裁判長が申しました。父は立上つて斯う述べました。

「夜前人影が闇の裡に私の側を實藏の方へ通り過ぎて間もなく戻つて參りました。今思ふと其が此の男らしうムいます。」

私は卒倒しさうでムいました。是は私丈けの秘密の心算でゐたのでムいます。神さまとても私の胸から秘密を引出す事は出來ますまいと思つて居りましたのに！

裁判長は嚴かにカルラを顧みて、

「申せ！」

と被仰いました。カルラは躊躇してから、斯う答へました。

「其は私でムいます。私は彼の美しい釣針の事が思はれて眠られないのでムいました。そこで私は單に心の渇を鎭め、少時罪なき歡樂を恣に致し度う存じて、彼處へ參り、釣針に脣を接し、頰を摺つた後、以前の通りに藏つて戻つたのでムいます。或は一本落したかも存じませぬが、決して心得違ひは仕りませぬ。」

嗚呼場所柄是は致命の告白でムいました。皆は恐ろしいくらゐ默つて居りました。彼は身の破滅を自ら公言したのも同樣、最早萬事休したと私は承知致しました。居並ぶ人々の顏にも、「白狀ぢや、而も卑劣な白狀の仕方ぢや。」といふ文字が明白と現れて居りました。

私は苦しい息をつきながら待つて居りました。さうして間もなく覺悟してゐた宣告を承りました。其が一言一句出て來るに從つて、刀物のやうに私の胸を抉りました。

「法廷は其命令によりて、被告を水責に掛く。」

嗚呼、此國に水責を持つて來た人が實に怨めしうムいます。此水責は數代の昔に何處にあるとも知れぬ國にから傳つて參つたのでムいます。其以前私共の祖先を占考其他の不確實な審判法を用ゐましたので、罪人とても時には命の助かる事もムいました。しかし私共無學な野蠻人よりも倘一層賢い人々の手で發明された水責に掛りましては決して然う參りません。是によりますと無罪の者は溺れますから、一點の疑念もなく無罪と判り、有罪の者は溺れませんから、同じやうに確實

に有罪と定ります。私は胸が張り裂けるばかりで厶いました、と申すのはカルラは無罪で厶いますから、海の底に沈んで了つて、再び歸つて來ないに定つて居るので厶ました。

それから後私は決してカルラの側を離れませんでした。別れるまでの間私は彼の腕に抱かれて歎き、彼は心の底からの愛情を私に注いで呉れました。さうして私は悲しくもあり又嬉しくもありました。竟に皆は彼を私から裂き放ちました。私は泣きながら皆の後に跟いて參り、彼が海に投込まれるのを見屆けて――それから兩手で顔を覆ひました。嗚呼、苦しう厶いました事！私は苦悶と申す文字の奥底までも味つたので厶います。

忽ち皆は大聲を上げて囃し立てました。何うしたのかと思つて、手を退けて見ますと、私は喫驚致しました。嗚呼、情ない事で厶います！カルラが游いでゐるぢや厶いませんか？「矢張り盜賊でした。私に嘘を吐いたのでした。」と私は申しました。私は呆れ果てゝ顔を外向け、其儘家路に急ぎました。

皆はカルラをずつと沖の方へ連れて行つて、大海を南へ漂ふ氷塊の上に乘せました。それから家の人達が歸つて參りました。父は私に斯う被仰いました。

「彼の盜賊がお前に這麼遺言を寄越したよ。私は此儘餓ゑやうが死なうが、朝となく晝となく又夕となく、ラスカさんを愛し、ラスカさんを思ひ、又ラスカさんにお目にかゝつた日を祝すると申すのぢや、ナカ〳〵言ひ廻しが乙で、一寸詩になつてゐる。」

「彼は畜生で厶います――もう再び彼の者の事は被仰つて下さいますな。」

と私は申したので厶います。さうして今彼の方が全く無罪でしたと思ひますと、私は何とも申譯がないので厶います。

五ケ月――長い悲しい五ケ月――が過去りました。さうして竟に毎年の御供祭が參りました。此日には部落の娘が皆顔を洗つて、髪を梳ります。私が一櫛入れますと毛の中から釣針が一本取れて參りました。カル

ラを死なせた釣針は彼の時以來私の髪の毛に宿つてゐたので厶います。私は歎き悔み父の腕に抱かれて卒倒致しました。父は呻きながら、『俺達がカルラを殺したのだ。何とも申譯ない。俺は今から一生笑はぬ誓を立てる』と被仰いました。さうして父は矢張り此誓を守つて居ります。其日から今日まで私は毎月缺かさず髪を梳きます。が、しかし後になつてから幾度梳いたとて何の効能が厶いませうか？』

斯くて憐むべきエスキモー乙女の身の上話が終つた之によつて之を見るに、ニウ、ヨークの一億弗と北極附近の釣針二十二本とは正に匹敵する財界の勢力である。しからば釣針を十仙買つて移住する事が出來るのに、ニウ、ヨークでマゴ〳〵してゐる貧乏人は馬鹿の骨頂と申さばねなるまい。(Mark Twain)

## 美術心と日本婦人

男女の別なく、一般の人に美術の素養の必要な事は云ふ迄もないが、就中婦人には美術の素養最も必要なるに拘らず、日本婦人には既に素養ある者殆ど皆無と云ふ可きは慨はしき限りである、勿論各女學校に繪畫の科目はあるが、甚だ不完全なもので、ほんの一通り畫の道をも修得させる事は出來なからうと思はれる。何故婦人に美術の素養が必要であるかと云ふに、婦人は男子と異り室内の裝飾、又は衣服の配合等を掌り、之れを自己の職務とせねばならぬからで、美術の素養さへあれば、充分の注意を惹き得る立派な室内の裝飾をなし、又誰が目にも美しく見好い扮裝をなし得られるのである。洋風の客間の配合が不調和な裝飾は、即ち其家の主婦の美術的素養のない事を明示するもので、歐米人との交際も紛々頻繁になる今日、實に恥かしい次第ではないか、又衣服の色などに付ても或色が流行すれば、誰も彼も其色の物を着用し、自分に其色が調和するか否かを考へずに、身幹が高くても、低くても、色が白くても、黒くても、一切構はず流行の色の物をひけらかす爲め、餘りの不調和に目を蔽はしめる事になる、滑稽の極と云ふの外はない、客間なり衣服なりの斯の如き不調和を避けるには、繪畫を學ぶが適當で、繪畫を學べば、色の配合や物の形の調和の解る事は勿論である上に、亂波した部屋の裝飾にも、拔目なき氣の利いた事が出來て、自分のみならず、家族全部に調和の整へる見好い扮裝をさせ得るが、美術は繪畫を學ぶ許ではないから、必ずしも繪畫を學ばればならぬとは限らぬ、繪畫を學ぶとなると、婦人の身には非常な憶怯を感ずるから、單に美術家に就いて色の配合等に關する理論だけでも聽き、美術と云ふ家の門口だけへでも、足を踏み入れる事が肝要なのである。婦人が一度人の妻となれば、三人や四人の小兒は出來るものと思はればならぬが、此等の小供を人の笑ひ物にする事は親として忍びぬ筈である、然らば其母親たる者は、美術的の素養を積んで、色の白い子、黑い子、脊の高い子、低い子、夫れ〳〵に調和した扮裝をさせる心懸がなければならぬのである、世の母親たる者はせめて原色と稱する色の調和關係位は心得て居て貰ひたい、日本婦人に美術素養のないのは、確に日本婦人の大缺點である

# 嫌はれる人と

◎燈火親むべく筆硯愈〻佳なる好季節來らむとす！

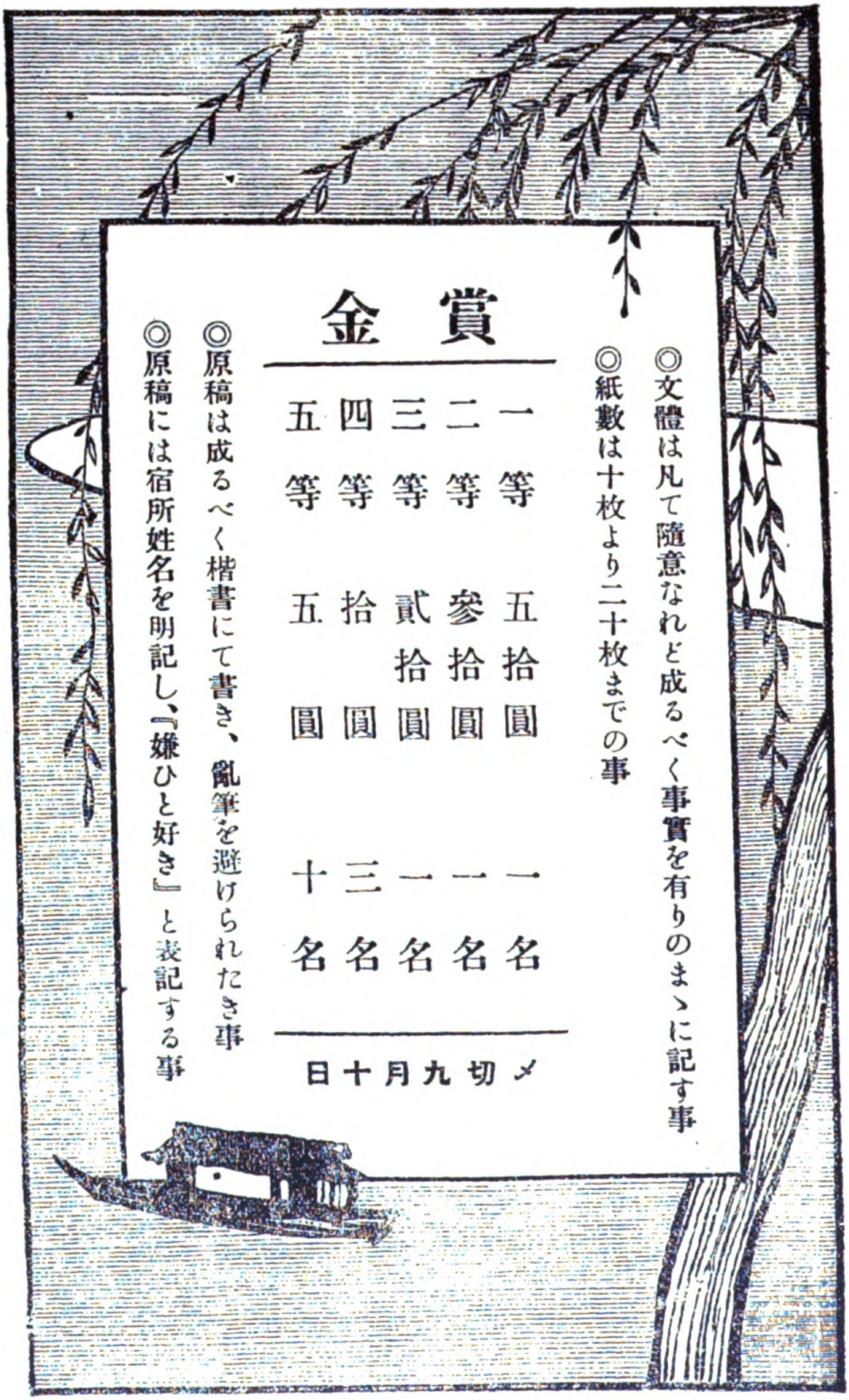
世に、好かるゝ人あり。嫌はるゝ人あり。一人に好かるゝものは大抵萬人に好かれ、一人に嫌はるゝものは大抵萬人に嫌はる。好かるゝは何が故か、嫌はるゝは何が故か。是れ大に研究すべき問題にあらずや。然り、處世の要訣として大に研究すべき問題にあらずや。女子の世界は感情の世界なり。好惡の世界なり。人に好かるれば其運命忽ち九天の上に昇騰すれど、一たび人に嫌はるれば其運命俄かに奈落の底に埋沒せらる。噫最も希望多くして而も最も戰慄すべきものにあらずや。

季や新秋の候に入るに際し、斯の興味深き問題を提出す。幸ひに腹蟲の喁々を抑ふることなく、飾らず、装はず、大に訴へ、大に叙べられよ。

# 好かれる人

懸賞募集
十月十五日發行

◎新秋玲瓏たると共に、願くば充實せる思想を傾倒せられよ！



## 賞金

| | | |
|---|---|---|
| 一等 | 五拾圓 | 一名 |
| 二等 | 參拾圓 | 一名 |
| 三等 | 貳拾圓 | 一名 |
| 四等 | 拾圓 | 三名 |
| 五等 | 五圓 | 十名 |

〆切九月十日

◎文體は凡て隨意なれど成るべく事實を有りのまゝに記す事

◎紙數は十枚より二十枚までの事

◎原稿は成るべく楷書にて書き、亂筆を避けられたき事

◎原稿には宿所姓名を明記し、『嫌ひと好き』と表記する事



# 和歌

## 一等

○九重の雲つひにはれず天が下かなしき雨の民草を打つ

佐賀　野田やな子

評　四海の人、々皆なこの感あり。

## 二等

○つぶやける子等みなもだせ言あらばかゝれとてしも大浅間鳴る

下谷　高橋ふみ子

評　豪快なる歌なり。一讀義留たるものを氣所せしむ

○燈火は春日の宮の大杉にあはくまたゝき秋雨のふる

堺　岡野千代子

評　景情いと神さびたり。

○うつくしき豐旗雲は榛名より利根たそがれの水にながるゝ

瀧の川　山田水月

評　雲を描して秋氣の〻かなるを思はしむるに、なんぞその言ひまはしの面白きや。

○山どよむ斧のひゞきに露散つて漣わたる明けの湖

本郷　横田佐久

評　秋氣山骨に入る時の景趣よく現はれたり。

○君まさぬ閨のともし火影ふけて枕に近くうまおひの鳴く

橫濱　山下やよ子

評　上品なる歌なり。詞調たひらかなる中に熱情のほの見ゆるもゆかし

## 秀逸

○こほろぎや花野はいづこ萩姫のみ膝の下に銀の鈴振る

大阪　小泉貞子

評　情調いて優なり。

○さら〳〵と黍の葉ずれに雨落ちて我が住む里に秋づきにけり

福島　坂本墨仙子

評　調子なだらかにして麗はし、さながら秋風の黍の葉を戦がすに似たり。

○ 下谷 杉島鶴子

香箱の中より出づる聲のごと草ひばり鳴く夜の靜けさに

評 纖麗にして美妙なり。

○ 水戸 川和みわ子

のどかなる稲荷の杜は夕やけて入日さびしく蜩の鳴く

評 よく實景を描し出せり。

○ 岡山 種子

京の秋御所の扉に落葉して禁制の札の搖れにけるかな

評 清趣寂寥

○ 成田町 白梅幸子

谷川の水の音さへ身にしみて哀れますなり秋の夕暮

評 思想やゝ古けれど、歌調いとなだらかなり。

○ 横濱 田卷よし子

秋風は二階の屋根の物干のあせし浴衣をはた〳〵と吹く

評 色褪せし浴衣さへ既に夏の逝けるを思はしむるに、秋風のはた〳〵と吹ける哀れさ一入なり。

○ 下野 萩原いち子

めだかすくふ小川に小雨降りながら夕日涼しくあきつ飛ぶなり

評 田園の小景描き得て面白し。

○ 下總 月見草

夏姫が舞の衣のいろどりか七色ゑがく虹のかけはし

評 比喩面白し。

○ 淺草 東ふみ子

陶もの師ちさき篦もて刻みゆく甕にも似たるおのが戀かも

評 比喩巧みなる割合に印象うすし。

## 佳作

○ 成田町 櫻井米子

朝露に色とり〳〵のうつくしく咲き出でにけり朝顔の花

○ 大阪 野村德子

月やどる葉末の露はきらめきぬ夕立すぎし夏のおばしま

○ 宇都宮 鈴木まさ

白玉の露ちる朝を命にて盛りみじかき朝がほの花

○ 神戸 百合子

湯あみせし後の端居に夏ぎぬのすそふきかへす庭の涼風

○ 高知 野田加奈子

河骨の葉末に夕日の影おちて夕風呂焚けばひぐらしのなく

○ 麻布 月岡波路

くれなゐの夕日はさして三尺のぬれば色なる我がくろがみに

○ 高知 竹崎梅子

秋風にゆられてなくか鈴蟲の聲おもしろき淺茅生の宿

○ 成田町 佐藤幸子

さら〳〵と清水したゝる岩かげに一ともとゆかし白百合の花
○　瀧の川　山田水月
ふじの嶺に金煙かけて落日は七浦めぐる白き帆に落つ
○　日暮里　わくらば
世の限り君をしたひてすごさまし名もなつかしきひぐらしの里
○　京橋　遠藤しのぶ
あこがれし戀の一字にうら若き胸の血汐は高鳴りにけり
○　埼玉　清水たか子
蟲啼く夜乙女心に湧き出でぬ涙ぐましき旅の思ひ出
○　宮城　齋藤靜子
暑き日をわが行く路のかたはらに紅緒のごともなでしこの咲く
○　群馬　空蟬
ひる顔の薄くれなゐに日のてりてひな路の晝の草いきれかな
○　横濱　高橋彌美子
糸を取るやつれし人の身の上をきゝてあかしぬ八王子の宿
○　長崎　前田縫子
青葡萄青きうれひのしたゝりにつゝまれて來し夏の夜の人
○　大分　齋藤ふみ子
病る母のお髪のやゝ白くなれるが悲しはつ秋の風
○　京都　波多野小春
暮がたの濁れる海の浪がしら秋の渚に白く光りぬ
○　愛知　なゝ代
やははだの乳のあたりのぬくみこそ若き乙女のほこりなりけり
○　神戸　深草しづ江
君は來ず時雨する夜は伽羅たきて何もおもはず琴ひきて居ぬ
○　長崎　鹽塚つたゑ
兄語り嫂語り興ずるをつぎへと外らす妹あはれ
○　大阪　竹本稲子
初秋や九十九谷にこだまして木曾のみ山は松をきこる音
○　東平　渡邊梅子
姉の子の日記罪なし昨日六つ今朝は七つの朝顔の花
○　名古屋　池部峰子
壯嚴と美觀と悲哀に包まれし涅槃平原日没の景
○　滋賀　土山芳子
夕燒の色薄らぎて靜かなる霞に入りぬ伊勢の滄海
○　山口　卯花子
嵯峨に寐て物思ふかな露滋き往生院の月の夕ぐれ
○　茨城　今泉義子
眞かゞやく大日輪を雲の掩ひ葉月は悲し雨そぼつふる
○　成田町　白梅幸子
夕暮に結びし峰の横雲のひまよりいづる十六夜の月
○　東平　渡邊梅子
小鳥一つ石より石に飛ぶ見えて秋に入る日の溫泉の宿
○　小石川　櫻子
ありし日の若き思ひにうそもなほ君が瞳の忘れかねつも
○　水戸　堺利濱子
白壁の土藏によりてすゝり泣く二十の秋を鳳仙花散る
○　横濱　紫子の妹
秋風は人足たえし山の湯の宿のしるしの小さき旗吹く
○　京都　野田サカエ

病院の窓にユーカリ若葉して小鳥歌へりはや夏來しか
○　新潟　美鳥

化粧する祇園の美妓の肌涼く京の町まち今朝秋たちぬ
○　高崎　村田嘉美子

淋しやなかく衰へし肉體のゆくべき人もなしと思へば
○　小石川　佐久間千代

こぼれかゝろうま盃に影さして銀月いでぬ大松ヶ枝に
○　豊後　佐藤雅子

夏祭り夢二が畫く人に似し女も見えたりあかき灯のもと
○　美作　杉山信子

新らしき女なりとてほこりかにのたまふ君の髭のあかさゝ
○　成田　小野寺英子

篠山の中に白百合咲き亂れそよ吹く風にひとりかなりぬ
○　美作　小川清子

さら／＼と一針ごとに運ぶなる手ざはりのよきモスリンの袖
○　神戸　靖子

若鮎釣る揖保川堤手たそがれて涼しき風に柳なびきぬ
○　小石川　中村つや子

みじか夜のみはてぬ夢のおもひでに涙ぐましき朝の雨かな
○　大阪市　竹木稻子

亡き友の柩おくればあはれにも聲ほそう鳴く野のきり／＼す
○　京都　都路桂子

花咲けど實だに結ばぬ秋草のさびしみに似る我が心かな
○　巣鴨　野口貞子

美くしき君が心にとらはれていつまでさめぬ我がこゝろぞも
○　下総　撫子

夏姫が化粧の水の掌を洩りし雫と思ふ夕顔の花
○　紀伊　みさほ

戀もすて虚榮もすてぬひたすらに子の生ひたちを今はたのしむ
○　上総　伊藤智子

秋の夜は靜かに更けて母と我れ言葉少なに縫織るかな
○　福岡　福永紅花

まくは瓜むく手は細しやむ母のみだるゝかみに夕月淡し
○　岡山　矢木武子

百舌のなく聲も聞えて山里の垣に亂るゝ白萩の花
○　山梨　青柳初子

朝靄に水草の花ほのゆらぐ母校去る日の淡きさびしみ
○　赤坂　石黒貞子

ふけし夜の廓の町のちひさなる紅提灯を窓に見まもる
○　北隣島　廣瀬春代

水無月やうす紫の霧分けてゆめの中ゆく菖蒲の髪
○　茨城　今泉義子

龍蛟の怒れる如き瀧壺にたをやめに似し白百合花
○　千葉　河原ゆき行

夏草の強きにほひをなつかしみ心しづかに死を思ふかな
○　京橋　山中米子

村雨のつゆそ垣根のあさがほもいろさえ／＼となりにける哉
○　福岡　馬場花代

病む姉とさびしく語るはなれ屋の夕闇に散る雛罌粟の花



# 俳句

天

松越して來る潮の香や簟　肥前　隈部信代

地

江南の美人幸あれ花芙蓉　京橋　吉村あい子

人

雨晴の萩眞白に風かろき　伊豆　土屋ひそ子

秀逸

秋風や病葉落つる空蟬　四谷　佐藤操子

朝露や紅緒の草履濡るゝほど　宮城　齋藤すみれ

名所粲紙紅葉押繪に旬も遲きて　攝津　松本實子

生垣に瓦斯燈青し秋の雨　水戸　川和美代子

蜥蜴光る井端石や棕櫚の花　尾張　鈴木照子

## 佳作

潮浴や松の風趣に遊ぶ人　福岡　福永紅花

夕立や叉柳の下の舟館　名古屋　岩田靜子

歌書といて灯にしたしむや秋の蝶　高田　永井久子

亂菊や白鷄かけるこぼれ蕊　姫路　よしこ

亡き妹が寧悲し林檎熟れ映えて　長崎　林田みき

萩暮れて灯なつかし讀書人　下關　山本芳子

笑む乳兒の顏懐かしや秋晴るゝ　兵庫　脇坂幸子

乙鳥の去ぬ日燈臺訪ふ見る　赤坂　長谷川清枝

水晶研ぐ水冷し白菊の宿　京都　元生留子

蟋蟀や馬市すぎし藁塵　福岡　山本年子

吊旗立つ淋しき町や鬱の米　本所　太田春子

白萩や客送る灯に袖屏風　淺草　山本春子

若稻や緋笠にかゝる土用風　廣島　上林芳枝

海ちかく宿とる驛や明やすき　北海道　齋藤たま子

今朝秋や櫛落したる涼　瀧の川　榎本ふく子

落鮎に水の灯影の揺れにけり　青山　森野英子

日盛や花の名合歡と聞くからに　宮城　齋藤靜子

朝顏やこの破れ垣も風趣ある　彦根　穗月

夕立や蚊垂小屋に辻君が　埼玉　秋山ユツ

柴折くゞるは誰か新妻ぞ秋立てり　群馬　清水きよ子

沼釣の今日も集ひつ菱の花　大阪　松浦くに子

夕立晴な施米あり寺の棕櫚茂り　名古屋　渡邊昇美

臥木伏石きらめき光る暑かな　京都　礒崎トミ子

雲の峯椰子の葉いたく萎びたり　朝鮮　佐藤つゆ子
かざし行く葬花白しや秋の蝶　本所　木村千代子
三ヶ月の眉あと青し今朝の秋　本所　木村公子
草鞋とく出月の庵すゝきかな　大阪　酒井すえ子
蟋蟀鳴いて新涼の香の高き　大阪　中川よし子
病室の疎き日ざしや白芙蓉　滋賀　中川君子
竹林に家あるさまや今朝の秋　下谷　大上しづ子
稲積みの馬響く土手木時雨哉　神奈川　山崎秀子
極楽活し夢かとも午睡醒めし守　伊豫　三浦悦子
須磨はもの〻夏冷し松根洗ふ波　攝津　律子
盂蘭盆や在所嫁きの姉詣る　福岡　松尾まさる
夕顔や風呂薪割りも一仕事　鶴岡　高畑けい子
童顔疲れを井に澄む心魚活ける　尾張　米倉花子
蟲啼くや墓草茂る夕月夜　埼玉　清水たか子
琴虫といふあらば笙虫もありぬべし　愛媛　近藤とめ子
講義だるき暑さ柳の垂れにけり　駿河　高瀬てつ子
短夜の寛ぎも病や水枕　奈良　蘆邊美洲子
夕顔や金魚養ふ垣隣　高知　中野安子
學童の壘合戰や蟬の聲　名古屋　櫻林脊子
花野原鳥なく一樹暮れ殘る　淺艸　春映子
白百合や蠛影し蓮の中　肥前　黒田てい子
稲妻や瀬のかゝりし與の音　横濱　大村壽々子
梨實の笠に夕日や赤蜻蛉　深川　増田峰
秋立つ日大魚を釣り落しけり　芝　小倉ため子
初霧に馬放ちけり小松原　麹町　川越せい女

坐右につむ好愛の書や更衣　埼玉　佐藤美子
蘆高に埋れ橋月の蚊喰鳥　愛知　六つ泉
一山の清水に寒き垢離場かな　出雲　長崎君子
丸髷を崩す女房や秋の風　石見　瑞枝
附箋して葉書戻りぬ秋暑き　博多　木村房子
名月の夜を逃げ去りし兎かな　下谷　杉島鶴子
一溪の氷を渡る狐かな　讃岐　福田こと
秋暑く十藥茂る厠かな　淺草　奥田春子
鮎すゝぐ小川の暮や月見草　靜岡　北川利子
雨の萩琵琶の悲曲にこぼれけり　福岡　服部いさ子
輪蜻蛉の飛ぶ殘礎桐の花遲き　尾張　木村不二枝
秋雨や佛師か宿の壺灯　栃木　石川喜代子
飛ふ星は戀の女神か天の川　栃木　石川あき子
海の幸の揃へ艫脚や夕立來ん　愛知　鈴木かなへ
御陸敷地見聞すことや秋悲し　瀧の川　山田水月
秋近き氣配覺ゆれ身を柱　神戸　山村香枝
名氏の家傳あり百日紅の照り　名古屋　宮川悦子
夏草やつゆふみわけて宮詣　長野　林千代子
みどり山八重なす邑や蟬時雨　三重　安田美子
据風呂に土音聞く闇とぶほたる　山梨　夢の女
木下流れの水媒花栩の冷し瓜　尾張　近藤たづ子
好物の西瓜割けども兄あらぬ　愛知　後藤伊都子
鳴息はてゝ雨靜なりなく水鷄　埼玉　秋山いの子
秋風や蟲葉を透る星光　紀伊　高野由子
南天の花ほろゝ小鳥美しき　周防　有賀みち子

## 新刊紹介

○最新洋菓子の調製（赤堀峰吉 赤堀道子 共著） 家庭百科全書第十一編として刊行されたるもの、著者が十數年來教場に於て教授せる實驗を本としケーキ。プデン。カスター。パイ等に亘つて西洋菓子類約三百六十種の製造法を四季に分ち、極めて簡明に何人にも解し易きやうに記述しあれば中流以上の家庭には必要の良著なり（一部定價四拾五錢。博文館發行）

○姉と妹の書簡（小野美智子作） 姉妹間の往復消息體にかきなしたるものなり、少女時代の優しき美しき心を口語體及び候文體にて叙べられたれば、讀物としても面白く、又少女書簡の參考としても絶好のものたり。（定價四拾錢、誠文館發行）

○遊覽地案内 四六倍判百五十頁、體裁優美、鐵道の便によつて探勝遊覽せんとする人には甚だ調寶なるべし、滿洲、朝鮮にも亘りて鐵道院所管の各線路沿道の名勝を記し、加ふるに美麗な寫眞版を挿みたれば、一讀足其地を踏むの思ひあり、卷尾には遊覽旅行の栞、鐵道營業案内、主要驛間の乘客賃金表、鐵道院所管線路の圖及び東京附近を始め全國の重要なる名勝地附近の地圖約二十枚を挿みたれば、遊覽の旅客には一層の便宜あるべし。（鐵道院發行、非賣品）

○學校家庭教訓お伽噺（巖谷小波編） 日本、支那、印度の有名なるお伽噺をあつめたる書なり、その中に教訓本位のものもあれば、又興味本位のものもあり、何しろ其數が百を數ふるの大册なれば、いろ／＼さま／＼のお伽噺あること勿論にして、實に兒童座邊の珍寳たるが上に、また兒童に敎ふる好資料たるなり。（定價壹圓參拾錢、博文館發行）

○常識讀本現代女大學、花嫁の卷（堀内新泉著） 昔の女は唯だ服從すれば家庭圓滿、一生無難に過ごすことを得しかど、現代はなか／＼其れのみにては濟まず、一より十まで常識本位に依りて六かしき世の中に處せざる可からず、新泉氏此に鑑みる所あり此著を作す、まづ常識の解より始まりて花嫁の生活、夫に事へる道、舅姑に對する心得等、章を分つこと十五、具さに花嫁より一家の主婦となるまでの心得を說きて餘蘊なし、實に本書の如きは、夙に現はれざるべくして未だ現はれざる書なり。あまねく世の諸姉に薦む。（定價五拾五錢、博文館發行）

○少女小說姉のおも影（河崎酔雨著） 一人は繼子、一人は生みの子、互ひに義理ある仲なれどそれが互ひに助けあひて種々の辛苦艱難に堪へ忍び、終に有名なる畫家及び音樂家となりたる出世物語にして、而もこれが事實の話なりと云へば、一層うるはしき少女小說なりといふべし。（定價四拾五錢、博文館發行）

○喜劇出來ない相談（太郎冠者作） 帝國劇場六月興行に上場せられたる喜劇なり、讀物として讀んでも甚だ面白く、銷夏の友として推薦す。（定價貳拾錢、興文館發行）

○お伽パーク この書は西村渚山の變化椿、沼田笠峰の命の綱、竹貫佳水の笑ひ藥、武田櫻桃の不思議の水、黑田湖山の猴八郎、木村小舟の黄金の城以上六編を蒐めたるもの、いづれもとり／＼に特色ありて面白く、眞にお伽パークの名に背かざる少年少女の好伴侶なり。（定價七拾錢、博文館發行）

○家庭百科全書第三十九編歐米魚介新料理（赤堀峰吉著） 在來の西洋料理書は牛肉、鷄肉を主として魚介類の料理はホンの附け加へに過ぎざる憾みありしが、此書は貝類、魚類のみの西洋料理法二百餘通りを、著者が多年女子大學、其他の女學校、又は赤堀教場に於て實地教授せるもの及び歐米漫遊の際習得せし新料理を極めて實際的に何人にも解り易く說明したれば、家庭料理の參考として庖廚の寶典たるべき良著なり。（定價四十錢、博文館發行）



# 誌友倶樂部

▲世は秋の初なれど、炎熱殊の外につよい折から、御なつかしき誌友の皆々様、御かわりもなく、御暮しあそばしますか？御伺ひいたします。申上ぐるもおそれ多き事ながら、先帝陛下には、六千萬の民草のお祈りいたしましたかひもなく、とう／＼ご崩御になりました、ほんとに何と申上てよろしいやら、申上ぐる言の葉もございません、私共はつゝしんで御遠慮いたしておらればなりません、ほんとにいつもはそれは／＼にぎやかな京都も、今日此頃はごくしづかで、幼子もうた一つうたはずにかしこまつてゐます、皆々様、暑さきびしい折から、御身お大切にあそばせ、（西の京河原なでしこ）

▲天皇陛下がおかくれになつたといふ報がまゐりました、三十日午前七時五分、父も母も、私とたゞ呆然たるばかり、とみには言葉もでませんでした、御危篤とは知りながら、神様の御加護、臣民の熱誠によつてでも、今こんなことがあらうとは思ひませんでしたに……いつもは大聲でわめき立てゝ行く小學生徒でさへ、肩に喪章をつけて、小聲に囁しあつて居るのを見ると、つい涙がこぼれます、軒毎にかゝげた弔旗は、愁然とひるがへつてをります、おそれ多い事ですが、かえす／＼も殘念でございます、（大正元年八月三日、伊豫鉦島百合香）

▲私の宅は醫者ですが、當地で平均二百圓の月收なれば、流行醫は別として、まづ中流だと云ふ事ですが、是にて夫婦に三才の小兒、老母、書生、車夫、下女、と家族七人にて少しも贅澤致さず、家賃三十圓と、電話、電燈、三千五百圓の夫婦の生命保險、千五百圓十年間の積立講金とで一ぱいです、私の經濟が惡しいと主人が申して困り升、月給取の家政談は時々御記載あるも、標準取れず、愛讀者中同業の奥さんに伺ひますが、皆様も此れ丈の費用が入りますか、御聞かせ下さい、（京都醫の妻）

▲夏もやうやく去りまして、おすこやにおいで遊ばす皆様は、これからいよ／＼和歌や俳句に詩的な秋の淋しさをお迎へになる事でございませう、今年はわけて明治天皇陛下が崩ぜさせられたので、私たちは千草にすだく蟲の音を聞いて無量の感慨に打たれます、前號の俳句の選の中、私のすきなのは、和子様の「籠ぬけて」と、清香子様の「涼しさや」ですの（菊香）

▲京の地をなつかしいと偲んで下すつた月見草様、若柳まれく折、加茂川のほとりの第一高女を御卒業遊ばしましたの？、私は白バラ様とセームクラスでしたの、ヒタ／＼とうち寄する夕波に、暮れ行く別府灣をあかず眺めていらつしやるところが浮びますワ、月見草様、さらば御機嫌やう!!（京にての菊）

▲諸姉様、皆様のお内にて、彼の故大塚楠緒子女史の御作、新體詩「お百度詣で」の「ひと足ふみて夫想ひ、二足皇國を思へども、三足再び夫思ふ……」、あれを終りまで御存じの方あらば、どうぞ下名迄お知らせ下さいませんか、お禮のしるし許りに、いと粗末ながら北海の松島と歌はるゝ、當湖畔の繪ハガキお贈りしたいと存じて居ります、又彼の和歌の浦、明石潟、須磨の浦や、嵯峨野、由井ヶ濱、等の詩趣に富める風光明媚の佳き里に、靜寂なる御明け暮れを過ごし給ふ諸姉様方と、御土地／＼の繪ハガキにての御交際お願ひいたします。（北海道渡島大沼湖畔岡田春子）

▲御なつかしき浪速の諸姉様方、最早皆様が須磨よ、舞子よ、さては有馬、濱寺と避暑にゐらつしやる時がまゐりましたのね、御たのしみでせう、どうぞ溫泉便り、渚便り、聞かして頂戴、天王寺のルナパークも夏は開かれますつてね、お羨しい事ばかりです、月宮殿の千代様の御寫眞、うれしふございましたわ、まちにまつてたんですもの、千代様、益々御才筆おろふひ遊ばせ、（渚の月）

▲詩の神の如き千代子様、東西に御名のとゞろきし其の御姿、漸く「月宮殿」に見上げ參らせて喜びました、御優しのお姿お若く在す此の君のお筆のあと、幾多の人の目を輝やかせましたらう、一度なと御目にかゝり度い事、玉露さまのお筆も中々、お藻しく、古きお作「思ひ出の記」取り出し、繰返し拜見致しました、才筆溢るゝ彼の君、此の君、御自重遊ばして、此後ますます（園世）

▲七月號の誌友倶樂部にお出しになりましたてつ子様、何も此の欄へ名文を投書せねばならんと云ふ規定もございませず、倶樂部と名の付い

て居る限り、皆樣の交際機關となさいまして差支はあ　まいと存じます、貴女も名文投書なさろうと思召すなれば、立派な場所がございます、私は未だ此の欄へ投書致しました事はございまんせが、一寸胸にさわりましたから、思ひのまゝを(花野ゆすゝき)

▲前號にての、松風樣の「俳諧袋綴し」とやら、面白く拜讀致しました、私も貴女と同じ樣に、俳句と云ふ物に好奇心を動かして居る拙女で、ございますが、何ぶんにも傳手が無いので、未だに其の儘に、なつて居ります、失禮ながら御手解き下さいますまいか、お願ひ致します、(峯子)

▲私は四十三年の一月から毎月女學世界を愛讀して居りますが、全つたく婦人雜誌中のクインですれ、堀内侍樣の痛快な書きぶり、三郎樣のロマンチックなデリケートな物語、若い血潮はをどりますよ、內藤樣の「箱からでた女」この頃にない出來榮えでしたれ、ヒハインの性格があんまり貴女に似てゐるから、非常に興味を以て誦讀しました、松平樣、玉汝樣、おふるひ遊ばせ、記者樣、淺にしちやたゝりますよ。(操)

▲宮城野萩樣　仰せご最と拜見いたしました、表と裏より：：きつとそうですわれ、最早寫眞までかゝげられました今日、　先生でございません事は、明かでございますが、御うつしゑの右なるは、ほんとうに千代子樣でございませうか、そう思つて拜見いたしますと、なるほど香蘭樣の仰せの通り、觀察力に富みたる御まなざし、鬼才と仰がるゝその豐富たる御筆のあやのこれる御才能、ありく＼と御顏に表れ見るからに、チャームされるやうな氣もいたしますが、：：「箱から出た女」！彩樣の御精神のほど、私は感心いたしました、千代子樣のはいつもスヰートな文ばかりと、思つて居つた私には、異樣に感じられた程です、青年男女の陷りやすき戀の振舞に對したる男の、然あるべき心の程、その怒りに對しての聞え(これ女の弱點か)、その弱きうちに、貴なる一筋の自尊心を偉大にして戀をうちすてたといふ彩樣の御心、世の婦女子に、稀なるその精神、感心の外ありません、はじめて千代子樣の力ある文を拜し、何とはなくしたはしう存じました(清涼)

▲異鄕の月樣、お言葉頂いてお嬉しくお懷かしう存じます、こんな境遇を味ふ私達の身にはどんな方法が、最善處世の方法か以後お交りを願ひ、お互に慰藉しあ ふではありま せんか、八月號井深夫人の「母の眞情」何とお讀み遊しましたか、私感ずる點が多うございました、お差支へなくば御住所御姓名お洩らし下さいませんか(西の國にて、葉がくれ)

▲記者樣、私は北海の空にて閑居して語る友もなく、淋しく只女學世界を唯一の友として暮らして居る者です、近頃クラスメート評判記を書いて見ましたがお送り致しますが、出して下さいますか、尙ほ當地の女學生は至って眞率です、(北海道浦千鳥)――よく書いてあるのは必ず出します。

▲七月號誌友倶樂部へお出しになつた若き母樣に申上ます　然ういふと、てつ子樣なんどは、お顏がみたいなんて被仰るか知れないけれど、相變らず交際機關に使用致しますから：：ホゝゝゝ、てつ子樣、御免遊ばせ、釉なし、小紋、中紋の和服、並通巾、中巾、大巾の裁方、くはしく書いたのが御座いますから、一冊差上度うございますけれど、何地へ御屆けしたら宜しう御ざいますか？(小野千歳世)

▲私はお作を拜見して自分の心に描いてゐた內藤千代子樣と、御寫眞の千代子樣と、違つてゐたには少なからず驚きました、皆樣も久しく焦れて被居つた內藤樣の御寫眞が出たのですからまあどんなに御滿足でせう？、この上の慾にはお聲が聞きたいと願つて居ります、私は皆樣の羨望の的になつて被居る內藤樣の御批評を早く拜見致したいと一日千秋の思ひに：：(神戸白菊)

▲月宮殿面白く讀みました、皆樣、あの千代子樣一行の紀念撮影、何とお感じ遊ばしまして？、あの三人の中の一人が千代子樣なんて、諸方樣だつて御信じになさらないでせうと　當地の愛讀者が寄り集まると言つては居ります、內藤樣つてキットあの○○樣ですわれ、豫防線としてあの御寫眞とはあんまりではご座いませんか、もし何はともあれ、才華溢るゝ秋香の君、以後ますく＼御自重遊ばして、誌上に花を咲かして下さいませ(羽前の國佐惠子)

▲播州の浜樣、御なつかしく存じます、貴女樣には父樣お一人で、眞の御兄弟とてもなく二度目の母樣につかへておいで遊ばすとか、ほんとにお察し申します、私なんか二人ともそろつてゐながら、一人子で淋びしいなんて云ふのは、あまりもつたいのう御座いますのれ、おさしつかへなくば御住所お知らせ下さいまし、(京都市上京區元三組西社町稲鶴子)

▲あの記者様、和歌や俳句は、一枚のはがきに一首以上はかゝせませぬか(府下駒場増子)—必ず一首づゝに願ひます。

▲月宮殿を手にしました時は、丁度臨時試驗最中で、從つて讀み終つたのはつい先日でしたの、妾、口繪サシ繪にはがつかりして了ひましたは、池田さん、夢二様のは、何故なかつたのでしよう？實際悲觀しました、嗚呼日本には女を畫く人は多いでしよう、けれどその多き中のその中で雜誌で見らるゝのは岡様、夢二様、武田様、日高様、河崎さん、池田さん、米子さん位でしよう、そう〳〵寺澤様がありました、あゝあの日!!!夢二式と好一對ですのれ、岡様のはいつも感心ばかり、武田様のはハイカラすぎて、いやな書の繪でも見る様です、池田、河崎様のは申し分ないけれど日高様と米子様のサシ繪と來たら頭からお話になりません……コレハ失敬、あゝ私も振つて見たい繪筆を……(香子)

▲下の關條文子様、私は貴女様の和歌が大好きです、ことに七月號の御姉上様を偲ぶの、あの歌、情溢れて、私振ひつきたい樣でした、猶この後ます〳〵本誌のために文才をふるつて頂戴な、不束ながら、私もこの頃或る先生について少し和歌の研究を始めました處、なか〳〵覺えかねます、而し、下手の横づきで困つて居ます、何卒この後いゝ歌でも出來ましたら、折り〳〵御惡み下さいませ、御禮はその度毎にいたしますから、何卒か〳〵御願ひいたします、末筆ながら下の關は何處の御住ひですか、御手數ながら一寸御知らせ下さいませ(福岡縣後藤文子)

▲文壇の鬼才萩香様、紀念號の月宮殿で初めてお目にかゝりました、私は今まで男の方の作とばかり思つて拜讀して居ました、然し突然お目にかゝりまして、今更の様におどろきました、此の頃中は一寸も見なかつたスヰートホームを出して見ました、そしてお作とお寫眞と見くらべ〳〵拜見いたしました、あの「箱から出た女」彩子さんの後の苦悶、孤獨の悲愁を知らなかつた時代の美しい戀、只たわいもなく月花に憧れた時も一年後に自覺した時の失心、凋落に泣いて〳〵遂に自ら捧げた涙も愛も後には囚はれたと苦しみぬいた彩さん、何と悲傷な筆でしやう、萩香様、今迄より以上の御奮發を願ひます、(萩内にて湖和)

▲八月號の「女子の大樂」中の、顔と足袋とのコントラスト、微笑を禁じ得られませんでした、苔の花様のある男に答ふる手紙、全くそうありたいものです、大酒な夫を感化せしめた龜本まち子様の御手腕には、少なからぬ教訓を受けました、次に本誌明治四十三年一月より同四十五年八月(増刊共)迄のが御座いますから、御入用の方にはおゆづり致します。(栃木ヤリー)

▲甲州及相州の二少女に告ぐ、手の甲の「いぼ」治療は、硝酸を用ゆるを最良とす、硝酸銀に非ず、硝酸銀は手を黒くするのみにて効なし)、即ち該液を少しく淡くして「いぼ」に浸す時輕く痛みを感ずる位になし、日に何回も使用すべし、何十何百のいぼも三週間を出ですして全滅すること疑なし(大阪浪江)

▲和歌、俳句を投書致さうと存じますが、一枚の葉書に和歌と俳句を一所に書てはいけませんでせうか、又二首宛かいて投書してはいけませんでせうか(大阪にてすみれ)—一所に書いてはいけません。又一首づゝに限ります。

▲記者様、力行女學校は何處にありますか、(熊本田舎女)—小石川區駕籠町五十一番地にあります

▲私は遠き米國の片田舎に淋しく暮して居る者です、同情深き皆様、繪葉書の御交換を偏にお願ひ申します、御望みなれば、和歌及び新體詩の如き作にても、拙きながらもお目にかけます(文藝趣味の御方との交際も切に望みます、(西本繆月)、S. Nishimoto R. R. 1 Box 90 C. Sanger (Cal.)

▲各府縣の名所、風景繪葉書と、當地の繪葉書と御交換を願ひます、海外に居らるゝ諸姉様と特に交際をお御願ひ致します、(千葉縣夷隅郡長者町六九石井濟子)

▲八月號の白梅幸子様、あなたのお歌はいつも敬服してなります、殊に同國になります方故、尚更お慕ひ申します、此のちとも可隣なる私をお導き下さいまして、行末ながく御交際なさつて下さいませ、誌友の皆様も御きげんよう、末ながら記者様の御健康を祈ります(安房北條町吉井薫子)

▲大阪なにはの邊にゐます幸香お姉様お變りはございませんか、此頃はあのおやさしいお便りが少しもございませんので、私はそればかり心配して此の病床で泣いて暮して居ります、長き病人のある中に、私まで先月末より少し病にとらはれ家中はいやにいんきで、寂しくつて〳〵けれ共此の病床にあり乍らもいつも〳〵あのおやさしいお姉様のお寫眞を置て、寂しくなると

出してあかずながめ、此の淋しい病中の心をなぐさめる唯一の樂しみにして居ります、はかない乙女のやめる心を察し下さい、私をたれだか御存じ（球磨川畔にて日陰の花）

▲北米に在す諸姉樣達よ、私も近き內に渡米致し度い考へですが、御地で婦人の仕事として何がよろしいか、何卒次號にてお敎へをお願ひ申上ます（寧樂にて花月）

▲愛讀者諸姉よ、妾はクセ毛にて困り居る者、今迄色々と藥を付けましたが、少しも効がありません、もし皆樣の內よき藥を御存じの彼方は、何卒お敎へ下さいませ、呉れ〲も御賴み申上ます（奈良の都にて一少女）

▲誌上の諸姉さま、先日お交りを願ひましたが、しばらく不在になりますから、一すおことわり致します（麴町平河町三ノ八大野はるえ）

▲親愛なる讀者諸姉と、繪はがき又は寫眞信書の交換を願ひます（名古屋市千種町一ノ神粕谷なみ）

▲七月號に皆樣より御情をお受け遊ばされし枯小草とやら、私と同じ身の上よ、私も尼にならうとして尼樣に無理な御願ひ致しましたが、途にゆるされませんでした、けれ共心は尼でありますから、お經でも心をまぎらはそうと思て居ります（越路の有髮尼）

▲七月號にお出し遊ばした春田清子樣お差支なくば御交際をお願ひ申します、紐育市に私の叔父が居りますの在米の方御交際を願ひます（越後長岡市草生津桑山錦子）

▲私は花の都の濵逃より去年の今頃此地に越してまゐりました、春まだ寒きさらぎの頃より本誌を唯一の友として、濵靜かなるほとりに侘しく思ひ暮す身となりました、何卒姉上樣方、お交り下さいませ、（攝津の國濵靜かなる片ほとりにてホワイトリリー）

▲私は女學校卒業補習科で一年ばかり裁物を習ひ、一通り出來るつもりですが、母の手助けに內職として裁物でも致して見たいと思ひますがどなたか御心當りも御座いましたら、誌上にて御手引下さいませ（神田のお願ひ女）

▲昔より女はかみかたち、など申しまして、婦人の頭髮といふものは最大切な婦人美の一つしとてかぞへられて居ますが、私は其髮に少しくせが御座いますので、其ために明けくれ氣ないためて居ます、もしか誌友倶樂部の諸孃樣のうち大によいくせなをしの法か、またはくせ直し劑をお存じのおかたがございましたら、お敎へ下さいませんか（筑後田舍娘）

▲在米の田中樣や、岡本樣　先日中は新聞や繪葉書をお送り下さいまして厚くお禮申上げます以後もどうぞよろしく願ひます、尙ほ海外にお在いでになる諸姉樣方、繪葉書の御交換を願ひます。（兵庫縣川邊郡長尾村口谷阪上かめ子）

▲和歌の部によくお見えになります茨城の今泉義子樣、何んとなくおなつかしうございます、どうぞ妹と思し召し末永く御交際下さいませ（茨城古登子）

▲伊勢の永田ふで子樣、御不用なれば、私に、和歌入門大和なでしこ、和歌俳句資料を御ゆづり下さいませ、（府下代々木百十八山田）

▲私しは本年二十三歲になりまして、父と共に茶花の敎授を致して居りますが、どうぞして英語を習ひたいと存じますが、とても大金で習ふ樣な事が出來ませんので、奉公でもして習へる樣な所がございましたら、どうぞおしらせ下さいませんか、姉樣たち御心あたりがございましたら、御しらせ下さいまし　御願ひ致します（京都にて風流人）

▲まことに申かねますが、皆樣の內で增刊「おどろく手紙」お持ち合せの方が御座いましたら、御送り下さいませんか、御禮は必ずいたします（京都府下宇治郡山科村勸修寺福井よね方花子）

▲御なつかしき誌友の皆樣の中で、今年女學校を卒へさせられ、まさに小學校へ御奉職なさらんと思召す御方おはさずや、若しかゝる御方のおはしまさば、是非とも誌上で御交際いたしとうございます、もとより不束なものですが、今よりこんな境遇に入る少女でございますから、（野ばらの露）

▲記者樣赤十字社の看護婦になりたいのですが生徒募集に應じないでも入られませうか、又篤志看護婦人會には、どうすれば入られましようか、くはしくお敎へ下さい（佐渡國一少女）―麴町區飯田町日本赤十字社へお問合せ下さい、

▲皆樣のお內に、三十七年に本館發行の「軍神廣瀨中佐」といふ書お持ちの方は下名へお惠み下さいませんか、又古本店にでもあるならば、お世話をして下さい、御恩の程は一生忘れません、必ず御禮は厚くいたしますから、皆樣何卒お願申ひします（新潟縣佐渡郡吉井村大字潟端甲斐靜子）

▲愛讀者諸姉樣よ、福岡市の箏曲通信敎授所發行の箏の譜本お買求めになりまして、如何でご

ざいますか、お試み遊ばしたお方は、此の誌友倶楽部でお知らせ下さいませんか（賀茂の竹原にてちとせ）

▲外國にお在ます諸姉樣よ、私は常々外國の樣子を知りたいと希ふて居りますが、よいお友達も有りませぬ故、未だ見ぬあこがれに悶えて居るので御座います、何卒外國に御出で被遊て居る諸姉樣、御住所をお知らせ下さいませ、珍らしい新刊の書籍に繪端書へ面白い出來事など書き添へてお送り致しますから、何卒お願ひ致します、（大阪市北區上福島中四丁目二三二ノ五白衣薔薇）

▲おなつかしい皆樣の中で、ちゞれ毛の根治する法御存知の方はございませんでせうか、是迄も隨分色々な賣薬もあらゆる方もして見ましたが、皆一時的で、根治いたしませず、皆樣のお美しい髮を見ましては、一人悲しんで居ります、同情深き皆樣、どうぞ根治法を御敎へ下さい、（ちゞれ毛女）

▲私の友人に、昨年小學校を卒業し、なほ上へ進まれるはづでしたが、或る事情のため多年の希望も水の泡となつた有樣、就ては何學にても勉强させて下さる慈善家へ、養女となつて行きたいと　御志願、愛讀者諸姉樣の內でお心當りのお有り遊ばすお方は、是非下名まで封書で御一報下さいませ、御願ひ申上ます。（岡山縣赤磐郡可眞村小山君子）

▲元山で感心致します事は、婦人が誠に能く働きます、何品に依らず其時々の物を朝より夕方迄賣りに來ります、又冬どんなに寒くても川のふちで着類を褌切でとん／＼たゝき、白く洗ひのりをつけ、いつも氣持の能い姿で居ります、女は水を酌みましても、物を賣りますにも、皆頭にのせて參ります、せなに子供を負ひ、頭に重ひ物をのせて行きます故か、誠に姿勢が正しう御座います、厭な思ひが致します事は、賣くたびれますと道のふちで休み、高いびきでねることです、物賣が掛値を申すには驚きます、六七十錢に賣る時でも、二圓以上に申ます、少年でも煙草を吸ひ、六七歳の男の子供でも、妻が定まれば、髮を大人と同じように結び、高い帽子をかぶります、妻の定まらぬ者は、三十歳に成りても、くんで後へたらして居ます、人が呼ぶには、髮を結ふて居る者をヨボ、たらして居る者をチョンガアーと申します、男子には日本語を能く喋舌る者もありますが、婦人には少ない樣に思はれます、お肴は色々取れますが、充分には取れませんので、釜山より參ります故、日本より代價はお高う御座います、漁の澤山な時は六七寸のカレ二錢、鯛七八錢、一尺二三寸のサハラ二十錢位であります、（元山政子）

▲みな／＼樣、ます／＼お盛の御樣子を拜し、かげ乍らお祝申上候、就ては私かねてより渡米志望の者にて候が、如何せんかの地に知人なし、あはれみ情け深き在米諸姉樣方よ、一樣の御同情あらん御方樣は、下名まで渡米の手續、御地の模樣等おもらし遊されん事、切に／＼御願申上げ候、（美濃國大垣櫻木町中村八重子）

▲横濱の須美子樣、おなつかしうございます私も横濱の者ですが、あなたの御宅どちらでございます、御姓は何と云ふのですか、御さしつかへなくば、御交際下さいませ、海外の皆樣、御ハガキ下され有難う存じます、以後もよろしく御願申上ます、京都にて深梅樣、御一人では御淋しいでせう、私の樣な者でも妹と思召して御文御めぐみ下さいませ、尙愛讀者の姉上樣、いろいろ地方の詩的な事御知らせ下さいませな、（横濱桐子）

▲私高女卒業後高等敎育を受け多年敎育に從事いたしてゐました處、今回事情ありて良家の家庭敎師を望みます、俸給を充分望むでもありません、みな樣方のお家庭に於て、もしやお心當りもございましたら、何卒下名まで封書で御一報下さいませ、早速參堂いたします、（東京市小石川區雜司ヶ谷一四二、岩間方木村）

▲松下露子樣に申上げます、あなたが「猛き妻」と題して女學世界の十一卷十三號におかゝげあそばした亡きお姉君の御日記とやら、もう／＼、無限の哀愁にうたれて涙と情に繰り返しまた繰り返して拜讀致しました、御日記のうちにもございますやうに、此の廣い浮き世には同じ運命に泣いてゐらつしやる方々がほんにこのやうなお筆の跡は、やがて社會の涙を職はなければならぬ私共の、どの位好いお手本となりましたか知れません、輕薄な虛榮的な文章は大嫌いでございますが、こんなおちついた修養になる文章をお出し下さると非常に感じて、幾度も／＼拜見するのでございますの、松下樣には深く／＼御禮申しあげますが、どうぞ此の後も精神の修養になりますやうなことをお書き下さるやうくれ／＼もお願ひ致しておきます、（越後山本れい子）

# 募集（九月八日〆切）

## ●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

［報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈］

▲短　文（一人一種）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△短文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

**賞品**

△短　文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

---


毎月一回一日發行

定價表

| | |
|---|---|
| 一冊（紙數二百八頁） | 金二十錢 |
| 四冊（三ヶ月分） | 前金七十五錢 |
| 八冊（半ヶ年分） | 前金一圓四十五錢 |
| 十六冊（一ヶ年分） | 前金二圓八十錢 |
| （定刊數十二冊 內 増刊四回）一、五、九、十一月價格同一 | |
| 郵税 一冊 | 二錢 |

廣告料

| 廿四字詰 | 特等 | 一等 | 二等 | 三等 |
|---|---|---|---|---|
| 一行 | …… | …… | …… | 五十錢 |
| 四半頁 | …… | …… | 十圓 | 七圓五十錢 |
| 半頁（[illegible]） | …… | 廿三圓 | 十九圓 | 十四圓 |
| 一頁（六十九行） | 五十五圓 | 四十五圓 | 三十八圓 | 二十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せす
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

大正元年八月廿三日印刷納本
第拾貳卷第拾貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　市川七作
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番
　　　　　千十八番　三千二百二十九番

女(後付の一)

女（後付の二）

## 創刊七大叢書の一

はもとより、我等日本國民の、萬人讀まざるべからず、萬戸藏せざるべからざる好著といふべし。

(2)
**萬葉集略解**（下卷）九月出版

八代集抄をもととして、更に之を補正せり。三十六人集は人麿、赤人、業平、貫之等所謂三十六歌仙の家集にして、由來誤字多き流布本を新たに校訂せるものを載せ。名家歌選は公平なる選出によつて、よく代表的歌人の作を網羅せり。凡てこれ和歌の經典とも稱すべきもの、而して校訂、補正、選出いづれも、佐佐木、芳賀兩先生の嚴密細心なる用意によりて成されたり。もしそれ製本の美なる、價格の至廉なるに至つては弊館の夙に世に誇るところ。書齋に應接室に必ず一本を藏すべき好叢書といふべし。

### 六大特色

校訂嚴密
補正適確
選出公平
用紙純良
印刷鮮美
價格至廉

## 校註和歌叢書（第一期刊行）書目

(1) **萬葉集略解** 上卷
(2) **萬葉集略解** 下卷
(3) **八代集** 上卷
(4) **八代集** 下卷
(5) **三十六人集** 一冊
(6) **名家歌選** 一冊

東京博文館

女（後付の三）

# 家庭整理の指導

# 家庭百科全書

**全部五十册＝每月一回發行**

近時婦人敎育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭敎師たる目的を以て、編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

- 第一編 新家庭訓　三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理　石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南　喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法　龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道　水原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南　琴松甫文雅君　松幸齋理常君　共著
- 第七編 育兒の務　田村貞策君　朝夷孤舟君　共著
- 第八編 簡易治療法　藤井婦子女史著
- 第九編 禮式と作法　佐方鎭子女史著
- 第十編 惣菜料理　赤堀占松君　赤堀峰吉君　赤堀菊子女史　共著
- 第十一編 編物指南　三木とみ子女史著
- 第十二編 婦人の生理と衛生　牧野清子女史著
- 第十三編 敎育お伽噺　木村小舟君著
- 第十四編 女德の養成　前田長太君著
- 第十五編 家屋と庭園　内山正如君著
- 第十六編 魚鳥家畜の飼養　鹿野乜骨君著
- 第十七編 女子作文法　遠藤ふみ子女史　松崎ふく子女史　共著
- 第十八編 子女の敎養　棚橋絢子女史著
- 第十九編 家庭の趣味　文學士大森兜山君著
- 第二十編 家庭遊戲法　高橋忠次郎君　松浦政泰君著

東京日本橋　**發行所**

販賣用電話　本局二六二〇

# 婦女必讀の大全書

第廿編 **書道手引** 井田秀生君著

第廿一編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第廿九編 兒童訓話 **母の知識** 木村小舟君著

第卅三編 **婚姻のかゞみ** 河崎酔雨君著

第廿七編 **偉人の妻** 前田雪子女史著

第廿二編 **歌の手引** 大和田建樹君著

第廿六編 **室内装飾法** 近藤正一君著

第卅編 **洋食の調理** 東京治庖會講師著

第卅四編 **交際と談話** 福田琴月君著

第廿八編 家庭日常 **公けの心得** 小西眞雄君著

第廿三編 **刺繍術指南** 磯村大次郎君著

第廿七編 **衣服の調整** 石崎蓬園君著

第卅一編 **衛生と衣食住** 福田琴月君著

第卅五編 **婦人日常座右銘** 高須梅溪君著

第卅九編 歐米 **魚介新料理** 赤堀峰吉君著

第廿四編 **摘み細工指南** 山田興松君著

第廿八編 **洋樂手引** 前田久八君著

第卅二編 **東西名婦の面影** 高須梅溪君著

第卅六編 **日用家庭理科** 一戸清方君著

第四十編

## 家庭新飲料

一名 調合酒、清涼飲劑製法

●家庭に於ける新飲料●交際過程の調合酒●新飲料調合に對する準備●調合上に使用する器具の説明●調合酒に要する材料の説明●飲料調合法…（春の部）五十七種…（夏の部）百四十八種…（秋の部）六十四種…（冬の部）七十六種

赤堀峰吉君
小原總雄君 共著

第四十一編

## 洋菓子の調製

●西洋菓子を拵へます時の心得●一月より三月に至る西洋菓子の拵へ方（九十種）●四月より六月に至る西洋菓子の拵へ方（八十八種）●七月より九月に至る西洋菓子の拵へ方（九十種）●十月より十二月に至る西洋菓子の拵へ方（九十種）

赤堀峰吉君
赤堀道子女史 共著

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

創刊七大叢書の一

文學博士　本居豐穎先生
文學博士　井上頼圀先生
文學博士　萩野由之先生
文學博士　關根正直先生
文學博士　池邊義象先生
校訂及註解

藤島武二畫伯
橋口五葉畫伯
意匠裝幀

空押及金模様摺込天金緣製本頗瑰麗

菊判總クロース上製
口繪及密畫挿入
本文―新鑄十ポイント組
註解―六號活字組

# 校註 國文叢書

第一期刊行（凡隔月一冊發行）
十二冊　每卷（七百五十頁乃至千餘頁）
□第一卷　七月中發行
總紙數約　壹萬頁
□特價十二冊金拾圓―（外に小包料を要す）
■正價一冊金壹圓（小包料内地十二錢）

一國の富强、文明は國民の自信力に原因す。自信力無き國民は富强の民たる能はず、文明の俗たる能はず。自信力は己を知りて彼を知るに起る、己を知るは我が歴史に通曉するに在り。我が文學を精究するに在り。此の如くにして、初めて我が國情明かに、その長所は愈々之に培ひ、その短所は速に之を補ひ、以て己を完うせむとするに至るべきなり。これ實に國民の本分たらむ。弊館創業以來、夙に心血を此に濺ぎ、この種の事業に向つて、世に貢獻せしこと鮮少ならずと信ず。就中曩に一般に紹介せし『日本文學全書二十四編』の如きは、蓋し久しく棄られたりし我が歴史的文學の復興普及に先鞭を著けしものにして國文復興、國文獨立の聲はこれによりて喚び起されたることは世人も均しく認めらるゝ所ならむ。

東京博文館

# 創刊七大叢書の一

今や世界の大勢、益々富强文明の競争の急激なるものあり、此の時に當りて一層自己の信念を厚うし、自己の歴史文學を研究し以て「我」あるを知らしむるは急務の業たらざらむや。故に弊館は更に現代知名の國文學の泰斗諸博士と謀り、往年の『日本文學全書』を更に擴張し、更に精選したる『校註國文叢書』を出版し以て大に學界に貢献し前條の主旨を貫徹せむことを務めむとす。

校註國文叢書

## 源氏物語

附（菫草）

上卷

七月中發行

國文叢書第一として出版せる源氏物語は桐壺より藤裏葉まで三十三帖なり。本文は『頭書源氏』を底本として諸本と參考し句讀段落を明にし漢字を挿入しながら國語を失はざるやうに注意し頭註は『湖月抄』『玉小櫛』其他古今の説を折衷して宜きに從ひ且帖毎に繪畫を挿入し卷首には有名なる藤原隆能筆源氏繪の彩色版を收めたり且『すみれ草』全部を採て源氏全部の人物の系圖及帖毎の梗概を一讀の下に解得せしむるやうにせり、今や源氏の縮册多しと雖も此の如く校註挿畫相須て完備せるものは蓋稀なり其裝幀及印刷紙面の鮮明製本の善美を盡せるは本館の最も得意とする所、今更に贅せざるなり。

### 國文叢書書目

| 書名 | 卷 |
|---|---|
| 源氏物語 附菫草 | 上卷 |
| 源氏物語 附紫家七論 | 下卷 |
| 太平記 | 上卷 |
| 太平記 曾我物語 | 下卷 |
| 源平盛衰記 | 上卷 |
| 源平盛衰記 義經記 | 下卷 |
| 水鏡。大鏡 增鏡。今鏡 | 一卷 |
| 平家物語。保元物語 平治物語。承久物語 | 一卷 |
| 榮花物語 | 一卷 |
| 竹取物語。伊勢物語。落窪物語。土佐日記、枕草子。徒然草。紫式部日記。 | 一卷 |
| 宇治拾遺物語。月のゆくへ。池の藻屑、松陰日記。 | 一卷 |
| 蜻蛉日記。とりかへばや物語。唐物語。濱松中納言物語。方丈記。更科日記。大和物語。海道記、東關紀行。 | 一卷 |

東京博文館

再版（文學博士坪內逍遙氏著）出來

# 所謂新シイ女

洋裝四六版頗美本全壹册◎正價金九拾錢郵税金拾貳錢

本書は曩に先生が早稻田大學、校外教授の爲めに東京大阪等に於て講演せられたるものゝ中東京にて演ぜられし速記に訂正を施し、且つ其首尾を綴りを加へられ以て一書となし刊行したるもの也。先生が佳麗なる詩文の才に長ぜらるゝことは世既に定論又他の呶々を容さゞる處請ふ天下の淑女、紳士一本を座右に備へて其妙趣を味ひ給はんことを

米國フインク氏原著
日本藤本班嶺氏譯述

# 戀愛の研究

正價金五十錢
郵税六錢

本書は世界諸民族の社界に現はしたる戀愛を始めとして男女の相愛婦人の地位等を科學的に研究したる現時最良の好著書也目下婦人問題の喧傳する折柄江湖諸君に薦む

發賣元 東京本町 博文館

發行所 東京小石川 精美堂

蘆川忠雄氏著

# 新處世術

本書ハ著者獨特ノ健筆ヲ以テ青年子弟ノ爲メニ立身出世ノ活法ヲ説キ示シタル好著書也

全一册
定價金四拾五錢
郵税金六錢

女（後付の八）

## 懸賞當選

# ◎藤原式裾模樣陳列

（九月十六日より當店三階に於て）

本年の藤原式裾模樣は意氣向を主とし優秀の圖案千六百中より當撰のもの數十を陳列し尙「染上げの實物」をも同所にて御覽に入申候間何卒御來店御高批の程奉願上候

東京日本橋

# 白木屋呉服店

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界
第拾貳卷第拾貳號（毎月一回廿三日印刷納本）
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可
大正元年八月廿三日印刷納本




# 人の健康は

金錢を以て購ふ能はず
されど
婦人の健康は
中將湯
によりて
婦人良藥
容易に得らる
弱き婦人疾く召せ中將湯
疾く！夙く！

中將湯は子宮血の道より起る左の諸症を治す

- 子宮病
- 血の道
- 婦人神經
- 氣ふさぎ
- 癇高ぶり
- 夜眠れず
- 內・膜・炎
- 白血赤血
- こ・し・け
- 膣加答兒
- 月經不順
- 月經滯り
- 月經痛み
- 逆上頭痛
- 下腹痛み
- 胸先差込
- 腰足冷込
- 難產流產
- 產前產後
- 惡阻

**定價**

| | |
|---|---|
| 四日分 | 三拾五錢 |
| 一週間分 | 六拾錢 |
| 二週間分 | 壹円拾錢 |
| 三週間分 | 壹円六拾錢 |
| 五週間分 | 貳円五拾錢 |

**本舖**

東京日本橋通四丁目
津村順天堂本店
振替口座六〇八番

大阪市堺筋大寶寺町
津村順天堂支店
振替口座四五六番

定價貳拾錢 ● 郵稅貳錢
No. 12
VOL. XII.
（東京市日本橋區本町三丁目博文館發行）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑭
明治45年8月(第12巻第11号)、大正元年9月(第12巻第12号)

2011年7月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　富士リプロ株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-4007-7　C3321